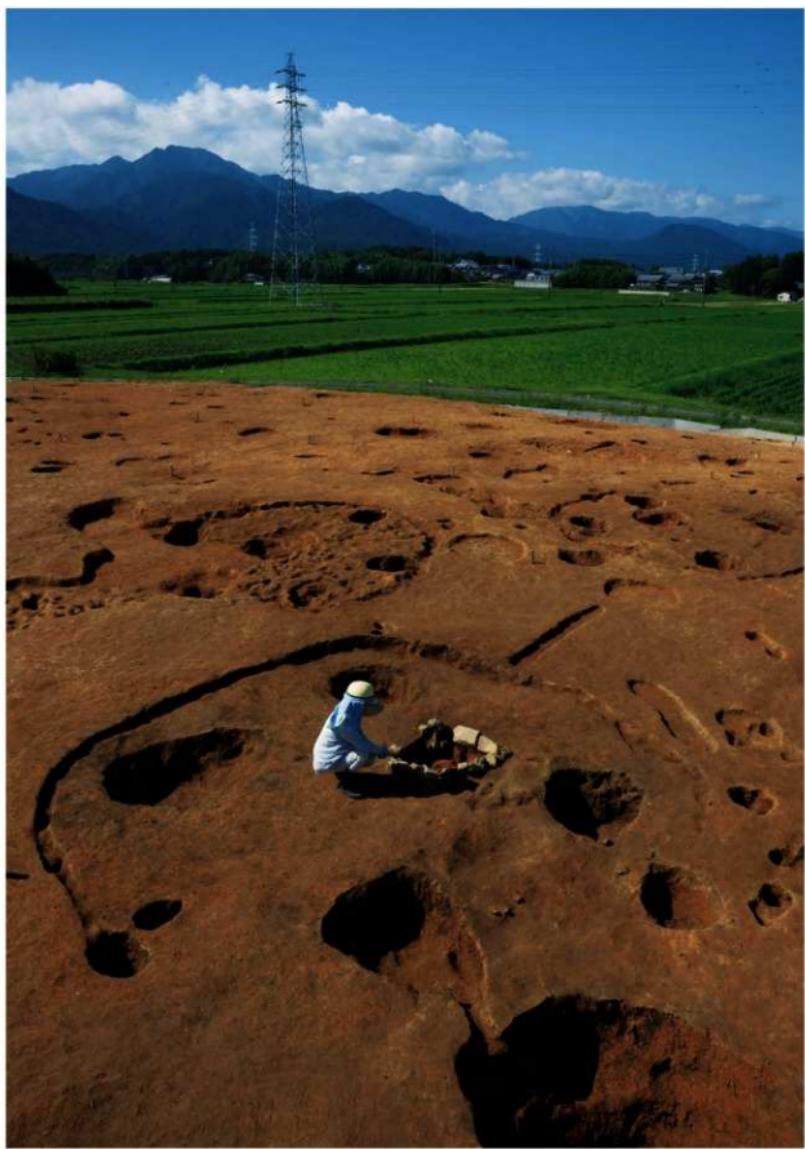


鈴山遺跡（第2・3次）発掘調査報告

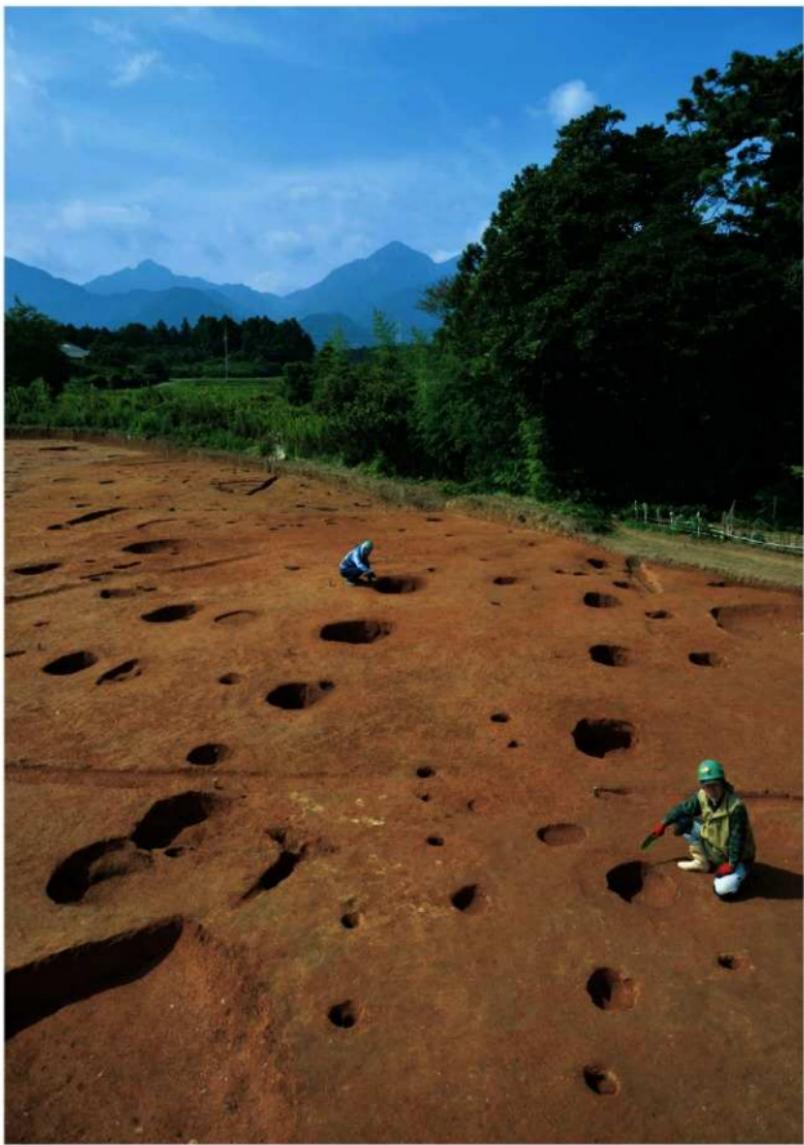
～三重郡菰野町～

2018（平成30）年12月

三重県埋蔵文化財センター



S H108完掘状況（南東から）



S B85完掘状況（東から）

卷頭写真図版 3



西調査区完掘状況（北東から）



S H50・S F51~54・96~99完掘状況（南東から）



出土遺物（報告番号28）



出土遺物（石器集合）

序

三重県埋蔵文化財センターでは、平成20年度から、新名神高速道路の四日市JCT～亀山西JCT間の路線内に存在する、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。対象となる埋蔵文化財は22遺跡、発掘調査対象面積は、延べ34万m²に及びます。

当センターとしては、供用開始の予定に間に合わせるため、発掘調査を円滑に進めるよう、担当職員を増員するなどの対応も行ってきました。

現地での調査を最優先に取り組むことを主眼に、年間5万m²を超える面積の発掘調査を行ったこともありましたが、ようやく発掘調査も終了し、本格的に報告書作成に取り組みはじめました。ここに三重郡菰野町に所在する鈴山遺跡の発掘調査成果を、とりまとめることが出来ました。

今から約1万年前、縄文時代早期の煙道付炉穴や集石炉が確認され、人々が生活を始めたことが分かりました。また、約4～5,000年前、縄文時代中期の竪穴住居や掘立柱建物なども確認され、当時の土器や石器も数多く見つかりました、特に、中期の掘立柱建物は、三重県内で最も古い時期のものと考えられ、この地域の歴史に新たな1ページが加わることとなりました。

最後になりますが、現地調査に限らず、その成果をまとめるにあたり、ご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所をはじめとする各関係機関、菰野町教育委員会、地元自治会、発掘調査区の近隣に居住の方々に、心からのお礼を申し上げます。

平成30年12月

三重県埋蔵文化財センター

所長 野原 宏司

例　　言

- 1 本書は、三重県三重郡菰野町大字音羽に所在する鈴山遺跡（第2・3次）の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。
- 3 発掘調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 4 発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報IV・VI・VII』の3冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。
- 5 調査は下記の体制で実施した。
委託者 中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
受託者 三重県教育委員会
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
なお、詳細については『I 前言』に記載したとおりである。
- 6 本書の執筆は三重県埋蔵文化財センター職員が行い、文責については目次及び文末に記載した。遺物の写真撮影は中村法道・萩原義彦が行い、編集は泉賀治・萩原義彦が行なった。
- 7 本書で示す方位は、世界測地系第VI系による座標北である。
- 8 本書で表記する土色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖（30版）』（日本色研事業株式会社1967年初版）に掲った。
- 9 発掘調査に際しては、地元の方をはじめ、菰野町教育委員会、菰野町音羽自治会、三重県企業庁、石井寛（元公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）、石田由紀子（奈良文化財研究所）、久保勝正（三重県立名張高等学校）、高橋健太郎（豊田市教育委員会郷土資料館）、田村陽一、津村善博（三重県総合博物館）、山田猛の各氏からのご教示やご協力をいただいた（順不同、敬称略）。
- 10 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 11 本書で使用した地図は、国土地理院発行の1:25,000の地形図「御在所山」「四日市西部」「菰野」「伊船」、三重県市町共有デジタル地図（平成19年測図）を用いた。三重県共有デジタル地図は三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した。（承認番号：平成30年4月5日付 三総合地第1号）
- 12 本書で用いた遺構表示略記号は、以下のとおりである。
S B : 挖立柱建物 S F : 燐道付炉穴・集石炉・被熱痕跡 S H : 竪穴住居
S K : 土坑・陥穴 S Z : 不明遺構 P : ピット・柱穴

凡　　例

[表類]

- 1 遺構一覧表における遺構番号は第2次から第3次調査までの通し番号である。
- 2 地区名については、第2次から第3次調査を全て含めて記載している。
- 3 遺物観察表は、各遺物実測図の番号に対応する。これは、器種・材質如何を問わず通し番号である。
ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号を振っていない。従ってこの番号の遺物が全てではない。
- 4 実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの3桁は用紙番号で、後ろ側の2桁は用紙内の実測した順序の番号である。
- 5 調整・技法については、遺物製作時になされていることを記載し、順序を示すものでない。
- 6 備考は、その遺構・遺物の特記事項について記載している。
- 7 本書では、以下のように遺物の表記漢字について統一している。

碗・塊・甌 → 梗　　坏 → 杯

[写真図版]

- 1 写真図版は、遺構・遺物ごとにまとめている。
- 2 出土遺物実測図の報告番号と遺物写真番号は対応している。
- 3 遺物の写真図版の個々の縮尺は、不同である。

本文目次

I 前言	(服部芳人)	1
1 調査の経緯と経過	1	
2 調査の経過	1	
II 位置と環境	(泉賀治)	5
1 地理的環境	5	
2 歴史的環境	5	
III 層序と遺構	(泉賀治・中村法道)	9
1 層序	9	
2 遺構	16	
IV 遺物	(中村法道)	51
1 土器等	51	
2 石器	81	
V 自然科学分析	(株式会社パレオ・ラボ)	103
1 放射性炭素年代測定	103	
2 樹種同定	111	
3 産地同定	114	
VI 結語	(中村法道)	119
1 繩文時代早期	119	
2 繩文時代中期	121	

卷頭図版

卷頭写真図版1 S H108完掘状況（南東から）

卷頭写真図版2 S B85完掘状況（東から）

卷頭写真図版3 西調査区完掘状況（北東から） S H50・S F51~54・96~99完掘状況（南東から）

卷頭写真図版4 出土遺物（報告番号28） 出土遺物（石器集合）

図版目次

第1図 遺跡位置図	7	第33図 S K 1・2実測図	44
第2図 遺跡地形図	8	第34図 S F 47・55・S Z 92実測図	45
第3図 調査区配置図	8	第35図 繩文土器実測図（1）	52
第4図 西調査区南北土層断面図	9	第36図 繩文土器実測図（2）	54
第5図 西調査区東西土層断面図	10	第37図 繩文土器実測図（3）	56
第6図 東調査区土層断面図	11	第38図 繩文土器実測図（4）	58
第7図 遺構平面図	12	第39図 繩文土器実測図（5）	59
第8図 遺構平面図1	13・14	第40図 繩文土器実測図（6）	60
第9図 遺構平面図2	15	第41図 繩文土器実測図（7）	61
第10図 煙道付炉穴部分名称図	16	第42図 繩文土器実測図（8）	62
第11図 S F52・53・54・99実測図	17	第43図 繩文土器実測図（9）	64
第12図 S F51・96・97・98実測図	19	第44図 繩文土器実測図（10）	66
第13図 S F60・71・91・102実測図	20	第45図 繩文土器実測図（11）	68
第14図 S H36・94実測図・炉	22	第46図 繩文土器等実測図（12）	70
第15図 S H50実測図・炉	23	第47図 石器分類図	81
第16図 S H50遺物出土状況図	24	第48図 石器実測図（1）	83
第17図 S H63・72実測図・炉	26	第49図 石器実測図（2）	84
第18図 S H84実測図・炉	27	第50図 石器実測図（3）	85
第19図 S H84遺物出土状況図上層	28	第51図 石器実測図（4）	86
第20図 S H84遺物出土状況図下層	29	第52図 石器実測図（5）	87
第21図 S H106実測図	30	第53図 石器実測図（6）	88
第22図 S H106遺物出土状況図	31	第54図 石器実測図（7）	90
第23図 S H107実測図	32	第55図 石器実測図（8）	91
第24図 S H107遺物出土状況図	33	第56図 石器実測図（9）	92
第25図 S H108実測図	34	第57図 石器実測図（10）	93
第26図 S H108石器炉実測図	35	第58図 石器実測図（11）	94
第27図 S H93・109実測図	36	第59図 石器実測図（12）	95
第28図 S H95・110実測図	37	第60図 石器実測図（13）	96
第29図 S B85・86実測図	38	第61図 石器実測図（14）	97
第30図 S B87・88実測図	39	第62図 繩文時代早期の遺構から出土した炭化 材の暦年較正結果の比較	105
第31図 S B89・105実測図	40	第63図 繩文時代中期の遺構から出土した炭化 材の暦年較正結果の比較	105
第32図 S K31・49・59・61・68・82・83・ 114実測図	42		

第64図	暦年較正結果（1）	106
第65図	暦年較正結果（2）	107
第66図	出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	113
第67図	黒曜石産地分布図（東日本）	114
第68図	黒曜石産地推定判別図（1）	117
第69図	黒曜石産地推定判別図（2）	117
第70図	煙道付炉穴の燃焼坑から煙出坑をみた 方角	119
第71図	早期の主要遺構全体図	120
第72図	切目石錘の重量	121
第73図	堅穴住居の主柱の平均柱間	123
第74図	中期の主要遺構全体図	124

表 目 次

第1表	遺構一覧表（1）	47
第2表	遺構一覧表（2）	48
第3表	遺構一覧表（3）	49
第4表	煙道付炉穴一覧表	49
第5表	掘立柱建物一覧表	50
第6表	「中富式・神明式」編年表	51
第7表	縄文土器観察表（1）	71
第8表	縄文土器観察表（2）	72
第9表	縄文土器観察表（3）	73
第10表	縄文土器観察表（4）	74
第11表	縄文土器観察表（5）	75
第12表	縄文土器観察表（6）	76
第13表	縄文土器観察表（7）	77
第14表	縄文土器観察表（8）	78
第15表	縄文土器観察表（9）	79
第16表	縄文土器観察表（10）	80
第17表	石器観察表（1）	98
第18表	石器観察表（2）	99
第19表	石器観察表（3）	100
第20表	石器観察表（4）	101
第21表	石器出土一覧表	102
第22表	測定試料および処理（1）	108
第23表	測定試料および処理（2）	109
第24表	放射性炭素年代測定および暦年較正の 結果	110
第25表	出土炭化材の樹種同定結果一覧	112
第26表	分析対象となる黒曜石製石器	114
第27表	東日本黒曜石産地の判別群	115
第28表	分析No. 16の半定量分析結果	115
第29表	測定値および産地推定結果	116
第30表	煙道付炉穴出土遺跡一覧表	119
第31表	堅穴住居一覧表	123

写 真 目 次

写真1	第2次調査現地説明会風景	3
写真3	分析試料写真	118
写真2	第3次調査現地説明会風景	4

写 真 図 版 目 次

写真図版屏	西調査区遠景（北から）	127
写真図版1	西調査区完掘状況（真上から）	128
	東調査区完掘状況（真上から）	128
写真図版2	S F 51 總出土状況（東から）	129
	S F 53 總出土状況（東から）	129
写真図版3	S F 51・96・97・98 完掘状況（南東 から）	130
	S F 60 完掘状況（北西から）	130
写真図版4	S F 52・53・54・99 完掘状況（北西 から）	131
	S F 52・54 完掘状況・S F 53・99 半裁状況（南西から）	131
写真図版5	S H 36・94 完掘状況（南東から）	132
	S H 50 遺物出土状況（北から）	132
写真図版6	S H 50 完掘状況（東から）	133
	S H 72 完掘状況（東から）	133

写真図版 7	S H84遺物出土状況（北から）	134	S K 2 完掘状況（南東から）	142	
	S H84完掘状況（南東から）	134	写真図版16	S K31完掘状況（南から）	143
写真図版 8	S H93完掘状況（東から）	135		S K49完掘状況（東から）	143
	S H95完掘状況（東から）	135		S K59完掘状況（南東から）	143
写真図版 9	S H106完掘状況（東から）	136		S K61完掘状況（北西から）	143
	S H107礫出土状況（南西から）	136		S K68完掘状況（南から）	143
写真図版10	S H107完掘状況（南西から）	137		S K82完掘状況（西から）	143
	S H108完掘状況（南から）	137		S K83完掘状況（南東から）	143
写真図版11	S H108石閉炉完掘状況（北から）	138		S K113完掘状況（北東から）	143
	S H106遺物出土状況（北から）	138	写真図版17	出土遺物（1）	144
	S Z 92遺物出土状況（東から）	138	写真図版18	出土遺物（2）	145
	S H106炉周辺遺物出土状況 (南西から)	138	写真図版19	出土遺物（3）	146
	S H108石閉炉周辺遺物出土状況（南西から）	138	写真図版20	出土遺物（4）	147
写真図版12	S B89・105・S H63完掘状況 (西から)	139	写真図版21	出土遺物（5）	148
写真図版13	S B87完掘状況（東から）	140	写真図版22	出土遺物（6）	149
	S B85・86・87完掘状況 (南東から)	140	写真図版23	出土遺物（7）	150
写真図版14	S B88完掘状況（西から）	141	写真図版24	出土遺物（8）	151
	S B85・86柱穴（S K18）礫出土 状況（南から）	141	写真図版25	出土遺物（9）	152
	S B85柱穴（S K20）遺物出土 状況（南東から）	141	写真図版26	出土遺物（10）	153
	S B89柱穴（S K56）柱痕跡完掘 状況（南から）	141	写真図版27	出土遺物（11）	154
	S B89柱穴（S K69）遺物出土 状況（北から）	141	写真図版28	出土遺物（12）	155
写真図版15	S K 1 矢頭出土状況（東から）	142	写真図版29	出土遺物（13）	156
			写真図版30	出土遺物（14）	157
			写真図版31	出土遺物（15）	158
			写真図版32	出土遺物（16）	159
			写真図版33	出土遺物（17）	160
			写真図版34	出土遺物（18）	161
			写真図版35	出土遺物（19）	162

I 前 言

1 調査の経緯と経過

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21年（2009）年2月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～亀山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書^①には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

【註】

①三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』（2011年）

2 調査の経過

（1）調査経過の概要

鈴山遺跡は、三重郡菰野町大字音羽に所在する縄文時代の遺跡である。平成19年2月に新名神高速道路の計画路線内の分布調査を行った結果、石礫や剥片が採集されたため、新たに登録された遺跡（菰野町遺跡番号136）である。

発掘調査前の現況は、大半が雄木林や竹林の山林で、一部畑地となっていた。石礫や剥片は、畑地で採集されたが、北東方向に延びる丘陵の先端部分を中心にして、地形などから判断して、東西約250m、南北約80m、約20,000m²が遺跡範囲であると考えられている。

今回、新名神高速道路の菰野ICのループが、鈴山遺跡の所在する丘陵周辺に計画されることとなっ

た。そのため、用地買収や伐採などの発掘調査の諸条件が整った平成25年度から、二次調査の必要の有無確認の一次調査を実施してきた。以下に、平成28年度にかけて行われた年度ごとの概要を記述することとする。

平成25年度

鈴山遺跡の発掘調査に関して、初めて議題に上がったのは、平成24年10月の定例会である。その際、用地買収が済み、引渡しも終了しているため、平成25年度に一次調査を依頼されていた。そこで、年度末の定例会では、平成25年5月以降に伐採作業が終了する予定であったため、8月～9月にかけて、980m²の一次調査の計画を行った。

年度が改まり、盆明けによく伐採作業が終了したため、調査坑を15本設定して、一次調査を行った。その結果、縄文時代の土坑・焼土・竪穴住居と思われる遺構を確認するとともに、縄文土器が多数見つかった。そのため、事業地内面積8,000m²の内、概ね西側の6,500m²を二次調査の対象と判断した。

この結果を9月の定例会で報告したが、新名神高速道路全体の工事計画との調整から、四日市工事区管内の発掘調査を優先させるため、二次調査の発掘調査の実施時期は、平成27年度以降に依頼されることとなった。

平成26年度

年度内に4回実施された定例会において、発掘調査の時期などの議題が上がった。道路建設工事の進捗や他の発掘調査面積などとの調整の結果、平成27年度内に6,500m²の発掘調査を終了させることが決まり、当初の計画に盛り込むこととなった。なお、年度末の定例会で、ループの外（東側）に新たな調整池の建設計画があることが初めて提示された。

平成27年度

年度が改まり、5月から第2次調査を開始した。12月まで行った結果、縄文時代早期の煙道付炉穴・集石炉^②の他、中期の竪穴住居・掘立柱建物・陥穴などを確認し、多数の土器・石器も出土した。

また、普及啓発活動の一環として、現地説明会を

11月7日（土）に行い、310名の参加があった。

年度内に行われた定例会では、ループの外（東側）での新調整池の計画に伴う発掘調査が議論になった。年度初めには、各種申請・用地買収・伐採などとの調整から、翌年の平成28年度後半に一次調査の実施を依頼された。また、その結果次第ではあるが、最大面積1,600m²の二次調査は、平成29年度に行うこととなった。

しかし、年度末の第3回定例会で、新調整池の工事は道路建設や周辺の用排水工事と一体で行う必要性があるため、一次調査を平成28年度早々に実施し、二次調査を平成28年度内に前倒して調査することを依頼された。協議の結果、一次調査はネクスコの労務提供という形で行い、二次調査はその他の遺跡の調査との調整もあるが、一次調査終了後、年度内に終了する計画を立てることとした。

平成28年度

年度早々の4月11日～14日まで、ネクスコの労務提供で一次調査を実施した。調査坑を3本設定して遺構の有無の確認を行った結果、縄文時代の遺構（堅穴住居？）や縄文土器を確認したため、二次調査が必要と判断された。一次調査後、速やかに二次調査に向けての準備を行い、6月から第3次調査を開始した。調査の結果、縄文時代中期の堅穴住居5棟、陥穴2基を確認した。

なお、普及啓発活動の一環として、現地説明会を9月17日（土）に行い、234名の参加があった。

（2）調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成25年度

・一次調査

担当：服部芳人 （調査研究3課）

業者：西武緑化株式会社（土工委託）

期間：平成25年7月30日～平成25年9月30日

面積：980m²

平成27年度

・第2次調査

担当：中村法道・西脇智広 （調査研究3課）

業者：株式会社アート（調査補助委託）

期間：平成27年5月27日～平成27年12月7日

面積：6,256m²

平成28年度

・一次調査

担当：中村法道・泉賢治・村上央（調査研究3課）

労務提供：中日本高速道路株式会社名古屋支社

四日市工事事務所

期間：平成28年4月11日～平成28年4月14日

面積：174m²

・第3次調査

担当：中村法道・泉賢治 （調査研究3課）

業者：丸文工業株式会社（土工委託）

期間：平成28年6月7日～平成28年9月27日

面積：1,653m²

（調査日誌抄）

・第2次調査

平成27年

6月12日（金） 重機による掘削開始。調査区内の南北及び東西畦の北から南西方向に向かって掘削。

6月15～19日（月～金） 引き続き重機による表土掘削。各所で縄文土器が出土。円形の堅穴住居とみられる遺構も確認。

6月22～25日（月～木） 引き続き表土掘削。調査区の畦の断面図作成。堅穴住居かと思われる遺構もさらに確認。

6月29～30日（月・火） 重機掘削。縄文土器が含まれる小土坑も確認。

7月2～3日（木・金） 引き続き重機掘削。風倒木の痕跡とみられる箇所から縄文土器出土。縄文土器は、中期とみられ、集落跡と判断。

7月6・9・10日（月・木・金） 引き続き重機掘削。調査区の東側を中心に行う。縄文時代の遺構が希薄なため、集落の中心から離れているとみられる。

7月13～15日（月～水） 引き続き重機掘削。調査区内に設定した畦の断面図作成。午後から台風対策実施。

7月21～24日（火～金） 引き続き表土掘削。包含層掘削を実施しながら、ふるいかけも実施。縄文土器をはじめ石器も出土。

7月27～31日（月～金） 重機による表土掘削を継続。堅穴住居の遺構も確認した。

8月3～7日（月～金） 表土掘削を実施しながら

包含層掘削。調査区北部において掘立柱建物1棟を確認した。

8月10・11日（月・火） 調査区内の東西畦の掘削。堅穴住居かと判断していたSK1は土坑と判明。

8月18～21日（火～金） 表土掘削終了。遺構検出と包含層掘削。検出した各遺構を掘削。縄文土器が出土。土坑と考えていたものは全て掘立柱建物の柱穴と判明。柱痕跡はほとんど確認できず。

8月24～28日（月～金） 遺構検出と掘削。作業しながらふるいがけも実施。サヌカイトの石礫も出土。

8月31～9月4日（月～金） 堅穴住居SH50掘削。縄文土器が多い。中期と判断される。掘立柱建物もさらに確認した。

9月7～11日（月～金） 遺構の中に階穴とみられる土坑も確認した。中にはかなり深いものも見受けられる。

9月14～18日（月～金） 各所で見られた被熱痕跡を残す土坑は、堅穴住居の炉跡と判断する。

9月28日～10月2日（月～金） 前週1週間雨が続き作業が止まっていたが作業再開。遺構検出で風倒木を確認。縄文土器が含まれる。

10月12～16日（月～金） 各遺構の半裁状況の実測を行いながら個別遺構掘削。

10月5～9日（月～金） 残っている堅穴住居や掘立柱建物の掘削を行う。また完掘した遺構の個別写真撮影も実施。

10月19～23日（月～金） 堅穴住居には、壁周溝があることが判明した（SH50）。

10月26日～11月6日（月～金） 各遺構の掘削をしつつ、実測・写真撮影。調査区全体の清掃にとりかかる。現地説明会のため。

11月7日（土） 現地説明会を実施。参加者310名で盛況な説明会となつた。

11月10～13日（火～金） 各遺構の最終掘削。炉跡周辺のピット探し。

11月16～20日（月～金） 各遺構の掘削及び断面図作成。

11月24～25日（火・水） 各遺構の断ち割り及び個別遺構実測。

12月1・3日（火・木） 千種小学校児童遺跡見学。2・5年生約100名。

12月17日（木） 現地引渡。



写真1 第2次調査現地説明会風景

・第3次調査

6月24日（金） 現地作業開始。表土掘削。

6月28日～7月1日（火～金） 表土掘削。堅穴住居らしい遺構を確認。縄文土器をはじめ石器出土。

7月4～8日（月～金） 引き続き表土掘削。南北及び東西の上層畦の実測確認。

7月11～13日（月～水） 表土掘削終了。土層畦実測。

7月20～22日（水～金） 遺構の検出開始。風倒木から縄文土器が出土。

7月25～29日（月～金） 遺構検出。風倒木と判断される搅乱より石器・縄文土器出土。堅穴住居も確認。

8月1～5日（月～金） 堅穴住居SH106・107の遺構掘削開始、同時に堅穴住居の埋土についてふるいがけを行う。縄文土器だけでなく切目石錐・石礫出土。中期後半以降とみられる。

8月8～10日（月～水） 引き続き遺構検出及び掘削。堅穴住居内において石皿確認。主柱穴や壁周溝も検出。

8月17～19日（水～金） 遺構検出及び掘削。遺物出土状況の写真撮影及び実測。

8月22～26日（月～金） 各遺構掘削。堅穴住居内において被熱痕跡を確認、炉跡とみられる。

8月29～31・9月1～2日（月～金） 堅穴の主柱穴の土層断面図作成。SH108の石圓炉の写真撮影など実測に追われる。

9月5～9日（月～金） 各遺構の写真撮影及び実測。現地説明会に向けての準備。

9月10日（土） 空中写真測量実施。

9月14～16日（水～金） 現地で1/20平面図の実測。3課職員絶出で実測を行う。

9月17日（土） 現地説明会を実施。234名の参加者があり、盛況の内に終了。

9月26・27日（月・火） 1/20の平面図実測。

9月27日（火） 実測終了後現地引き渡し。



写真2 第3次調査現地説明会風景

（3）文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知）

・平成23年8月9日付け、中高名支四工第798号
(中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて)

◎文化財保護法第99条第1項（発掘調査の着手報告）

・平成27年6月5日付け、教理第87号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成27年度・第2次】

・平成28年6月24日付け、教理第104号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成28年度・第3次】

◎文化財保護法第100条第2項（文化財の発見・認定通知）

・平成28年1月15日付け、教委第12-4440号
(三重県教育委員会教育長から四日市西警察署長あて) 【平成27年度・第2次】

・平成28年10月4日付け、教委第12-4421号
(三重県教育委員会教育長から四日市西警察署長あて) 【平成28年度・第3次】

(服部)

II 位置と環境

1 地理的環境

鈴山遺跡（1）は、三重郡菰野町大字音羽に所在し、海藏川の支流竹谷川の上流南岸、鈴鹿山脈東麓の隆起扇状地の標高90m付近に位置する。

菰野町は伊勢平野の北西部に位置し、西は鈴鹿山脈を分水嶺として滋賀県甲賀市・東近江市に接し、鈴鹿山脈東麓に位置する。町内には御在所山（1212m）がそびえる。北は、いなべ市と接し、濃尾平野の西端部、三重・岐阜県境でもある養老山地を東に望む。この最南端の主峰多度山（403m）には多度大社が鎮座する。

鈴鹿山脈の駿河ヶ岳に源を発し、鈴鹿国定公園に含まれる朝明溪谷を刻みつつ丘陵地に出る朝明川は、東と南は四日市市と接する。南は茶畑等が営まれる微高地が続く。また南には御在所山に源を発し四日市市を潤し伊勢湾へと注ぐ三澗川が流れる。

調査前の現況は山林もしくは畠であったが、地元の人の話では、戦後暫くまでは、一面畠地として利用されていたという。

2 歴史的環境

（1）旧石器時代

現在菰野町内では、旧石器時代の遺跡は確認されていない。一方、菰野町に隣接する四日市市の北部の山田町宮蔵遺跡では、チャート製のナイフ形石器が、また、四日市市西山町の西山小瀬遺跡では、チャート製の石核、チャートの剥片が採集されている。今後の調査によって、菰野町域でも鈴鹿山脈山麓部において旧石器時代人々の暮らしが営まれていたことが明らかになる可能性がある。

（2）縄文時代

菰野町内の縄文時代の遺跡については、本格的な発掘調査は少ない。

大字小島の六谷遺跡（2）では、昭和58年の発掘調査で縄文時代の土坑が確認され、大字潤田の大久保遺跡（3）では、平成26年の発掘調査で、注口土器の注口部や縁帶文土器、突帯文土器などの縄文時

代後期後葉から晩期の遺物が出土した。

一方、大字千種、大字杉谷、大字竹成、大字永井などの高原や小高い丘では土器や石器などの遺物が表面採集されている。大字杉谷の觀音寺境内地からは、黒灰色で表面に押型文がある縄文早期の植物織維を含む土器が見つかっている。

大字杉谷の七ツ塚古墳群の西側の採石場からは、石匙、石斧が見つかっている。そのほか、大字杉谷などの尾高高原では石鏃や縄文時代の環状石斧の破片が見つかっている。大字竹成と大字永井が接する所にある高原遺跡（4）では、環状石斧の一種と考えられている三頭石斧が見つかっている。大字千草の西江野A・B遺跡（5）では、縄文時代草創期に矢の柄を削って整えるために砥石として使われていた矢柄研磨器が見つかっている。

土器、石器の採集の様子からも、菰野町の縄文時代の生活の様子をうかがい知ることができる。

（3）弥生時代

菰野町では弥生時代の遺跡が本格的に発掘されたことはないが、大字杉谷は、弥生時代の遺物が出土する地区として知られている。大字杉谷の高塚と呼ばれる山林から灰色の石斧が、同じく大字杉谷の採石場付近から石斧、たたき石、石臼が見つかっている。このことは、この付近が縄文・弥生時代の複合遺跡であることを物語っている。大字杉谷では高杯の破片や薄茶色と赤土色の壺の破片などが見つかっている。

（4）古墳時代

菰野町で確認されている古墳は円墳が多く、方墳、前方後円墳は現在確認されていない。後期の6世紀末から7世紀前半に造営された高塚古墳群（6）、黒石原古墳群（7）、七ツ塚古墳群（8）などの群集墳が大字杉谷の朝明川両岸の上流部に集中している。大字大強原の飛塚古墳（9）は、高さ3m、直径32mの円墳である。菰野町域に現存する独立墓として最大級のものであり、柳ヶ塚、首人塚とも呼ばれる。この地域に勢力のあった豪族の墓、もしくは成務天皇時代の県主の墳墓とも言われている。平成

24年の発掘調査では、外面が赤い顔料で塗られた家形埴輪の破片が出土した。また、ずんぐりとした筒状部と壺のような口縁部を持ち、表面と口縁部の内面が赤く塗られた円筒埴輪も出土した。これらの出土品から、この古墳は、この地の有力な人物の墓であったと考えられている。現在、飛塚古墳は現状のまま保存されている。

(5) 飛鳥・奈良・平安時代

大字池底・大字潤田に広がる椋ノ木遺跡（10）では、7世紀中ごろの煙道付きカマド跡を有する堅穴住居5棟が見つかった。大字小島の六谷遺跡（2）では、堅穴住居と掘立柱建物群が見つかり、奈良時代前半の集落跡と考えられている。

大字田光の下江平遺跡（11）では、「五十戸口」「倭家」等の墨書き土器が堅穴住居から出土している。「五十戸口」については、飛鳥・藤原・平安京などの官衙遺跡の出土品が多いことから、律令国家形成時における国都里制と深く関わる資料と考えられている。また、整然と配置された8世紀中頃の掘立柱建物群が見つかっており、律令国家における地方行政組織に関する構造と考えられ、「五十戸口」との関連から里長クラスの在地豪族層の居宅の可能性も考えられている。

(6) 平安時代後期から中・近世

菰野町域は、平安後期から伊勢神宮の神領地として寄進されてきた。鎌倉時代に伊勢神宮の神領地を記した『神賦録』によると、本遺跡の周辺には潤田御厨があったという記録がある。

中世の遺跡としては、大字杉谷に杉谷中世墓跡（12）があり、鎌倉・室町時代の宝篋印塔や五輪塔が合わせて200基近く残っている。また、火葬穴が10基ほど確認されている。杉谷中世墓跡の南には杉谷城跡（13）が、そのほか千草城跡（14）、向城城跡（15）、金ヶ原城跡（16）などの中世城館が大字千草に点在している。

慶長5年（1600年）には、徳川氏の家臣となった土方雄氏が菰野城（17）に入り、菰野藩を立藩し、城下町として発展した。菰野小学校の敷地となっている菰野城では発掘調査が行われており、角櫓下の石積などの近世の構造が見つかっている。

当遺跡の東には、徳川3代将軍家光が、諸国に巡

見使を派遣するために整備した街道である巡見道が通り、現在はその多くが国道306号として利用されている。

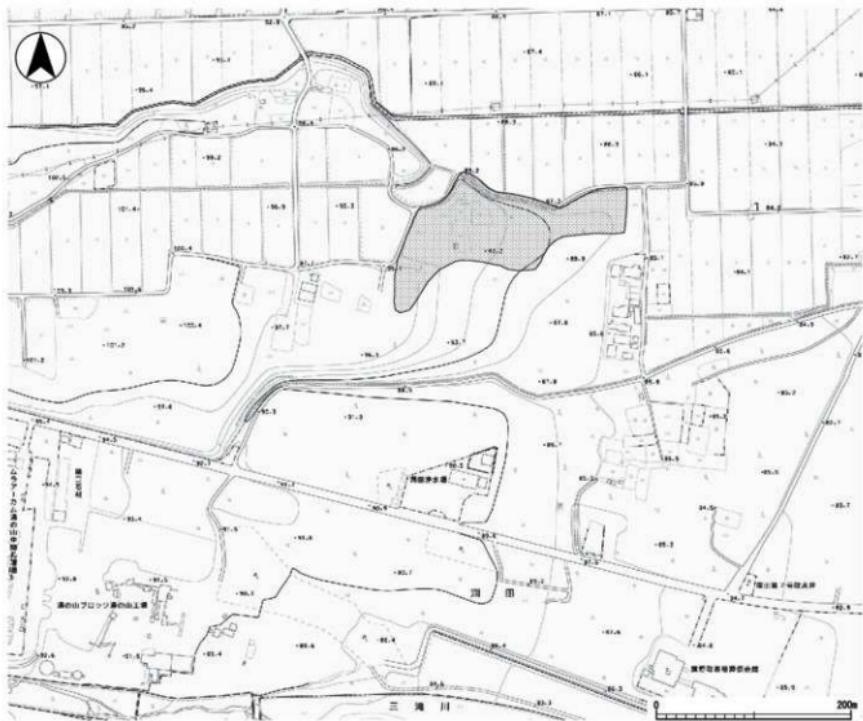
（泉）

【参考文献】

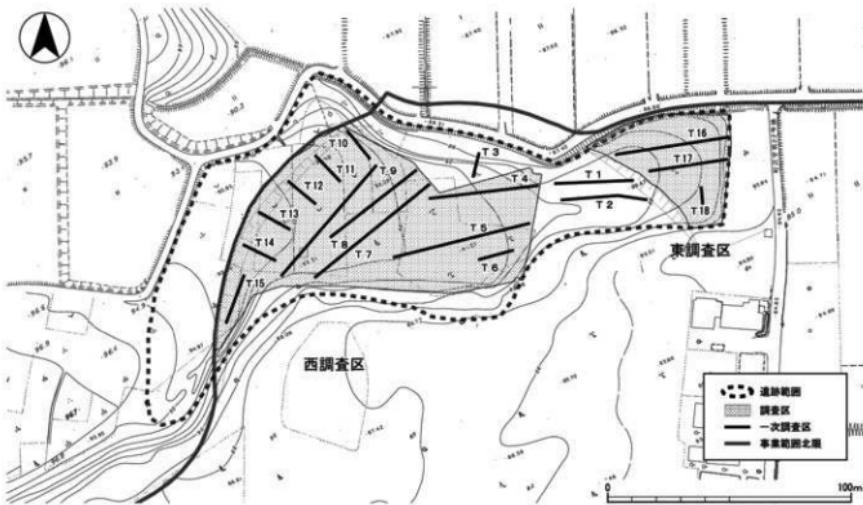
- ・菰野町教育委員会『菰野町史 上巻』（1987年）
- ・四日市市『四日市市史 第二巻資料編考古 I』（1988年）
- ・三重県『三重県史 資料編考古 2』（2008年）
- ・三重県教育委員会『六谷遺跡』『昭和58年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告』（1984年）
- ・三重県埋蔵文化財センター『飛塚古墳発掘調査報告』（2015年）
- ・三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第2次）発掘調査報告』（2016年）
- ・三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第3次）発掘調査報告』（2017年）
- ・菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告 I』（1987年）
- ・菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告 II』（1988年）
- ・三重県埋蔵文化財センター（「椋ノ木遺跡（第2次）現地説明会資料」）『菰野のあけぼの 第1号』（2014年）
- ・三重県教育委員会『三重の中世城館』（1976年）



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)



第2図 遺跡地形図（1：5,000）（網目は遺跡範囲）



第3図 調査区配置図（1：2,000）

III 層序と遺構

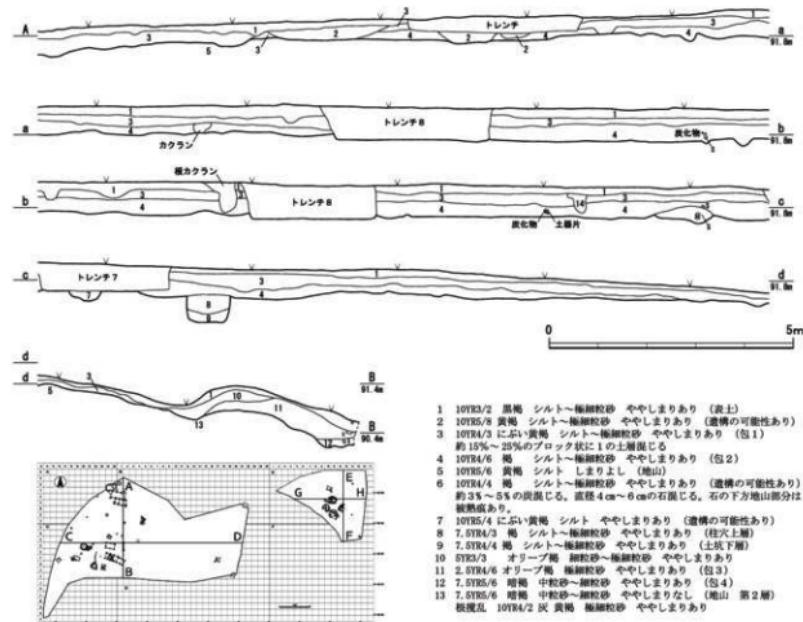
1 層序

遺跡が広がる範囲は、山林および畠地であり、調査に及んだ範囲はすべて林であった。標高は86～92mで、付近の畠地との比高は1～4m程度である。東西2,164m、南北1,000mの範囲でトレンチ調査を実施した。その結果、遺構が見られない中央を調査から除外し、東西二つの調査区に分割し、東調査区1,563m²、西調査区6,300m²の発掘調査を行った。

調査区の土層断面は、各調査区の中央を通る、東西および南北方向に設定し、壁面を設けて層位の調査を行った。西調査区（第4図・第5図）では南北A-B（西面）と東西C-D（南面）を、東調査区（第6図）では南北E-F（西面）と東西G-H（南面）である。東・西調査区の基本層序はおおむ

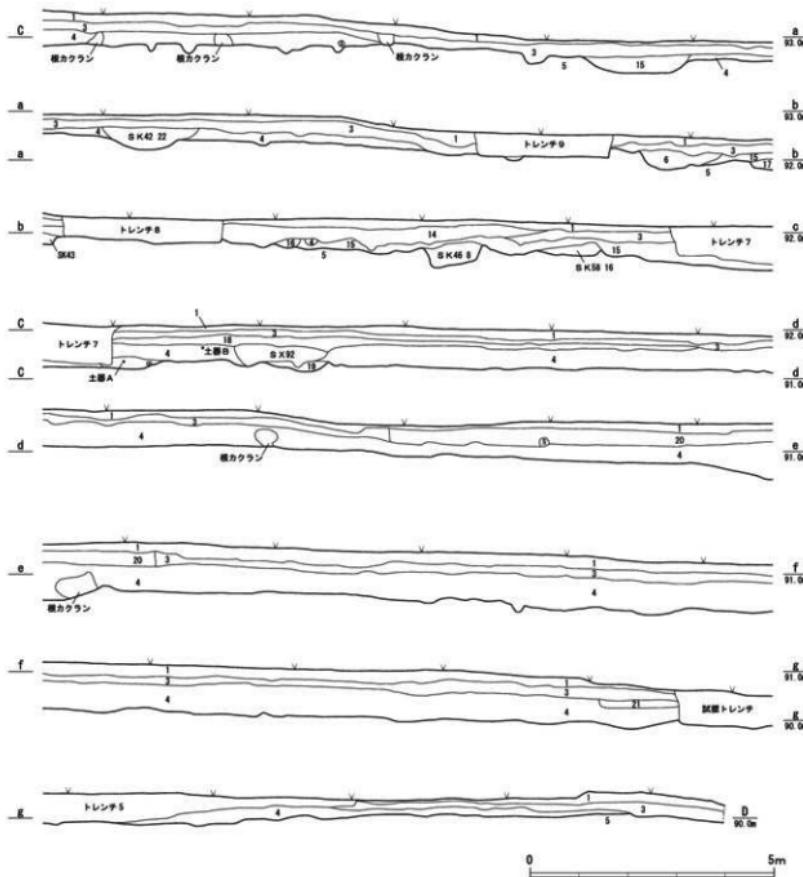
ね同様といえ、上から第1層：表土・耕作土、第2層：にぶい黄褐色土、第3層：褐色土、第4層：黄褐色土（地山）の4層である。縄文時代の遺構検出面は、第3層の最下部で、包含層はほぼ無いと見られる。しかし、第3層中程から土器が微量に見られたり、遺構の上面とみられるラインが検出されたりもした。明確な層として現れないにしても、遺物包含層ないし遺構検出面が存在した可能性がある。遺構検出は、第4層上面ラインで行った。

表土及び遺構検出面直前まではバックホウで掘削し、平均4cm程を人力で掘削して遺構を検出した。遺物はほぼ遺構から検出した。第4層（地山）において1m程の深掘を部分的に試みたが、第4層の地山が続き、縄文時代中期以前の遺物包含層は見られなかった。（泉）



第4図 西調査区南北土層断面図 (1 : 100)

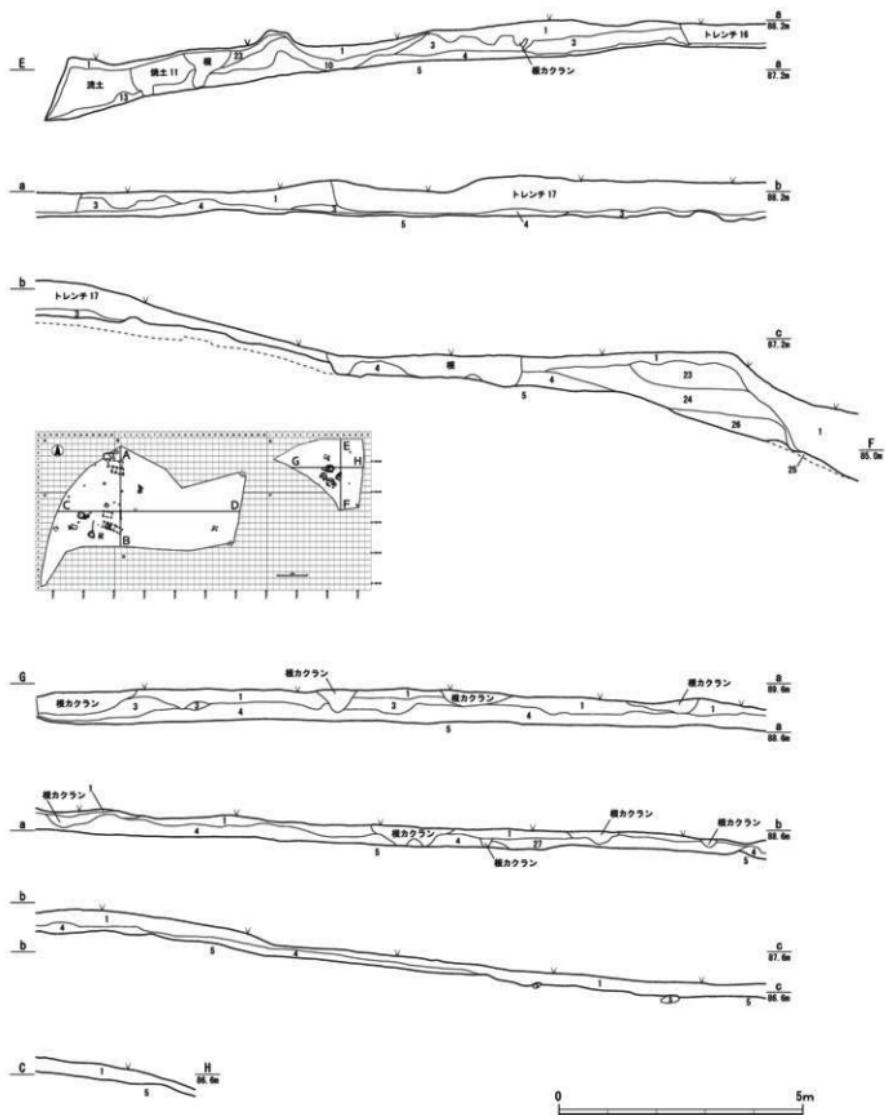
1. 10Y3/2 黒褐 シルト～極細粒砂 ややしまりあり (表土)
2. 10Y5/8 黄褐 シルト～極細粒砂 ややしまりあり (遺構の可能性あり)
3. 10Y4/3 にぶい黄褐 シルト～極細粒砂 ややしまりあり (包1)
4. 10Y4/4 暗 シルト～極細粒砂 ややしまりあり (包2)
5. 10Y5/5 黄褐 シルト しまり上し (地山)
6. 10Y4/4 暗 シルト～極細粒砂 ややしまりあり (遺構の可能性あり)
約3%～5%の炭化土。直径4cm～6cmの石片じる。石の下方地山部分は
約3%～5%の炭化土。
7. 10Y5/4 にぶい黄褐 シルト ややしまりあり (遺構の可能性あり)
8. 7.STR4/3 暗 シルト～極細粒砂 ややしまりあり (往穴上層)
9. 7.STR4/4 暗 シルト～極細粒砂 ややしまりあり (土坑下層)
10. STR3/3 オリーブ暗 細粒砂～極細粒砂 ややしまりあり
11. 2.STR4/6 オリーブ暗 細粒砂～極細粒砂 ややしまりあり (包3)
12. 7.STR5/6 喧闹 中粒砂～細粒砂 ややしまりあり (包4)
13. 7.STR5/6 喧闹 中粒砂～細粒砂 ややしまりあり (地山 第2層)
後段 10Y4/2 暗 黄褐 細粒砂 ややしまりあり



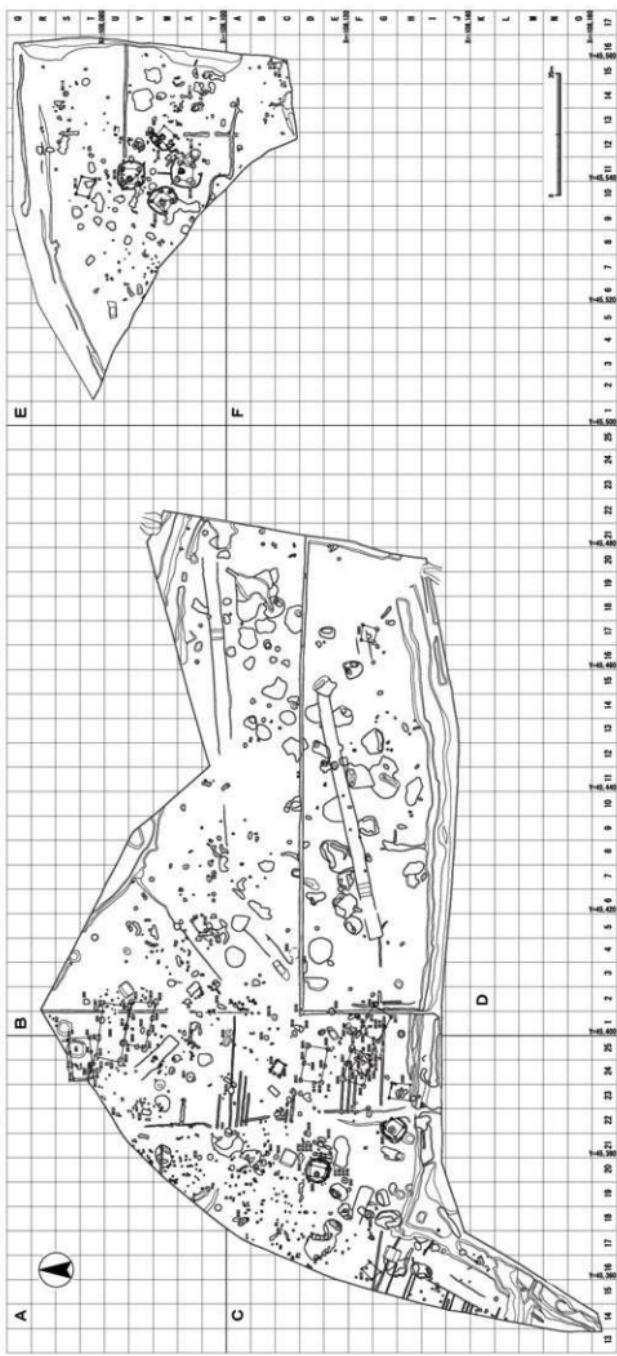
14. 2.SV93/3 埋オーリープ層 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり
表面層中にビニール袋状のものがあるため、現代の風乱層の可能性あり
15. 10YR4/4 黃 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり
16. 10YR2/4 黄褐色 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり (遺構)
17. 10YR5/3 にじい黄褐色 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり (遺構)
18. 7.5YR4/4 黄褐色 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり
19. 7.5YR4/4 黄褐色 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり
(遺構にこじられた地土)
20. 2.5Y3/1 黑褐色 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり (復元)
21. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり
表面層に約7%の炭化物含有 (遺構か?)

22. 10YR3/4 喀斯特 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり
23. 10YR3/3 喀斯特 中粒砂～細粒砂 (洪土1)
24. 10YR5/4 黄褐色 中粒砂～細粒砂 (洪土2)
25. 7.5YR6/8 黄褐色 細粒砂～細粒粘土砂 ややしまりあり
層中に10cm 大の礫含む (堆山2層)
26. 10YR6/7 黄褐色 細粒砂～細粒粘土砂 ややしまりあり
層底付近～表面の部分 (堆山が多い層)
27. 10YR3/4 喀斯特 シルト～細粒粘土砂 ややしまりあり
土器片及び石器 5～7cm の石 (石器?) 含む
根被石、10YR4/2 黄褐色 細粒粘土砂 ややしまりあり
直徑2～3mm の小石含む

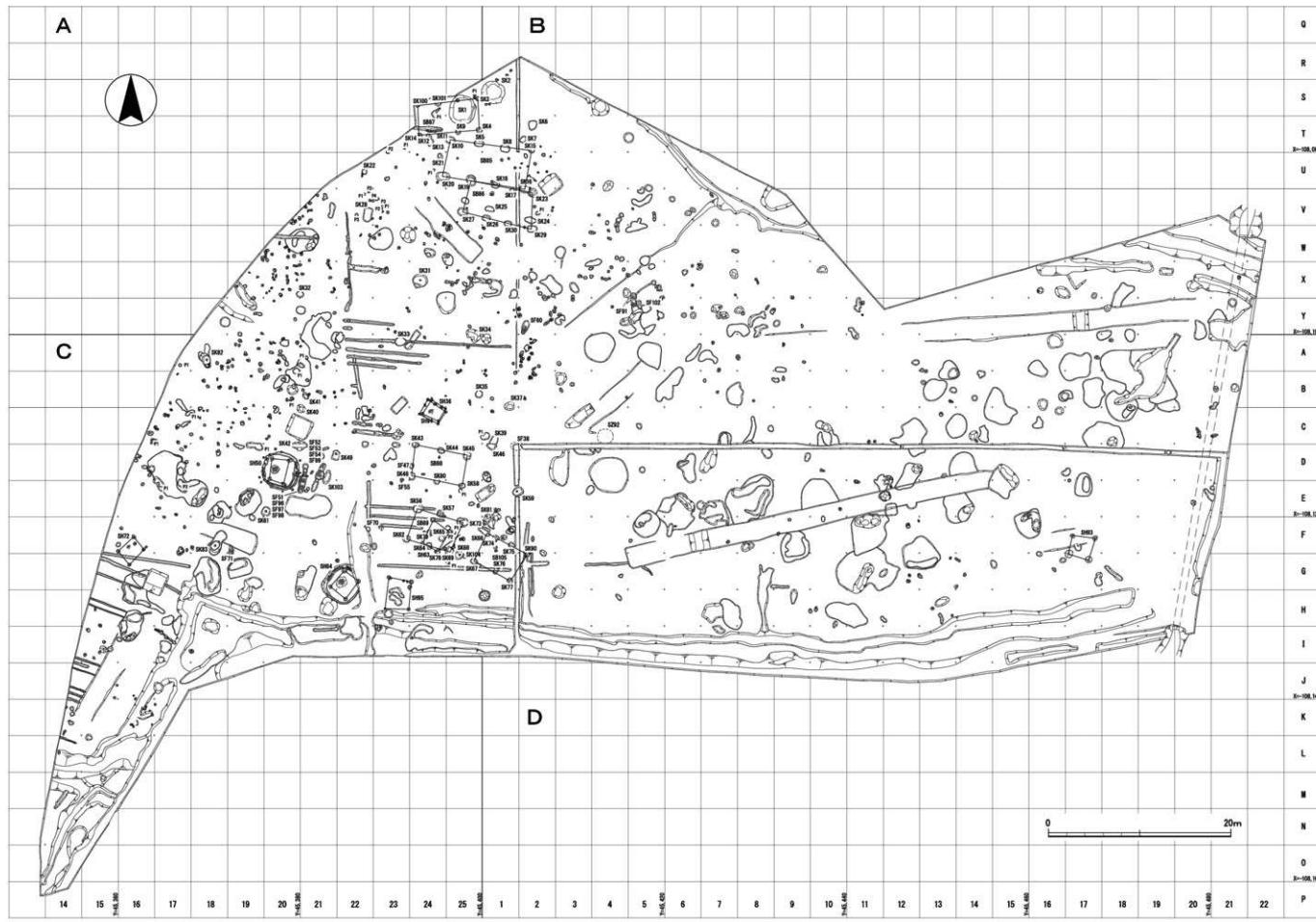
第5図 西調査区東西土層断面図 (1 : 100)



第6図 東調査区土層断面図 (1 : 100)



第7図 遺構平面図 (1:800)



第8図 遺構平面図1 (1 : 14—)



第9図 遺構平面図2 (1:400)

2 遺構

縄文時代早期と中期の遺構を検出した。早期は、煙道付炉穴10基（S F52・54・60・71・91・96～99・102）と集石炉2基（S F51・53）である。中期は、竪穴住居13棟（S H36・50・63・72・84・93～95・106～110）と、掘立柱建物6棟（S B85～89・105）、竪穴9基（S K31・49・59・61・68・82・83・113・114）、土坑は大型土坑2基のほかに2基（S K1・2・13・S Z92）である。

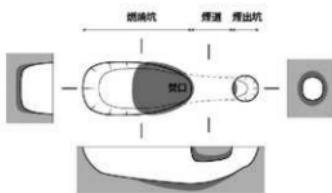
なお、竪穴住居や掘立柱建物に構造材としての棟があったとは必ずしも考えないが、便宜上「棟」を数詞として使用する。

（1）縄文時代早期

A 煙道付炉穴（第4表）

煙道付炉穴は、西調査区の中央部と南西部に偏在していた。重複がなく単体の例2基（S F60・71）、2基の重複例1ヶ所（S F91・102）、3基の重複例2ヶ所（S F52・54・96～99）を検出した。

いずれも上部が後世に削平されていて、本来の平面形は不明である。しかし、前傾（オーバーハング）した壁や全体形および焼土の様子から、煙道付炉穴と判断した。なお、煙道付炉穴の部分名称は第10図のとおりとする。また、煙道付炉穴の方位は、燃焼坑から煙出坑を見た方角とした。



第10図 煙道付炉穴部分名称図

S F52（第11図） 西調査区の南西部で検出した。残存部は燃焼坑から煙道の一部のみで、残存長0.92m、幅0.56m、深さ0.16mを測り、燃焼坑から煙道へ向けて浅くなる。方位はN-22°-Eを示す。煙道前半部を中心に底面から側壁にかけて被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土下層から焼土ブロックを多く検出した。煙道天井

部が崩落したものと推定する。燃焼坑の一部は、煙道付炉穴S F99や集石炉S F53と重複関係にある。S F52が古く、次にS F99、S F53へと新しくなる。埋土から押型文土器片（1）を検出した。当遺跡から出土した土器の中では、早期前半と比定できる唯一の遺物である。

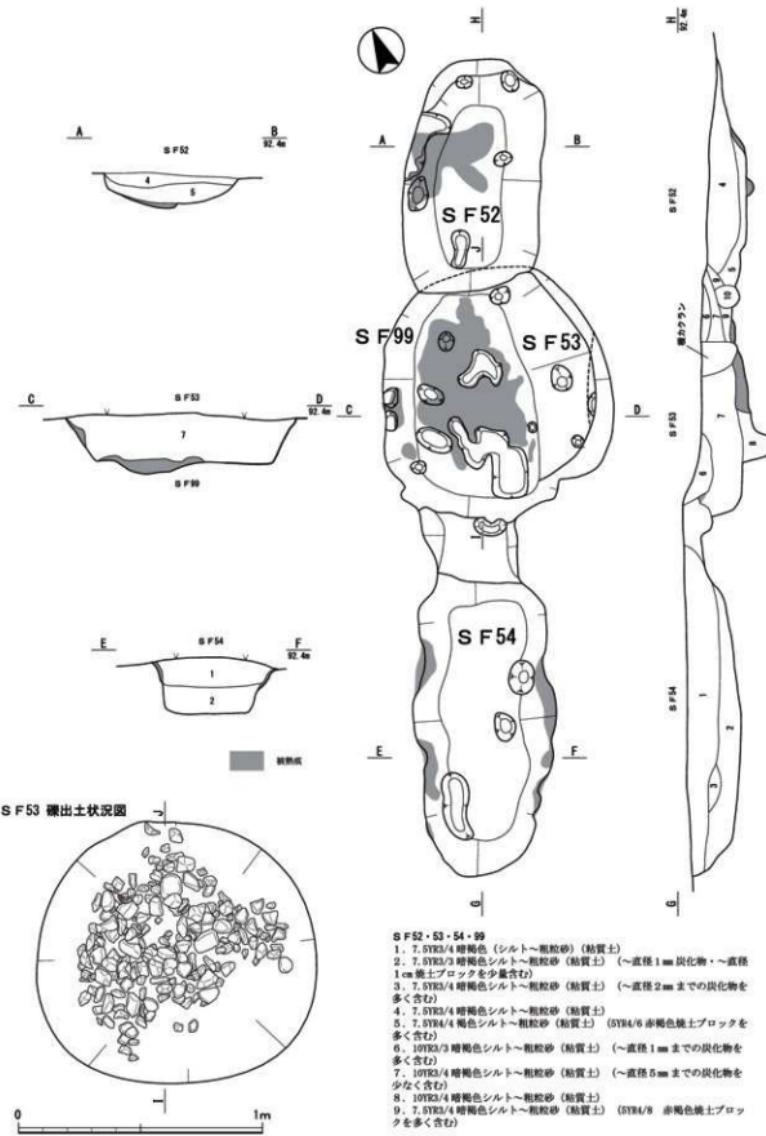
S F54（第11図） 西調査区の南西部で検出した。残存長1.46m、幅0.58m、深さ0.22mを測り、燃焼坑から煙道へ向けて浅くなる。方位はN-22°-Eを示し、S F52やS F99とはほぼ同一方向である。燃焼坑の底面には見られないが、側壁には厚さ2cm程の被熱層が形成され、赤褐色に変色して硬化している。埋土の下層からは、径1mm程の炭化物や径1cm程の焼土ブロックを検出した。煙道天井部が崩落したものが含まれると推定する。煙道出坑の一部が集石炉S F53と重複関係にある。S F54が古くS F53が新しいと推定される。理土から土器の細片を検出したが、所属時期などは不明である。

S F60（第13図） 西調査区の中央部で検出した。平面は燃焼坑から煙道へ向けて幅が狭くなる。残存部は、長さ1.56m、幅0.72m、深さ0.1mを測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干深くなる。方位はS-21°-Wを示す。煙道前半部を中心に底面から側壁にかけて被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。煙道入口付近の埋土から径2cm程の炭化物や焼土ブロックを検出した。

遺物は検出できなかったが、埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では9650±30を、曆年較正年代では、9650±32を示している。

S F71（第13図） 西調査区の南西部で検出した。平面は燃焼坑から煙道へ向けて幅が狭くなる。残存部は、長さ1.1m、幅0.62m、深さ0.1mを測る。方位はN-5°-Wを示す。底面や側壁の半分以上に被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土からは焼土ブロックを検出した。通常、人が入って作業する燃焼坑の端部には被熱は認められない。しかし、本遺構の南端には被熱が認められることから、燃焼坑の大部分が削平されていると推定する。遺物は検出できなかった。

S F91（第13図） 西調査区の中央部で検出した。残存部は、長さ0.85m、幅0.6m、深さ0.05mを



第11図 SF52・53・54・99実測図 (1 : 20)

測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干深くなる。方位はS-5°-Eを測る。煙道前半部の底面に厚さ5cm程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。煙出坑の一部が煙道付炉穴S F 102と重複関係にある。S F 91が古くS F 102が新しいと推定される。埋土からは、径1cmまでの炭化物を微量と焼土ブロックを多量検出した。

遺物は検出できなかったが、埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、9585±30を曆年較正年代では9587±32を示している。

S F 96 (第12図) 西調査区の南西部で検出した。

残存部は、長さ0.85m、幅0.45m、深さ0.06mを測る。方位はN-8°-Eを示す。煙道前半部を中心にして底面から側壁にかけて厚さ4cm程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土から少量の径3mmまでの炭化物と焼土ブロックを認めた。

煙出坑の一部を煙道付炉穴S F 97と、燃焼坑の一部を集石炉S F 51と重複し、一直線に並ぶ。S F 96が古くS F 51が新しいと推定するが、S F 96とS F 97の新旧は判然としない。

遺物は検出できなかった。

S F 97 (第12図) 西調査区の南西部で検出した。

平面は燃焼坑から煙道へ向けて幅が狭くなる。残存部は、長さ0.85m、幅0.76m、深さ0.11mを測る。方位はN-14°-Eをとる。煙道前半部を中心にして底面から側壁にかけて、厚さ10cm程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。燃焼坑の一部を煙道付炉穴S F 98と、煙出坑の一部を煙道付炉穴S F 96と重複している。S F 97が古くS F 98が新しいと推定する。

埋土から繩文中期の土器を検出したが、混入と思われる。また、埋土から径3mmまでの炭化物を少量と焼土ブロックを少量検出した。埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、9555±30を示している。

S F 98 (第12図) 西調査区の南西部で検出した。

残存部は、長さ1.25m、幅0.7m、深さ0.26mを測り、燃焼坑の底面はほぼ平坦であるが煙道へ向けて若干浅くなる。方位はN-14°-Eを示す。煙道前半部を中心にして底面から側壁にまで厚さ5cm程の被熱

層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土から径3mmまでの炭化物を少量と焼土ブロックを少量検出した。煙出坑の一部分が煙道付炉穴S F 97の燃焼坑と重複関係にある。

S F 99 (第11図) 西調査区の南西部で検出した。

燃焼坑から煙道にかけて底部(床面)のみの検出であるため、本来の形状は不明である。残存部は長さ1.03m、幅0.58m、深さ0.23mを測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干浅くなる。方位はN-22°-Eを示す。煙道前半部の底面に厚さ5cm程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。煙道の上部が、集石炉S F 53と重複関係にある。S F 53との境界は判然としない。しかし、燃焼坑は底部から側壁へ立ち上がっており、S F 99のものと推定される。また、被熱跡はすべてS F 99の範囲内であり、集石炉S F 53のものではないと思われる。遺物は検出できなかった。

S F 102 (第13図) 西調査区の中央部で検出した。

南部は搅乱により失われている。残存部は、長さ1.1m、幅0.76m、深さ0.2mを測り、燃焼坑から煙道へ向けて若干浅くなる。方位はN-25°-Wを示す。煙道前半部を中心にして底面から側壁にかけて厚さ5cm程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。埋土から径1cmまでの炭化物を微量と焼土ブロックを多量検出した。煙出坑の一部が煙道付炉穴S F 91と重複関係にある。

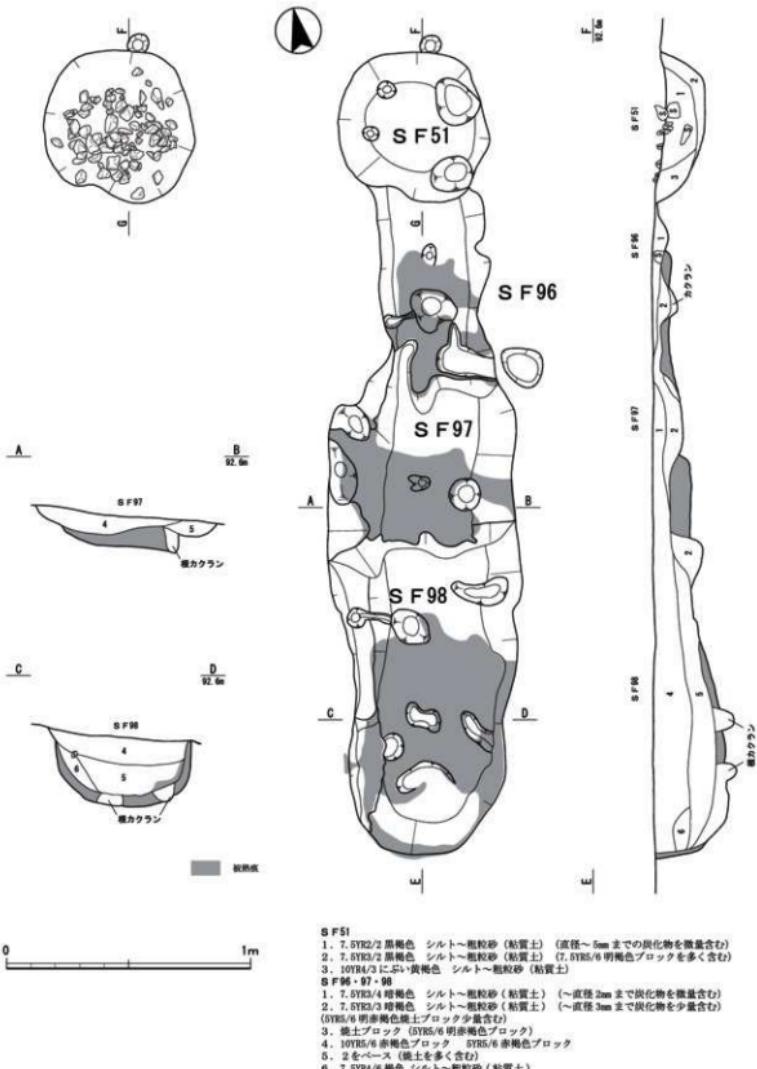
遺物は検出できなかった。

B 集石炉

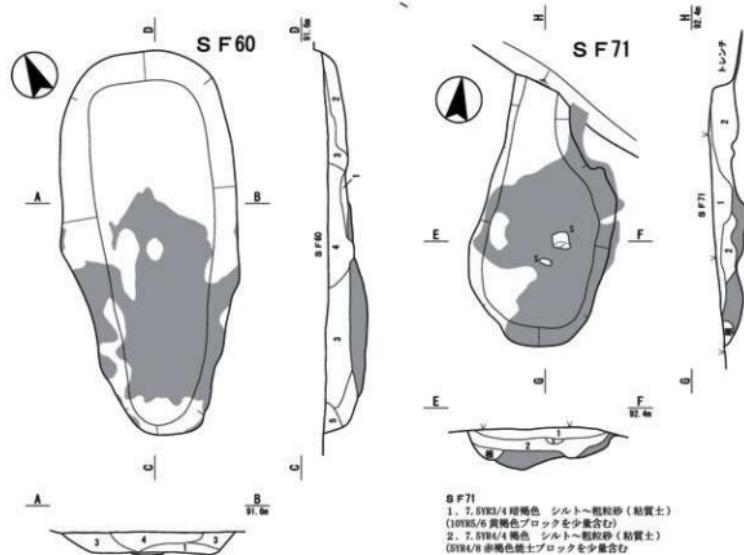
2基検出したが、共に煙道付炉穴と重複している。煙道付炉穴跡の窪みを利用して、真上に構築した可能性がある。

S F 51 (第12図) 西調査区の南西部で検出した。

後世の削平のため上部が失われているが、平面はおおむね円形を呈し、残存部は、径0.62m、深さ0.16mを測る。埋土は暗褐色を呈し、上位で径5~7cmを中心とした礫を密集した状態で検出した。また埋土中位では礫がまばらに広がる様子を確認した。礫の石材は花崗岩やチャートの他、ホルンフェルスや班レイ岩、流紋岩などで、遺跡周辺から調達できるものを使用していることがわかる。底面や礫に被熱跡は見られない。ただし、埋土には径1cmまでの



第12図 SF51・96・97・98実測図 (1 : 20)



S F 71

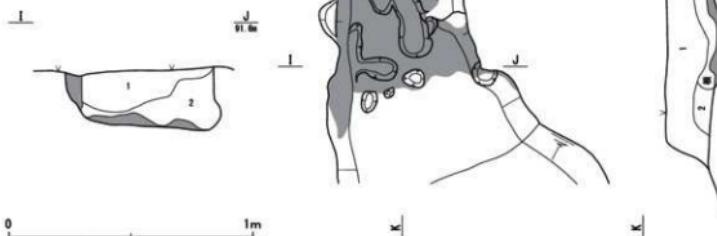
1. 7. SYR4/4 棕褐色 シルト～粗粒砂（粘質土）
(10YR5/6 黄褐色ブロックを多く含む)
2. 7. SYR4/4 棕色 シルト～粗粒砂（粘質土）
(SYR4/8 赤褐色地土ブロックを少く含む)

S F 60

1. 7. SYR4/4 棕色シルト～粗粒砂（粘質土）
(地表を多く含む)
2. 10YR4/6 棕色シルト～粗粒砂（粘質土）
(10YR5/6 黄褐色ブロックを多く含む)
3. 10YR2/2 黑褐色シルト～粗粒砂（粘質土）
(直径2cmの炭化物・地土ブロックを少く含む)
4. 7. SYR4/4 棕色シルト～粗粒砂（粘質土）
(直径5mmの炭化物を少く含む)
5. 10YR4/4 棕色シルト～粗粒砂（粘質土）
(10YR5/6 黄褐色ブロックを多く含む)

S F 91・102

1. 7. SYR4/3 棕色 シルト～粗粒砂（粘質土）
(直径～1cmまでの炭化物微量含む)
2. 7. SYR4/6 棕色 シルト～粗粒砂（粘質土）
(SYR4/8 赤褐色地土ブロックを多く含む)



第13図 S F 60・71・91・102実測図 (1 : 20)

炭化物が認められることから、炉と推定する。S F 96の燃焼坑と重複関係にある。S F 96を利用して構築したものと推定される。底面1cm上の埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では 9635 ± 30 を、曆年較正年代では 9637 ± 30 を示している。

埋土から土器細片を検出したが、所属時期は不明である。

S F 53（第11図） 西調査区の南西部で検出した。

後世の削平のため上部が失われているが、平面はおおむね円形を呈し、残存部は、径0.95m、深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色を呈し、5mm程の炭化物が少量認められた。ただし、明らかな層位は認められない。埋土上位で径4~6cmを中心とした縦を密集した状態で検出した。また埋土中位から下位にかけて縦がまばらに広がる様子を確認した。縦の中には被熱により赤変しているものが見られる。石材は花崗岩やチャートの他、ホルンフェルスや斑レイ岩、流紋岩などがある。

北側のS F 52と南側のS F 54、底面下のS F 99、計3基の煙道付炉穴を切っている。3基のくぼみを利用して、S F 99の真上に構築したものと思われる。したがって、S F 99はS F 53の下にすっぽり隠れている。断面からS F 99との境界を観察するが判然としない。ただし、縦が含まれる範囲はS F 53と判断した。土坑底面の被熱跡はS F 99の範囲と推定され、S F 53のものではない。

埋土から縄文中期の土器片を検出したが、混入と思われる。壁面近くの埋土から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では 9535 ± 30 を示している。

（2）縄文時代中期

遺構は東西両調査区に広がり、西調査区は標高の高い西部に、東調査区は中央部に遺構が集中している。

A 穫穴住居

壁周溝が残るもの6棟（S H50・84・106・107・108・109）、柱穴と屋内炉のみが確認できるもの3棟（S H63・72・93）、柱穴のみが確認できたもの4棟（S H36・94・95・110）を検出した。

柱穴は大小のものを検出したが、いずれも掘形、柱痕跡・抜取穴を検出できず、「柱穴」とした。

出土土器は、ほとんどが中期後半に属する。

S H36・94（第14図） 西調査区の西部中央で検出した。掘込や周溝は認められず平面形は不明であるが、主柱穴をそれぞれ4個確認した。

S H36の柱間は南北の両面が1.8m、東面が1.5m、西面が1.8mを測る。また、S H94の主柱穴の柱間は南北の両面が2.4m、東西の両面が1.8mであり、他の竪穴住居と規模を比較しても違和感はない。2棟に、屋内炉と思われる被熱跡を1ヶ所確認した。炉の作り替えは認められないことから、2棟の重複ではなく、建て替えであると推定した。新旧は不明である。

遺物は確認できなかった。

S H50（第15・16図） 西調査区の南西部で検出した。平面は略圓角方形に近い。規模は4.1m四方である。残存最大深は0.26mを測る。

4つの主柱穴は周溝に近く、柱穴から側壁までは0.28m程を測る。柱間は北面が1.9m、南面が1.7m、東面が2.7m、西面が2.3mを測る。周溝は、最大幅0.8m、最大深0.16mである。周溝の北側は一重であるがその他の部分は二重に廻っている。また、周溝の外側には径0.2~0.25m、深さ0.1~0.15mの小穴を8基確認した。垂木穴であろうか。

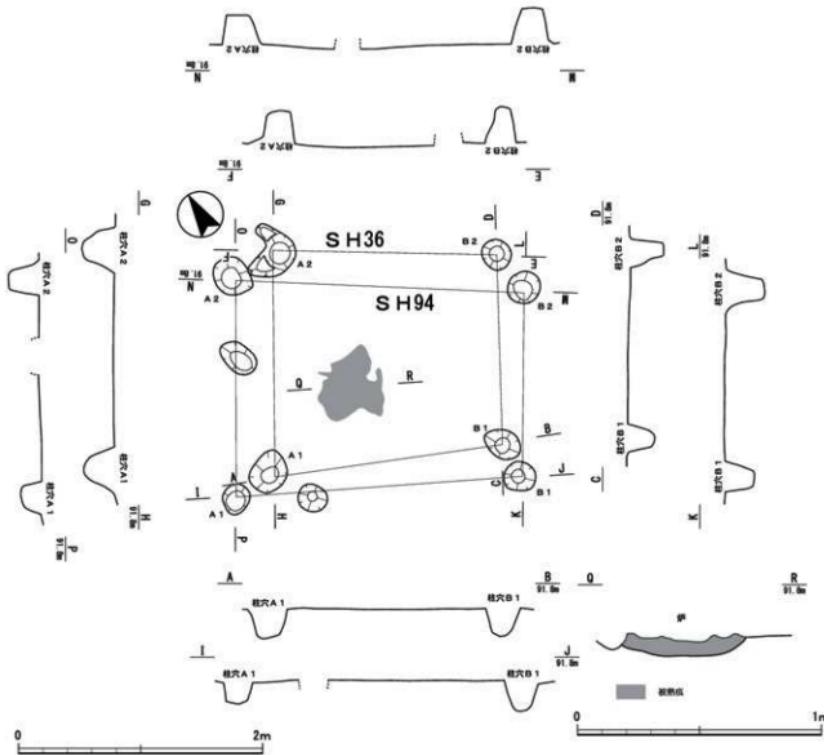
中央からやや西寄りに屋内炉を確認した。焼土周囲の掘込は、石團の痕跡の可能性がある。なお、床面には小さな凹凸を多数確認した。詳細は不明である。

周溝は二重であるが炉の作り替えはないことから、建て替えが行われたと推定した。周溝の新旧は、土層の観察から内側の方が外側より新しく、建て替えに際して縮小された可能性が高い。

柱間が西面より東面の方が広く、屋内炉はやや西寄りである。また、壁周溝の東辺中央付近で小穴を2基検出した。このような特徴から、入口は東側である可能性が高いと判断した。

埋土には、上層から下層まで中期の灰陶貝塚I群A類系（2期）³から後期初頭までの土器（2~83）が混在していたが、層位に応じて土器の型式が変わるべきではない。量的には後葉の4古~5新期に属するものが多い。石器類や剝片及び碎片も多数出土した。

S H63（第17図） 西調査区の南西部で検出した。



第14図 SH36・94実測図 (1:40)・炉 (1:20)

掘込や周溝は不明であるが、径0.5m程、深さ0.5m程の4つの主柱穴を検出した。柱間は南北面が2.1m、東西面が2.7mを測る。中央から西寄りには、径0.7m、深さ0.28mの屋内炉を確認した。掘立柱建物S B89と重複するが、新旧は不明である。中央より西寄りに屋内炉を有し、東への傾斜地形であることから、出入口は東側と推定した。

埋土から中期の土器を検出したが、細片のため掲載できなかった。

S H72(第17図) 西調査区の南西端部で検出した。

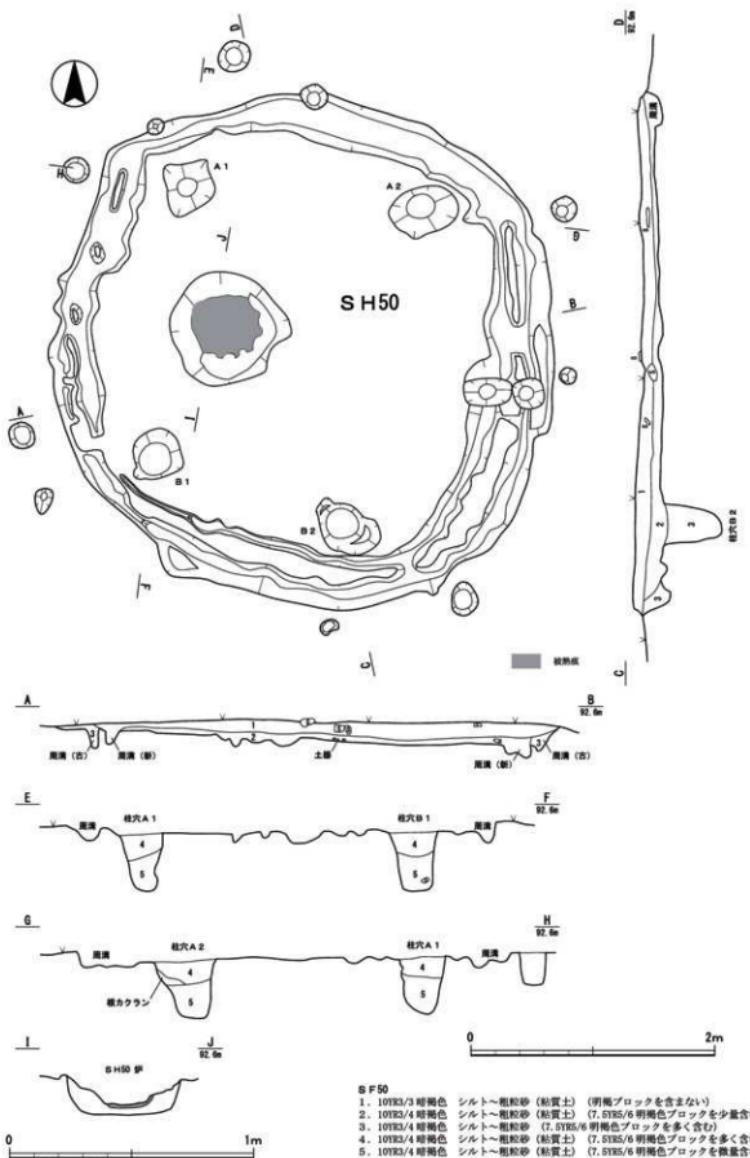
掘込や周溝は不明であるが、深さ0.3m程の4つの主柱穴を検出した。柱間は、南北が二面共2.3m、東西が二面共1.8mである。中央からやや北寄りに屋内炉を確認した。中央から北側に屋内炉を有し、南側への傾斜地形であることから、出入口は南東側と推定した。遺物は確認できなかった。

S H84(第18・19・20図) 西調査区の南西部で検出した。平面は略楕円形に近いが、やや東西に長い。北東部は、後世の擾乱溝により失われている。規模は、東西4.2m、南北3.9mで、残存最大深は0.45mを測る。4つの主柱穴を四隅で検出した。柱間は南北が二面共2.4m、東西が二面共2.1mである。柱穴から側壁までは0.4m程を測る。

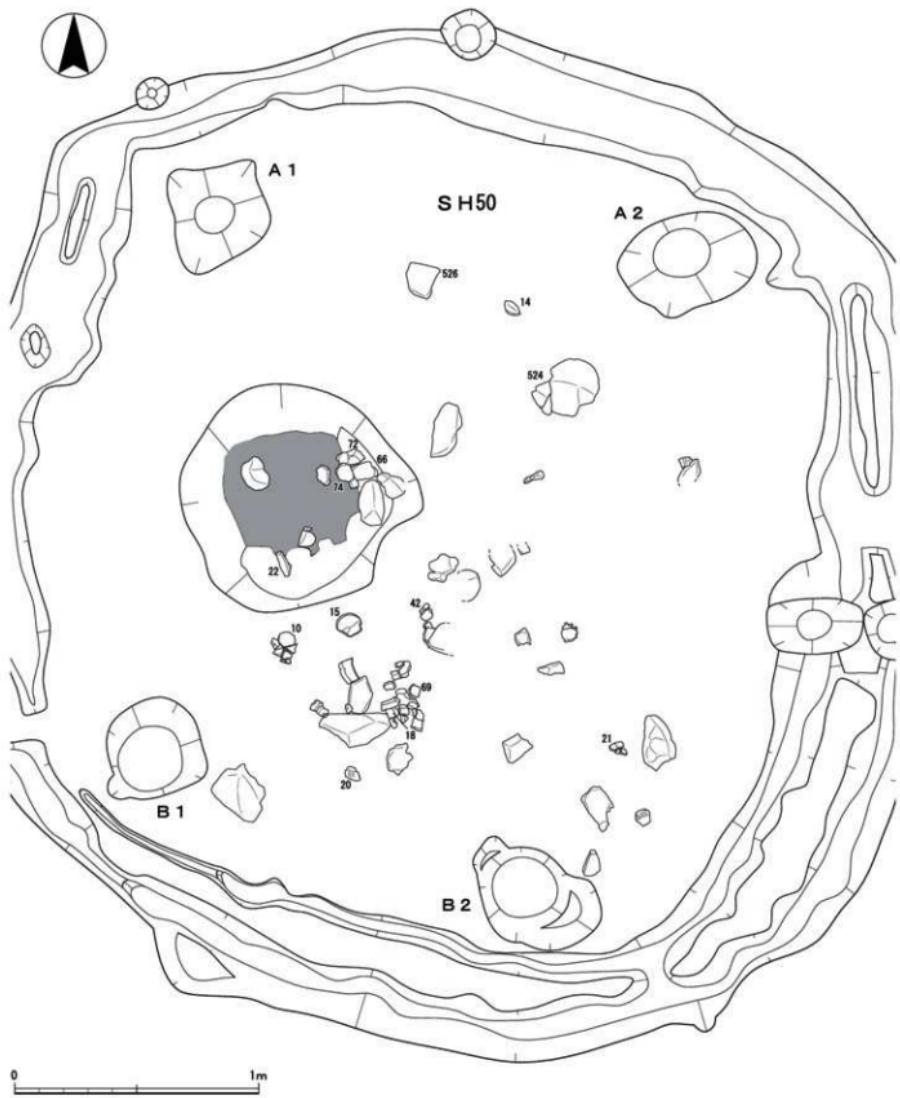
周溝の南半は幅0.4mであるのに対し、北半では幅0.8mを測り、北辺中央で二分されるような形状である。周溝の北西辺で径0.1m前後の小穴を3基検出した。これらはおおむね0.85m間隔で並ぶ。

中央からやや北寄りでは、屋内炉を検出した。焼土の周りには掘込があり、炉の開口に適した跡も残存したことから、石圍炉の可能性が高い。また、床面には小さな凹凸を多数確認した。

出土した遺物の量は全遺構中で最多であり、中期



第15図 SH50実測図 (1 : 40)・炉 (1 : 20)



第16図 SH50遺物出土状況図 (1 : 20)

後葉を中心とした土器（84～211）と、打製石斧や石鎌・切目石錐・剥片・碎片などの石器類を検出した。

北半側の壁周溝が二重になっていることから、建て替えによる住居の拡大または縮小した可能性がある。また、片側の柱間を広くする特徴はもたないが、中央より北西側に屋内炉を有し、東への傾斜地形でもあることから、出入口は南東側と推定した。

S H93 (第27図) 西調査区の南東部で検出した。

掘込や周溝は認められなかったが、深さ0.6m程の4つの主柱穴と炉を検出した。柱間は北面が2.6m、南面が2.3m、東面が2.5m、西面2.1mである。中央からやや西寄りに屋内炉を確認した。炉の北側は擾乱されて消失している。柱間が西側より東側の方が広く、屋内炉が中央よりやや西に寄ることと、東への傾斜地形でもあることから、出入口は東側と推定した。

炉跡から中期後葉（3期以降）の土器（212）を検出した。

S H95 (第28図) 西調査区の南西部で検出した。

掘込や周溝は認められなかったが、径0.4m程、深さ0.4m程の4つの主柱穴を検出した。柱間は南北の両面が、2.4m、東面が3.0m、西面が3.4mである。柱間は、他の堅穴住居のものより大きくて不定形であるため、他の遺構の可能性も残る。しかし、柱穴の配置や大きさおよび埋土は他の堅穴住居と同様であり、堅穴住居と推定した。

遺物は検出していない。

S H106 (第21・22図) 東調査区の中央部で検出した。平面は略隅丸方形に近い。規模は、長径3.8m、短径3.7mを測る。最大径が0.8mを測る柱穴を四隅で検出した。柱間は南北の両面が2.4m、東面が2.7m、西面が2.4mであり、柱穴から側壁までは0.6m程を測る。南西部は後世の擾乱により失われているが、最大幅0.2mの壁周溝が廻る。周溝の東辺中央付近では、小穴や径1m程の土坑を検出した。また、周溝の外側には径0.3m程の小穴を3基確認したが、垂木穴の可能性もある。中央からやや西寄りに屋内炉を有し、焼土厚は最大5cmを測る。炉付近からは、石圓炉に使用された可能性のある人頭の大の礫を検出した。柱間が西側より東側の方が広く、

屋内炉は中央より西寄りであることから、出入口は東側と推定した。

炉周辺や柱穴から中期後葉の神明式の土器を中心にして多数を検出した（213～238）。また柱穴B2付近からは、自然面を残すサヌカイトの大型剥片（492）を確認した。

S H107 (第23・24図) 東調査区の中央部、SH106の南西近くで検出した。平面は略隅丸方形に近い。南西部は後世の擾乱のため失われているが、残存規模は東西4.6m、南北4.3m以上を測る。柱穴は径0.7m程を測り、四隅で検出した。柱間は南北の両面が2.4m、東西の両面が2.8mである。最大幅0.24mの周溝を確認した。屋内炉を中心よりやや北西寄りで確認し、南東側には径0.7m程の土坑や小穴を検出した。

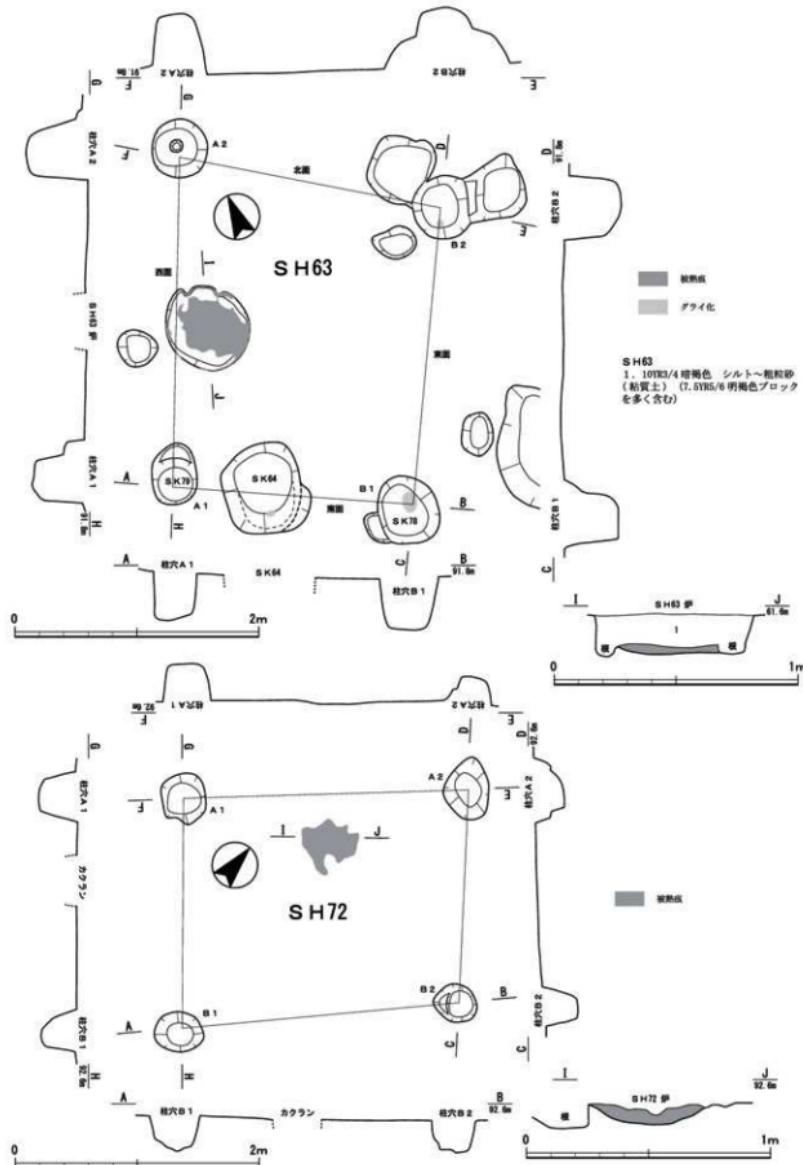
一面の柱間を広くする特徴はもたないが、中央を外し、北西側に屋内炉を有することから、出入口は南東側と推定した。

出土遺物には、中期後葉の神明式を中心とした多数の土器（239～266）と、石器類や剥片・碎片がある。また、石圓炉に使用された可能性のある礫も多数検出した。

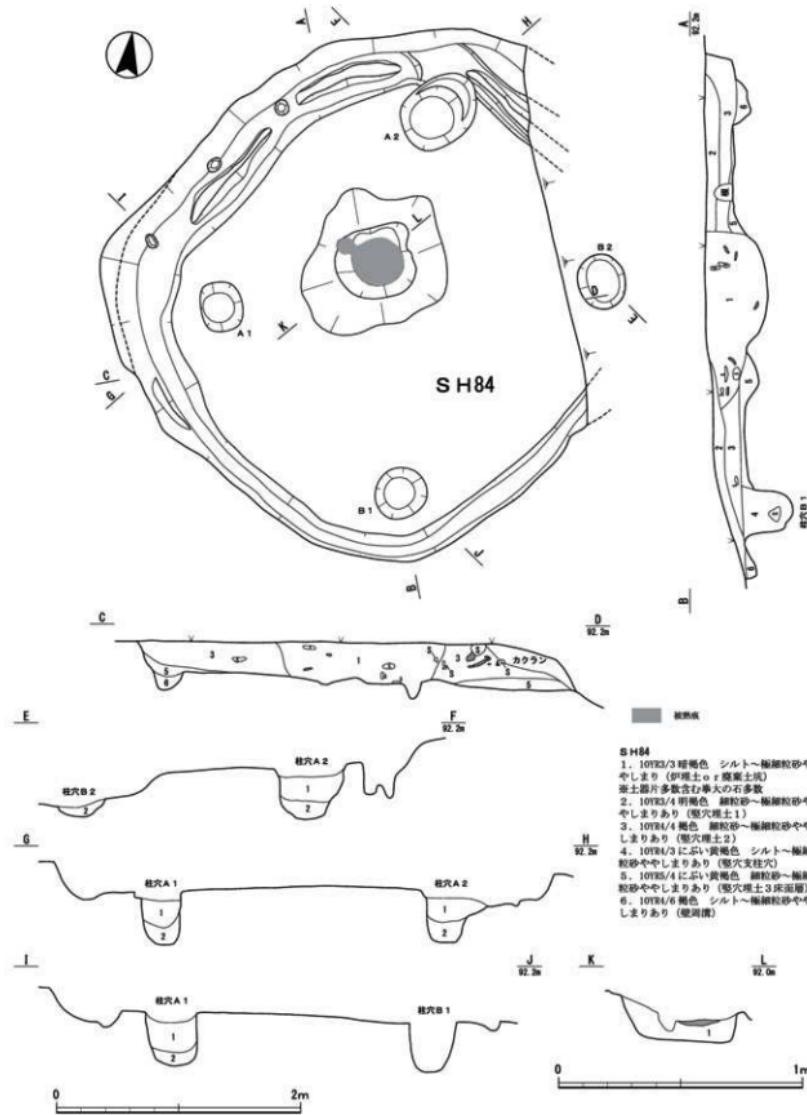
S H108 (第25・26図) 東調査区の中央部、SH106の南近くで検出した。東部は部分的に削平されていて平面が略隅丸方形に近い。規模は、東西4.8m以上、南北5.2mを測る。柱穴は最大径1.2mを測り、四隅で検出した。柱間は北面が2.7m、南面が3.0m、東西の両面が2.4mで、柱穴から側壁までは0.8m程を測る。幅0.16m程の周溝が廻る。周溝の南辺中央では、径0.48mの小穴を検出した。

0.9m四方の石圓炉を、中央からやや北寄りで確認した。炉の北辺（奥部）には、縦0.13m、横0.6mの平らな面をもつ整った形状の礫を配している。川原石だが、被熱によって割れている。炉の西辺の一部は、後世の擾乱により礫が遺存しなかった。炉の底面は被熱により赤変硬化し、焼土厚は最大4cm程を測る。また、炉を囲む礫と地山との間には、厚さ2cm程の裏込を確認した。柱間は北側より南側の方が広く、石圓炉は中央を外して北側に寄ることから、出入口は南側であると推定した。

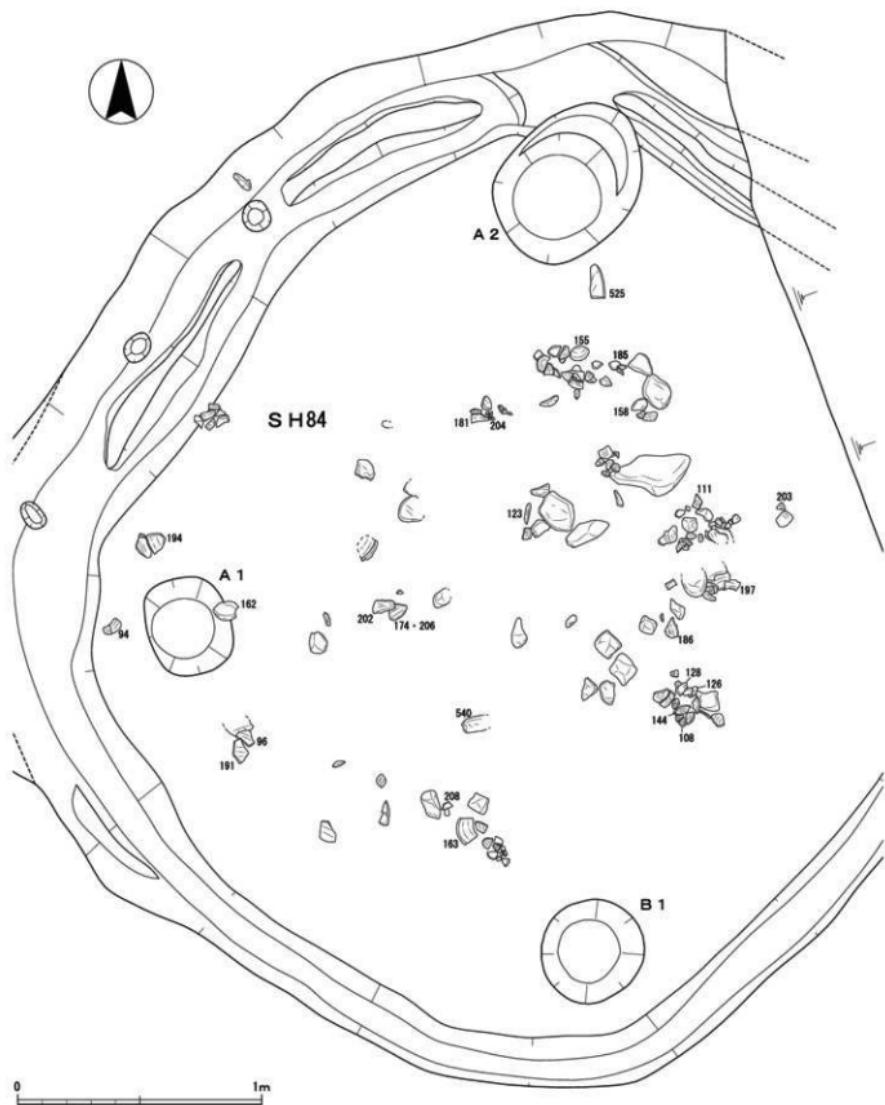
出土遺物には、中期後葉の土器（267～276）



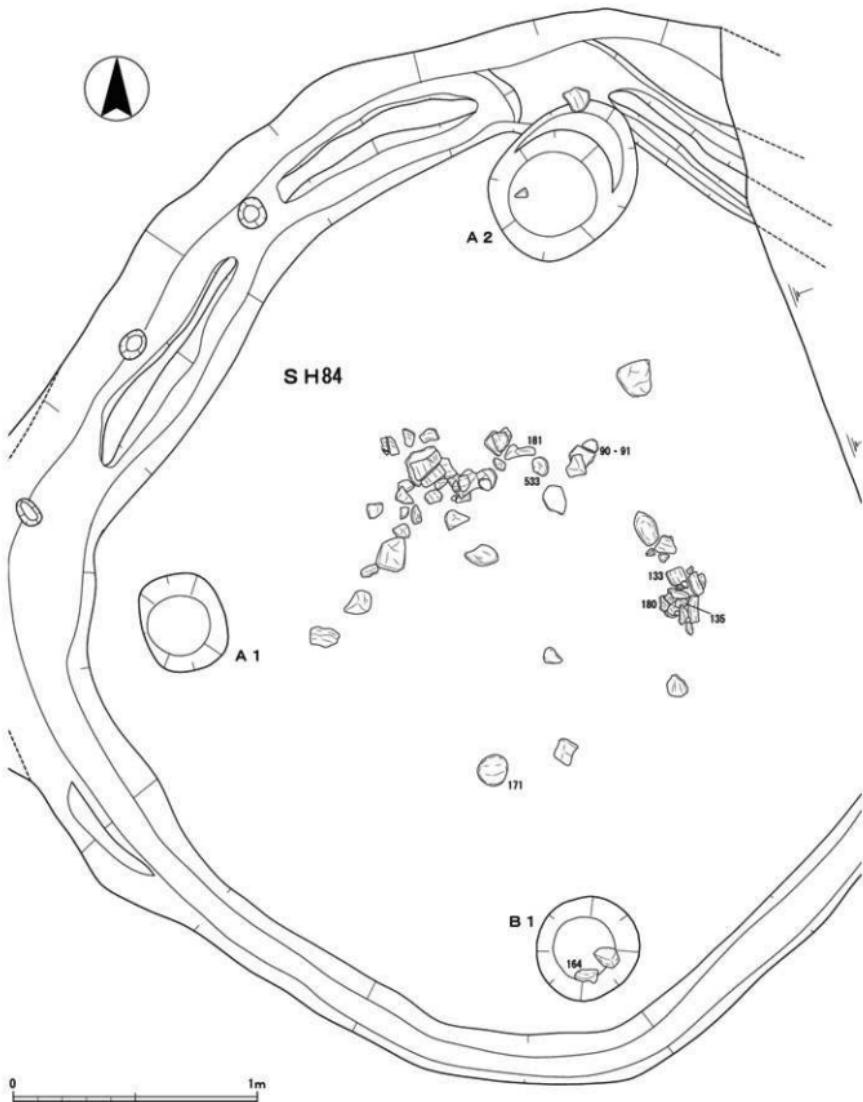
第17図 SH63・72実測図 (1 : 40) • 炉 (1 : 20)



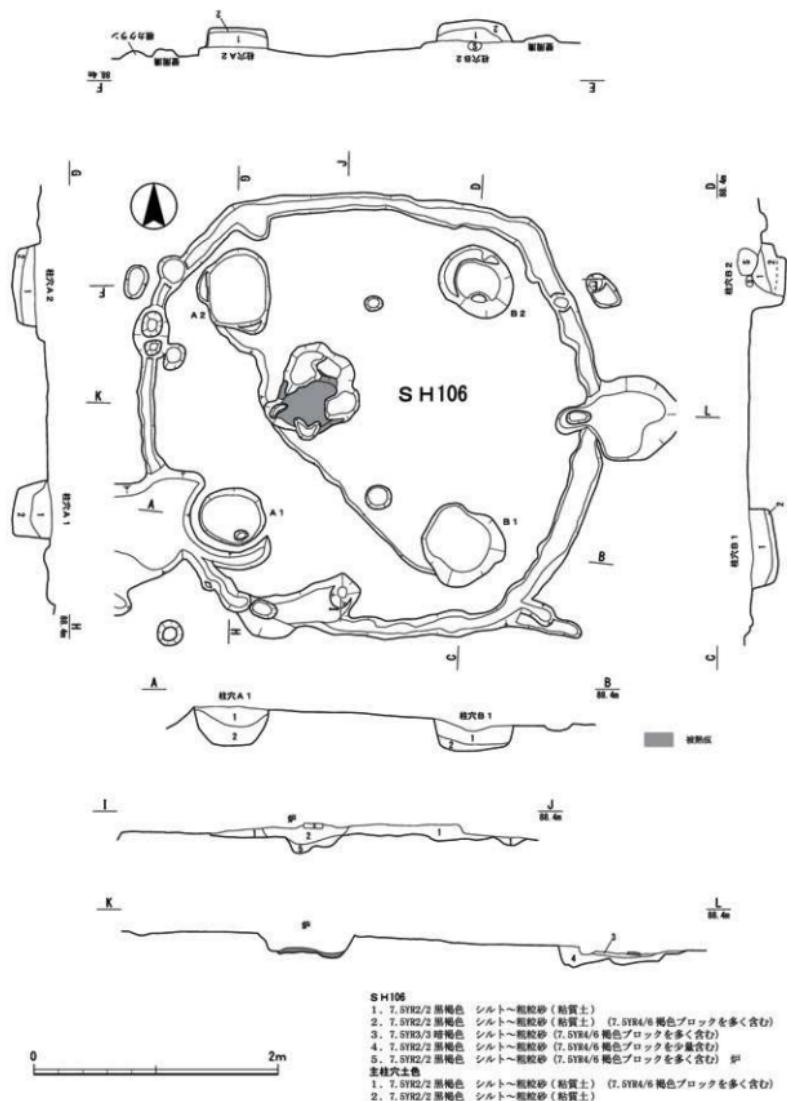
第18図 SH84実測図 (1 : 40)・炉 (1 : 20)



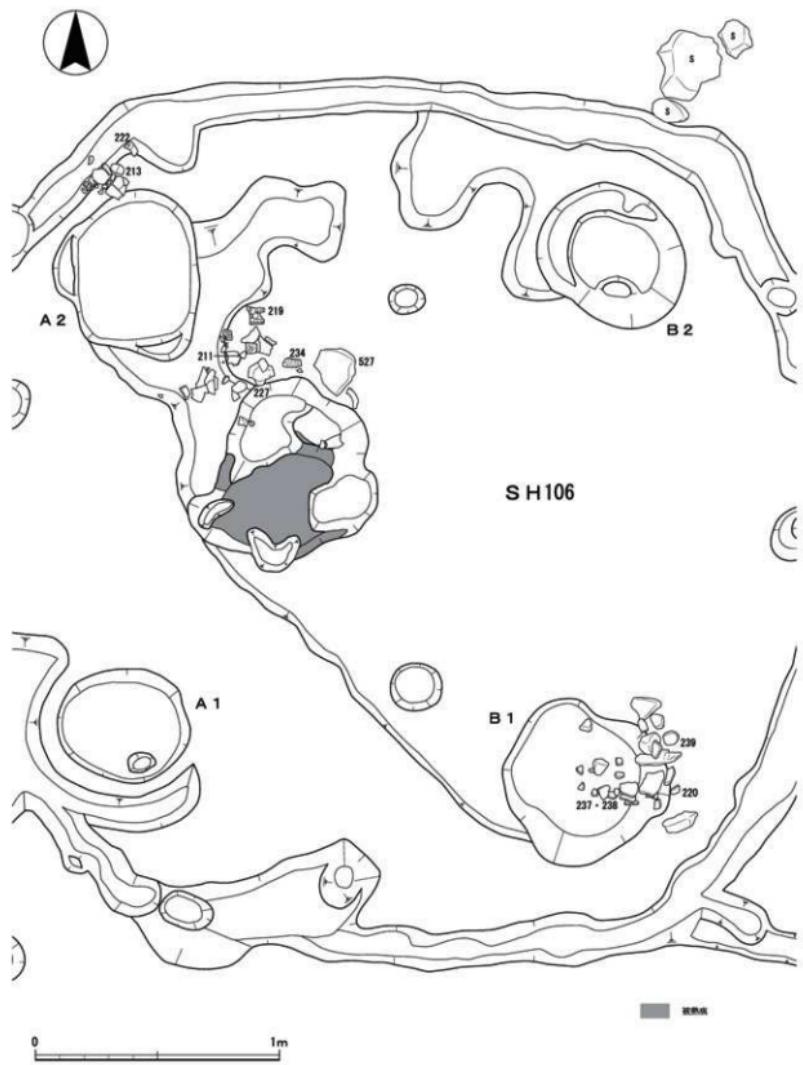
第19図 SH84遺物出土状況図上層 (1 : 20)



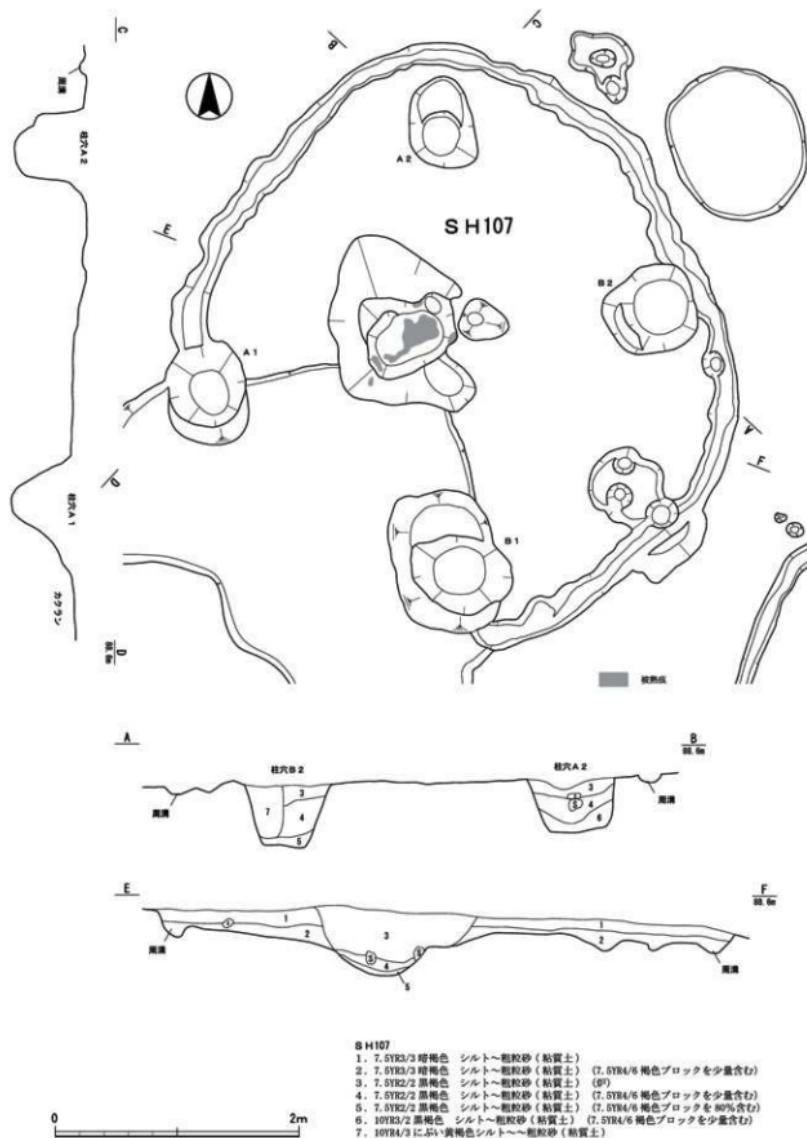
第20図 SH84遺物出土状況図下層 (1 : 20)



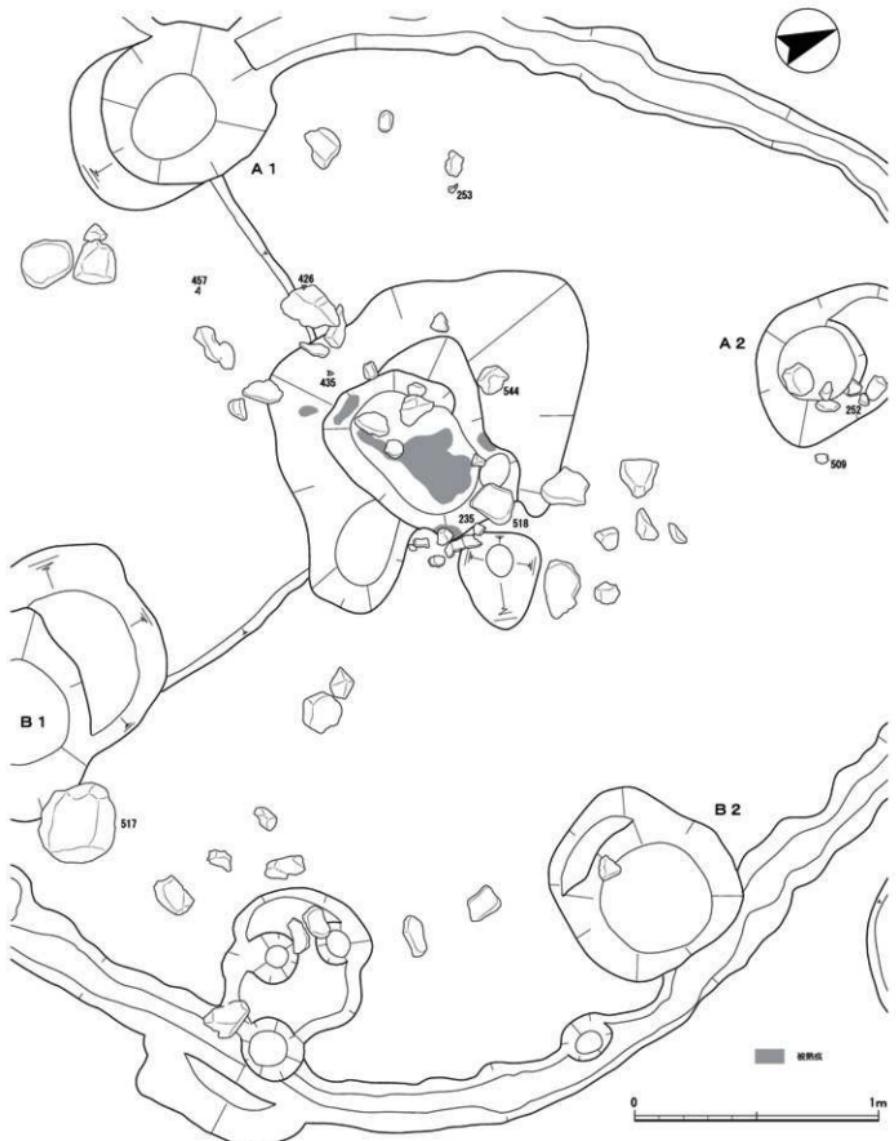
第21図 SH106実測図 (1 : 40)



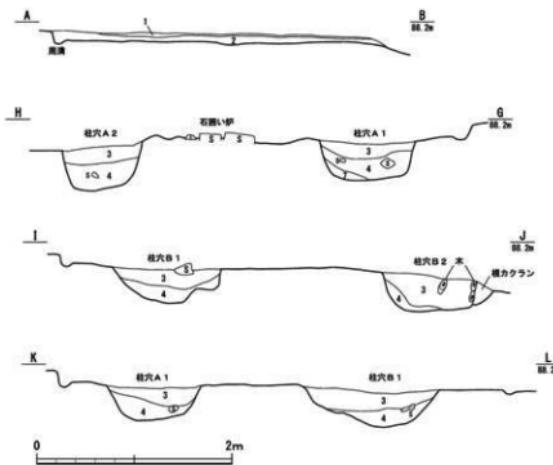
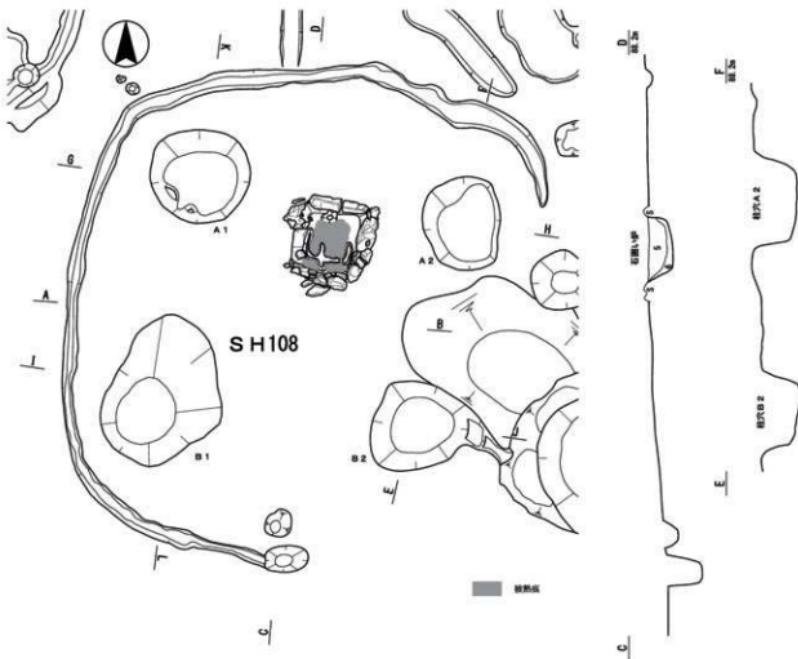
第22図 SH106遺物出土状況図 (1 : 20)



第23図 SH107塞測図 (1 : 40)



第24図 SH107遺物出土状況図 (1 : 20)



第25図 SH108実測図 (1 : 50)

(2期～5期)を中心とした土器と、石器類や剥片・碎片がある。

S H109 (第27図) 東調査区の南東部、S H106の南東近くで検出した。大部分は削平されているが、4つの主柱穴を検出した。最も残りの良いもので深さ0.4mを測る。柱間は北面が2.4m、南面が2.6m、東西面の両面が2.1mである。柱穴から側壁までは0.7m程を測る。周溝は北側から西側にかけての一部分のみ確認できた。中央よりやや北西寄りに屋内炉を確認した。残存する柱穴や周溝および炉の形状は、他の堅穴住居と同様であったとみられる。

炉周辺から、中期後半の土器(277・278)と切目石鍤(510)を確認した。

S H110 (第28図) 東調査区の中央北部、S H106の北約6mで検出した。掘込や周溝および屋内炉は認められず、平面形は不明である。最大径0.46mを測る4つの主柱穴を検出した。柱間は南北面が3.0m、東西面が2.2mである。柱穴のみであるために他の遺構の可能性も否定できないが、柱穴の配置と大きさ及び埋土は他の堅穴住居と同様であり、堅穴住居

と推定した。遺物は検出していない。

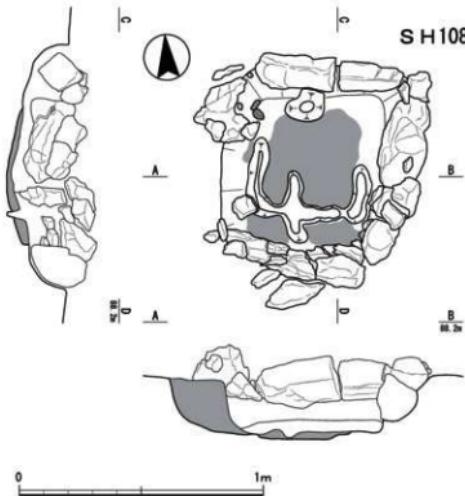
B 挖立柱建物 (第5表)

便宜的に柱間数の多い側を棟方向とし、棟方向の座標北に対する振れを記した。いずれの棟方向も、ほぼ等高線に沿った北東である。西調査区の北西部と南西部に、3棟ずつみられた。

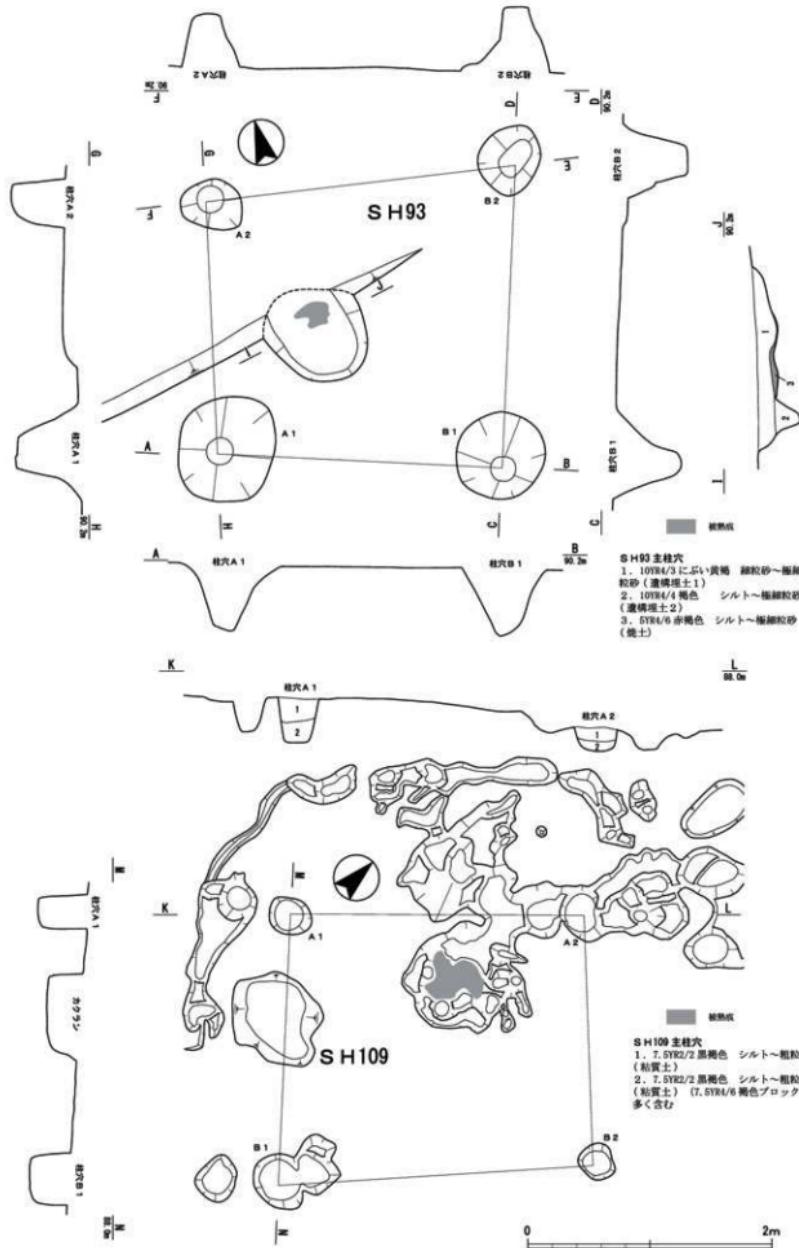
いくつもの柱穴の底部から上部にかけて、縄文中期末葉の土器を検出した。ところが、柱痕跡・掘形・抜取穴の識別ができなかつたため、掘立柱建物の所属期を特定し切れなかった。しかし、全調査区において縄文中期以外の土器はほとんどみられないことから、掘立柱建物は中期末葉と推定しておく。

S B85 (第29図) 西調査区の北西部で検出した。桁行3間・梁行1間の東西棟で、棟方向はW-8°-Nである。建物規模は桁行が約9.0m、梁行が約4.1mを測る。柱穴は楕円形を呈し、最大のもので長径1.5m程、深さ0.5m程を残す。柱間は、桁行が3.0m等間である。

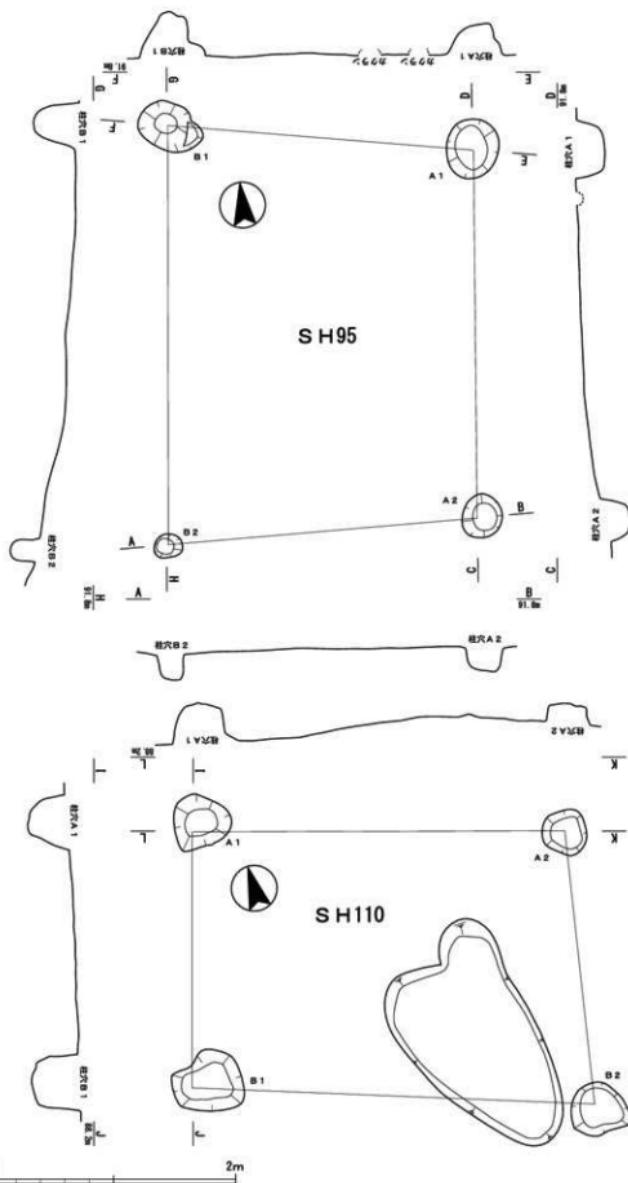
柱穴S K18・19はS B86の柱穴とそれぞれ重複し、柱穴S K19の底面には2穴の深度の違いによる段差



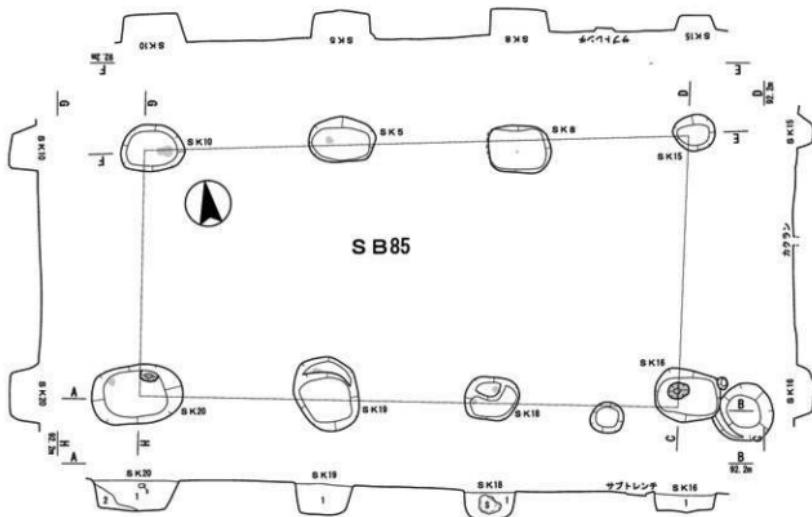
第26図 S H108石圓炉実測図 (1:20)



第27図 SH93・109実測図 (1 : 40)



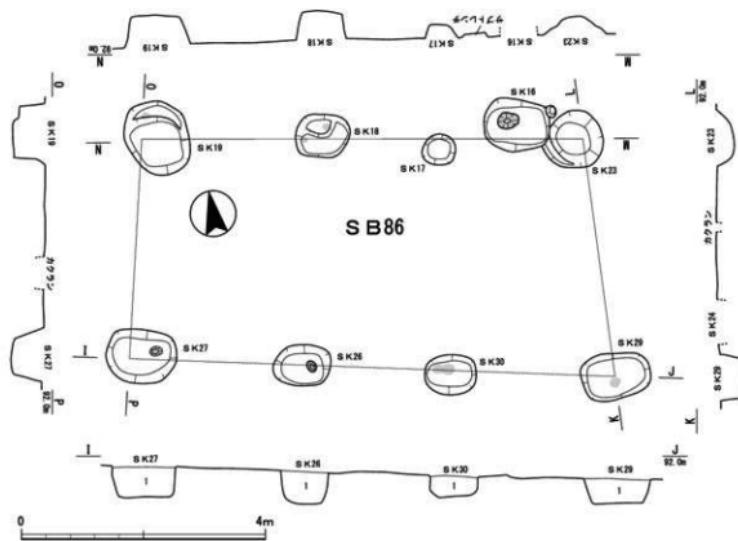
第28図 SH95・110実測図 (1 : 40)



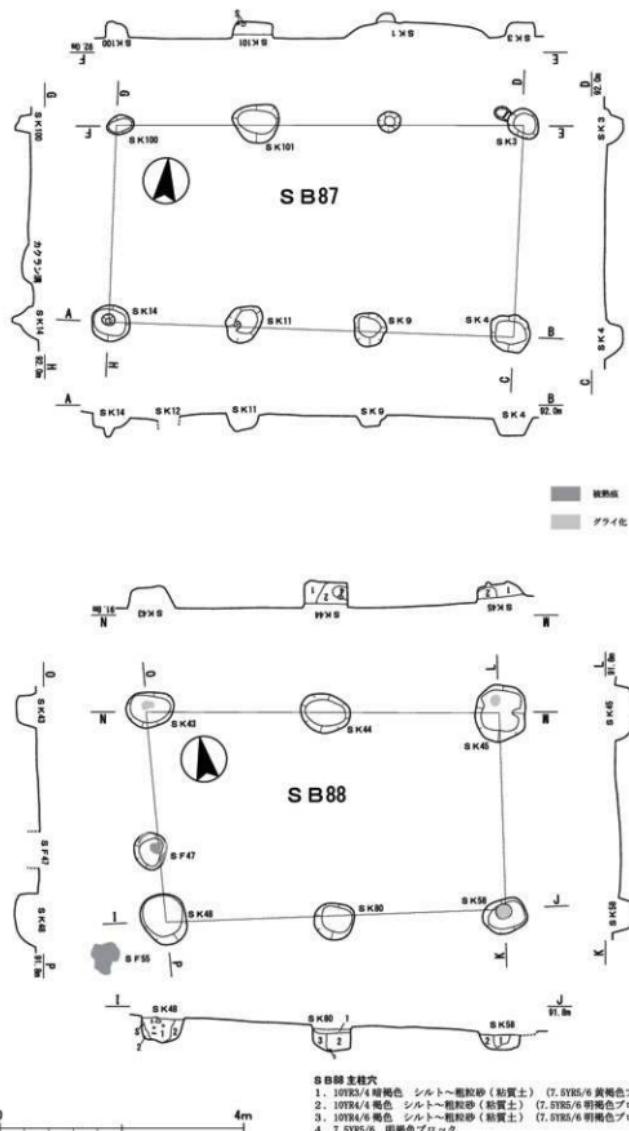
グライ化

S B85-86 主柱穴

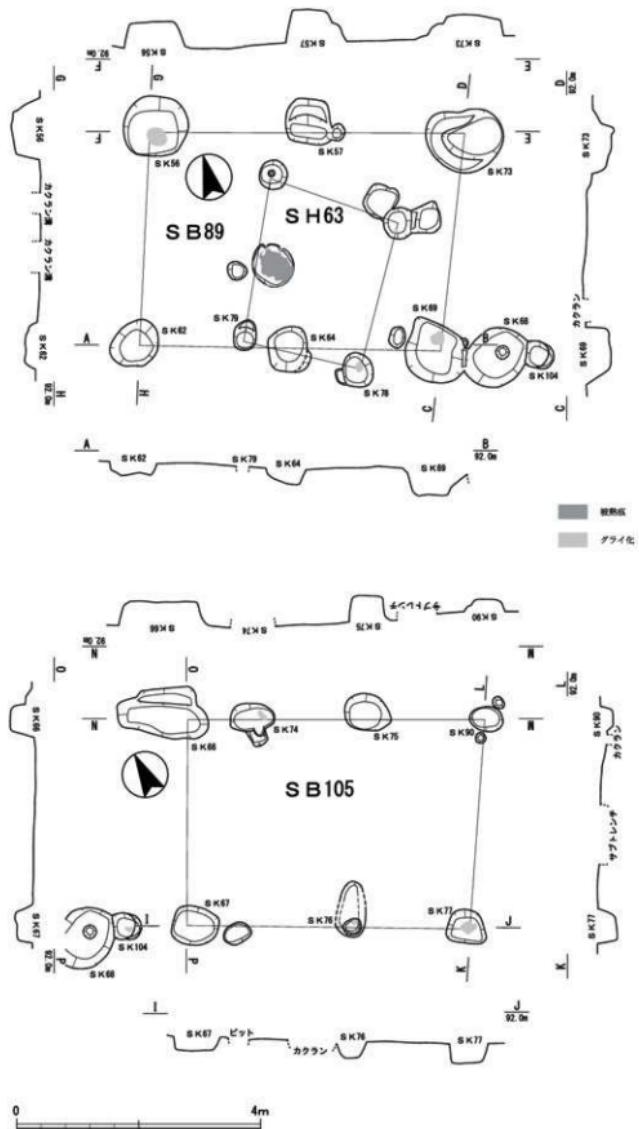
1. 10TR3/4暗褐色 シルト～粗粒砂（粘質土） (7.5YR5/6
黄褐色ブロックを少し含む)
2. 10TR4/6褐色 シルト～粗粒砂（粘質土） (7.5YR5/6明
褐色ブロックを多く含む)



第29図 SB85・86実測図 (1 : 80)



第30図 SB87・88実測図 (1 : 80)



第31図 SB89・105実測図 (1 : 80)

がみられる。柱穴の底面には、柱痕跡と推定される土壤のグライ化が見られる。柱穴からは、縄文中期後半（4・5期）を中心とした土器（279～289）と石器類を検出した。

S B86（第29図） 西調査区の北西部で検出した。桁行3間・梁行1間の東西棟で、棟方向はW-13°-Nである。柱穴の上部は削平されているが、平面は梢円形を呈し、最大のもので長径1.2m程、深さ0.5m程を残す。建物規模は桁行が約7.2m、梁行が約3.7mを測る。柱間寸法は桁行が南北で違いがあり、北側は2.6m+2.0m+2.6m、南側は2.4m等間である。

柱穴SK18・19は、S B85の柱穴とそれぞれ同じ位置で重複している。柱穴の底面には柱痕跡と推定される土壤のグライ化が見られる。

柱穴から縄文中期後葉（4・5期）を中心とした土器（290～294）と石器類を検出した。

S B87（第30図） 西調査区の北西部で検出した。桁行3間・梁行1間の東西棟であり、棟方向はW-6°-Sである。柱穴は不整円形を呈し、最大径0.7m程、深さ0.5m程を残す。建物規模は桁行が約6.6m、梁行が約3.3mを測る。柱間寸法は桁行が3.3m等間である。大型土坑SK1と重複する柱穴を有し、新旧関係は柱穴が新しいと推定される。また、柱穴SK14の底面中央にはさらに0.2m深くなる小穴を確認した。

柱穴から縄文中期後葉（4期新～5期古）の土器（295～297）と石器類を検出した。

S B88（第30図） 西調査区の南西部で検出した。桁行2間・梁行1間の東西棟で、棟方向はW-9°-Nである。柱穴は梢円形を呈し、最大のもので長径0.9m程、深さ0.51m程を測る。建物規模は桁行が約6.0m、梁行が約3.4mを測る。柱間寸法は桁行が3.0m等間である。柱穴の底面には柱痕跡と推定される土壤のグライ化が見られる。また、柱穴SK58の一部に若干の被熱跡を確認した。柱穴SK43と48ライン上のSK48寄りに、被熱跡のあるSF47を検出した。建物の中心から桁側に外れていることから、本建物に間連する炉の可能性は低いと考える。柱穴から縄文中期後半の土器（298・299）と石器類を検出した。

S B89（第31図） 西調査区の南西部で検出した。桁行2間・梁行1間の東西棟で、棟方向はW-17°-Nである。柱穴の上部は削平されているが、平面は梢円形を呈し、最大のもので長径1.2m程、深さ0.56m程を測る。建物規模は桁行が約5.2m、梁行が約3.6mである。柱間寸法は桁行が2.6m等間である。

柱穴の底面には柱痕跡と推定されるグライ化土壤化が見られる。中でも柱穴SK56は最も残存が良く、径約0.3m、厚さ3cmで黄褐色を呈している。柱穴SK69では、上層から中層にかけて深鉢（327等）を検出した。このほかにも、中期後葉（4期新～5期新）の土器を検出した。

屋内炉を有するSH63と重複するが、新旧は確認できない。

S B105（第31図） 西調査区の南西部で検出した。桁行2間・梁行1間の東西棟で、棟方向はW-27°-Nである。柱穴はおおむね梢円形を呈し、長径0.5～1.5m程、深さ0.42m程を測る。建物規模は桁行が4.9m、梁行が3.4mを測る。柱間寸法は桁行が3.0m+1.8mである。柱穴SK76は後世の搅乱により一部が失われている。柱穴の底面には柱痕跡と推定される土壤のグライ化が見られる。柱穴からは、縄文中期後葉（4～5期）の土器（333～338）を検出した。

C 陶穴

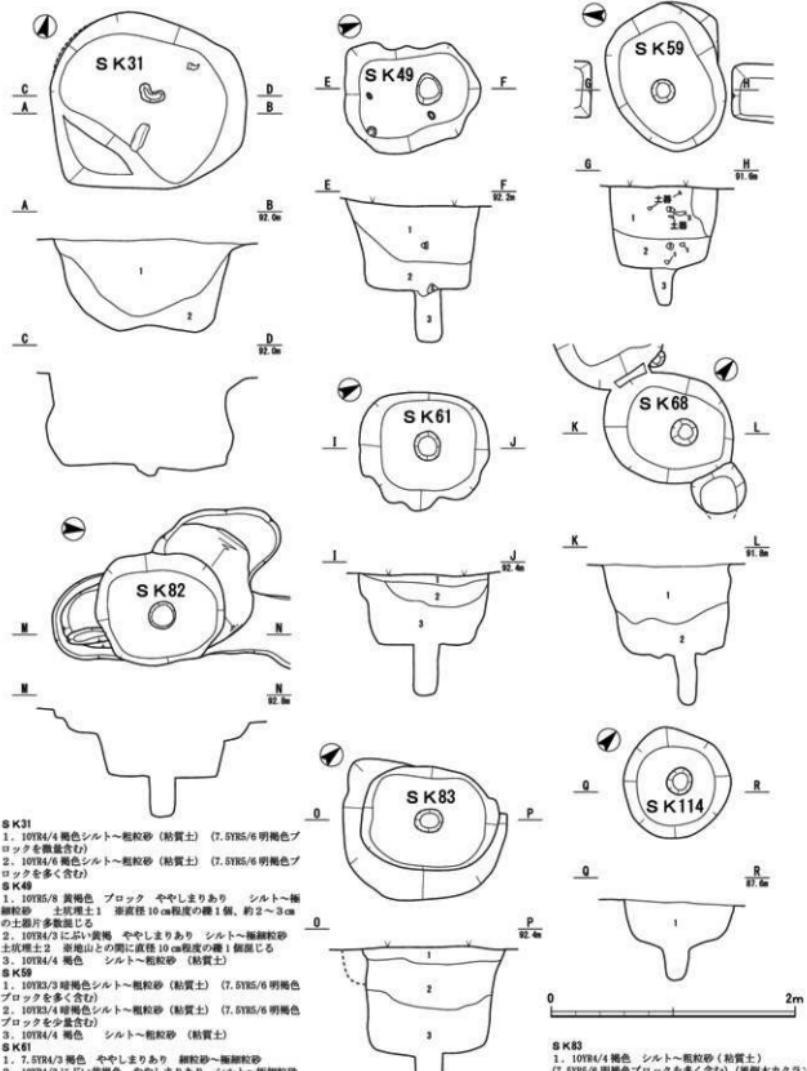
西調査区で7基（SK31・49・59・61・68・82・83）、東調査区で2基（SK113・114）を検出した。

いずれの陶穴からも縄文中期中葉から後葉の土器を検出したが、遺構との共伴関係は判然としない。しかし、全調査区から検出した遺構や遺物はほとんどが縄文中期であることから、ここでは陶穴の時期も縄文時代中期と推定しておく。

S K31（第32図） 西調査区の北西部で検出した。平面は梢円形を呈し、残存部は長径1.65m、短径1.39m、長径0.84mを残していた。底部の中央で検出した長径0.2m程、深さ0.1m程の不定形なビットまたは逆茂木の痕跡の可能性がある。

埋土からは、縄文時代中期後葉（2～5期）の土器（339～342）を検出した。

S K49（第32図） 西調査区の中央西部で検出した。



第32図 SK31・49・59・61・68・82・83・114審測図 (1:40)

平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.10m、短径0.85m、深さ1.1mを測る。底部の中央付近で検出した径0.25m、深さ0.15mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（5期）の土器1点（343）を検出した。

S K59（第32図） 西調査区の中央南部で検出した。平面は楕円形を呈し、長径1.21m、短径0.9m、深さ0.99mを測る。底部のほぼ中央で検出した径0.2m、深さ0.42mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（4期新～5期古）の土器（344～347）を検出した。

S K61（第32図） 西調査区の南西部で検出した。平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.06m、短径0.95m、深さ1.01mを測る。底部の中央で検出した径0.2m、深さ0.42mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（4期新～5期古）を中心とした土器（348～355）を検出した。

S K68（第32図） 西調査区の南西部、S B89とS B105の間で検出した。平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.14m、短径0.9m、深さ1.15mを測る。底部ほぼ中央の径0.2m、深さ0.4mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（4期新～5期古）を中心とした土器（356～361）を検出した。

S K82（第32図） 西調査区の中央南部で検出した。平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.06m、短径0.92m、深さ0.9mを測る。底部の中央で検出した径0.2m、深さ0.3mのピットは、逆茂木痕と推定した。

遺物は検出できなかった。

S K83（第32図） 西調査区の中央西部で検出した。

平面は楕円形を呈し、残存部は長径1.13m、短径0.84m、深さ1.4mを測る。底部中央で検出した径0.16m、深さ0.45mのピットは、逆茂木痕と推定した。

埋土からは、縄文時代中期後葉（4期新～5期古）の土器（362～365）を検出した。

S K113 東調査区の中央部、S H108の東で検出した。北西部は搅乱されているが平面は楕円形を呈し、

残存部は長径0.94m、短径0.80m、深さ0.84mを測る。底部に杭穴は見られなかった。規模や形状から竪穴と推定した。

埋土からは、縄文時代中期中葉（2期）から後期初頭の土器（366～371）と、石器（422）を検出した。

S K114（第32図） 東調査区の北東部で検出した。

平面は円形を呈し、径0.95m、深さ0.64mを測る。底部の中央で確認した径0.28m、深さ0.28mのピットは、逆茂木痕と推定した。

遺物は検出できなかった。

D 土坑等

性格が不明である大小の土坑や被然跡を東西調査区で確認した。その中で特徴のある遺構をいくつか記す。

S K1（第33図） 西調査区の北西部で検出した。

検出中はその規模から竪穴住居と推定していたが、完掘すると大型土坑とせざるをえない形状であった。土坑の性格は不明である。

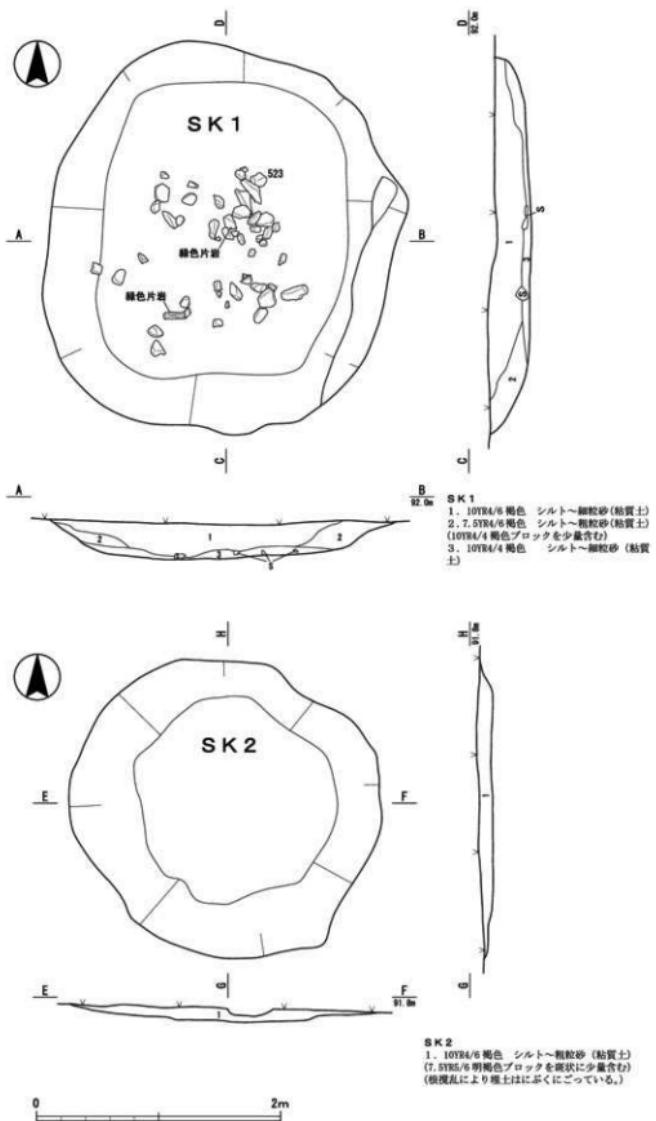
平面は楕円形を呈し、残存部は長径3.22m、短径2.82m、深0.32mを測る。底部は平らで、立ち上がりがゆるやかな形状を呈する。この特徴は、縄文時代早期の竪穴住居と類似する。しかし、土坑の周縁で柱穴は確認できず、炉も検出できなかった。さらに、出土土器が縄文中期のみであった。したがって、早期の竪穴住居ではなく、中期の土坑と判断した。S K1の底部で、S B87の柱穴を検出した。これら的新旧関係は、S K1が古く、S B87が新しいと推察される。

埋土から、縄文時代中期後半の土器（372・373）と石器類や剥片・碎片を検出した。また、遺跡周辺からは採集できない緑色片岩（約20cm前後）を2点検出ましたが、これらは石斧用の石材としても利用可能なものである。

S K2（第33図） 西調査区の北西部で検出した。

検出中はその規模から、竪穴住居と推定していた。しかし完掘すると、竪穴住居ではなく大型の土坑とせざるをえない形状であった。性格は不明である。

平面は不定形な楕円を呈し、残存部は長径2.56m、短径2.42m、深0.18mを測る。壁の傾斜がゆるやかなため、底部の面積は少ない。柱穴や炉は確認できなかった。根の搅乱により埋土はにくく漏っており、縄



第33図 SK 1・2実測図 (1 : 40)

文時代中期後半の土器1点(374)と剝片を検出した。

S K13 西調査区の北西部で検出した。平面は不定形で、長径0.85m、短径0.42m、深さ0.5mを測る。

埋土から、縄文中期後葉の土器(375~377)を検出した。

S F38 西調査区の南西部で検出した。遺構の全体形は不明で、径0.5m程の範囲に暗褐色粘質土の埋土と赤褐色の被熱跡を確認した。周間に堅穴住居は確認できず、住居の屋内がとは考えにくい。

出土遺物はない。

S F47(第34図) 西調査区の北西部で検出した。

掘立柱建物S B88の柱穴、S K48の北およそ1mに位置する。平面は略円形を呈する土坑で、長径0.59cm、短径0.53cm、深さ0.06mを測る。土坑の中央上部および東端に厚さ6cm程の被熱跡を確認した。

S B88を構成する柱穴や炉との可能性を考えたが、相当する位置から外れるため、別の遺構とした。

出土遺物はない。

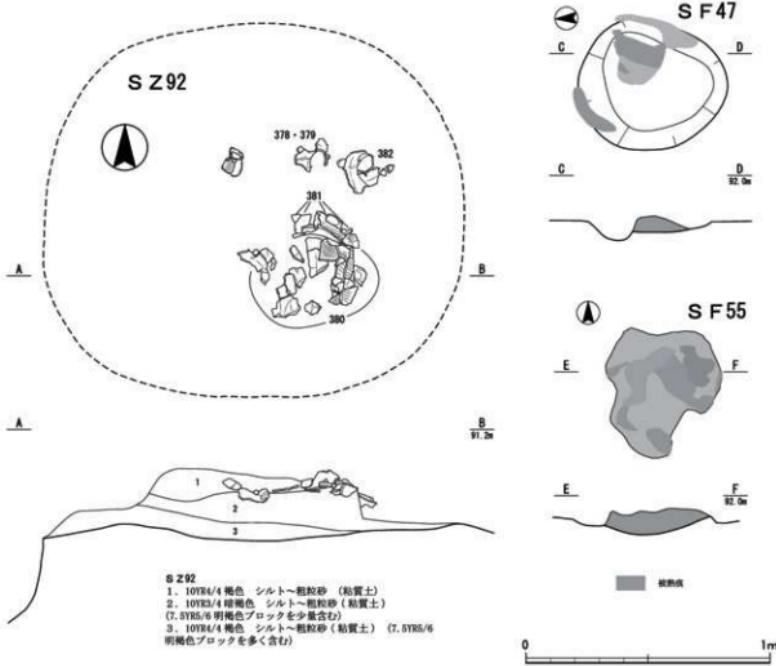
S F55(第34図) 西調査区の北西部で検出した。

前述のS B88の柱穴、S K48の南西およそ1mに位置する。土坑状の窪みではなく、厚さ0.1m程の被熱跡のみが0.5m程の範囲に広がる。

S F70 西調査区の南西部で検出した。0.5m程の範囲に被熱跡のみが僅かに広がる。厚さは0.02mである。周間に堅穴住居等はなく、用途は不明である。

S Z92(第34図) 西調査区の北東部で検出した。

他の遺構検出面より上位で検出した。明確な遺構の範囲は確定できず、径1.7m程の範囲に、暗褐色粘質土の埋土が広がる。柱穴や炉に相当するものは無い。埋土の下位から縄文時代中期後葉の土器(380)を検出した。土器は口縁部を含む1個体の1/3程



第34図 S F47・55・S Z92実測図 (1:20)

が残存し、出土土器全体の内でも残りの良い例である。

S K103 西調査区の南西部で検出した。S F 53の東側に接している。平面は略楕円形を呈する土坑で、北東側が僅かにすぼまる。長さ1.54m、深さ0.55mを測る。隣接する煙道付炉穴と形状は類似するが、被燃跡はない。暗褐色粘質土の埋土の中に多量の炭化物を検出した。放射性炭素年代測定の結果は、 4370 ± 20 を示す。出土遺物はない。

S K112 東調査区の南東部で検出した。平面は梢円形を呈し、長径1.09m、短径1.08m、深さ0.24mである。埋土から縄文中期後葉の深鉢（383・384）を検出した。

(中村)

【註】

①繩嶺茂・高橋健太郎「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』(株式会社アム・プロモーション 2008年)

遺構番号	次数	主なグリッド	性格	時代	規格			備考 (断面関係・特徴・出土遺物等)
					長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)	
S K 1	2次	A-S 25・T 25	大型土坑	縄文中期	長径3.22	短径2.82	0.32	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 2	2次	B-S 1	大型土坑	縄文中期	長径2.56	短径2.42	0.18	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 3 (SB87)	2次	A-S 25	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.50	短径0.48	0.26	縄文土器
S K 4 (SB87)	2次	A-T 25	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.63	短径0.61	0.40	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 5 (SB85)	2次	A-T 25, B-T 1	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.10	短径0.74	0.48	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 6	2次	B-T 2	土坑	縄文中期	長径1.08	短径0.91	0.14	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 7	2次	B-T 2	土坑	縄文中期	長径0.83	短径0.66	0.10	
S K 8 (SB85)	2次	B-T 1	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.03	短径0.76	0.43	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 9 (SB87)	2次	A-T 25	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.56	短径0.51	0.23	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 10 (SB85)	2次	A-T 25	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.05	短径0.76	0.48	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 11 (SB87)	2次	A-T 24	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.70	短径0.54	0.30	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 12	2次	A-T 24	土坑	縄文中期	長径0.65	短径0.42	0.29	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 13	2次	A-T 24	土坑	縄文中期	長径0.85	短径0.42	0.15	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 14 (SB87)	2次	A-T 24	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.63	短径0.59	0.32	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 15 (SB85)	2次	B-T 2・U 2	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.69	短径0.61	0.26	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 16 (SB85)	2次	B-U 2・V 2	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.08	短径0.83	0.38	石器(削片及び砂片)
S K 17 (SB86)	2次	B-U 1・V 1		縄文中期	長径0.55	短径0.50	0.25	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 18 (SB85・ 86)	2次	B-U 1・V 1	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.89	短径0.70	0.50	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 19 (SB85・ 86)	2次	A-U 25	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.21	短径1.05	0.55	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 20 (SB85)	2次	A-U 24・+ 25	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.48	短径0.97	0.53	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 21	2次	A-U 24	土坑	縄文中期	長径0.68	短径0.56	0.18	縄文土器
S K 22	2次	A-U 22	土坑	縄文中期	長径0.64	短径0.53	0.27	縄文土器
S K 23 (SB86)	2次	B-V 2	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.00	短径0.93	0.30	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 24	2次	B-V 2	土坑	縄文中期	長径1.32	短径0.76	0.08	
S K 25	2次	B-V 1	土坑	縄文中期	長径1.08	短径0.56	0.14	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 26 (SB86)	2次	B-V 1	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.94	短径0.67	0.60	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 27 (SB86)	2次	A-V 25	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.16	短径0.87	0.55	石器(削片及び砂片)
S K 28	2次	A-V 22	楕丸	縄文中期	長径1.60	短径0.92	0.03	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 29 (SB86)	2次	B-W 2	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.14	短径0.74	0.41	石器(削片及び砂片)
S K 30 (SB86)	2次	B-V 1・W 1	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.93	短径0.65	0.37	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 31	2次	A-X 24	椭穴	縄文中期	長径1.65	短径1.39	0.84	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 32	2次	A-X 20・+ 21	土坑	縄文中期	長径0.86	短径0.75	0.15	
S K 33	2次	C-A 23	楕丸	縄文中期	長径1.26	短径0.95	0.16	縄文土器
S K 34	2次	C-A 25	楕丸	縄文中期	長径1.72	短径1.08	0.42	
S K 35	2次	C-B 25, D-B 1	土坑	縄文中期	長径0.96	短径0.78	0.32	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H 36	2次	C-B 24, C 24・+ 25	堅穴住居	縄文中期	—	—	—	石器(削片及び砂片)
S K 37	2次	D-B 1, C 1	土坑	縄文中期	長径1.12	短径0.89	0.25	
S F 38	2次	D-D 1・+ 2	被熱窓	縄文中期	—	—	—	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K 39	2次	D-C 1	楕丸	縄文中期	長径1.20	短径0.78	0.02	縄文土器
S K 40	2次	C-B 20・+ 21～C 20・+ 21	楕丸	縄文中期	長径1.00	短径0.83	0.23	石器(削片及び砂片)
S K 41	2次	C-B 21	楕丸	縄文中期	長径0.80	短径0.56	0.24	縄文土器
S K 42	2次	C-C 20・+ 21～D 20・+ 21	楕丸	縄文中期	長径1.69	短径0.98	0.27	
S K 43 (SB88)	2次	C-C 24, D 24	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.78	短径0.59	0.40	石器(削片及び砂片)
S K 44 (SB88)	2次	C-D 24	楕円柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.93	短径0.64	0.51	石器(削片及び砂片)

第1表 遺構一覧表(1)

遺構番号	次数	主なグリッド	性格	時代	規格			備考 (断面関係・特徴・出土遺物等)
					長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)	
S K45 (SB88)	2次	C-D25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.95	短径0.81	0.33	縄文土器
S K46	2次	D-D1	窓丸	縄文中期	長径1.10	短径0.68	0.19	
S F47	2次	C-D23~24	被熱跡	縄文中期	長径0.59	短径0.53	0.06	
S K48 (SB88)	2次	C-D23~24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.93	短径0.75	0.44	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K49	2次	C-D21~22	窓火	縄文中期	長径1.10	短径0.85	1.10	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H50	2次	C-D19~20, E20~21	壁穴住居	縄文中期	長径4.10	短径4.10	0.26	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S F51	2次	C-D21	窓石炉	縄文早期	径0.62		0.16	S F50重複・縄文土器
S F52	2次	C-D21	堆造付炉穴	縄文早期	長径0.92	短径0.56	0.16	S F53~54・99復・縄文土器
S F53	2次	C-D21	窓石炉	縄文早期	径0.95		0.18	S F52・S F54・S F99・縄文 上部・石器(削片及び砂片)
S F54	2次	C-E21	堆造付炉穴	縄文早期	長径1.46	短径0.58	0.22	S F51・S F53重複・縄文土器・ 石器(削片及び砂片)
S F55	2次	C-D23, F23	被熱跡	縄文中期	—	—	—	
S K56 (SB89)	2次	C-E24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.06	短径0.97	0.48	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K57 (SB89)	2次	C-E24, F24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.89	短径0.72	0.56	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K58 (SB88)	2次	C-E25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.72	短径0.55	0.33	縄文土器
S K59	2次	D-E 1・2	窓穴	縄文中期	長径1.21	短径0.90	0.99	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S F60	2次	B-Y 2	堆造付炉穴	縄文早期	長径1.56	短径0.72	0.10	
S K61	2次	C-E19~20	窓穴	縄文中期	長径0.66	短径0.95	1.01	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K62 (SB89)	2次	C-F23	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.85	短径0.70	0.22	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H63	2次	C-F24~25, G25	壁穴住居 柱	縄文中期	—	—	—	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K64 (SB89)	2次	C-F24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.79	短径0.63	0.27	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K65	2次	C-F24	窓丸	縄文中期	長径0.85	短径0.72	0.39	縄文土器
S K66 (SB105)	2次	C-F25, D-F 1	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.32	短径0.84	0.41	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K67 (SB105)	2次	C-G25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径8.1	短径6.4	0.27	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K68	2次	C-F25, G25	窓穴	縄文中期	長径1.14	短径0.90	1.15	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K69 (SB89)	2次	C-F25, G25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.18	短径0.98	0.48	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S F70	2次	C-F23	被熱跡	縄文中期	—	—	0.02	
S F71	2次	C-F18, G19	堆造付炉穴	縄文早期	長径1.1	短径0.62	0.10	縄文土器
S H72	2次	C-F15~16, G16	壁穴住居 柱	縄文中期	—	—	—	
S K73 (SB89)	2次	C-F25	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径1.28	短径1.05	0.36	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K74	2次	D-F 1	土坑	縄文中期	長径0.72	短径0.44	0.30	石器(削片及び砂片)
S K75 (SB105)	2次	D-F 1	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.79	短径0.59	0.42	縄文土器
S K76 (SB105)	2次	D-G 1	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.91	短径0.49	0.29	縄文土器
S K77 (SB105)	2次	D-G 1	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.69	短径0.49	0.32	縄文土器
S K78 (SH63)	2次	C-F24	壁穴住居 柱穴	縄文中期	長径0.58	短径0.49	0.47	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K79 (SH63)	2次	C-F24	壁穴住居 柱穴	縄文中期	長径0.50	短径0.37	0.43	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K80 (SB88)	2次	C-D24, E24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.64	短径0.60	0.44	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K81	2次	D-E 1, F 1	窓丸	縄文中期	長径1.80	短径0.84	0.35	縄文土器
S K82	2次	C-A18	窓穴	縄文中期	長径1.06	短径0.92	0.9	縄文土器
S K83	2次	C-F 18・G 18	窓穴	縄文中期	長径1.13	短径0.84	1.40	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H84	2次	C-G21~22, H21~22	壁穴住居	縄文中期	長径4.2	短径3.90	0.45	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S B85	2次	A-T25~B-T 3, A-U24~B-V 2	掘立柱建物	縄文中期	桁行9	梁行4.1	—	
S B86	2次	A-U25~B-V 2, A-V25~B-W 2	掘立柱建物	縄文中期	桁行7.2	梁行3.7	—	
S B87	2次	A-S24~25, T24~25	掘立柱建物	縄文中期	桁行6.6	梁行3.4	—	
S B88	2次	C-C24, D23~25, E24~25	掘立柱建物	縄文中期	桁行6.0	梁行3.4	—	

第2表 遺構一覧表(2)

遺構番号	次数	主なグリッド	性格	時代	規格			備考 (新旧関係・特徴・出土遺物等)
					長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)	
S B89	2次	C-E24, F23~25, G25	掘立柱建物	縄文中期	幅行5.2	梁行3.5	—	
S K90 (S B105)	2次	D-F 2, G 2	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.55	短径0.40	0.18	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S F91	2次	B-X 5, Y 5	埋造付炉穴	縄文早期	長径0.85	短径0.60	0.05	S F102重複・石器(削片及び砂片)
S D92	2次	D-C 4	土坑	縄文中期	—	—	—	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H93	2次	D-F17, G17	雙穴住居	縄文中期	—	—	—	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H94	2次	C-B24, C24	雙穴住居	縄文中期	—	—	—	
S H95	2次	C-G23+24, H23	雙穴住居	縄文中期	—	—	—	
S F96	2次	C-D21, E21	埋造付炉穴	縄文早期	長径0.85	短径0.45	0.06	
S F97	2次	C-D21	埋造付炉穴	縄文早期	長径0.85	短径0.76	0.11	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S F98	2次	C-E20+21	埋造付炉穴	縄文早期	長径1.25	短径0.70	0.26	S F 97重複
S F99	2次	C-D21	埋造付炉穴	縄文早期	長径1.03	短径0.58	0.23	S F52+53+54重複
S K100 (S B87)	2次	A-S24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.44	短径0.31	0.25	
S K101 (S B87)	2次	A-S24	掘立柱建物 柱穴	縄文中期	長径0.77	短径0.62	0.28	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K102	2次	B-Y 5	埋造付炉穴	縄文早期	長径1.10	短径0.76	0.2	S F90重複
S K103	2次	C-D21	S F63 東丘 S N68 東丘上	縄文中期	長径1.54	—	0.55	
S K104	2次	C-G25		縄文中期	長径0.47	短径0.43	0.37	
S B105	2次	C-F25~D-F 2, C-G25~D-G 1	掘立柱建物	縄文中期	幅行4.8	梁行3.4	—	
S H106	3次	E-U16+11, V10+11	雙穴住居	縄文中期	3.8	3.7	0.19	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H107	3次	E-V 9+10, W 9+10	雙穴住居	縄文中期	4.6	4.3E上	0.02	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H108	3次	E-W10+11, X10+11	雙穴住居	縄文中期	4.8以上	5.2	0.09	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H109	3次	E-W12+13	雙穴住居	縄文中期	—	—	—	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S H110	3次	E-S10, T10+11	雙穴住居	縄文中期	—	—	—	
S K111	3次	E-X14	土坑	縄文中期	0.68	0.55	0.47	
S K112	3次	F-H15, C15	土坑	縄文中期	1.09	1.08	0.24	縄文土器
S K113	3次	E-X11+12	端穴	縄文中期	長径0.94	短径0.80	0.47	縄文土器・石器(削片及び砂片)
S K114	3次	E-S14	端穴	縄文中期	長径0.95	短径0.95	0.64	

第3表 遺構一覧表(3)

遺構名	方 位	焼 土 部 位	出 土 遺 物	新 旧 関 係
S F52	N-22°-E	燃焼坑～煙道の底面	押型文土器(1)	S F52⇒S F99⇒S F53
S F54	N-22°-E	燃焼坑の側壁	土器細片(時期不明)	S F54⇒S F53
S F60	S-21°-W	燃焼坑～煙道の底面・壁面		
S F71	N-5°-W	燃焼坑～煙道の底面・壁面		
S F91	S-5°-E	燃焼坑～煙道の底面		S F91⇒S F102
S F96	N-8°-E	燃焼坑～煙道の底面		S F96⇒S F51
S F97	N-14°-E	燃焼坑～煙道の底面		S F96とは不明
S F98	N-14°-E	燃焼坑～煙道の底面・壁面		S F97⇒S F98
S F99	N-22°-E	燃焼坑～煙道の底面		S F99⇒S F53
S F102	N-25°-W	燃焼坑～煙道の底面		

第4表 煙道付炉穴一覧表(方位は燃焼坑から煙道を見た方向)

直積番号	グリッド	E-N番号	方位	規格 上：間、下：m	柱行柱間 n	梁行柱間 n	最大残存穴規格 n		その他
							大きさ	深さ	
S B85	A T25, B T1	S K 5	W-8°-N	3×1 8.96×4.19	3.0+2.78+3.18	4.19	長径1.1×短径0.74	0.48	S B86と重複
	B T 1	S K 8					長径1.03×短径0.76	0.43	
	A T25	S K10					長径1.05×短径0.76	0.48	
	B T 2	S K15					長径0.69×短径0.61	0.26	
	B U 2, BV 2	S K16					長径0.89×短径0.70	0.5	
	B U 1, BV 1	S K18					長径1.12×短径1.05	0.55	
	A U25	S K19					長径1.48×短径0.97	0.53	
S B86	A U24, AU25	S K20	W-13°-N	3×1 7.2×3.7	2.6+2.0+2.6 南 2.4+2.4+2.4	3.9	長径0.55×短径0.50	0.25	S B85と重複
	B V 1	S K17					長径0.89×短径0.70	0.5	
	A U 1, BV 1	S K18					長径1.21×短径1.05	0.55	
	A U25	S K19					長径1.00×短径0.93	0.3	
	B V 2	S K23					長径0.94×短径0.67	0.6	
	B V 1	S K26					長径1.16×短径0.87	0.55	
	A V25	S K27					長径1.14×短径0.74	0.41	
S B87	B W 2	S K29	W-6°-S	3×1 6.62×3.3	2.32+2.1+2.2	3.3	長径0.83×短径0.65	0.37	
	B V 1, BW 1	S K30					長径0.50×短径0.48	0.26	
	A S25	S K 3					長径0.63×短径0.61	0.4	
	A T25	S K 4					長径0.56×短径0.51	0.23	
	A T25	S K 9					長径0.70×短径0.54	0.3	
	A T24	S K11					長径0.63×短径0.59	0.32	
	A T24	S K14					長径0.44×短径0.31	0.25	
S B88	A S24	S K100	W-9°-N	3×1 5.78×3.4	2.8+2.98	3.4	長径0.77×短径0.62	0.28	
	A S24	S K101					長径0.78×短径0.59	0.4	
	C D24	S K43					長径0.81×短径0.64	0.51	
	C D24, CD25	S K44					長径0.93×短径0.81	0.33	
	C D25	S K45					長径0.83×短径0.75	0.44	
	C D24	S K48					長径0.72×短径0.55	0.33	
	C E25	S K58					長径0.64×短径0.60	0.44	
S B89	C D24, CE24	S K80	W-17°-N	3×1 5.2×3.6	2.6+2.6	3.6	長径1.06×短径0.97	0.48	S H63と重複
	C E24	S K56					長径0.89×短径0.72	0.56	
	C F24, CE25	S K57					長径0.85×短径0.70	0.22	
	C F23, CF24	S K62					長径0.79×短径0.63	0.27	
	C F24	S K64					長径1.18×短径0.98	0.48	
	C F25, CG25	S K69					長径1.28×短径1.05	0.36	
	C E25, CF25	S K73							
S B105	C F25, DF1	S K66	W-27°-N	2×1 4.9×3.4	2.9+2.0	3.4	長径1.62×短径0.84	0.41	
	C G25	S K67					長径0.81×短径0.40	0.27	
	D F 1	S K75					長径0.79×短径0.59	0.42	
	D G 1	S K76					長径0.69×短径0.49	0.29	
	D G 1	S K77					長径0.65×短径0.40	0.22	
	D F 2	S K90							

第5表 堀立柱建物一覧表 (長辺を柱行と仮定して便宜的に「棟方向」と呼ぶ、柱間は西からの順に記述)

IV 遺 物

縄文時代中期の土器と石器を中心に、その他の時代の土器数点と和釘1点も検出した。

1 土器等

縄文土器が大半を占める。縄文土器は、早期が1点、後期初頭が2点、それ以外は中期のものである。このほかに、古式土器や灰釉陶器など数点と、和釘1点がある。

(1) 縄文時代早期の土器

煙道付炉穴S-F52から1点確認した。そのほかに、微量の無文小片を早期の遺構から検出した。これらは胎土や厚みが中期のものとは異なる様相を示す。

S-F51（第35図） 1は体上部片で、羽状の押型文もしくは沈線が認められ、直下には横位の山形文が施されている^③。いわゆる「神並上層式」に近似する。

(2) 縄文時代中・後期の土器

竪穴住居や掘立柱建物・竪穴・大型土坑などから検出した。中期前葉から後期初頭のものだが、主体は中期後葉である。器種は深鉢が大半を占め、このほかに少量の浅鉢や壺がある。

型式分類については、縄文中期後葉の「中富・神明式」編年表を主として用いた（第6表）^④。この編年表では、大きく5段階に分け、それぞれを細分している。

A 竪穴住居出土の土器

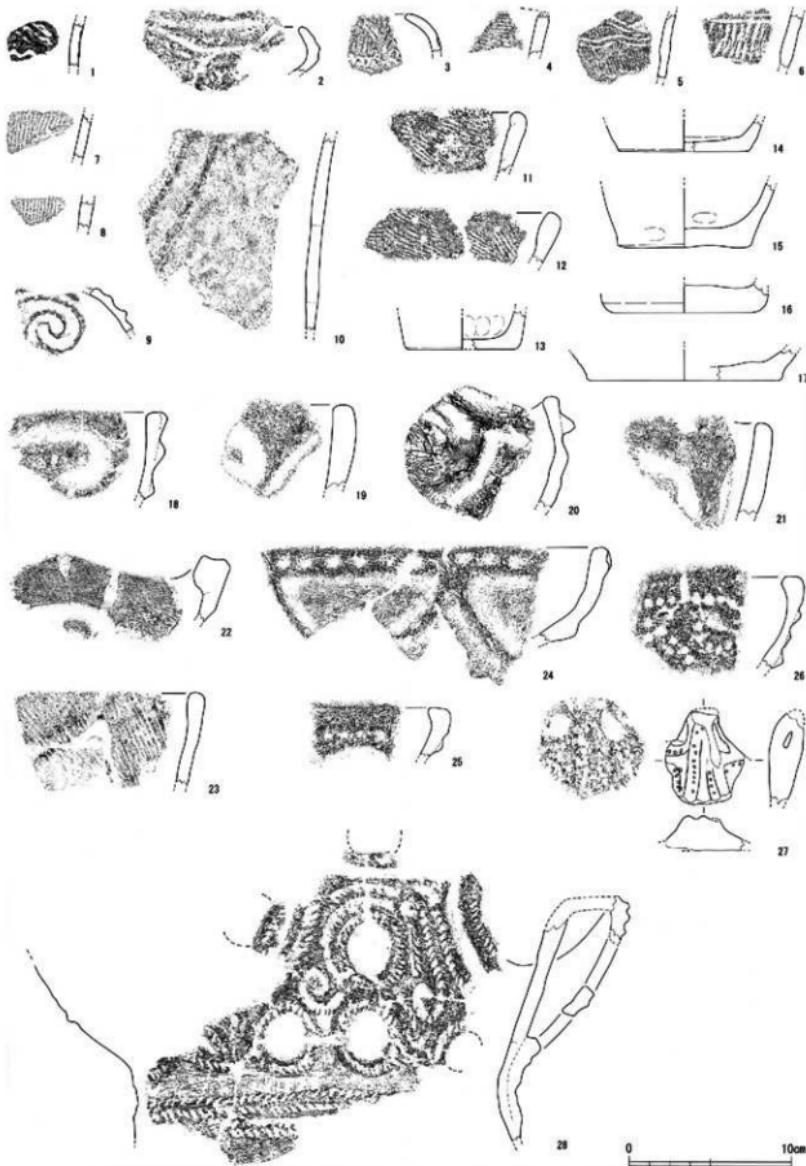
S-H50（第35・36図） 出土土器は中期後葉から後期初頭のものが見られるが、4期古～5期新のものが多い。器種は63が浅鉢で、それ以外は深鉢とみられる。2と3は、咲貝塚I群A類系のキャリバー形口縁部である。2は3条の波状沈線文が横走し、3は撚糸文と横位沈線内に交互刺突を施す。共に2期古（＝中富III・IV式）である。4～8は体部で、撚糸文が施される。5と6には、半截竹管文が波状や直線状に横行する。6は柵巻縄文の可能性がある。2期古（＝里木II式）である。9は、咲貝塚I群A類系のキャリバー形口縁部である。器壁が薄く、2本の沈線文が溝状に絡み合う。2～3期（＝中富III～神明式）である。10は、2条の垂下降帯をもつ体部である。11と12は、単節R Lの縄文が施される口縁部である。13～17は平底である。いずれも3～5期（＝神明～山ノ神II式）である。18と19は平縁の口縁部であり、20～22はゆるやかな波状口縁部である。いずれも貼付隆帯と指圧による太い沈線で溝状文を描出し、4期古（＝取組式）に属する。23～26は、平口縁部である。23は、櫛描条線が斜行している。24は、肥厚する口縁部に下部がゆるやかな丸味をもつ逆三角形の貼付隆帯が繋がり、口縁直下に丸い刺突文が等間隔で並ぶ。25と26は、横

高橋編年	従来編年				
1期（古）	中富I式		船元IV式	里木II式（1期）	
1期（新）	中富II式			里木II式（2期）	
2期（古）	中富III・IV式			里木II式（3期）	
2期（新）	中富V式	咲貝塚I群A類系			
3期	神明式				
4期（古）	取組式				加曾利E3式
4期（新）	島崎III式				
5期（古）	山ノ神I式				
5期（新）	山ノ神II式				

第6表 「中富式・神明式」編年表（綱総・高橋2008）

S F 52

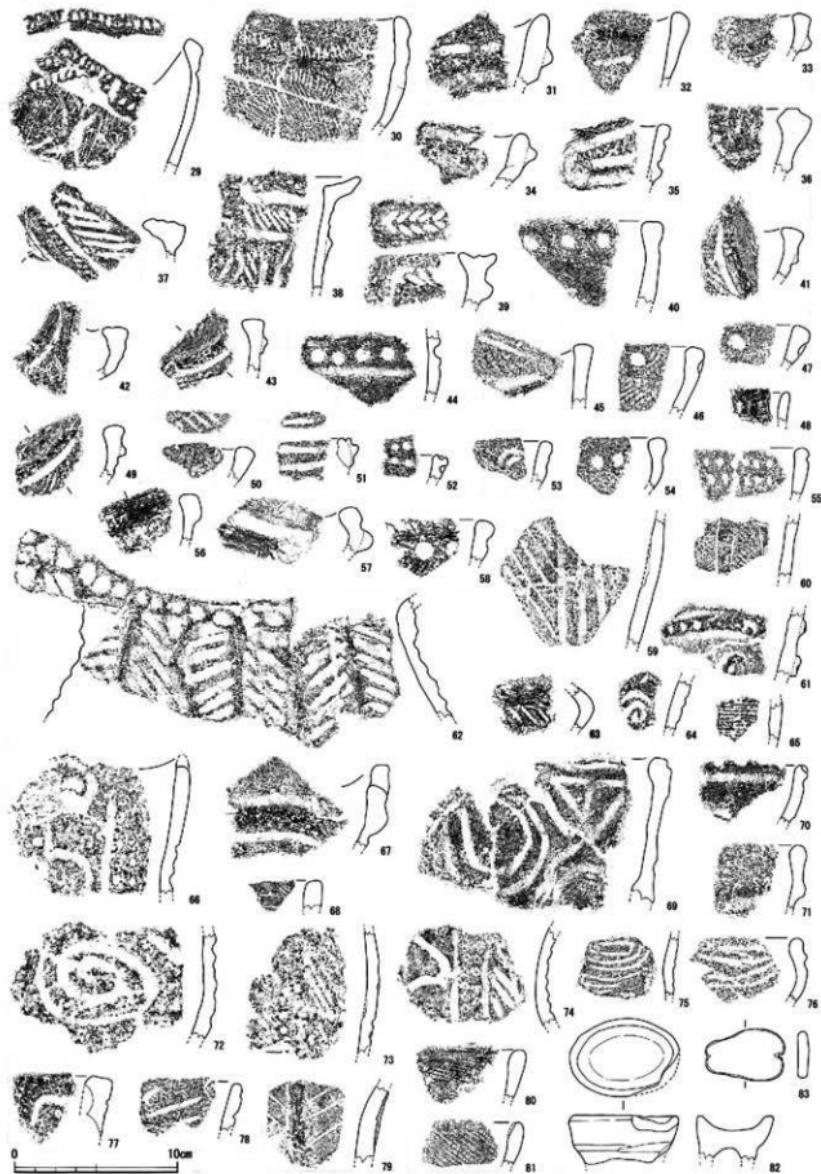
S H 50



第35図 縄文土器実測図（1）（1：3）

位や溝状の沈線文内に円棒状具による刺突文が施される。27は、ややつぶれた橋状把手をもつ。把手上の縦位沈線文内などに円棒状具による小さな刺突文が施されており、装飾的である。いずれも4期（*ニ取組～島崎III式*）である。28は、富士山形の波状口縁を呈する箱状把手である。口縁部から頭部にかけて、径3cm程を測る円形の穿孔を有す。穿孔は、立面に縦位に2個、横位に1列、等間隔に配し、側面にも1個配す。穿孔の周囲を沈線および隆帶で縁取り、縦位に配す穿孔の両側には「S」字文様を沈線で描出する。沈線内にはいずれも籠状具による連続刺突文を丁寧に施す。同様の箱状把手を4個程付くと推定する。頭部には1条の横位沈線を施し、沈線の内外には、刺突文を矢羽根状に配す。美濃地方に類例がある³。3期～4期古（*ニ神明～取組式*）に属する。29～65は、ほとんどが沈線文や刺突文の構成で、隆帶が付くものは少ない。29は大波状口縁部で、波頂部や側面は内側に肥厚する。口唇および側面などに刺突文を施し、口縁部以下は縦位条線を引く。30はゆるやかな波状の口縁部で、横位や梢円状の沈線文内にヘラキザミが入り、梢円文の内側には条線が充填される。31～43と45～58は、口縁部の小片である。富士山形や三角形で大波状のもの、ゆるやかな波状のもの、平縁のものがある。ゆるやかな波状の31～35や45・57には、横位や斜行の沈線文が伴い、その内の45には単節RLの繩文を施す。やや厚みのある隆帶が付く31や33・34・57は、弧状の文様を施す。富士山形の36や37・39は、断面形が「T」字形で、横位沈線をもつ。37と39には、口唇にも斜行や矢羽根状の沈線がみられる。38は、断面形が逆「L」字状の口縁部で、口縁部端から縦位に橋状把手の剥離痕がある。斜行する単沈線が、口縁部の区内にみられる。41～43・49～51・56は三角形で大波状の口縁部である。弧状の沈線を施し、41や49には単節LRの繩文が見られる。平縁の40や46・47・52・54・55・58は、円棒状具による丸い刺突文を配する。その内、46は単節LRを、58は無節の繩文を施し、52は横位沈線内や口唇部にも丸い刺突文がある。44は頭部で、同様の丸い刺突文を配す。48や53は細片のために判断に苦しみが、平縁ではない可能性もある。48はヘラキザミを施し、53は小さい溝

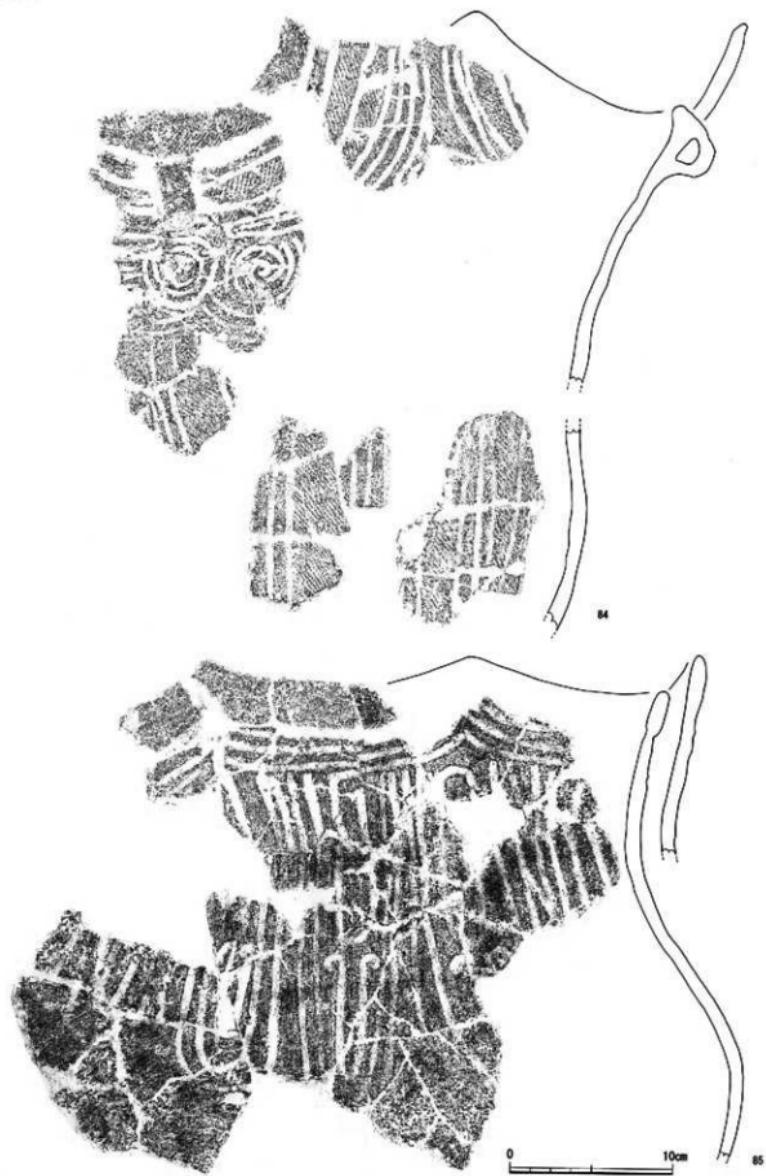
文を施す。59は、体部片で外面に煤が付着し、3条の垂下沈線と斜行沈線を施す。60は単節LRの繩文地に垂下沈線を施すが、沈線文間に繩文は見られない。61は体部で、隆帶は弧状に貼付され、隆帶上に円棒状具による刺突文を施す。62は、頭部から体部にかけての破片である。頭部には円棒状具による丸い刺突文が等間隔で横位に並び、体部には直行と蛇行を交互に貼付した垂下降帯が5条残り、隆帶間に沈線文で綾杉文を丁寧に描出している。63は、浅鉢の口縁部で端部は欠失している。細く浅い沈線文を施す。64は満文のある体部で、器壁は薄い。65は体部で、細い条線を施す。これら29～65のうち、29～35・38・40・44～48・50・52～55・57～65は、4期新～5期古（*ニ島崎III～山ノ神I式*）に、36・37・39・41～43・49・51・56は、4期新～5期新（*ニ島崎III～山ノ神II式*）に属する。66～76は隆帶が少なく、沈線や刺突が施文の主体である。66と72～74は同一個体と思われ、垂下沈線や満文、竹管文などをもつ。67は三角形の波状口縁部で、厚い隆帶が弧状に貼付き、隆帶の両側には沈線文が縁取る。68は、単節RLの繩文を施す口縁部である。66～68は、5期新（*ニ山ノ神II式*）である。69はゆるやかな波状口縁部で、口唇に刺突文が見られる。2本1組の沈線文で円形や逆三角形を描出しており、後期初頭の中津式につながる型式である。70や71・76は口縁部の小片である。70の口唇部には刺突文が深く施され、溝状の沈線文が見られる。71は平縁で口縁部が肥厚し、横位隆帶が貼付く。75は体部で、浅い溝巻沈線文と多重連弧文をもつ。76は平縁で、横位に1条の沈線文と連弧文を施す。いずれも5期新（*ニ山ノ神II式*）である。77は富士山形の大波状口縁部で、1条の沈線文を施す。78は平縁で、口縁部直下から斜行沈線を施す。79は体部で、垂下降帯と細い沈線で綾杉文を描出する。77～79は5期（*ニ山ノ神I～II式*）である。80や81は平縁で、単節RLの繩文を施す。80は、特に筋が細かく繊細な施文である。共に中期末葉である。82は波状口縁部の頂部らしく、皿状であり筒状ではない。1条の横位沈線を施す。5期新～後期初頭（*ニ山ノ神II式～後期初頭*）である。83は土器片難で、長軸の両端に切目がある。当遺跡で唯一のものである。所属時期は不明である。



第36図 繩文土器実測図（2）（1：3）

S H84 (第37・38・39・40図) 出土土器はいずれも中期後葉に属するが、中でも末葉のものが多い。器種は104が壺、111が浅鉢か壺で、それ以外は深鉢とみられる。84の口縁部は大波状を呈し、口縁から少し下がった位置に橋状把手が付く。單節L Rの縄文を全面に施し、波頂部から左右対称に沈線が6条ずつ配される。把手下部の2箇所に満文を配し、以下に懸垂文が走る。北白川C式C類の大波状口縁の深鉢に類似するが、把手が付く点は独自性と見られる。5期(ニ山ノ神I～II式)である。85は、出土土器の中で最も残存の良いものである。口縁は外反し、頸部から胴部にかけて膨らみをもつ。口縁はゆるやかな波状を呈し、その波状に並行するように三連弧文を施す。以下には縱位沈線と紡錘文が交互に規則正しく並び、紡錘文の中にワラビ手文を配す。5期新(ニ山ノ神II式)である。86は肥厚した口縁部で、太い横位沈線を施す。胎土は緻密で、内面はミガキを施す。2～3期(ニ中富III～神明式)である。87は、把手状の立体的な装飾と推定される。上面および側面の3方向に透かしがあり、透かしの曲線を縁取るよう2重の刺突文を施す。88～91は同一個体の体部と推定される。唐草状文と2条の蛇行沈線の間に綾杉文を施す。いずれも3期～4期古(ニ神明～取組式)に属する。92は、満巻沈線文内に竹管文のある細片である。3期～5期古(ニ神明～山ノ神I式)に属する。93と94はゆるやかな波状口縁で、口縁直下に横位に連続したキザミを施し、満巻隆帯で区画している。93は隆帯が厚く、94はつぶれている。95は口縁部で、内寄する。口縁直下に太い横位沈線が走る。縱位の「S」字状文を施し、両側に隆帯および沈線で楕円区画をはっきりと描出し、区画内に斜行沈線を充填する。96と97・102・107は口縁部で同一個体と思われ、隆帯および太い沈線で満文を施す。107には、主文様と見られる縱位の「S」字状文を配す。4期古(ニ取組式)である。98～101は口縁部で、隆帯および沈線で区画文などの文様を施す。98はゆるやかな波状口縁で、隆帯が厚い。99は口縁に並行する太めの沈線文が施され、100は、口縁直下に斜行するキザミを施す。101には隆帶上に単節R Lの縄文が見られる。103は平縁の口縁部で、区画文は無く、浅い斜行沈線が口縁

直下から施される。104は壺の筒状把手とみられ、縁に小さな刺突文を施す。105は中空の立体装飾で、橋状把手の可能性もある。前面には隆帯および沈線で縱長の「S」字状文を描出し、小さな刺突文を前面や側面の沈線内に施す。106と108は同一個体の可能性がある体部で、縱位隆帯の両側に綾杉文を施している。98～108は、4期(ニ取組～島崎III式)に属する。109はゆるやかな波状口縁部である。摩滅しているが無文と思われる。4期以降(ニ取組式～)である。110は大波状口縁部で、深い沈線内に刺突文が施される。4期新(ニ島崎III式)と見られる。111は立体的であり、浅鉢か壺の橋状把手とみられる。隆帯や沈線を配し、中心は深く窪んでいる。4期古～5期古(ニ取組～山ノ神I式)である。112～125・127～137・139～143・145～147は口縁部である。112や113・115・116・120・123・125・147は、富士山形の大波状口縁部である。112は、口縁直下に斜行沈線、口唇に刺突文を施す。113は浅い横位沈線を施す。123は、口縁部が屈曲し斜行する刻みを施す。125は、口唇に斜行する刻みを配する。115と116・120は断面形が「T」字状で、外面には並行する沈線が施される。147は、口唇に2条の沈線が認められる。117や118・121・129・137・141・143は、緩やかな波状を呈する。118や121・129・141は、浅い横位沈線を施す。この内の141は、口縁直下に無筋Eの縄文を施す。137は無文とみられる。143は、隆帯による区画文が曲線的に巡る。114は、口縁の断面が整った楕円形で肥厚し、曲線的な沈線区画がみられる。破断面から推定すると、断面楕円形の粘土紐を口縁に乗せ、それを薄く包み込むように成形している。119は、口縁直下の沈線内に籠具による斜行する刻みが施され、その下を隆帯で区画している。122は、ゆるやかな波状口縁を呈し、口縁直下に斜行沈線が走り、隆帯による区画が施される。124は口縁の断面形が丸みを帯び、外面には円形状の指圧痕を配す。126は台付深鉢で、2条の縱位隆帯を施す。127は太い沈線による区画文を施す。128はゆるやかな波状口縁で、波頂部下に満文を配し、両側に区画文を構成する。130は細かい条線を施し、口縁部区画文はみられない。131は沈線による区画文を配するが、口縁より少し下までは無文である。



第37図 縄文土器実測図（3）（1：3）

132と133・134は薄手である。132は外面に竹管文を配し、133と134は横位沈線が深く施される。135は2条の横位沈線が並行する。136と138は同一個体とみられ、136は口縁直下に2条の横位区画沈線の間に斜行沈線が施される。138は、体部にゆるやかな曲線状の沈線と綾杉状の沈線がみられる。139は、3条の横位沈線間に矢羽根状の細沈線を施す。140は平縁で、1条の横位沈線下に条線を施す。142は、口縁直下に右方向からの刺突文が施される。144は頭部で、横位降帯上に左下からの刺突文を等間隔に配し、以下には垂下降帯間に綾杉文を配する。145は無文の平縁である。146は、口縁部区画内に矢羽根状沈線を充填する。148～154、156・157・159～161は体部である。148と149・152は、2条の垂下沈線と綾杉文を施す。150は、細く浅い沈線で綾杉文を描出する。151は懸垂文と2条の蛇行沈線の間に綾杉文を配す。153は、刺突を配した降帯を「ハ」字状におき、その間に綾杉文を施す。154・157は綾杉文のみである。156は、縦位の厚い貼付降帯上に円棒状具による丸い刺突文を1ヶ所施し、降帯の両側には沈線区画を配する。北白川C式深鉢B類に類似する。159は溝文を降帯と沈線で描出し、条線が溝文上にも施される。160は頭部で、多重連弧文を施す。161は、細い条線が見られる。112～163のうち、114・117～119・121・122・124～163は、4期新～5期古（＝島崎III～山ノ神I式）に、112・113・115・116・120・123は4期新～5期新（＝島崎III～山ノ神II式）に属する。164は無文の体・底部で、胎土は赤褐色である。165～167は、台付深鉢である。165と166は降帯が付く。155・158・162・163・168～172は平底である。158や169には葉脈痕が認められる。172は径4.4cmと小形で、外面には細く浅い沈線が施される。164～172は3期以降（＝神明式～）である。173～180は口縁部である。173はゆるやかな波状を呈し、2条の浅い横位沈線を施す。174～177は無文である。178は、口縁直下の降帯区画内に矢羽根状沈線を配す。179と180は同一個体らしく、ゆるやかな波状を呈し、口縁直下に単節L Rの繩文を施す。173～180は、4～5期（＝取組～山ノ神II式）である。181と182は、ゆるやかな波状を呈するキャリバー形の口縁部で、斜行沈線を充填した梢円

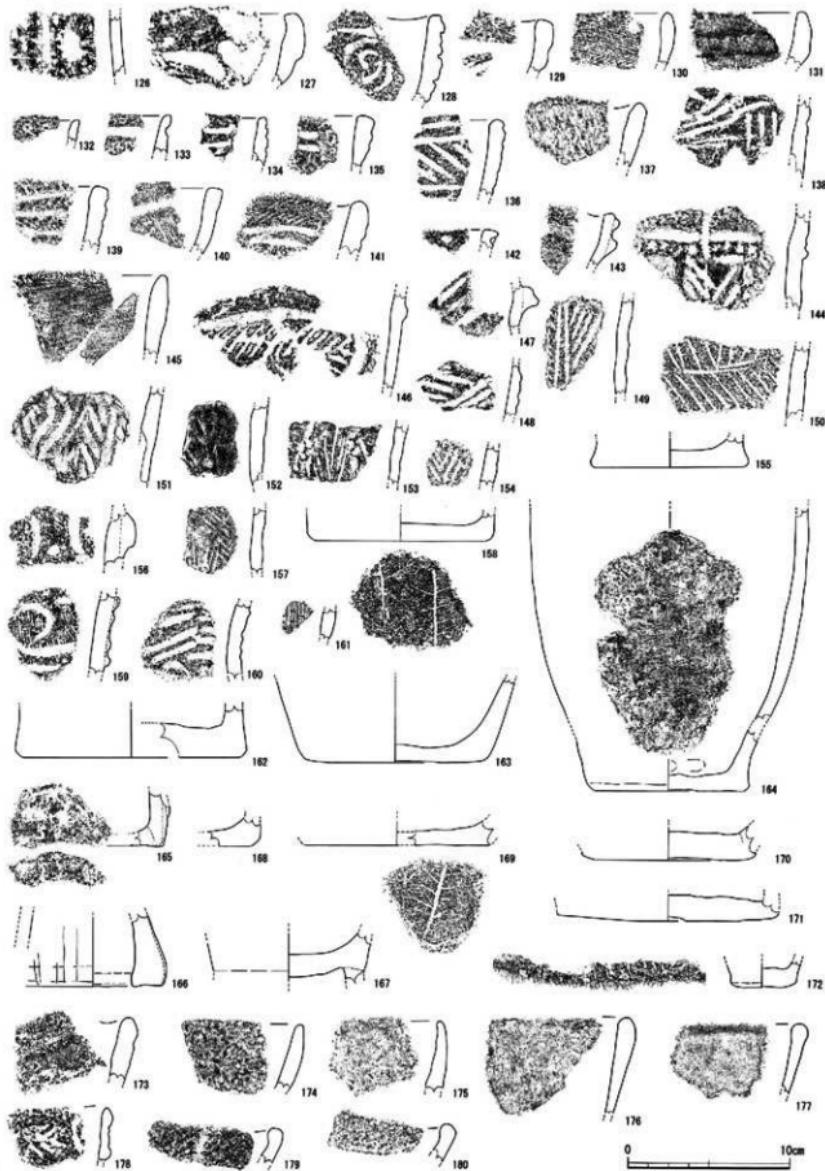
区画の下に連弧文を配する。183は、口縁直下に下からの竹管文を横位に施す。184は、正面からの竹管文を口縁端部に施す。185や186は平底である。186は、細くて弱い垂下沈線と綾杉文が最下部まで施される。181～186は5期古（＝山ノ神I式）である。187～197は口縁部である。187や188・191は三角形の大波状口縁を呈し、187や188は降帯や沈線により区画を作る。区画内には斜行沈線を充填し、降帯に沿うように刺突が施される。191は無文である。189や190は富士山形の大波状口縁を呈し、189は沈線を、190は単節L Rの繩文を施す。192～196はゆるやかな波状口縁を呈し、192は端部が肥厚する。193や195は2条の横位沈線を施す。194は溝文を描出し、196は無文である。197は平縁で、肩が明瞭な横位沈線を1条施す。198～201は体部で、198は縦位の沈線と単節L Rの繩文を施す。199は沈線で梢円文様を配し、無節rの繩文を施す。200と201は、2本の横位降帯の内側に斜行沈線文を描出する。202は平縁で、横位沈線を2条施す。187～202は、5期新（＝山ノ神II式）に属する。203～207は口縁部である。203や204・207は、ゆるやかな波状口縁である。203は横位沈線を2条と斜行文が見られ、204や207は斜行沈線を充填した区画文を施す。205は口縁直下に、刺突文列と横位沈線を1条施す。206は富士山形の大波状口縁を呈し、2条の沈線と単節L Rの繩文を施す。208は体部で、ワラビ手状の文様など、沈線で曲線文様を描出し、尖った範状具で斜行沈線を施す。209はゆるやかな波状口縁で、端部の1ヶ所に半円状の穴をあけ、下位に刺突文を施し、沈線による区画文様を描く。210は口縁部で、器壁は薄く口唇に刺突を配する。211は体部で、条線を不規則に施す。203～211は、5期（＝山ノ神I～II式）に属する。

S H 93（第40図） 爐から212のみが出土した。やや内湾する深鉢の体部で、単節L Rの繩文を施す。3期（＝神明式）以降に属する。

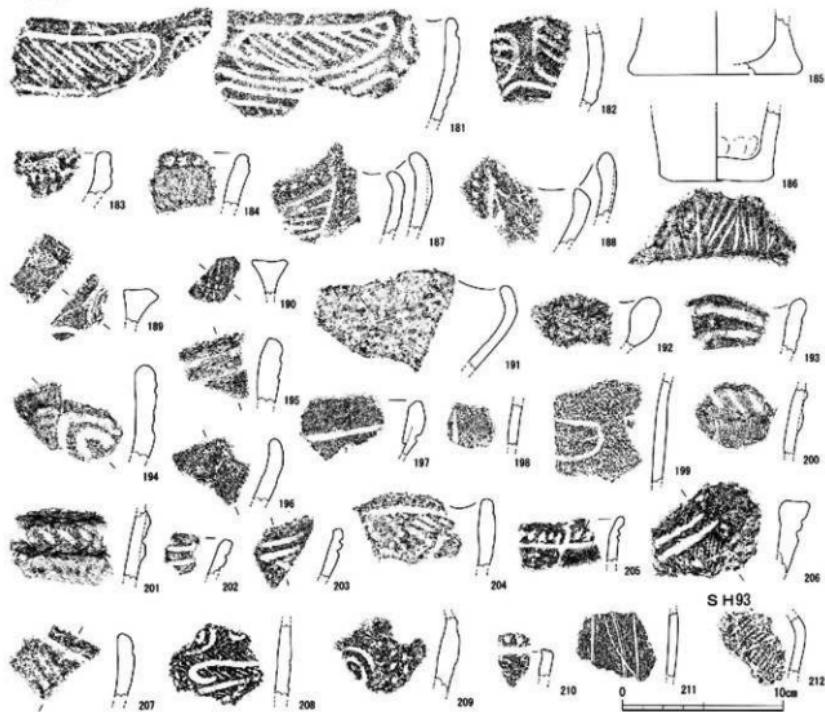
S H 106（第41図） 出土土器は中期後葉に属するが、古相（2期～3期）の例が一定量認められた。完形および完形に近いものはない。器種は234が浅鉢で、それ以外は深鉢とみられる。213は深鉢の胴部で、器壁は薄く、幅の狭い沈線が連弧状に施される。2期古（＝咲田貝塚I群A類系）に属す



第38図 縄文土器実測図(4)(1:3)



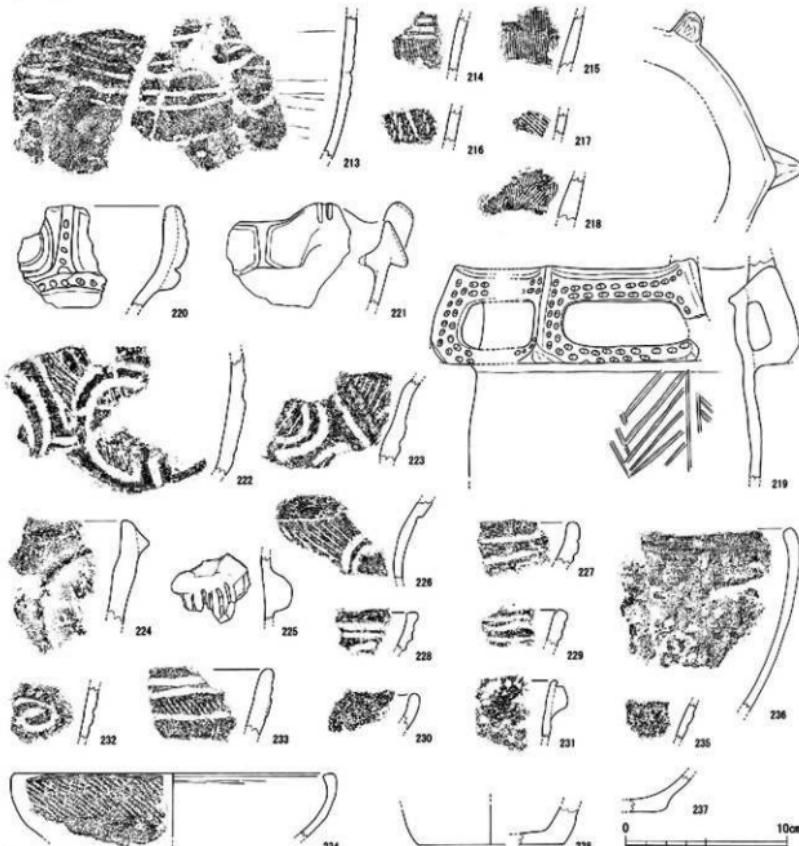
第39図 繩文土器実測図（5）（1：3）



第40図 純文土器実測図 (6) (1 : 3)

る。214～217は撚糸を地文とする体部である。214は、半截竹管文が横位に3条認められる。2期古(△里木Ⅱ式)に属する。218は体部で、撚糸文をやや乱方向に施す。2期古(△里木Ⅱ式)である。219は口縁部文様帯が立体的で、文様上の貼付隆帯が口端にあたり、内側に蓋受け状の段をもつ。口縁部の上下2段には、貼付した横位隆帯を紙に繋ぐ橋状把手をもつ。把手は6区画と推定される。内側の蓋受け状の段は把手部分で角をもち、六角形を呈するように思われる。隆帯および把手上には竹管文が施されている。口縁部から胴部にかけてはやや膨らみ、2条1單位の懸垂文の両側に浅い綾杉文が施されている。岐阜県の戸入村平跡遺¹⁰に類例がある。220はキャリバー形の口縁部で、竹管文を配した隆帯による方形区画文と推定され、区画内には沈線が認められる。221は、立体装飾のある波状口縁である。内

側に蓋受け状の段をもち、波頂部から両側に隆帯による区画文が施される。219と器形や文様構成は類似するが、219ほどの立体感はなくつぶれている。いずれも3期（^ヒ神明式）である。222と223は、体部片で同一個体の可能性がある。隆帯と沈線で唐草状に描出し、2本の短い隆帯が左右の唐草状文を繋いでいる。文様の内外には、細い斜行沈線が粗雑に施される。共に3期～4期古（^ヒ神明～取組式）である。なお、226は222や223と文様が類似するが、同一個体かは不明である。224は台付深鉢の口縁部で、弧状の隆帯が貼り付く。3期～5期古（^ヒ神明～山ノ神I式）である。225は、横位の貼付隆帯の下に中実の把手が継ぎ位に付くもので、把手手上に深い沈線が継ぎ位に施されている。227と228・230は、ゆるやかな波状の口縁部である。227は2条の横位沈線が横行する。228は、2条の沈線と区画文らしい



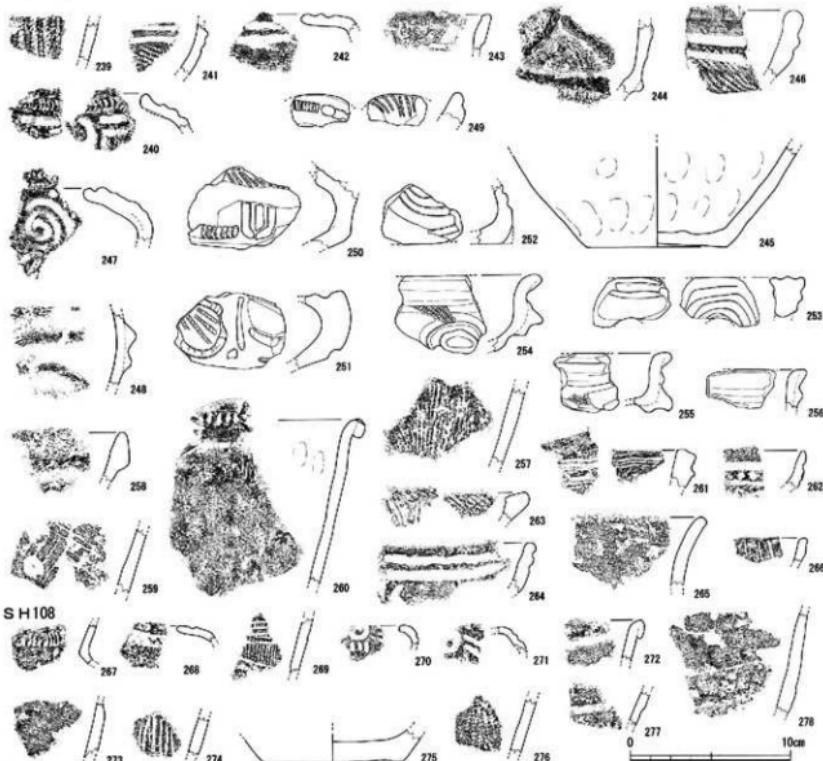
第41図 縄文土器実測図（7）（1：3）

弧状の沈線を施す。229は、平線の口縁部で3条の沈線が横行する。230は無文である。231は分厚い隆帯がつく口縁部で、隆帯上に竹管文が認められる。いずれも4期新～5期古（与島崎III～山ノ神I式）に属する。232は、満巻状沈線のある体部である。5期新（与山ノ神II式）である。233は口縁部で、太い箇擗沈線区画の中に無節の縄文を充填している。5期（与山ノ神I・II式）である。234は浅鉢である。口縁部はやや内湾し、器壁は薄い。単節RLの縄文が施されている。235は単節RLの縄文

が施される体部で、器壁は薄い。236はやや内湾する口縁部で、磨滅により文様は不明である。237は、236の底部と思われるが接点はない。238は底部であり、外面に文様は認められない。

SH107（42図） 出土土器は中期後葉を中心とするが、中期前半から末葉のものもある。器種は254～256は鉢で、それ以外は深鉢とみられる。239は体部で器壁は薄く、単節RLの縄文が施される。中期前半（船元系）と推定する。240はキャリバー形の口縁部で器壁は薄く、口縁直下に横位の押引文を施

SH107



第42図 縄文土器実測図(8)(1:3)

し、「S」字状と見られる文様を縦位に配す。241は体部で器壁は薄く、2条の横位沈線と、単箭R-Lの繩文が施される。共に2期新(△呑煙貝塚I群A類系)である。242はキャリバー形の口縁部で、横位沈線が2条施されている。2期(△中富III~呑煙貝塚I群A類系)に属する。243は肥厚帶口縁部で口縁下部に横位沈線がみられる。244は体部で、貼付け隆帯や押引文と単箭R-Lの繩文が施される。245は無文であり、底部から立ち上がりのない体部に統く。いずれも2~3期(△中富III~神明式)に属する。246は口縁部で、横位隆帯と沈線で区画を描出している。区画内に単箭R-Lの繩文を充填するが、隆帯上にも繩文がはみ出している。2期新~3期

(△呑煙貝塚I群A類系~神明式)である。247はキャリバー形の口縁部で、器壁は厚い。口縁直下に沈線と刺突文を施し、肩部にかけて渦文を描出している。248は口縁部で、端部を欠失している。1本の横位隆帯と、区画を構成する弧状の隆帯が見られる。249にはドーナツ形らしい装飾が見られ、大波状口縁部に付く可能性がある。横位沈線内に刻みを充填し、外面には放射状に広がる細い沈線が施される。250~252はキャリバー形に張り出す部分である。250は、沈線や刻みにより文様をはっきりと描出しており、戸入型³に近い。251は中央に縦位の隆帯が付き、右側には渦文を、左側には区画を施し、区画内には単箭R-Lの繩文を配する。252は渦状の文様が施され

る。253は、大波状口縁部の角にあたる部分で、内外面および口唇に沈線が施される。いずれも3期(ニ神明式)である。254~256は、同一個体の鉢の口縁部と思われる。ゆるやかな波状を呈し、端部は外反する。横位沈線の下位に、隆帶による立体的な溝文が斜め下向きに付く。一部に単節RLの繩文が施される。257は体部で、条線を施す。これらは3期~4期古(ニ神明~取組式)に属する。258や260~263は口縁部で、沈線や刺突による文様描出が中心である。258と260は端部が肥厚する。260は、細く丸い粘土紐がそのまま外に貼付くような形状を呈し、口唇に刻みが入る。体部は無文である。261は内外面に櫛状具で不揃いな条線を施す。262は器壁が薄く、横位沈線が2条とその間には円棒状具による丸い刺突文を等間隔に配す。263は口唇に単節RLの繩文が施され、外面は鋭い箇状具による沈線文を深く施す。259は体部で、細く浅い綾杉文を施す。いずれも4期新~5期古(ニ島崎III~山ノ神I式)である。264は口縁部で、口縁直下に2条の横位沈線を配し、その下に垂下沈線などを描出す。5期新(ニ山ノ神II式)に属する。265は外反する無文の口縁部である。266は口縁部で器壁が薄く、細い沈線を口縁直下から縦位に施す。いずれも中期後葉である。

S H108 (第42図) 出土土器は、中期後葉でも古相(2期)の例を中心とするが、中期前半の例も認められる。器種は、いずれも深鉢とみられる。267や268・270・271はキャリバー形の口縁部で、器壁が薄い。267は石團炉の埋土から出土した。幅の広い爪形文が施される。古相を示し、中期前半(船元系)と推定する。268は、口縁直下の横位沈線内に交互刺突が見られる。269は体部で、横位沈線を上下にはさみ、内部に撚糸文を充填する。いずれも里木II式(ニ2期古)に比定される。270や271は、溝文を中心とした沈線が放射状に広がる。272は折り返し肥厚の口縁部で、無文である。いずれも2期(ニ中富III~咲烟貝塚I群A類系)である。273や274は、撚糸文を施す体部である。2期古(ニ里木II式)に比定される。275は平底である。立ち上りは外に拡張せず、底面は若干窪む形状を呈する。2期(ニ中富III~咲烟貝塚I群A類系)に属する。276は体部

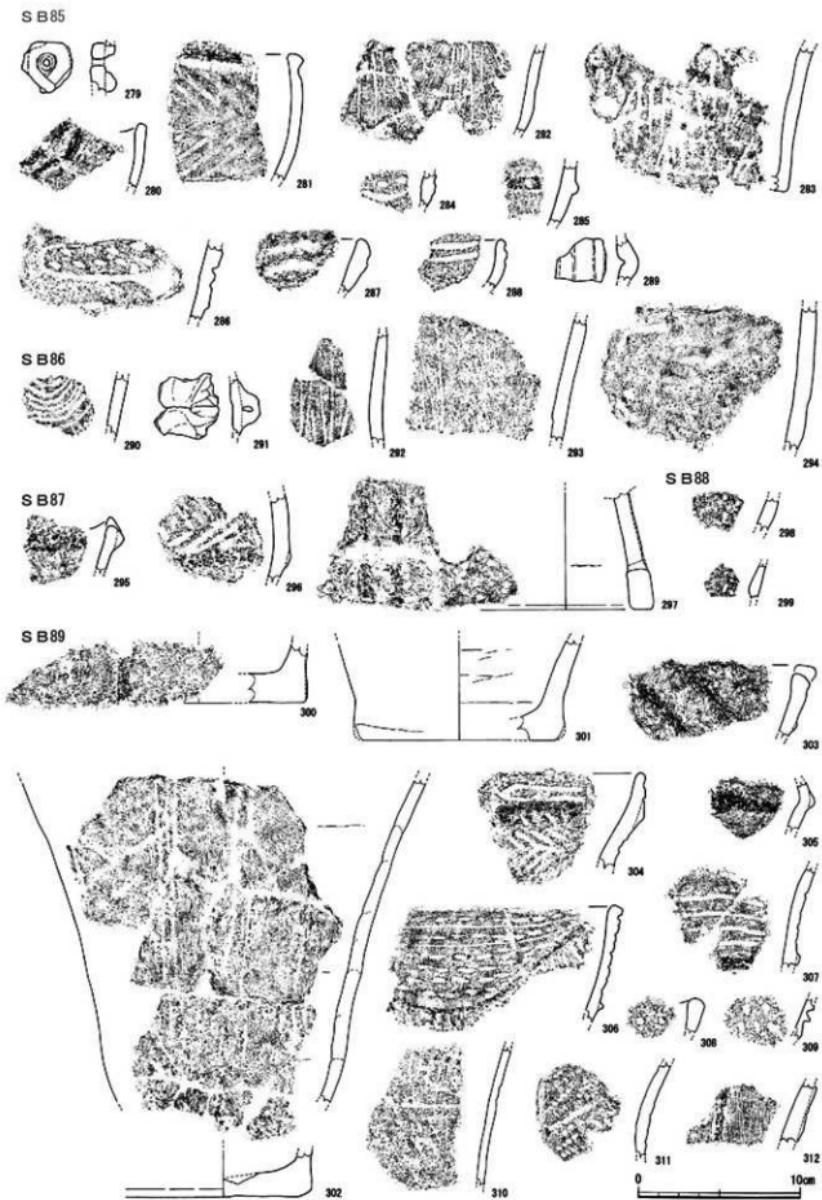
で、単節RLの繩文が施される。中期後半に属する。
S H109 (第42図) 2点の土器が出土した。277・278は共に深鉢の体部であり、外面は磨滅する。277は浅い沈線を施すが、278は無文である。いずれも中期の後葉であろう。

B 捏立柱建物出土の土器

S B85 (第43図) 柱穴SK5・8・18・20から出土した中期後葉の土器だが、末葉の例が多い。器種はいずれも深鉢とみられる。279は、ドーナツ状に粘土を巻いており、胸部に貼付く把手と思われる。3期以降(ニ神明式~)である。280はゆるやかな波状口縁を呈し、口縁直下に隆帶が付く。隆帶に無節ℓの繩文を施す。281は、ゆるやかなキャリバー形の口縁部で、浅い矢羽根状沈線が横位に施される。282は体部で、4条の垂下沈線と綾杉文が交互に施される。283は体部で、底部がはがれている。垂下沈線と綾杉文を、底部直近まで施す。284は口縁部で、刺突文と横位沈線文を施す。285は体部で、隆帶が貼付く。280~285は4期新~5期古(ニ島崎III~山ノ神I式)である。286は体部で、楕円区画の中に、左上からの刺突文を充填する。5期新(ニ山ノ神II式)に属する。287や288は平口縁部で、2条の横位沈線を施す。共に5期(ニ山ノ神I・II式)である。289は橋状把手と思われ、ややつぶれた形状を呈する。中期後葉に属する。

S B86 (第43図) いずれも柱穴SK23から出土した土器で、中期後葉に属するが、末葉の例が多い。器種はいずれも深鉢とみられる。290は体部で、溝文と連弧文・2条の縦位沈線を施す。5期新(ニ山ノ神II式)である。291は橋状把手で、ややつぶれた形状を呈する。292や293は体部で綾杉文を施す。いずれも4期新~5期古(ニ島崎III~山ノ神I式)である。294は無文の体部であり、中期後葉である。

S B87 (第43図) 柱穴SK3・11から出土した土器であり、いずれも末葉と認められる。295は、ゆるやかな波状口縁の深鉢で、端部は外面に肥厚する。296は、端部を欠失しているが深鉢の口縁付近で、隆帶による区画の中に沈線による矢羽根状文を充填する。297は台付深鉢の脚台部分で、縦位の隆帶と長楕円形の透孔を施す。胎土は赤褐色を呈する。すべて4期新~5期古(ニ島崎III~山ノ神I式)である。



第43図 縄文土器実測図(9)(1:3)

S B88 (43図) 柱穴 S K45・48から出土した。出土量は少なく、型式分類ができるものはない。298と299は、共に体部の無文片である。胎土や器壁の厚さから、中期後葉と推定できる。

S B89 (第43・44図) 柱穴 S K69を中心とする。柱穴 S K56・57・64・73から出土した土器である。中期後葉に属するが末葉を中心としている。器種はいずれも深鉢とみられる。300と301・319・328は底部である。300は隆帯が継位に付く。301と319・328は無文である。いずれも3期以降(△神明式～)である。302は体・底部で、2条1組の懸垂文を等間隔に配す。外面は摩滅して不明瞭だが、一部に縄文を施す。303や304・305・306・308は口縁部である。303は平縁で、隆帯により渦文を描出し、弧状の隆帯にかかる押引文を施す。304は、口縁直下へ沈線を長楕円に施し、1条の隆帯を貼付ける。下位には刺突や矢羽根状沈線を配する。305は波状口縁を呈し、断面形は「く」字外面に肥厚する。306は、平縁で、口縁直下に細い横位沈線を2条配し、隆帯により連弧文のような大振りの弧線を描く。口縁端部から弧線までの範間に、左方向への刺突文を充填する。308はゆるやかな波状口縁を呈し、円棒状具による丸い刺突文を2ヶ所に配す。307や309～312・314は体部である。307は多重の連弧文を施し、309は深い刺突文を配す。310は器壁が薄く、摩滅が激しい。かすかに綾杉文が見られる。311は継位沈線と単節R Lの縄文を施し、312は隆帯と条線を残す。314は、2本の細い粘土紐をからみ合わせ、「T」字状にしたものを見付けて装飾としたものと推定する。装飾の周りには円棒状具による小丸の刺突文を配す。313は橋状把手である。つぶれた形状を呈し、中実になる。大石遺跡³に類例がある。いずれも4期新～5期古(△島崎III～山ノ神I式)である。315～317は体部で、垂下沈線と綾杉文の構成である。317は、有文と無文の部分が明確に分かれれる。315は5期古(△山ノ神I式)、316と317は5期(△山ノ神I・II式)である。318は把手と見られ、立体的で弧状を呈する。中期後葉に属する。319～332は、柱穴 S K69から出土した。319は平底である。3期以降(△神明式～)である。320は口縁部で、継位の隆帯が付き、垂下沈線や綾杉文が施される。323～325・328は同

一個体と思われ、321も文様が類似する。口縁直下に刺突文を横位に2列配し、下位に垂下沈線を浅く雜に描く。東員町村前遺跡³に類例がある(S K69出土・報告番号66)。322は口縁部で、富士山形の大波状を呈する。隆帯がU字状に付き、U字の下端からも隆帯が垂下する。隆帶上には円棒状具による刺突文が施される。326や329は橋状把手である。326はつぶれた形状を呈し中実であり、329は円棒状具による大きな丸い刺突文を施す。327は口縁部で、横位隆帯が付き、沈線内に刻みを施す。いずれも4期新～5期古(△島崎III～山ノ神I式)に属する。330は、口縁部の下位に1条の横位沈線を施す。331は口縁端部に単節R Lの縄文を施し、横位沈線と区画文を配する。共に5期新(△山ノ神II式)に属する。332は口唇に円棒状具による刺突文を配し、端部が肥厚して横位沈線と斜行条線を施す。4期新～5期古(△島崎III～山ノ神I式)である。

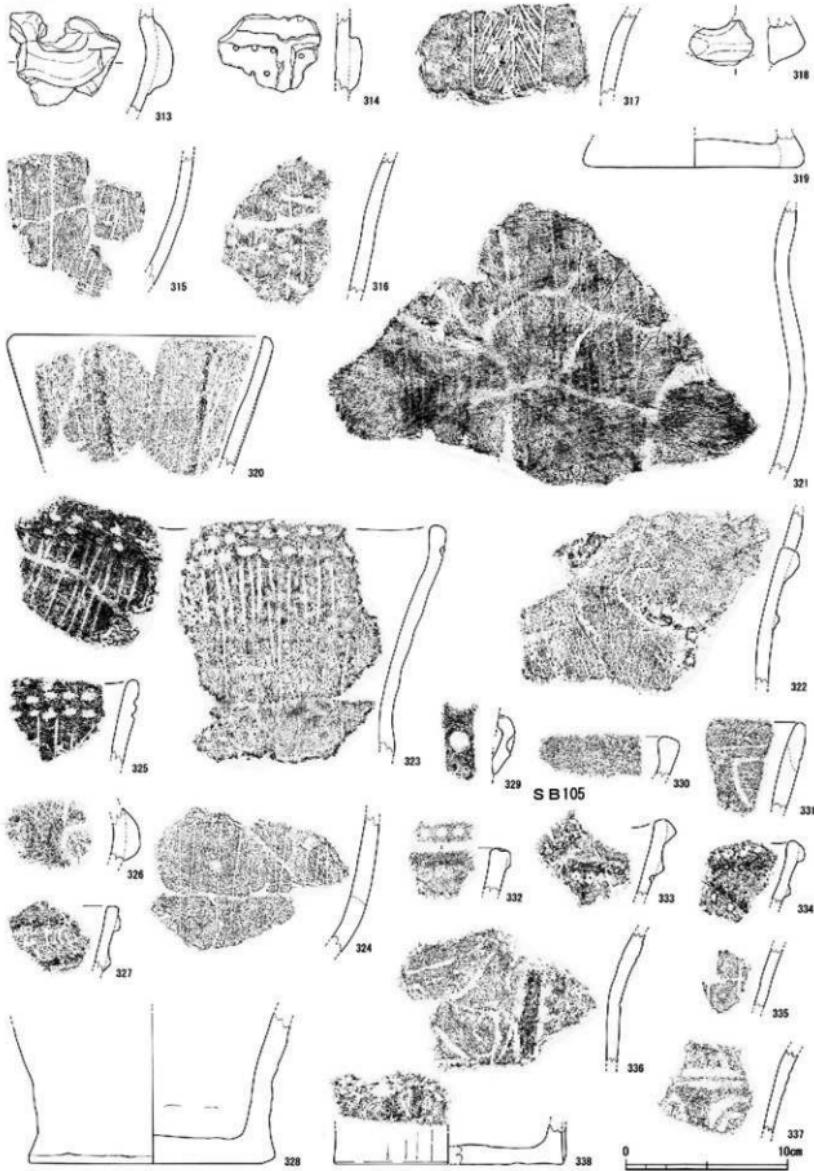
S B105 (第44図) 柱穴 S K66・75から出土した土器である。中期後葉に属するが末葉を中心としている。器種はいずれも深鉢とみられる。333や334はゆるやかな波状口縁部であり、隆帯や竹管文により文様を描出する。334は口唇にも竹管文を配す。335は体部で、継位沈線を2条配する。いずれも4期新～5期古(△島崎III～山ノ神I式)である。336は体部に継位の隆帯が付き、沈線による区画とその中に円棒状具による刺突文を配する。337は体部に横位沈線を2条と渦文をもつ。共に5期(△山ノ神I・II式)に属する。338は平底で、継位隆帯が付く。3期以降(△神明式～)である。

C 跖穴出土の土器

S K31 (第45図) 出土土器は中期後葉である。器種はいずれも深鉢とみられる。339は撚糸文を施す体部で、2期(△中富III～咲畠貝塚I群A類系)に属する。340は条線を施す体部で、3期以降(△神明式～)に属する。341は、口唇に円棒状具による刺突文を配する波状口縁部で、4期新～5期古(△島崎III～山ノ神I式)である。342は口縁部で、外面に肥厚する。摩滅のため、文様は明確に見られない。5期新(△山ノ神II式)である。

S K49 (第45図) 343のみが出土した。深い沈線で文様を描出する深鉢の口縁部である。5期(△山

S B89



第44図 繩文土器実測図 (10) (1 : 3)

ノ神 I～山ノ神 II式)に属する。

S K59 (第45図) 出土した土器は、いずれも中期末葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。344は、ゆるやかな波状を呈する口縁部である。隆帯による区画の中に、範状具による矢羽根状線を施す。345と346は頸部で、隆帯上に刺突文を施す。347は体部で、条線を施す。すべて4期新～5期古(=島崎III～山ノ神 I式)に属する。

S K61 (第45図) 出土土器は中期後葉の内、末葉を中心としているが、後期初頭の例もある。器種はいずれも深鉢とみられる。348は平縁で、口縁直下に竹管文を配する。349はゆるやかな波状を呈し、沈線による区画文を施す。350は頸部で、隆帯上に刺突文を施す。351は、多重沈線と条線が施された体部である。352はゆるやかな波状を呈する口縁部で、隆帯による区画の中に矢羽根状沈線を配す。353は体部で、矢羽根状沈線を施す。354は橋状把手である。いずれも4期新～5期古(=島崎III～山ノ神 I式)に属する。355はゆるやかな波状を呈する口縁部で、胎土は緻密である。横位沈線を1条と、区画を描く隆帯が付く。後期初頭と推定される。

S K68 (第45図) 出土土器は中期後葉の内、末葉を中心とする。器種はいずれも深鉢とみられる。356は平縁の口縁部である。端部の外側に隆帯を貼付けて肥厚し、隆帯上に刺突文を配す。357は口縁部でゆるやかな波状を呈し、文様は見られない。358や359は胴部で、細くて浅い垂下沈線と綾杉文を施す。360は口縁部で、隆帯による区画を描き、口縁直下に刺突文を配す。いずれも4期新～5期古(=島崎III～山ノ神 I式)に属する。361は平底であり、3期以降(=神明式～)に属する。

S K83 (第45図) 出土土器は、いずれも中長期葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。362は、富士山形の大波状を呈する口縁部で、2条の横位沈線と斜行沈線を施す。363と364は体部で、363は条線を、364は沈線1条と単節LRの繩文を施す。365は頸部で隆帯が付き、隆帯上に刺突文を施す。すべて、4期新～5期古(=島崎III～山ノ神 I式)に属する。

S K113 (第45図) 出土した土器は、中期後葉～後期初頭のものである。器種はいずれも深鉢とみら

れる。366は口縁部で器壁は薄く、半截棒状具で押引文を施す。367はキャリバー形の口縁部で、沈線を施す。共に2期(=中富III～吠貝塚I群A類系)である。368は富士山形の大波状口縁で、口唇に横位沈線を施す。369は口縁部で、口唇に円棒状具による刺突文を配し、外面に横位沈線を施す。4期新～5期古(=島崎III～山ノ神 I式)である。370は体部、371は口縁部で、共に単節LRの繩文と明瞭な沈線による擦消繩文を施す。5期新～後期初頭(=山ノ神 II～後期初頭)であり、中津I式成立期のものと推定される。

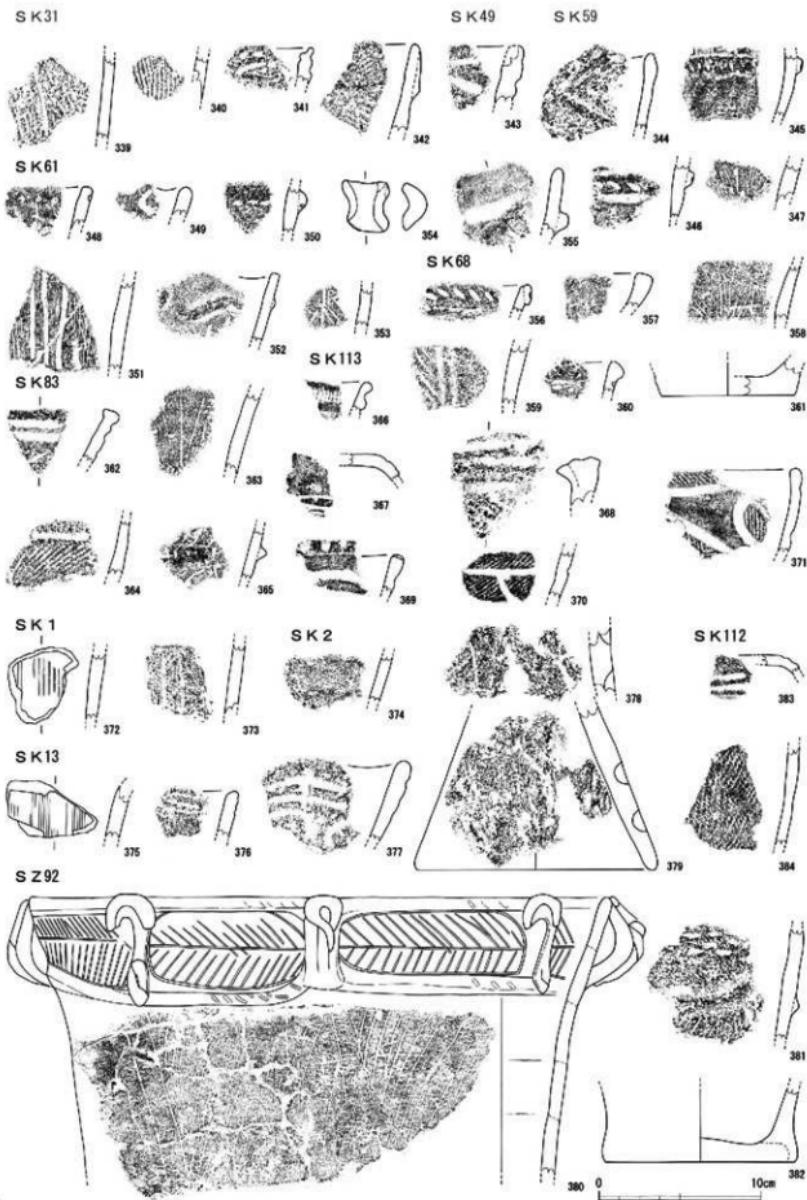
D 土坑等出土土器

S K1 (第45図) 出土した土器は、中期後葉のものである。372は、深鉢の体部で浅い条線を施す。5期(=山ノ神 I・II式)である。373は、深鉢の体部で縱位沈線を2条施す。中期後葉に属する。

S K2 (第45図) 出土した土器は374の深鉢1点で、無文の体部片である。型式分類は明確でなく、中期後葉とする。

S K13 (第45図) 出土した土器は、中期後葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。375は体部で、縱位条線を施す。3期以降(=神明式～)に属する。376は口縁部で、横位条線を施す。4～5期(=取組～山ノ神 II式)である。377は口縁部で、ゆるやかな波状を呈する。口縁に沿うように横位沈線を2条施し、満文や区画文を配す。5期新(=山ノ神 II式)である。

S Z92 (第45図) 出土土器は中期後葉の内、末葉を中心とする。器種はいずれも深鉢とみられる。378や379は同一個体と思われ、懸垂文と丸穴を2ヶ所ずつ配す。4期新～5期古(=島崎III～山ノ神 I式)に属する。380は、梢円形の口縁部区画文と把手状の装飾が交互に配される。区画文内には範状具による細い矢羽根状沈線が描かれる。把手状の装飾は2種類の形状があり、いずれも粘土紐をねじらせて貼付けている。胴部には2条1組の垂下沈線と雑な斜行沈線を配す。北白川C式B類に類似するが、把手の様相は異なり、独自性が見られる。5期古(=山ノ神 I式)に属する。381は体部で、隆帯が「U」字状に付き、隆帯より上に刺突文を、下に範状具による鋭い条線を施す。4期新～5期古(=島崎III～



第45図 縄文土器実測図 (II) (1 : 3)

山ノ神 I 式)に属する。382は底部で、外面に文様は無い。中期後葉である。

S K112 (第45図) 出土した土器は、中期後葉の内、2期古のものがある。器種はいずれも深鉢とみられる。383はキャリバー形の口縁部で、沈線を3条施す。2期古(山ノ神 I 式～島崎 III～呪煙貝塚 I 群 A 類系)に属する。384は体部で、撫糸文もしくは繩巻繩文を施す。2期古(里木 II 式)である。

P i t 出土 (第46図) 出土土器はすべて中中期後葉である。385は深鉢の口縁部で、ゆるやかな波状を呈し、横位沈線を1条施す。5期新(山ノ神 II 式)である。386は、細かい刺突で弧状の文様を描く。土器の装飾部分かと推定されるが、土偶の可能性も否定できない。

E 包含層等出土の土器

S K28 (搅乱) (第46図) 出土した387は器壁が薄い深鉢の口縁部で、横位の沈線と竹管文を配する。5期古(山ノ神 I 式)に属する。

B-Y 5 風倒木痕・根搅乱 (第46図) 中期後葉の土器が出土した。388と389は、壺の「X」字状の橋状把手と見られる。共に大きくしっかりした作りであり、把手の上下両端に円穴を配する。388は、体部には把手を貼付けした後に梢円状の沈線を描き、内側を単節LRの繩文を充填する。388は4期(取組～島崎 III)、389は4～5期(取組～山ノ神 II 式)に属する。390は把手状の装飾と推定し、沈線でワラビ手状の文様などを描出す。4期～5期古(取組～山ノ神 I 式)である。391と392は深鉢の体部で、391は単節LRの繩文を地文として、2条の垂下沈線と蛇行沈線を配す。392は弧状の2重隆帯が付き、隆帯上に円棒状具による刺突文を施す。共に4期新～5期古(島崎 III～山ノ神 I 式)である。393は深鉢の口縁部で、穿孔が1つ見られ、補修孔と推定される。

D-A～D 風倒木痕・西調査区東端の谷 (第46図)

中期後葉の土器が出土した。器種は、いずれも深鉢とみられる。394はキャリバー形口縁部で屈曲し、胎土は赤褐色である。太い沈線で満文などの文様を描出し、沈線内に箇刺突が入る。2期古(呪煙貝塚 I 群 A 類系)である。395は把手状の立体的な装飾で、多角形の蓋受けを有する。把手に細い粘土紐

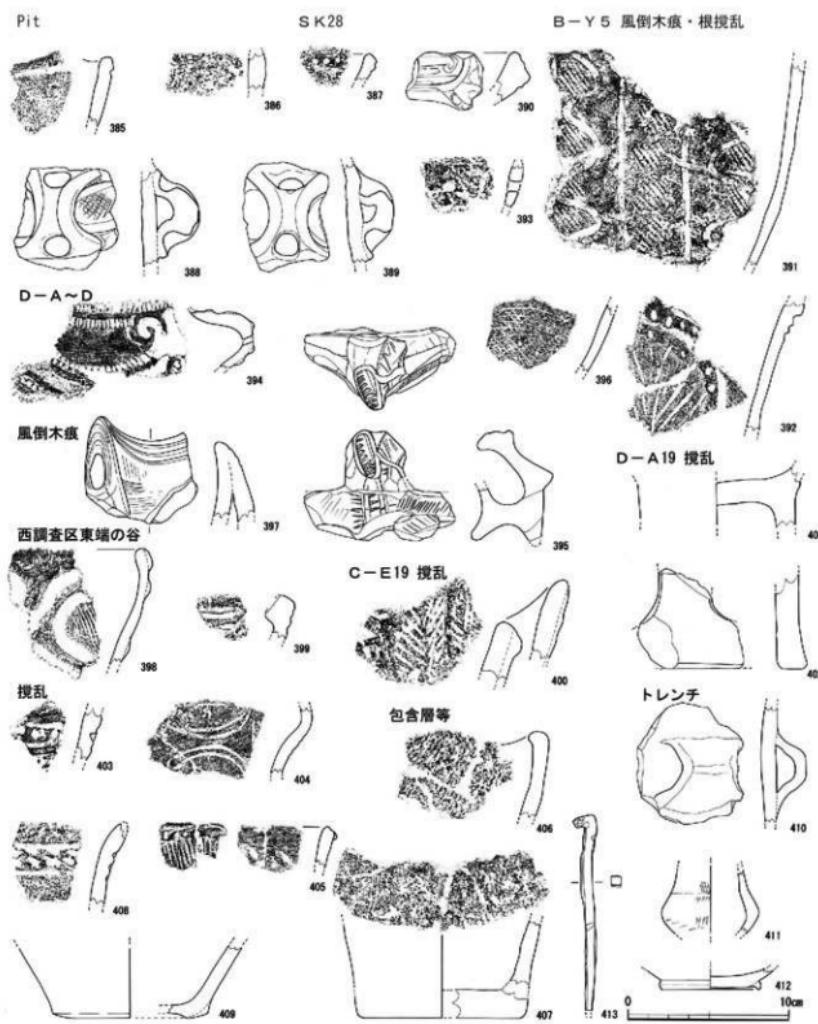
を貼付け、内側に刺突文を施す。把手の両側には透かしを配し、下位には細い沈線が斜行する。美濃地域に類例がある。3期(山ノ神明式)である。396は体部で、胎土は緻密である。条線が交差し文様を描く。3期～5期古(山ノ神明～山ノ神 I 式)である。397は口縁部で三角形の大波状を呈し、波頂部は左側に面を持ち、大きな穴があく。3重の沈線が穴の周りと口縁直下に施される。398は口縁部で、隆帯や沈線により区画文を描出し、区画内に斜行沈線を充填する。共に4期(取組～島崎 III)である。399は口縁部で、三角形の大波状を呈し、沈線が横行する。

搅乱 (第46図) 出土した土器は、中期後葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。400は口縁部でゆるやかな波状を呈し、垂下隆帯と継杉文を施す。401は台付深鉢の底部で、底面は内側に窪み、外面は無文である。いずれも4期新～5期古(島崎 III～山ノ神 I 式)である。403は体部で、横位沈線と並行する刺突文を施す。5期新(山ノ神 II 式)である。404は体部で、2重の弧状沈線文を描く。2期(山ノ神 I 式～呪煙貝塚 I 群 A 類系)である。405は口縁部で、端部が肥厚し円棒状具による刺突文を施す。外面は条線を施し、内側は斜行する窪みを有する。

4期新～5期古(島崎 III～山ノ神 I 式)である。包含層等 (第46図) 出土した土器は、中期後葉に属する。器種はいずれも深鉢とみられる。402は台付深鉢の底部で、外面は無文である。4期新～5期古(島崎 III～山ノ神 I 式)である。406と407は同一個体と見られ、体・底部である。摩滅により明瞭ではないが、条線が縦位にかかに残る。3期以降(山ノ神明式～)である。408は口縁部で端部を欠失する。2条の横位沈線と、斜行する細長い刺突文を施す。5期新(山ノ神 II 式)に属する。409は底部で、外面は無文である。3期以降(山ノ神明式～)である。410は橋状把手であり、大型で立体的である。4期新～5期古(島崎 III～山ノ神 I 式)である。

(3) その他の土器と金属製品

古式土師器1点と灰釉陶器1点、和釘1点である(第46図)。411は古墳時代前期の古式土師器の小型丸底壺と思われる。412は灰釉陶器の底部である。413は和釘である。先端を僅かに欠失する。(中村)



第46図 縄文土器等実測図 (12) (1 : 3)

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他
1	162-08	深鉢	C-D21	S F52	体上部：羽状の押型文か沈織と横顕山形文	褐	7.5IR4/3	「神並上層」
2	137-05	深鉢	C-D20	S H50	強いキャリバー形口縁部 沈織文	褐	7.5IR4/4	古
3	147-10	深鉢	C-D20	S H50上	キャリバー形口縁部 沈織・交叉刻突・鶴糸文	にぶい黄褐色	10V3S/4	古
4	150-08	深鉢	C-D20	S H50中	鶴糸文	にぶい黄褐色	10V3S/3	古
5	137-08	深鉢	C-D20	S H50上	鶴糸・沈織文	褐	7.5IR4/3	古
6	138-01	深鉢	C-D20	S H50上	鶴糸・(瑞兽圖)・沈織文	にぶい黄褐色	10V3S/4	古
7	150-05	深鉢	C-D20	S H50上	鶴糸文	褐	7.5IR4/4	古
8	150-07	深鉢	C-D20	S H50上	鶴糸文	にぶい黄褐色	10V3S/4	古
9	137-06	深鉢	C-D20	S H50上	キャリバー形口縁部 沈織・漢文	褐	7.5IR7/6	3~4 中富III・神明
10	141-06	深鉢	C-D20	S H50 No. 25	弦文	明黄褐色	10V3T/6	3~5 神明～山ノ神II
11	143-04	深鉢	C-D20	S H50	R L織文	にぶい黄褐色	10V3S/3	3~5 神明～山ノ神II
12	143-05	深鉢	C-D20	S H50	R L織文	にぶい黄褐色	10V3S/4	3~5 神明～山ノ神II
13	145-02	深鉢	C-E20	S H50	平底	にぶい褐色	7.5IR7/4	3~5 神明～山ノ神II
14	146-02	深鉢	C-D20	S H50 No. 47	平底	にぶい黄褐色	10V3S/4	3~5 神明～山ノ神II
15	149-01	深鉢	C-D20	S H50 No. 24	平底	明黄褐色	10V3T/6	3~5 神明～山ノ神II
16	145-03	深鉢	C-D20	S H50	平底	にぶい黄褐色	10V3S/4	3~5 神明～山ノ神II
17	146-01	深鉢	C-D20	S H50	平底	にぶい黄褐色	10V3S/4	3~5 神明～山ノ神II
18	136-01	深鉢	C-D20	S H50	平口縁部 陰沿・鶴巣沈織文	にぶい黄褐色	10V3S/4	4古 取組
19	138-07	深鉢	C-D20	S H50 No. 4	波状口縁部 陰沿・鶴巣沈織文	灰黄褐色	10V3S/2	4古 取組
20	139-02	深鉢	C-D20	S H50 No. 17	平口縁部 陰沿・鶴巣沈織文	にぶい黄褐色	10V3S/3	4古 取組
21	138-08	深鉢	C-D20	S H50 No. 14	ホリバー形・波状口縁部 陰沿・鶴巣沈織文	褐	7.5IR4/4	4古 取組
22	139-01	深鉢	C-D20	S H50 No. 29	波状口縁部 陰沿・鶴巣沈織文	灰黄褐色	10V3A/2	4古 取組
23	137-09	深鉢	C-D20	S H50	平口縁部 鶴巣条縫	12.5~14古 褐	10V3S/2	4古 取組～鳥崎III
24	143-08	深鉢	C-D20	S H50	キャリバー形・平口縁部 陰沿・沈織・柄突文	にぶい黄褐色	10V3T/3	4古 取組～鳥崎III
25	140-08	深鉢	C-E20	S H50	キャリバー形・平口縁部 陰沿・鶴巣沈織・柄突文	浅黄褐色	10V3S/4	4古 取組～鳥崎III
26	140-07	深鉢	C-D20	S H50	キャリバー形・平口縁部 陰沿・鶴巣沈織・柄突文	にぶい黄褐色	10V3T/4	4古 取組～鳥崎III
27	138-02	深鉢	C-D20	S H50	楕状把手 陰沿	にぶい褐色	7.5IR5/4	4古 取組～鳥崎III
28	134-01	深鉢	C-D20	S H50	キャリバー形・山形大菱状口縁部・楕状把手	褐	7.5IR6/6	3~4古 神明～取組
29	143-06	深鉢	C-E20	S H50	キャリバー形・大三角形波状口縁部 陰沿	にぶい黄褐色	10V3S/3	4新~5古 鳥崎III～山ノ神I
30	136-03	深鉢	C-D20	S H50 No. 52	キャリバー形・波状口縁部 鶴巣文	にぶい黄褐色	10V3S/3	4新~5古 鳥崎III～山ノ神I
31	141-04	深鉢	C-D20	S H50	沈織・弦文	にぶい黄褐色	2.5IV6/4	4新~5古 鳥崎III～山ノ神I
32	147-08	深鉢	C-D20	S H50上	鶴巣・沈織文	灰褐色	4新~5古 10V3S/6	鳥崎III～山ノ神I
33	137-04	深鉢	C-D20	S H50	鶴巣・織文	灰褐色	4新~5古 10V3A/2	鳥崎III～山ノ神I
34	143-03	深鉢	C-D20	S H50	ハリツナナデ 鶴巣	にぶい黄褐色	10V3S/3	4新~5古 鳥崎III～山ノ神I
35	146-06	深鉢	C-D・E20	S H50 F 南東部	鶴巣・沈織文	にぶい褐色	7.5IR5/4	4新~5古 鳥崎III～山ノ神I
36	143-01	深鉢	C-D20	S H50	ユビオサエ・山形口縁部	褐	7.5IR6/6	4新~5古 鳥崎III～山ノ神II
37	138-02	深鉢	C-D20	S H50	直土山形口縁部 沈織文	灰黄褐色	10V3A/2	4新~5古 鳥崎III～山ノ神II
38	138-03	深鉢	C-D20	S H50 No. 50	楕状把手 陰沿・柄突・沈織文	灰褐色	7.5IR4/2	4新~5古 鳥崎III～山ノ神II
39	147-02	深鉢	C-E20	S H50	山形口縁部 鶴巣・沈織文	褐	7.5IR5/6	4新~5古 鳥崎III～山ノ神II
40	140-05	深鉢	C-D20	S H50	刺繡文	にぶい黄褐色	10V3T/4	4新~5古 鳥崎III～山ノ神I
41	137-03	深鉢	C-D20	S H50	鶴巣・沈織・織文	灰黄褐色	10V3A/2	4新~5古 鳥崎III～山ノ神II
42	139-03	深鉢	C-D20	S H50 No. 27	沈織文	灰黄褐色	10V3A/2	4新~5古 鳥崎III～山ノ神II

第7表 織文土器観察表（1）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他の
43	137-01	深鉢	C-D20	S H50	縁帶・沈綱・繩文	灰黄褐色 10YR4/2	4新～5古 島崎III・山ノ神II	
44	138-06	深鉢	C-D20	S H50	網突・沈綱文	褐 10YR4/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
45	149-06	深鉢	C-D20	S H50上	縁帶・沈綱・繩文	にぶい黄褐色 10YR5/7	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
46	150-01	深鉢	C-D20	S H50上	網突・繩文	にぶい黄褐色 10YR5/7	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
47	149-11	深鉢	C-D20	S H50上	網突文	にぶい黄褐色 10YR4/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
48	147-01	深鉢	C-D20	S H50中	網突文	にぶい黄褐色 10YR5/5	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
49	137-02	深鉢	C-D20	S H50	縁帶・沈綱・繩文	灰黄褐色 10YR4/2	4新～5古 島崎III・山ノ神II	
50	149-01	深鉢	C-D20	S H50上	沈綱文	12.5-5-黒 7.5YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	風化
51	149-09	深鉢	C-D20	S H50 唇	沈綱文	褐褐色 10YR3/1	4新～5古 島崎III・山ノ神II	
52	148-03	深鉢	C-D20	S H50上	網突文	12.5-5-黒 7.5YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
53	149-03	深鉢	C-D20	S H50上	沈綱文	褐灰黄 2.5YR5/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
54	149-02	深鉢	C-D20	S H50上	網突文	灰黄褐色 10YR4/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
55	148-02	深鉢	C-D20	S H50上	網突文	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
56	146-04	深鉢	C-D-E20	S H50 西唇	縁帶・沈綱文	にぶい黄褐色 10YR5/4	4新～5古 島崎III・山ノ神II	
57	141-03	深鉢	C-D20	S H50	縁帶・沈綱文	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
58	146-05	深鉢	C-D-E20	S H50 西唇	網突・繩文	褐黄褐色 10YR5/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
59	152-02	深鉢	C-D20	S H50上	沈綱文	灰黄褐色 10YR4/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	炭化物付着
60	151-04	深鉢	C-D20	S H50上	沈綱・繩文	にぶい黄褐色 10YR4/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
61	144-01	深鉢	C-D20	S H50	縁帶・網突文	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
62	135-06	深鉢	C-D20	S H50	キャリパー・形口縁部？ 網突・網突文	褐 7.5YR4/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
63	146-09	深鉢	C-D20	S H50中	沈綱	12.5-5-黒 7.5YR5/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
64	137-07	深鉢	C-D20	S H50上	(風巻？)沈綱文	12.5-5-黒 7.5YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
65	146-07	深鉢	C-D20	S H50F 南西唇	鰐糸文？	12.5-5-黒 7.5YR3/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
66	142-01	深鉢	C-D20	S H50 No.37	連續竹管・垂下沈綱・蛇行沈綱文	12.5-5-黒 7.5YR2/4	5新 山ノ神II	
67	147-09	深鉢	C-D20	S H50上	沈綱・絹帶文	にぶい黄褐色 10YR5/4	5新 山ノ神II	
68	146-02	深鉢	C-D20	S H50中 北東唇	沈綱・繩文	にぶい黄褐色 10YR5/3	5新 山ノ神II	
69	139-04	深鉢	C-D20	S H50 No.23-26	波状口縁部 沈綱・網突文	灰黄褐色 10YR4/2	5新 山ノ神II	
70	144-04	深鉢	C-D20	S H50	沈綱・網突文	にぶい褐 7.5YR5/4	5新 山ノ神II	
71	138-04	深鉢	C-D-E20	S H50	陽文带	褐 7.5YR6/6	5新 山ノ神II	
72	142-03	深鉢	C-D20	S H50 No.36	鰐糸沈綱文	にぶい黄褐色 10YR2/4	5新 山ノ神II	
73	142-04	深鉢	C-D20	S H50	連續竹管・斜行沈綱文	にぶい黄褐色 10YR2/4	5新 山ノ神II	
74	142-02	深鉢	C-D20	S H50 No.35	連續竹管・垂下沈綱・蛇行沈綱・斜行沈綱文	にぶい黄褐色 10YR2/4	5新 山ノ神II	
75	150-02	深鉢	C-D20	S H50上	沈綱・溝・多重溝張文	にぶい褐 7.5YR5/4	5新 山ノ神II	
76	150-03	深鉢	C-D20	S H50上	沈綱文	褐 10YR4/4	5新 山ノ神II	
77	136-04	深鉢	C-D20	S H50	山形・大波状口縁部 沈綱文	にぶい黄褐色 10YR5/4	5新 山ノ神I～II	
78	149-10	深鉢	C-D20	S H50上	平縁	灰黄褐色 10YR4/2	5 山ノ神I～II	
79	152-01	深鉢	C-D20	S H50上	縁帶・網突・絹衫文	褐 5YR5/1	5 山ノ神I～II	
80	146-08	深鉢	C-D20	S H50中	平縁 繩文	灰黄褐色 10YR4/2	中期末葉	
81	147-04	深鉢	C-E20	S H50	平縁 繩文	黑褐色 10YR5/2	中期末葉	
82	145-01	深鉢	C-D20	S H50	波状口縁部 沈綱文	褐 7.5YR6/6	5新～昔原初頭 山ノ神～後原初頭	
83	147-07	上唇片縛	C-D20	S H50上	長輪両端に切込み 黒文	灰黄褐色 10YR4/2	時期不明	
84	132-01	深鉢	C-G22	S H84T No. 9	大波状口縁部・横状把手 沈綱・溝・垂直・L.R.綱文	にぶい黄褐色 10YR5/3	5 山ノ神I～II	

第8表 繩文土器観察表（2）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他
85	131-01	深鉢	C-G-22	S H84 No. 2・3・6～8・16・18・43・53・58・102	波状口縁部 透彫・沈継・筋突・ワラビ手文	褐 7.5TR4/3	5新 山ノ神Ⅱ	
86	111-02	深鉢	C-H-22	S H84下	波継・筋突	にぶい黄褐色 10V3E/4	2～3 中富田～神明	
87	127-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	把手 新突文	黄褐色 10V3E/6	3～4古 神明～段組	
88	109-03	深鉢	C-H-22	S H84下	堆塑・沈継・綾杉文	褐 7.5TR4/4	3～4古 神明～段組	
89	109-05	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北東部 戸	波継・綾杉文	褐 7.5TR4/4	3～4古 神明～段組	
90	109-01	深鉢	C-G-22	S H84下 No. 34	沈継・綾杉文	にぶい褐 7.5TR4/4	3～4古 神明～段組	
91	109-02	深鉢	C-G-22	S H84下 No. 34	沈継・綾杉文	褐 7.5TR6/6	3～4古 神明～段組	
92	126-08	深鉢	C-G-22	S H84 仰周邊	陈帯・漢状沈継・竹管文	12.5E・黒 7.5TR6/4	3～5古 5～6 神明～山ノ神Ⅰ	
93	101-02	深鉢	C-G-22	S H84下 No. 1	波状口縁 新突・路滑による曲巻き・織い沈継文	12.5E・黄褐色 10V3E/6	4古 取組	
94	101-03	深鉢	C-G・H-22	S H84上 No. 63	波状口縁 新突文・太い沈継による曲巻き文	12.5E・黄褐色 10V3E/5	4古 取組	
95	101-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北東部周溝	大きい沈継によるワリ手状文・梅円形区画	12.5E・黄褐色 10V3E/4	4古 取組	
96	122-01	深鉢	C-G・H-22	S H84上 No. 66	路滑・沈継・漢文	灰黃褐色 10V3E/2	4古 取組	
97	122-02	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北西部	路滑・沈継・漢文	黑褐色 10V3E/1	4古 取組	
98	113-09	深鉢	C-G-22・23	S H84 哮	波状口縁 路滑・沈継・区画文	にぶい黄褐色 10V3E/4	4 取組～島崎田	
99	114-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84 哮	路滑・沈継・区画文	にぶい黄褐色 10V3E/3	4 取組～島崎田	
100	113-02	深鉢	C-G・H-22	S H84下 北西部	筋突・路滑・沈継・区画文	にぶい黄褐色 10V3E/4	4 取組～島崎田	
101	113-05	深鉢	C-G-22	S H84	路滑・沈継・区画・R.L.綫文	灰黃褐色 10V3E/2	4 取組～島崎田	
102	121-06	深鉢	C-H21・22	S H84上 南西部	路滑・沈継・漢文	灰黃褐色 10V3E/2	4古 取組	
103	122-07	深鉢	C-G・H 21・22	S H84 哮	沈継文	黑褐色 2.5T3/1	4 取組～島崎田	
104	127-05	豆	C-G・H 21・22	S H84	把手 新突文	褐 7.5TR6/6	4 取組	
105	127-02	深鉢	C-G-22	S H84下	穂状把手？ 路滑・沈継・新突文	12.5E・黄褐色 10V3E/3	4 取組～島崎田	
106	119-07	深鉢	C-G-21	S H84上	路滑・矢羽根・綾杉文	12.5E・黒 7.5TR5/4	4 取組～島崎田	
107	121-05	深鉢	C-G-22・23	S H84 哮	路滑・沈継・漢文	灰黃褐色 10V3E/2	4古 取組	
108	102-08	深鉢	C-G・H-22	S H84上 No. 97	路滑・羽状沈継・綾杉文	にぶい黄褐色 10V3E/4	4 取組～島崎田	
109	107-08	深鉢	C-G-22	S H84下 No. 56	波状口縁部 黒紋・彌？	褐 7.5TR4/4	4～ 取組～	
110	116-10	深鉢	C-H22	S H84	山形・大波状口縁部 突唇・沈継・新突文	灰黃褐色 2.5T3/2	4新 島崎田Ⅲ	
111	105-07	浅鉢・舟形	C-G・H-22	S H84上 No. 21	穂状把手 路滑・沈継文	にぶい黒 7.5TR7/4	4古～5古 取組～山ノ神Ⅰ	
112	129-01	深鉢	C-G-22・23	S H84 哮	富士山形・波状口縁部 新突・斜行沈継文	西黃褐色 7.5TR8/4	4新～5新 島崎田Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
113	111-05	深鉢	C-G-22	S H84下	突唇？横状沈継文	にぶい黄褐色 10V3E/3	4新～5新 島崎田Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
114	111-01	深鉢	C-H-22	S H84	沈継・新突文	明黃褐色 10V3E/6	4新～5古 島崎田Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
115	133-02	深鉢	C-G-22	S H84下 No. 26	富士山形・波状口縁部 沈継文	にぶい黄褐色 10V3E/3	4新～5新 島崎田Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
116	133-05	深鉢	C-G-22	S H84下 No. 26	富士山形・波状口縁部 沈継文	にぶい黄褐色 10V3E/3	4新～5新 島崎田Ⅲ～山ノ神Ⅱ	
117	114-08	深鉢	C-G-22・23	S H84 哮	路滑	西黃褐色 10V3E/4	4新～5古 島崎田Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
118	108-06	深鉢	C-G-22	S H84上	ユビオサエ後ナダ 横位沈継文	褐褐色 10V3E/3	4新～5古 島崎田Ⅲ～山ノ神Ⅰ	
119	111-04	深鉢	C-G-22	S H84下	新突・突唇・沈継・路滑による区画文	灰黃褐色 10V3E/4?	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
120	133-01	深鉢	C-G-22	S H84	富士山形・波状口縁部 沈継文	12.5E・黄褐色 10V3E/4	4新～5新 島崎田～山ノ神Ⅱ	
121	115-03	深鉢	C-G-22・23	S H84 哮	穂位沈継文	12.5E・黄褐色 10V3E/4	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
122	119-06	深鉢	C-G-22	S H84 柱穴 A 2	穂や小さな波状口縁部 斜行沈継・路滑による区画文・キザミ	褐 7.5TR4/3	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
123	104-06	深鉢	C-G・H-22	S H84上 No. 46	斜行するキザミ・新突文	褐 7.5TR7/6	4新～5新 島崎田～山ノ神Ⅱ	
124	115-04	深鉢	C-G-22・23	S H84左	柄によるU痕 新突文	にぶい黄褐色 10V3E/3	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
125	116-01	深鉢	C-H22	S H84	富士山形大波状口縁部 斜行するキザミ・新突文	褐 10V3E	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
126	105-01	深鉢	C-G・H-22	S H84上 No. 92	横位路滑・突唇文	褐 7.5TR7/6	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	

第9表 繩文土器観察表（3）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他
127	114-02	深鉢	C-G22・23	S H84 咎	沈縫による区画文	にぶい黄褐色 10YR4/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
128	104-09	深鉢	C-G・H22	S H84上 No. 90	縄・区画文	灰黄褐色 10YR5/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
129	108-07	深鉢	C-G22	S H84上	ユビオサエ後ナデ 縄模様沈縫文	暗褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
130	123-06	深鉢	C-H22	S H84	沈縫	灰褐色 7.5YR4/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
131	111-06	深鉢	C-G22	S H84下	突唇？・沈縫による区画文	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
132	116-04	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	竹管文	にぶい黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
133	107-03	深鉢	C-G22	S H84下 No. 46	横模様沈縫・縄文	黒褐色 10YR7/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
134	107-07	深鉢	C-G22	S H84下 No. 56	横模様沈縫	12.5Y-黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
135	107-04	深鉢	C-G22	S H84下 No. 52	横模様沈縫	12.5Y-黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
136	125-02	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	沈縫・左上がり斜綱判	12.5Y-黄褐色 10YR7/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
137	111-07	深鉢	C-G22	S H84上	無文	黒褐色 7.5YR5/6	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
138	125-03	深鉢	C-G・H22	S H84 南東	沈縫・縫杉文	にぶい黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
139	120-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84中	矢羽根・横模様沈縫文	にぶい黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
140	122-06	深鉢	C-G22	S H84	縫杉文	にぶい黄褐色 10YR7/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
141	129-04	深鉢	C-G22	S H84	縫帶・横模様沈縫文	明赤褐色 5YR5/6	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
142	128-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北東部	刺突文	灰黄褐色 10YR7/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
143	116-09	深鉢	C-G22	S H84	突唇・縫帶による区画文	にぶい黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
144	105-03	深鉢	C-G・H22	S H84上 No. 96	突唇・刺突・沈縫・縫杉文	黒 7.5Y2/1	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
145	112-06	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	平縫 無文	灰黄褐色 10YR4/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
146	121-04	深鉢	C-G・H 21・22・23	S H84 咎	陰滑・斜状文 矢羽根状沈縫	黒褐色 2.5Y3/1	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
147	112-04	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	直土沈縫・縫杉文	12.5Y-碧 7.5YR6/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
148	125-04	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	垂下沈縫・縫杉文	12.5Y-黄褐色 10YR7/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
149	129-05	深鉢	C-G・H22	S H84下 北西部	矢羽根・垂下沈縫・縫杉文	黒 5YR6/6	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
150	129-06	深鉢	C-H22	S H84 南東部	矢羽根・沈縫・縫杉文	にぶい碧 7.5YR6/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
151	122-05	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	懸垂・蛇行沈縫・縫杉文	にぶい黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
152	123-09	深鉢	C-G・H22	S H84下 南東部	垂下沈縫・縫杉文	にぶい黄褐色 10YR7/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
153	119-08	深鉢	C-G・H 21・22	S H84中	垂下斜挫・刺突・矢羽根・縫杉文	にぶい碧 7.5YR6/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
154	120-03	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下	矢羽根・縫杉文	にぶい黄褐色 10YR7/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
155	105-06	深鉢	C-G・H22	S H84上 No. 5	明赤褐色 7.5YR6/6	4新～5古 島崎III・山ノ神I		
156	127-06	深鉢	C-H22	S H84下	貼付陰滑・刺突・沈縫文・押注	にぶい碧 7.5YR6/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
157	129-02	深鉢	C-G22	S H84下	矢羽根・縫杉文	淡黃褐色 10YR5/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
158	105-08	深鉢	C-G・H22	S H84上 No. 15	聚脂底	にぶい黄褐色 10YR5/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
159	128-03	深鉢	C-G・H 21・22	S H84 咎	陰滑・沈縫・縫文	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
160	133-07	深鉢	C-H22	S H84下 南東部	沈縫・矢羽根？・多重連弧文	にぶい碧 7.5YR6/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
161	123-04	深鉢	C-G22・23	S H84 咎	沈縫	灰黃褐色 10YR4/2	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
162	106-01	深鉢	C-G・H22	S H84上 No. 02	未満量	12.5Y-黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
163	106-02	深鉢	C-G・H22	S H84上 No. 76	未満量	明黃褐色 10YR7/6	4新～5古 島崎III・山ノ神I	
164	130-01	深鉢	C-G22	S H84下 No. 16・18・50・60	調懸不規則・無文	明赤褐色 2.5Y5/8	3～ 神明～	
165	129-06	深鉢	C-G22	S H84下	陰滑文	碧 5YR6/8	3～ 神明～	
166	129-07	深鉢	C-G22	S H84	陰滑文	碧 7.5YR6/6	3～ 神明～	
167	128-06	深鉢	C-G21・22	S H84 主柱穴	未満量	碧 7.5YR7/6	3～ 神明～	
168	129-05	深鉢	C-H22	S H84	陰滑文	にぶい碧 5YR6/4	3～ 神明～	

第10表 繩文土器観察表（4）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋年・從来年	その他
169	128-08	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北東部	裏面痕あり	にぶい褐色 7.5YR6/3	3~ 神明~	
170	128-07	深鉢	C-G・22	S H84 仰頭邊		褐色 7.5YR6/6	3~ 神明~	
171	108-05	深鉢	C-G・22	S H84下 No.59		淡黃褐色 10YR5/3	3~ 神明~	
172	128-08	深鉢	C-H22	S H84	沈縫文	明赤褐色 2.5YR5/6	3~ 神明~	
173	115-07	深鉢	C-G・22	S H84	模様沈縫文	にぶい黄褐色 7.5YR5/4	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
174	104-01	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.57	無文	にぶい黄褐色 10YR5/5	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
175	116-02	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	無文	灰褐色 7.5YR5/2	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
176	113-08	深鉢	C-G・22	S H84	無文	褐色 7.5YR6/9	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
177	113-06	深鉢	C-G・22	S H84	無文	褐色 7.5YR4/3	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
178	104-02	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.22	刺突文・陰唇による区画・羽根状沈縫文	褐色 7.5YR6/6	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
179	107-05	深鉢	C-G・H22	S H84 南東部	L.R.縫文	灰褐色 10YR5/2	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
180	107-06	深鉢	C-G・22	S H84下 No.56	L.R.縫文	灰褐色 2.5YR7/2	4~5 取組~山ノ神Ⅱ	
181	103-03	深鉢	C-G・H22	S H84下 No.30	横円区画(斜行沈縫)・漁舟文?	にぶい黄褐色 10YR7/3	5古 山ノ神Ⅰ	
182	103-04	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.38	横円区画(斜行沈縫)・漁舟文?	灰褐色 10YR7/1	5古 山ノ神Ⅰ	
183	117-02	深鉢	C-G・22	S H84上	垂直・横円区画(斜行沈縫)・漁舟文	灰褐色 10YR5/1	5古 山ノ神Ⅰ	
184	110-04	深鉢	C-G・H22	S H84 南東部	刻み・刺突文	にぶい黄褐色 10YR5/3	5古 山ノ神Ⅰ	
185	110-03	深鉢	C-G・21	S H84上	刺突文	にぶい黄褐色 10YR5/4	5古 山ノ神Ⅰ	
186	105-06	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.10・12		明褐色 7.5YR6/6	5古 山ノ神Ⅰ	
187	107-01	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.84	ヘラ引き沈縫・垂下沈縫・絵衫文	にぶい黄褐色 0YR7/3	5古 山ノ神Ⅰ	
188	102-03	深鉢	C-G・22	S H84中	大波状口縫部 滑溜(頸に刺突)・縫文?・斜行沈縫文	にぶい黄褐色 10YR7/3	5古 山ノ神Ⅰ	
189	102-02	深鉢	C-G・22	S H84上	大波状口縫部 滑溜(頸に刺突)・縫文?・斜行沈縫文	にぶい黄褐色 10YR7/4	5古 山ノ神Ⅰ	
190	102-04	深鉢	C-G・22	S H84	大波状口縫部 滑溜(頸に刺突)・縫文?	明褐色 7.5YR3/1	5古 山ノ神Ⅰ	
191	102-05	深鉢	C-G・22	S H84	大波状口縫部 L.R.縫文	灰褐色 2.5YR7/2	5古 山ノ神Ⅰ	
192	107-09	深鉢	C-G・22	S H84下 No.65	大波状口縫部	12.5YR7/3 7.5YR6/4	5古 山ノ神Ⅰ	ヌス付着
193	114-04	深鉢	C-G22・23	S H84 垂	波状口縫部	にぶい黄褐色 10YR2/4	5古 山ノ神Ⅰ	
194	114-03	深鉢	C-G22・23	S H84 垂	波状口縫部 模様沈縫文	灰褐色 10YR4/2	5古 山ノ神Ⅰ	
195	115-06	深鉢	C-G・22	S H84下 No.50	波状口縫部 縫文	褐色 7.5YR4/6	5古 山ノ神Ⅰ	
196	112-02	深鉢	C-G・H22	S H84下 北東部	波状口縫部 模様沈縫文	灰褐色 10YR5/6	5古 山ノ神Ⅰ	
197	114-06	深鉢	C-G22・23	S H84 垂	波状口縫部 縫文	褐色 7.5YR4/3	5古 山ノ神Ⅰ	
198	104-08	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.82	平縫	灰褐色 10YR4/2	5古 山ノ神Ⅰ	
199	125-06	深鉢	C-G・21	S H84上	沈縫・L.R.縫文	にぶい黄褐色 10YR5/3	5古 山ノ神Ⅰ	
200	121-01	深鉢	C-G22・23	S H84 垂	沈縫(絵衫文)・無縫 r 縫文	暗褐色 7.5YR3/3	5古 山ノ神Ⅰ	
201	117-07	深鉢	C-G22・23	S H84 垂	模様沈縫・斜行沈縫文	灰褐色 10YR5/2	5古 山ノ神Ⅰ	
202	117-06	深鉢	C-G・22	S H84	模様沈縫・斜行沈縫文	にぶい黄褐色 10YR7/5	5古 山ノ神Ⅰ	
203	110-09	深鉢	C-G・22	S H84下 No.56	平縫 模様沈縫	灰褐色 10YR4/2	5古 山ノ神Ⅰ	
204	104-03	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.34	波状口縫部 模様沈縫	褐色 2.5YR7/2	5古 山ノ神 I ~ II	
205	102-07	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.39	波状口縫部 模様沈縫・区画文(斜行沈縫)	12.5YR7/3 10YR7/2	5古 山ノ神 I ~ II	
206	112-06	深鉢	C-G・22	S H84下	刺突文・模様沈縫	明褐色 10YR7/4	5古 山ノ神 I ~ II	
207	104-07	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.57	大波状口縫部 沈縫・L.R.縫文	明褐色 2.5YR7/1	5古 山ノ神 I ~ II	
208	110-01	深鉢	C-G・22	S H84上	波状口縫部 模様沈縫・区画文	にぶい黄褐色 10YR5/4	5古 山ノ神 I ~ II	
209	102-06	深鉢	C-G・H22	S H84上 No.73	ワラビ手状沈縫文・羽状斜行沈縫	褐色 7.5YR4/3	5古 山ノ神 I ~ II	
210	128-04	深鉢	C-G・21	S H84下	波状口縫部 穿孔・捺突・区画・沈縫文	にぶい黄褐色 10YR5/3	5古 山ノ神 I ~ II	
211	110-08	深鉢	C-G・21	S H84上	刺突文	暗褐色 7.5YR3/3	5古 山ノ神 I ~ II	

第11表 繩文土器観察表（5）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他
211	124-01	深鉢	C-G・H 21・22	S H84下 北東部	条縞文	にぶい鶴 7.5W6/4	5 山ノ神 I ~ II	
212	161-08	深鉢	D-F 17	S H93 伊	L.R.縞文	鶴 10W8/4	3~ 神明式~	
213	191-02	深鉢	E-U・V 11	S H106 No.23・24・25	波状沈縞・無文帶	にぶい黄褐色 10W8/3	2古 波状貝殻 I群A類系	
214	187-02	深鉢	E-U 11	S H106	平底竹管状具での横位沈縞・撫糸地文	鶴 5W6/6	2古 黒木II	
215	188-11	深鉢	E-U 11	S H106	撫糸地文	明赤褐 6W6/6	2古 黒木II	
216	187-03	深鉢	E-U 11	S H106 地北	撫糸地文	鶴 7.5W7/6	2古 黒木II	
217	187-04	深鉢	E-U 11	S H106 上部集中(西)	纏文無題? 撫糸地文	灰黄褐色 10W8/2	2古 黒木II	
218	188-09	深鉢	E-V 11	S H106 伊	撫糸地文	にぶい黄褐色 10W8/4	2 黒木II	
219	185-01	深鉢	E-U・V 11	S H106 No.10・ 13・15	穂状把手・ 竹管状具による斜突・點垂。 縞文衫・方筋(折衷)具面・矢羽根状沈縞	鶴 5W6/6	3 神明	
220	185-02	深鉢	E-V 11	S H106 No. 2	竹管・方筋(折衷)具面・ 斜帶による区画文・渦巻き文	青黄 2.5W7/4	3 神明	
221	186-04	深鉢	E-U 11	S H106(切株両辺)	波状口縁部 縞帶による区画文(区画内纏文か?)	にぶい黄褐色 10W8/3	3 神明	
222	189-08	深鉢	E-U 11	S H106	縞帶・斜行沈縞文	鶴 2.5W7/1	3~4古 神明・波組	
223	189-09	深鉢	E-U 11	S H106	縞帶・斜行沈縞文	にぶい黄褐色 10W8/3	3~4古 神明・波組	
224	186-03	深鉢	E-U 11	S H106	弧状の船形捺掛	淡黄褐色 10W8/4	3~5古 神明・山ノ神 I	
225	190-01	深鉢	E-V 11	S H106 柱穴 B	中宋の把手 沈縞文	にぶい黄褐色 10W8/3	4新~5古 島崎III・山ノ神 I	
226	189-08	深鉢	E-U・V 11	S H106	縞帶・斜行沈縞文	にぶい黄褐色 10W8/4	4新~5古 島崎III・山ノ神 I	
227	188-07	深鉢	E-U・V 11	S H106 No. 17	波状口縁部 穂状沈縞	にぶい黄褐色 10W8/4	4新~5古 島崎III・山ノ神 I	
228	188-01	深鉢	E-U 11	S H106 柱穴 B 1	縞帶・弧状の沈縞・区画文	灰白 10W8/2	4新~5古 島崎III・山ノ神 I	
229	187-01	深鉢	E-U 11	S H106(上部集中2)	平縞 沈縞文	にぶい鶴 7.5W7/4	4新~5古 島崎III・山ノ神 I	
230	188-03	深鉢	E-U 11	S H106 柱穴 B 1	波状口縁部 無文	にぶい黄褐色 10W8/3	4新~5古 島崎III・山ノ神 I	
231	188-04	深鉢	E-V 11	S H106 柱穴 A 1	斜突・捺掛・竹管文	にぶい黄褐色 10W8/3	4新~5古 島崎III・山ノ神 I	
232	189-04	深鉢	E-U・V 11	S H106 No. 22	波状沈縞文	にぶい黄褐色 10W8/3	5新 山ノ神 II	
233	186-01	深鉢	E-V 11	S H106	ヘラ描き沈縞文・無基 r 織文	にぶい黄褐色 10W8/4	5 山ノ神 I ~ II	
234	186-02	深鉢	E-U・V 11	S H106 No. 16	R.L.縞文	にぶい黄褐色 2.5W6/4	中期末葉	
235	188-10	深鉢	E-V 11	S H106 柱穴 A 1	R.L.縞文	にぶい黄褐色 10W8/4	中期末葉	
236	191-01	深鉢	E-V 11	S H106 No. 4	塵底により不明瞭	淡黄褐色 10W8/4	中期末葉	
237	191-01	深鉢	E-U・V 11	S H106 No. 17		淡黄褐色 10W8/4	中期末葉	
238	186-06	深鉢	E-V 11	S H106 No. 9	無文	淡黄褐色 10W8/4	中期末葉	
239	197-03	深鉢	E-W 10	S H107 柱穴 A 1	沈縞・R.L.縞文	にぶい鶴 7.5W6/4	中期前半(船元系)	
240	194-01	深鉢	E-W 10	S H107	穂位の押引文・穂位のS字状文	にぶい黄褐色 10W8/4	2群 波状貝殻 I群A類系	
241	196-01	深鉢	E-W 10	S H107	穂位沈縞・R.L.縞文	にぶい鶴 7.5W6/4	2群 波状貝殻 I群A類系	
242	192-04	深鉢	E-W 9	S H107 伊周辺	キャリバーパー口縁部	にぶい黄褐色 10W8/4	2群 中富III~波状貝殻 I群A類系	
243	192-07	深鉢	E-W 10	S H107	穂位沈縞	にぶい黄褐色 10W8/4	2~3 中富III~神明	
244	193-03	深鉢	E-W 10	S H107 伊周辺	貼付け隆起・押引き・R.L.縞文	鶴 7.5W6/4	2~3 中富III~神明	
245	195-01	深鉢	E-W 10	S H107 柱穴 A 2	無文	にぶい黄褐色 10W8/3	2~3 中富III~神明	
246	192-05	深鉢	E-W 10	S H107	穂位沈縞・沈縞文	淡黄褐色 10W8/1	2~3 波状貝殻 I群A類系~神明	
247	194-03	深鉢	E-W 10	S H107 柱穴 B 2	キャリバーパー口縁部 沈縞・斜突・無文	灰黄褐色 10W8/2	3 波状貝殻 I群A類系	
248	196-03	深鉢	E-W 10	S H107	穂位・弧状斜帶文	にぶい鶴 7.5W6/4	3 神明	
249	194-04	深鉢	E-W 9 + 10	S H107	穂位沈縞文	灰黄褐色 10W8/2	3 神明	
250	194-07	深鉢	E-W 10	S H107	沈縞文	にぶい黄褐色 10W8/4	3 神明	
251	194-06	深鉢	E-W 10	S H107 No. 5	穎位沈縞・渦・R.L.縞文	にぶい黄褐色 10W8/3	3 神明	

第12表 繩文土器観察表 (6)

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他の
252	194-06	深鉢	E-W10	S H107 No. 10	圓文	黒赤褐 5YR5/6	3 神明	
253	194-02	深鉢	E-W10	S H107 伊	波状口縁部 沈ね文	にぶい黄褐色 10YR4/3	3 神明	
254	193-06	鉢	E-W10	S H107 伊	波状口縁部 模位沈繩・陰窓・R.L.圓文	灰黄褐色 10YR4/2	3~4古 神明~段組	
255	193-07	鉢	E-W10	S H107 伊周辺	波状口縁部 模位沈繩・陰窓・R.L.圓文	灰黄褐色 10YR4/2	3~4古 神明~段組	
256	193-08	鉢	E-W10	S H107	波状口縁部 模位沈繩・陰窓・R.L.圓文	灰黄褐色 10YR4/2	3~4古 神明~段組	
257	193-02	深鉢	E-W9	S H107 伊周辺	条痕	褐色 10YR4/4	3~4古 神明~段組	
258	196-08	深鉢	E-W9+10	S H107	工具痕あり 洗繩・側旁文	西青褐色 7.5YR6/4	4新~5古 島崎田一山ノ神	
259	196-04	深鉢	E-W10	S H107	羽状文・鶴桙文	12.5YR 7.5YR6/4	4新~5古 島崎田一山ノ神	
260	192-02	深鉢	E-W10	S H107 柱穴A2	沈繩・刺突文・刻み	12.5YR 10YR5/3	4新~5古 島崎田一山ノ神	
261	196-02	深鉢	E-W9	S H107	条痕・陰窓・沈繩・刺突文	12.5YR 10YR5/3	4新~5古 島崎田一山ノ神	
262	195-06	深鉢	E-W9+10	S H107	模位沈繩・刺突文	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新~5古 島崎田一山ノ神	
263	196-05	深鉢	E-W10	S H107	条痕・沈繩・刺突・R.L.圓文	褐色 7.5YR6/6	4新~5古 島崎田一山ノ神	
264	192-03	深鉢	E-W10	S H107	模位・垂下沈繩文	にぶい黄褐色 10YR5/3	5新 山ノ神	
265	187-06	深鉢	E-W10	S H107 No. 6	刻みあったか?・無文	淡黃褐色 7.5YR6/6	中期後葉	
266	196-07	深鉢	E-W9+10	S H107	模位沈繩文	黒褐色 10YR5/1	中期後葉	
267	198-03	深鉢	E-X11	S H108 石畠炉	キャリバー形口縁部 錐状工具・荒形文	褐色 5YR6/6	中期南北(高)元年	
268	199-05	深鉢	E-X11	S H108 柱穴B2	キャリバー形口縁部 錐状工具・荒形文	褐色 7.5YR7/6	2古 木ノ木	
269	198-06	深鉢	E-W11	S H108 柱穴A2	錐状工具瓶 模位沈繩・無文	にぶい黃褐色 10YR6/3	2古 木ノ木	
270	198-01	深鉢	E-X11	S H108 柱穴B1	キャリバー形口縁部 洗繩・無文	黒赤褐色 10YR3/4	2 中宮器~後傾貝塚I群A類似	
271	198-05	深鉢	E-X11	S H108 柱穴A2	キャリバー形口縁部 洗繩・無文	黒赤褐色 10YR3/4	2 中宮器~後傾貝塚I群A類似	
272	198-07	深鉢	E-X10+11	S H108 西東部	踏帶・無文	灰褐色 10YR4/2	2 中宮器~後傾貝塚I群A類似	
273	198-08	深鉢	E-X11	S H108 西北部	無文	灰褐色 10YR4/2	2 黒木ノ	
274	198-02	深鉢	E-X11	S H108 柱穴A1	沈繩・無文	褐色 10YR3/2	2 黒木ノ	
275	198-09	深鉢	E-X11	S H108 西北部	錐	2 7.5YR6/6	中宮器~後傾貝塚I群A類似	
276	198-11	深鉢	E-X11	S H108 西東部	R.L.圓文	灰褐色 10YR4/2	中期後葉	
277	199-07	深鉢	E-W12	S H109 同講	沈繩文	にぶい黃褐色 10YR4/3	中期後葉	
278	199-06	深鉢	E-W12	S H109	沈繩・無文	灰褐色 10YR4/2	中期後葉	
279	154-01	深鉢	A-U24	S K20	軸上縫・貼付把手	にぶい褐色 7.5YR6/3	3~神明式~ 神明式~	S B85
280	153-01	深鉢	A-T25	S K5	波状口縁部 踏帶・無文Lの縁文	灰褐色 2.5YR4/1	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B85
281	153-08	深鉢	B-U1	S K18	踏帶・矢切状の模位沈繩文	灰褐色 7.5YR4/2	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B85
282	154-04	深鉢	A-U24	S K20	垂下沈繩・鶴桙文	黒褐色 7.5YR6/6	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B85
283	153-09	深鉢	A-U24	S K20	垂下沈繩・鶴桙文	にぶい黃褐色 10YR5/4	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B85
284	154-02	深鉢	A-U24	S K20	踏帶・刺突・模位沈繩文	灰褐色 10YR6/1	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B85
285	154-03	深鉢	A-U24	S K20	踏帶	にぶい黃褐色 10YR6/1	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B85
286	154-05	深鉢	A-U24	S K20	刺突文・沈繩	にぶい・黄褐色 10YR6/1	5新 山ノ神	S B85
287	153-04	深鉢	B-T1	S K8 北	踏帶・模位沈繩	12.5YR 10YR7/3	5 山ノ神+II	S B85
288	153-02	深鉢	A-T25	S K5	模位沈繩	灰褐色 10YR6/1	5 山ノ神+II	S B85
289	153-05	深鉢	B-T1	S K8	錐状把手	にぶい黄褐色 10YR7/3	中期後葉	S B85
290	154-07	深鉢	B-V2	S K23	溝・達縫・模位沈繩文	黒 10YR4/1	5新 山ノ神	S B86
291	155-02	深鉢	B-V2	S K23	錐状把手	褐色 10YR4/4	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B86
292	155-01	深鉢	B-V2	S K23	沈繩・鶴桙文	暗褐色 10YR5/3	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B86
293	154-08	深鉢	B-V2	S K23	沈繩・鶴桙文	褐色 7.5YR6/6	4新~5古 島崎田一山ノ神	S B86

第13表 織文土器観察表（7）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他
294	154-06	深鉢	B-V 2	S K23	無文	黒褐 7.5YR5/6	中期後葉	S B86
295	156-02	深鉢	A-T 24	S K11	波状口縁部 陰滑文	淡黄褐 10YR3/3	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B87
296	156-03	深鉢	A-T 24	S K11	陰滑による区画・矢羽根状沈線文	にぶい黃褐色 10YR7/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B87
297	156-01	台付深鉢	A-S 25	S K 3	楕円形の透孔(三方)・縦い陰滑(二条曳) 縦位の陰滑文	明赤褐 5YR5/6	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B87
298	156-04	深鉢	C-D 25	S K45	無文	淡黄 2.5YI7/3	中期後葉	S B88
299	156-05	深鉢	C-D 24	S K48	沈線・無文	にぶい橙 2.5YR7/4	中期後葉	S B88
300	157-01	深鉢	C-E 24	S K56 No. 3	縦位陰滑文	淡黄褐 10YR3/4	3～ 神明式～	S B89
301	156-09	深鉢	C-E 24	S K56	圓文？・無文	淡黄 2.5YR3/3	神明式～	S B89
302	158-01	深鉢	C-E 24	S K57 No. 1・No. 2・No. 3	沈線・懸垂・圓文	12.5-・黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
303	158-02	深鉢	C-E 24	S K56	平縁	10YR3/1	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
304	158-04	深鉢	C-E 24	S K57	沈線・陰滑・矢羽根状沈線・柄突文	灰黄褐 10YR4/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
305	156-07	深鉢	C-E 24	S K56	波状口縁部 陰滑文	にぶい黃褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
306	158-05	深鉢	C-F 24	S K64	平縁	10YR4/1	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
307	159-04	深鉢	C-F 25	S K73	陰滑・沈線・連弧文	にぶい黄 7.5YR5/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
308	159-02	深鉢	C-F 24	S K64	波状口縁 柄突文	暗灰黄 2.5YI7/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
309	159-03	深鉢	C-F 25	S K69	柄突文	にぶい褐 7.5YR5/3	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
310	159-01	深鉢	C-F 24	S K64	矢羽根・無文？・絞衫文	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
311	159-08	深鉢	C-F 25	S K73	縦位沈線・R.L.繩文	にぶい黄 7.5YR5/3	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
312	159-09	深鉢	C-F 25	S K73	陰滑・纏結・条底	にぶい黄褐色 10YR7/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
313	159-06	深鉢	C-F 25	S K73	纏状把手 ハリフタナギ	にぶい黄褐色 10YR7/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
314	159-05	深鉢	C-F 25	S K73	陰滑・柄突文	にぶい褐 7.5YR5/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
315	159-07	深鉢	C-F 25	S K73	纏封 重下沈線・絞衫文	12.5-・黄褐色 10YR7/2	5古 山ノ神I スス付着	S B89・ S B89
316	158-03	深鉢	C-F 24	S K64	重下沈線・絞衫文	12.5-・褐 7.5YR5/2	5山 山ノ神I・II	S B89・ S B89
317	157-03	深鉢	C-E 24	S K56 No. 2	別状沈線文 重下沈線・絞衫文	灰黄褐 10YR4/2	4新～5古 山ノ神I・II	S B89
318	156-06	深鉢	C-E 24	S K56	把手	明赤褐 10YR7/4	中期後葉	S B89
319	181-06	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 19	無文	にぶい黄褐色 10YR7/4	3～ 神明式～	S B89
320	179-01	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 23	纏位の捺摺・重下沈線・絞衫文	褐 5YR7/6	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
321	175-01	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 26	重下沈線・柄突文	にぶい黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
322	178-02	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 17	大波状口縁部 陰滑・沈線・柄突文	にぶい黄褐色 10YR7/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
323	176-02	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 27	柄突・沈線	にぶい黄褐色 10YR5/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
323	177-01	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 14	柄突・沈線	灰黄褐 10YR4/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
324	178-06	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 21	沈線	淡黄褐 10YR7/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
325	177-03	深鉢	C-F・G 25	S K69	柄突・沈線	灰黄褐 10YR4/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
326	180-02	深鉢	C-F 25	S K69	纏状把手 陰滑区画文？(区画内は斜行沈線)	灰黄褐 10YR7/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
327	181-04	深鉢	C-F 25	S K69	纏位陰滑・無文・陰滑部分	にぶい黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
328	178-01	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 1	無文	12.5-・褐 7.5YR7/4	3～ 神明式～	S B89
329	179-02	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 18	纏状把手 柄突	12.5-・黄褐色 10YR5/3	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
330	181-02	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 21	纏位沈線・無文・陰滑部分	明赤褐 5YR5/6	5古 山ノ神II	S B89
331	181-01	深鉢	C-F・G 25	S K69 No. 21	纏位沈線・区画・L.R.繩文	にぶい褐 7.5YR5/4	5古 山ノ神II	S B89
332	181-06	深鉢	C-F 25	S K69	斜行条綱・陰滑・模様沈線文	にぶい黄褐色 7.5YR5/3	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B89
333	169-06	深鉢	D-F 1	S K75	波状口縁部 陰滑・竹管文	黑褐 10YR5/2	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B105
334	169-05	深鉢	D-F 1	S K75	波状口縁部 柄突・陰滑・竹管文	にぶい黄褐色 10YR5/4	4新～5古 島崎III-山ノ神I	S B105

第14表 織文土器観察表（8）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他の
335	160-01	深鉢	D-F 1	S K66	縦位沈織文	灰黄褐色 10VR4/2	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	S B106
336	160-02	深鉢	D-F 1	S K75	縦位陰唐・沈織による区画・刺突文	明朱褐色 10VS5/8	5 山ノ神 I～II	S B106
337	160-03	深鉢	D-F 1	S K75	模倣沈織・漢文	明黄褐色 10VS6/6	5 山ノ神 I～II	S B106
338	160-04	深鉢	D-F 1	S K75	縦位陰唐文	淡黄 2,5VS7/4	3～ 神明式	S B106
339	162-05	深鉢	A-X24	S K31	鰐魚文	墨 7,5VR7/6	2 中宮面～映頬貝冠 I群 A類系	
340	162-06	深鉢	A-X24	S K31	条痕	黄褐色 10VS6/6	3～ 神明式	
341	162-04	深鉢	A-X24	S K31	波次口縁部 沈織・刺突文	墨褐色 10VS7/2	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
342	162-03	深鉢	A-X24	S K31	陰唐文?	12.5～黄褐色 10VS7/3	5 山ノ神 II	
343	162-07	深鉢	C-D22	S K49	沈織文	12.5～ 10VS7/4	5 山ノ神 I～II	
344	163-04	深鉢	C-E 1・2	S K59	波状口縁部 陰唐・矢羽根状旋紋	12.5～ 10VS6/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
345	163-02	深鉢	C-E 1・2	S K59	陰唐・刺突文	12.5～ 10VS6/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
346	163-03	深鉢	C-E 1・2	S K59	陰唐・刺突文・沈織	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
347	163-05	深鉢	C-E 1・2	S K59	沈織・条痕	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
348	164-05	深鉢	C-E19・20	S K61	平縫 刺突・竹管文	12.5～ 10VS7/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
349	164-02	深鉢	C-E19・20	S K61	沈織・区画文	黄褐色 2,5VS7/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
350	163-06	深鉢	C-E19・20	S K61	陰唐・刺突文	淡黄褐色 10VS7/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
351	163-07	深鉢	C-E19・20	S K61	多重沈織文・条痕	12.5～ 10VS7/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
352	164-06	深鉢	C-E20	S K61	陰唐・区画・矢羽根状沈織文	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
353	164-04	深鉢	C-E19・20	S K61	矢羽根状沈織文	墨 10VS2/1	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
354	163-08	深鉢	C-E19・20	S K61	穂状把手	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
355	164-07	深鉢	C-E20	S K61	横位沈織・陰唐・区画文	12.5～ 10VS7/4	後期初頭	
356	167-05	深鉢	C-F・G25	S K68 北	平縫 陰唐・刺突文	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
357	166-01	深鉢	C-G25	S K68	陰唐・刺突文	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
358	165-05	深鉢	C-G25	S K68	垂下沈織・縫合文	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
359	166-02	深鉢	C-G25	S K68	垂下沈織・縫合文	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
360	166-07	深鉢	C-G25	S K68	陰唐・区画・刺突文	12.5～ 10VS6/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
361	165-03	深鉢	C-G25	S K68	墨	2 7,5VR7/6	3～ 神明式～	
362	167-06	深鉢	C-F 18	S K83	大波状口縁部 横位・斜行沈織文	12.5～ 7,5VS6/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
363	168-02	深鉢	C-F 18	S K83	条痕	12.5～ 10VS6/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
364	168-03	深鉢	C-F 18	S K83	沈織・L.R織文	12.5～ 10VS6/3	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
365	167-10	深鉢	C-F 18	S K83	沈織・陰唐・刺突文	12.5～ 7,5VS5/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
366	201-01	深鉢	E-X 12	S K113	陰唐・沈織・神伏具で押引き	墨褐色 10VS3/2	2 中宮面～映頬貝冠 I群 A類系	
367	201-03	深鉢	E-X 12	S K113	キャリバー形口縁部 沈織文	床黄褐色 10VS4/2	2 中宮面～映頬貝冠 I群 A類系	
368	200-04	深鉢	E-X 12	S K113	大波状口縁部 横位沈織・把手?	12.5～ 10VS7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神 I	
369	201-02	深鉢	E-X 12	S K113	刻み・横位沈織・刺突文	墨褐色 7,5VS4/2	3～ 島崎田～山ノ神 I	
370	200-05	深鉢	E-X 12	S K113	沈織・L.R織文	2 中宮面 7,5VS5/6	5新～後期初頭 山ノ神 II～後期初頭	
371	200-02	深鉢	E-X 12	S K113	沈織・L.R織文	12.5～ 10VS5/4	5新～後期初頭 山ノ神 II～後期初頭	
372	161-02	深鉢	A-S・T25	S K 1	沈織・ハケ・条痕	床黄褐色 10VS5/2	5 山ノ神 I～II	
373	161-03	深鉢	A-T 25	S K 1	沈織文	12.5～ 10VS7/3	中期後葉	
374	161-04	深鉢	B-S 1	S K 2	無文	12.5～ 10VS6/4	中期後葉	
375	161-06	深鉢	A-T 24	S K13	沈織・ハケ・縦位条痕	墨灰 10VS4/1	3～ 神明式～	
376	161-05	深鉢	A-T 24	S K13	沈織・横位条痕	墨褐色 7,5VR5/6	4～5 取組～山ノ神 II	

第15表 織文土器観察表（9）

報告番号	修理番号	器種	地区名	出土遺構	器形・技法・文様の特徴	色調	高橋編年・從来編年	その他
377	161-07	深鉢	A-T24	S K13	波状口縁部 横位沈繩・油・区画文	黒灰 10VR4/1	5新 山ノ神Ⅱ	
378	183-01	深鉢	D-C 4	S Z 92 No. 20	階帶・突き縮文・懸垂文	黒 7.5TR7/6	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
379	183-01	深鉢	D-C 4	S Z 92 No. 20	階帶・突き縮文・懸垂文	黒 7.5TR7/6	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
380	184-01	深鉢	D-C 4	S Z 92 No. 1～18	把手状の突出 橋円内溝・重下・斜行・矢羽根状沈繩文 階帶文に刺突・耀線のハケ後沈繩	黒白 2.5VS2/2 2.5VS2/2	5古 山ノ神Ⅰ	
381	182-04	深鉢	D-C 4	S Z 92 No. 9～12 の下	刺突・階帶文・朱赤	黒黄褐 10VS3/2	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
382	182-01	深鉢	D-C 4	S Z 92 No. 21	無文	黒 7.5TR6/6	中期後葉	
383	200-03	深鉢	F-C 15	S K112	キャリバー形口縁部 沈繩文	にぶい黄褐 10VS3/3	2 中富翁～吸煙貝冠I群A類系	
384	200-01	深鉢	F-C 15	S K112	飾糸・纏呉繩文	黒黄褐 10VS4/2	2古 黒木Ⅱ	
385	168-06	深鉢	A-V23	Pit 4	波状口縁部 横位沈繩	にぶい黄褐 10VR7/3	5新 山ノ神Ⅱ	
386	171-06	土偶?	C-E 17	Pit 2	病突文・沈繩文	黒 7.5TR6/6	不明	
387	162-02	深鉢	A-V22	S K28 (復元)	刺突・横位沈繩・竹管文	黒褐 10VS3/1	5古 山ノ神Ⅰ	
388	169-03	瓶	B-Y5	風呂木瓶	楕状把手・ハリツケナデ	黒 7.5TR4/3	取組～島崎田	
389	169-02	瓶	B-Y5	風呂木瓶	楕状把手・ハリツケナデ	にぶい黄褐 10TR5/4	4～5 取組～山ノ神Ⅱ	
390	169-04	深鉢	B-Y5	風呂木瓶	沈繩文(ワラビ手状)	にぶい・褐 7.5TR5/4	4～5古 取組～山ノ神Ⅰ	
391	170-02	深鉢	B-Y5	風呂木瓶	重下・蛇行沈繩・L.R.闇文	12.5V・褐 7.5TR5/3	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
392	169-07	深鉢	B-Y5	風呂木瓶	階帶・刺突文・沈繩	黒 2.5VS2/1	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
393	171-04	深鉢	B-Y5	粗尻瓦瓶	穿孔(被修孔)・闇文・沈繩	青黄 2.5ST7/3	中期後葉	
394	172-02	深鉢	D-A・B 19	風呂木瓶	キャリバー形口縁部 沈繩・油文・道綫柄突文・陰唇文	黒 5TR6/6	2古 吸煙貝冠I群A類系	
395	170-01	深鉢	D-A～C18～20	風呂木瓶	把手 沈繩・斜行沈繩・刺突文	にぶい・黄褐 10VR7/4	3 神明式	
396	169-06	深鉢	D-A～C18～20	風呂木瓶	沈繩・朱瓶	にぶい・黄褐 10VS3/4	3～5古 神明～山ノ神Ⅰ式	
397	172-03	深鉢	D-A～C18～20	風呂木瓶	大波状口縁部 沈繩文・工具痕残	黒黄褐 10VS7/4	4 取組～島崎田	
398	172-06	深鉢	D-A・B	西園寺区 東端の谷	階帶による区画・斜行沈繩文	にぶい・黄褐 10VS3/3	4 取組～島崎田	
399	169-05	深鉢	D-D 7	風呂木瓶	波状口縁部 沈繩文	にぶい・褐 7.5VS6/4	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
400	171-06	深鉢	C-E 19	復元	波状口縁部 重下階帶・羽状比沈繩・棘形文	にぶい・黄褐 10VR7/4	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
401	171-05	深鉢	D-A 19	根振丸	無文	黒 7.5TR6/6	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
402	201-07	深鉢	B-Y 23	調査区 東壁面	無文	黒 7.5TR6/6	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
403	201-04	深鉢	E-X 12	復元	横位沈繩・刺突文	にぶい・黄褐 10TR5/4	5新 山ノ神Ⅱ	
404	201-06	深鉢	E-V 6	風呂木瓶底	沈繩	黒 10TR4/4	2 中富翁～吸煙貝冠I群A類系	
405	201-05	深鉢	E-X 9	復元	ハケ・刻み・条痕・刺突文	にぶい・褐 7.5TR6/4	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
406	173-01	深鉢	B-C 1	包含層(南北土層ライン)	沈繩・朱瓶	黒 10VR4/4	3～ 神明	
407	173-01	深鉢	B-C 1	包含層(南北土層ライン)	沈繩・朱瓶	黒 10VR4/4	3～ 神明	
408	171-02	深鉢	C-A 20	包含層	沈繩区画文・横位沈繩・刺突文	黒灰 10VR4/1	5新 山ノ神Ⅱ	
409	201-08	深鉢	F-C 13	包含層	無文	にぶい・黄褐 10VS3/4	3～ 神明	
410	174-02	深鉢	T 11	殘出中	楕状把手 ユビオサエ	にぶい・黄褐 10VS3/4	4新～5古 島崎田～山ノ神Ⅰ	
411	172-01	古式土器 小型丸底壺	D-A～C18～20	風呂木瓶	ハケ少し残る	黒 7.5TR7/6	古墳時代前期後半	
412	174-04	灰釉陶器 壺		表面採集	ロクロナダ・龍付ナダ	黒 NS/	10～11世紀	
413	301-01	鐵器 和鉈	B-T 4・5	復元	残存長11.9cm・厚さ0.6cm・重量17.64g			

第16表 繩文土器觀察表 (10)

2 石器

石器は遺構から出土したものが大半であり、石鏃や剥片等の小型石器の多くは遺構埋土の箇掛けにより検出した。出土総数は、169点である。その器種別内訳³⁾は、石鏃78点、石鏃未成品10点、石錐4点、削器1点、二次加工痕有剥片10点、使用痕有剥片2点、楔形石器7点、石核2点、大型剥片2点、打製石斧2点、磨製石斧3点、切目石錐18点、大型石皿兼台石8点、小型石皿8点、磨石7点、敲石4点、砾器3点である。このほかに、小型剥片や碎片も多數検出した。当遺跡の縄文時代では、早期と中期の上器や遺構が認められている。このため、個別の石器の所属期は厳密には特定できない。しかし、その多くは中期の所産であろう。

A 石鏃 (第48・49・50図414~484)

未成品も含めた88点を検出し、その内71点を図示した。以下の通りに分類する。凹基無茎式を1類として、主に側縁の形態に注目し a ~ i と細分した³⁾。平基無茎式を2類、3類を円基無茎式とした。

1 a 類 (414) 基部の抉りが全長の半分程で、側縁は全体的に外弯する。いわゆる「長脚鏃」である。1点のみを検出した。先端部は尖锐で、側縁は緩やかに膨らみ、脚の最下部は内にすぼまる形状を呈す。左右対称で薄く、精巧に作られ、その他の個体より

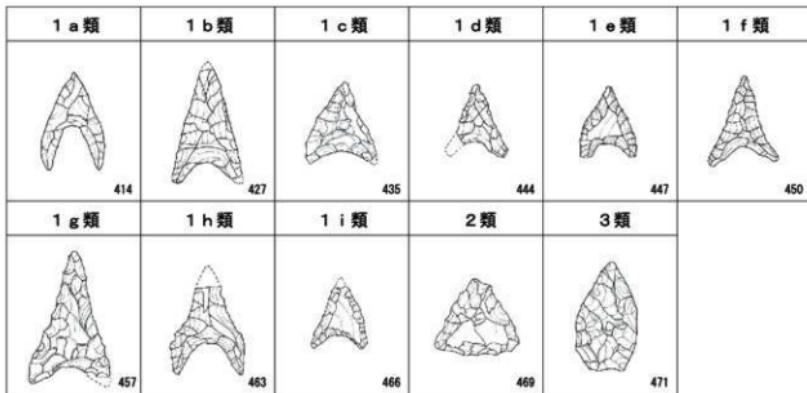
も古相を示す。サヌカイト製である。

1 b 類 (415~429) 側縁が直線的で、全体形は正三角形状か二等辺三角形状を呈する類である。

全体形が正三角形状のもの (416) は少なく、二等辺三角形状のもの (415・417~429) が多い。基部の抉りが山形で浅いもの (415・416・418・419) や、山形でやや深いもの (417・420~422・426~429) 、基部の中央のみが深く抉られ脚部が丸味をもつもの (423~425) がある。419は先端部が潰れ、425は片面に一次面を残す。426は中央のみ分厚い。石材は、サヌカイト製 (417・420~423・425・426・428) のほか、チャート製 (415・424・429)、下呂石製 (416・418・427)、黒曜石製 (419) である。

1 c 類 (430~443) 側縁が緩やかに外弯する類である。基部の抉りが浅いもの (430・431・434・443) や、やや深いもの (432・435~438・442)、基部の中央のみが深く抉られ脚部が丸みをもつもの (433・439・441) がある。440は製作途中なのか不明だが脚部が左右非対称である。431や435・437・443は片面に一次面を残し、439は片面の大半を剥離する。石材は、サヌカイト製 (430・432~435・437~441・443) のほか、チャート製 (442) や下呂石製 (431・436) である。

1 d 類 (444・445) 側縁が緩やかに内弯する類である。2点検出し、いずれも小型である。444は、



第47図 石鏃分類図

基部の抉りが中央のみ深く、脚部が丸みをもち、445は、基部の抉りが浅く弧状を呈す。444は下呂石製、445はサヌカイト製である。

1 e類 (446・447) 側縁上部が緩やかに内湾し、下部は外反する類である。2点検出し、いずれも小型である。446は脚部が左右非対称で、基部の抉りが浅く、447は基部の中央のみが深く抉られ、脚部が丸みをもち、両面に一次面を残す。446はサヌカイト製、447はチャート製である。

1 f類 (448～453) 側縁が上部で屈曲し、中部にかけて緩やかに内湾する類である。448や449は側縁の形状が左右非対称である。448は小型で、基部の大半を欠失し、抉りは浅い。449は片面に一次面を残す。450や451の基部の抉りはやや深く、山形より波状に近い形状を呈す。452や453は基部の抉りが浅く、452は先端部が尖鋭ではなく、453は脚部が太い。石材は、サヌカイト製(448・449・452・453)のほかに、チャート製(450・451)である。

1 g類 (454～459) 側縁が上部で屈曲し、中部にかけて緩やかに内湾し、下部は外反する類である。基部の抉りが山形のもの(454～458)や、基部の中央のみが深く抉られるもの(459)がある。石材は、サヌカイト製(454・455・457)と、チャート製(458)、下呂石製(456・459)である。

1 h類 (460～465) 1 g類の内、脚部の側縁が内に屈曲する類である。460は細身で、基部の抉りがやや浅い。基部の抉りが山形で深いもの(462～464)は、すべて脚部が尖鋭である。基部の中央のみが深く抉られるもの(461・465)は、脚部が太くなる。石材は、サヌカイト製(460・462～464)と、チャート製(461・465)である。

1 i類 (466) 側縁が左右非対称を呈する類である。側縁の一方は外反し、もう一方は内湾する。基部の抉りは山形でやや深く、左右対称である。両面に一次面を残して周縁のみを調整する。石材はチャート製である。

2類 (467～469) 平基無茎式である。側縁は直線的か、やや外反する形状である。467は先端部が三方とも丸く、468は未調整部が多い。469は三角鐵であり、両面に一次面を残す。石材は、3点ともサヌカイト製である。

3類 (470～474) 円基無茎式であり、側縁はすべて緩やかに外反する。最大幅が全長の中央あたりに位置するもの(471・472・474)と、下部に位置するもの(470・473)がある。石材は、サヌカイト製(470・472)とチャート製(471・473・474)である。

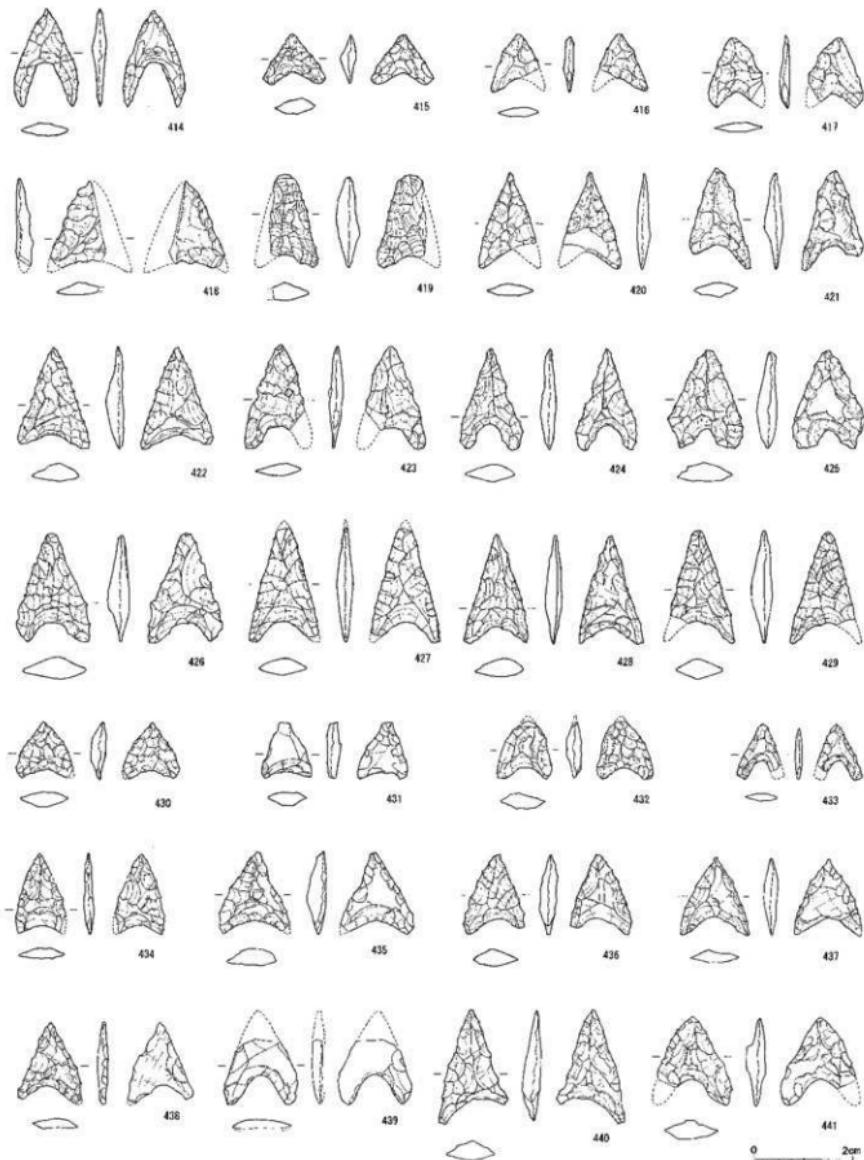
石鎚未成品 (475～484) 剥片に二次調整が施されたものの内、製品には至らないが、石鎚と推定できそうなものを未成品とした。475は細身で、先端部は尖るもの基部は認められず、片面はほぼ一次面のままである。476は分厚く片面は未調整部が多い。477や478、480の3点は基部の作出が認められ、凹基を呈す。477や478は両面に、480は片面に一次面を残し、全体形が不整形である。479は側縁が左右非対称で、基部が未調整と推定するが、逆位に見るとつまみ部を有する石鎚のようにも見える。481は縁に面をもち、調整途中とみられる。482や483は下部を大きく欠失し、最終形態が不明であることから未成品としている。484は、分厚く先端部や基部など全体的に調整が未完成の様相である。サヌカイト製(475・477・479・481)の他、チャート製(476・478・480・482～484)がある。

B 石鎚 (第50図485～487)

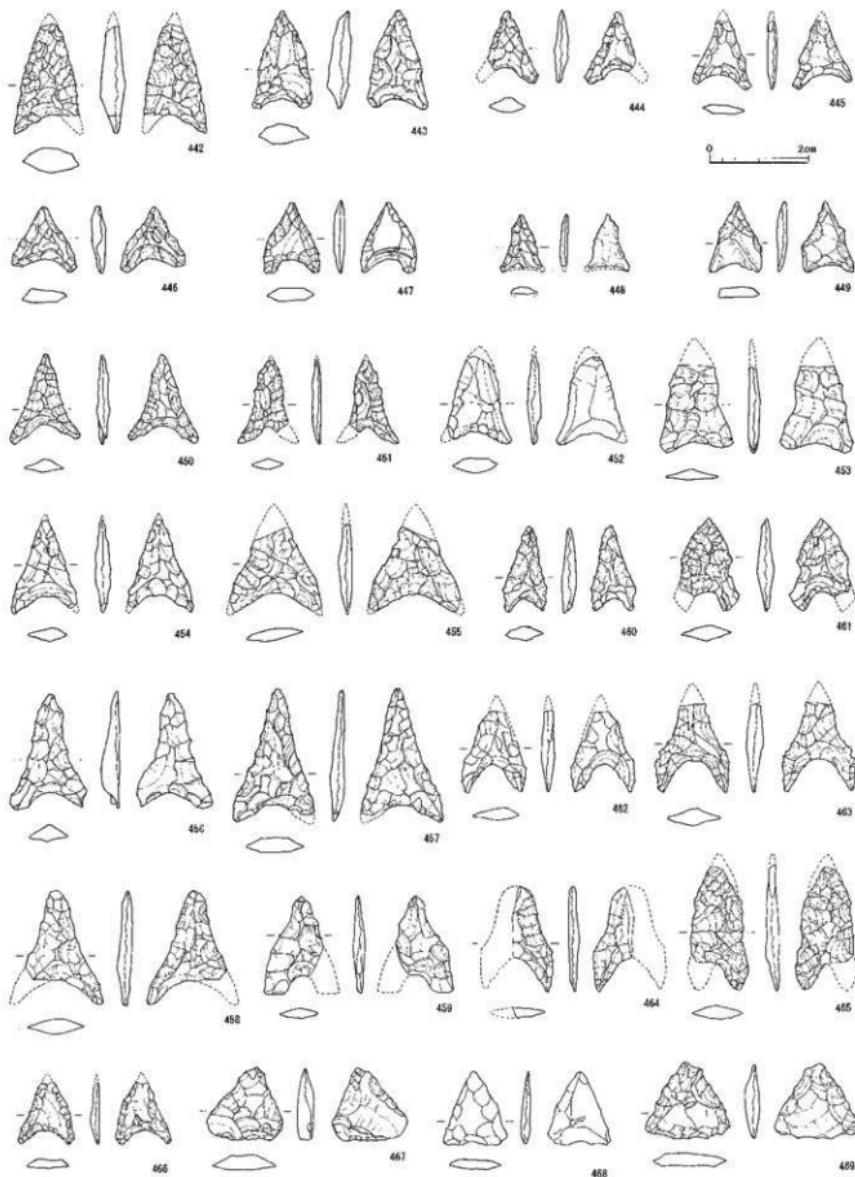
石鎚は4点検出し、その内3点図示した。3点共に、つまみ部をもたない。485は分厚く機能部が長く棒状で、ほぼ全体に入念な調整を行なうが、先端部はやや尖鋭さを欠く。486や487は、全体的に寸詰で機能部が短い。486の片面は一次面のままであるが、先端部は尖鋭である。487の先端部は尖鋭さを欠く。石材は、すべてサヌカイト製である。

C 二次加工痕有剥片 (RF) (第50・51図488～490)

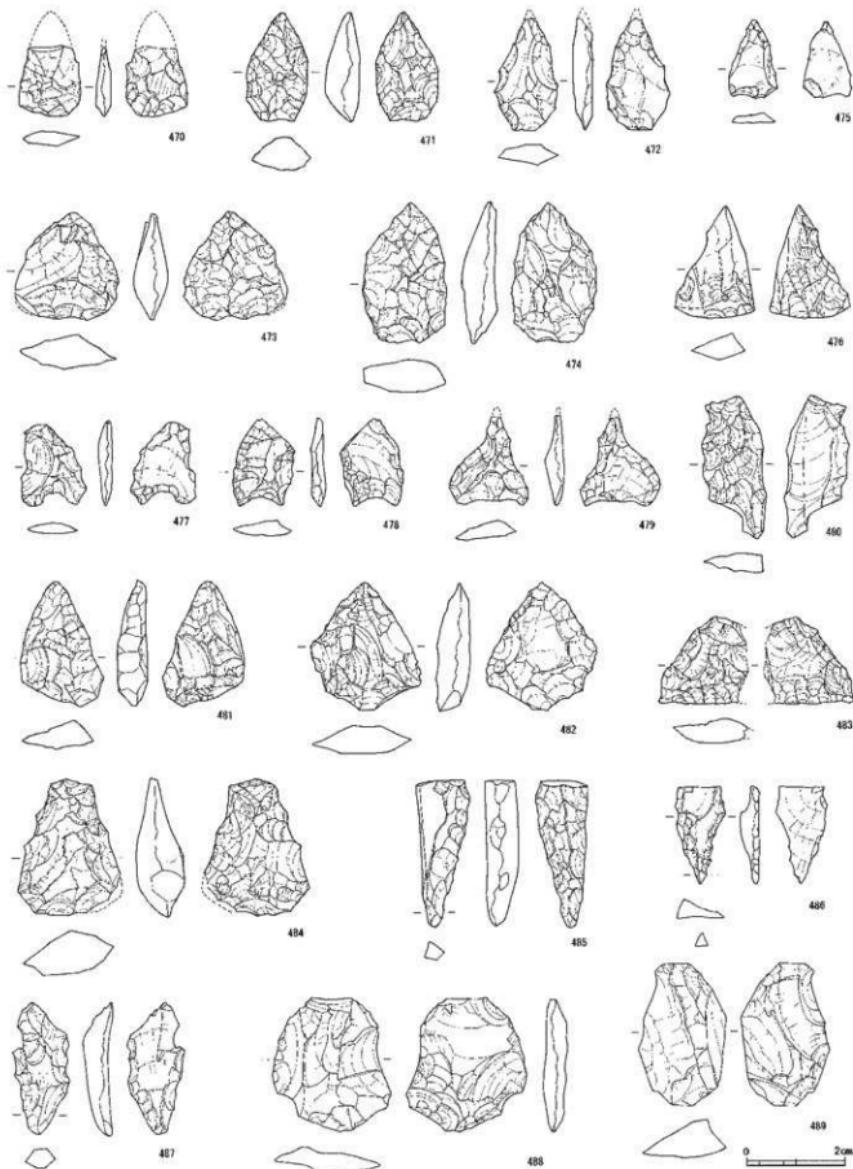
剥片素材の周縁に二次加工した石器の内、定型的な器種として認識できないものを、二次加工痕有剥片 (RF) とした。10点検出し、3点を図示したが、削器や搔器等の未成品を含んでいる可能性もある。488はチャート製で、縱長剥片の下端に二次加工が施される。489はサヌカイト製で、側縁を欠失し上端と下端に押圧剥離とみられる二次加工が施される。剥片の大きさや厚み、調整の様子から、石鎚の製作を意図していた可能性がある。490はチャート製で片面はほとんどが礫面のままで分厚く、弧状の側縁に二次加工を施す。部分的に両面調整により薄



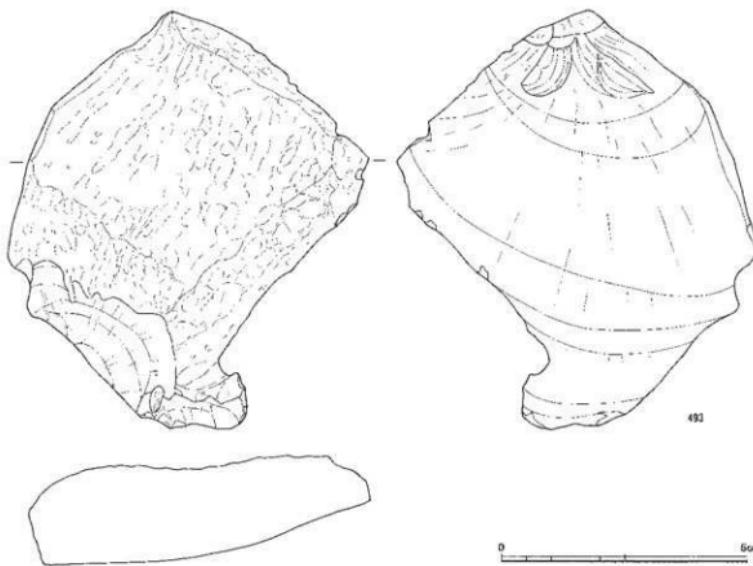
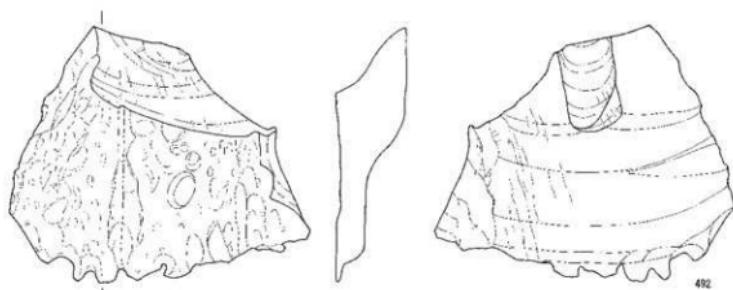
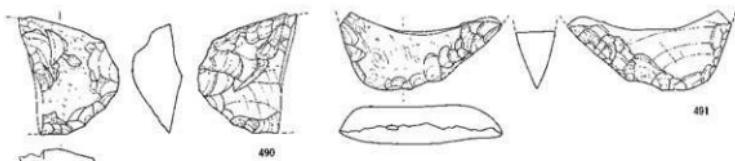
第48図 石器実測図（1）（1 : 1）



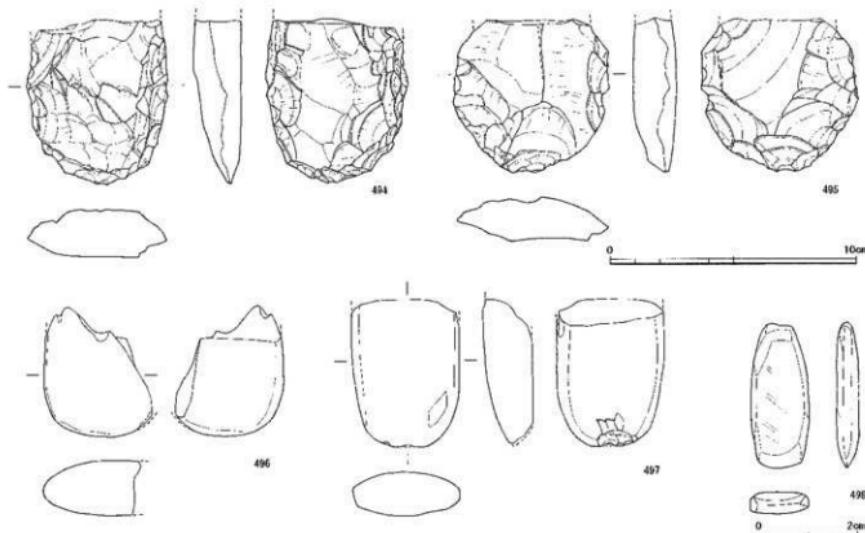
第49図 石器実測図（2）（1 : 1）



第50図 石器実測図（3）（1 : 1）



第51図 石器実測図(4)(1:1)



第52図 石器実測図（5）（1：2）（1：1）

く尖る。

D 削器（第51図491）

1点のみを検出し図示した。押圧剥離による両面調整を側縁にのみ施し、側縁は鋭利な刃状を呈す。調整部以外は、裏面および一次面を多く残す。石材は、サヌカイト製である。

E 刃片（第51図492・493）

数多く検出した刃片の中でも、大型の2点を図示した。気泡状の裏面を残す拳大の刃片で、492は堅穴住居SH106の理土から検出し、493は表面採集である。石材は、いずれもサヌカイト製である。

F 打製石斧（第52図494・495）

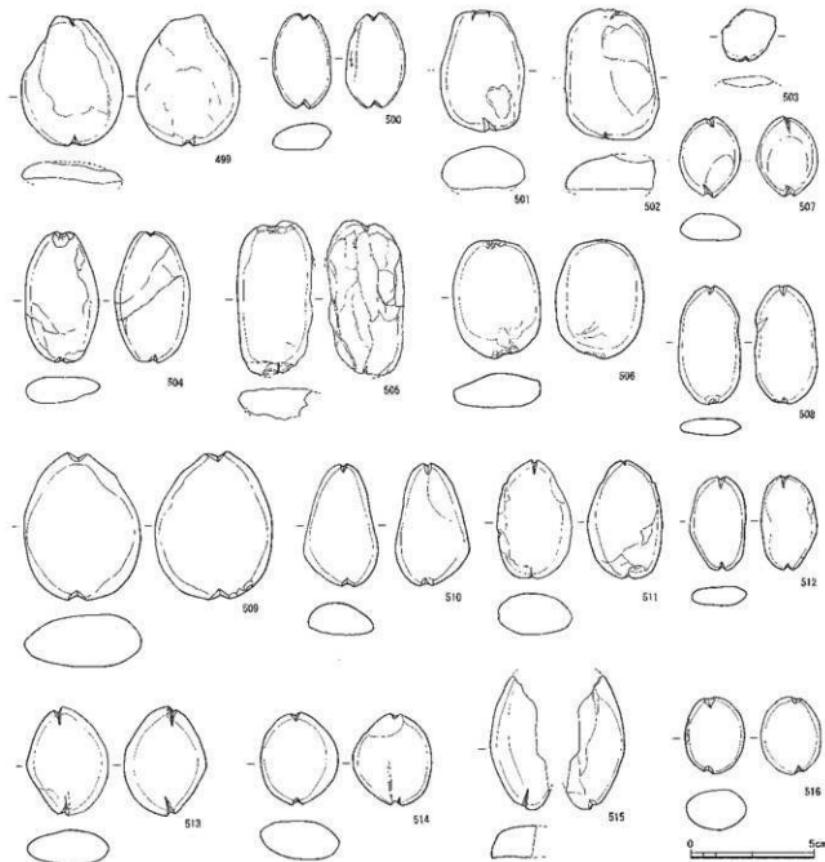
2点検出し、全て図示した。いずれも全体の半分以上を欠失している。494は、刃部片とみられる。上部がやすぼまる形状を呈し、全形は撥形と推定する。両面の中央まで丁寧に剥離を施している。495は側縁下部が丸形を呈し、上部は強いくびれを成す。両面に一次面を残し、周縁に粗く浅い加工を施す。全形は分頭形と推定し、下端は尖鋒さを欠くため、刃部であるか不明である。

G 磨製石斧（第52図496～498）

3点検出し、全て図示した。496と497は、両側縁に面を有する片刃の定角石斧である。共に基部の大半を欠失したままで、楔として再利用した形跡はない。また、表面が摩滅して研磨の様子は不明瞭である。496は、遺跡の分布調査時に、当遺跡内で表面採集したものである。498は、小型細身で盤状の定角石斧の完形品である。精巧な作りであり、刃部が尖鋒で全面にわたりよく研磨されて光沢があり、使用痕はみられない。石材は、泥岩製である。

H 切目石錐（第53図499～516）

長径3～6cm程、重さ10～75g程の扁平な川原石の長軸両端に切目を入れたものである。切目石錐は図示したように18点を検出したが、打欠石錐は確認できなかった。ほとんどが完形であるが、499や501・502は片面の大半を、503と515は片側の大半を欠失している。いずれも自然縁をそのまま素材としたもので、形態はさまざまである。完形のものをみると、素材となる礫が円形に近いもの（507・509・513・514・516）や、精円形のもの（500・506・511・512）、



第53図 石器実測図（6）（1 : 2）

長楕円形のもの（504・505・508）、楕円形で上部が細くすぼまるもの（510）がある。切目の形成は、完形のものについては、全て長辺の両端のみに施されている。切目が両端の両面に明瞭なものは、500・507～514・516である。499は一端が片面に、505や506は両端に打欠きを施した後に切目を形成したもので、一端のみに切目が確認できる。507や513は切目の方向が両端で相違し、中軸を通らない。512は薄手で泥岩製である。

I 大型石皿兼台石（第54・55・56図517～524）

8点検出し、全てを図示した。器表に磨面をもつことから石皿と判断したものの内、大きくて重いために設置しての使用が推定できるものを本器種とした。固定的に使用されており、台石としての多様な使用も推定できる。517は、堅穴住居（SH107）の床面で検出したものである。8点の内で最大の平面規模を測り、平滑な上面の広範囲に磨痕が認められる。下面も割と平らで、置いた時に水平を保ち易く、

堅穴住居内に据えた作業台でもあった可能性がある。518は、堅穴住居（SH107）の埋土中で検出したもので、平滑な上面に擦痕が多く残る。519～521は、掘立柱建物の柱穴から検出したものである。519は、平滑な上面の広範囲に磨面が認められる。520は、磨痕のある面を上面とし、周縁はすべて意図的に割った可能性がある。521は、欠失部を復元すると長径50cm程の略梢円形を呈する大型品で、柱穴の中位に立つように埋設していた。平面の中央には石皿としての使用による凹みがみられる。石材は花崗岩製で、風化が激しく脆い状態である。522は、SH108の埋土中で検出したもので、半分を欠失している。上面のすべてにかなり磨った痕跡がみられる。523や524は全形の大半を欠失するが、磨面を有することから石皿とした。

J 小型石皿（第56・57図525～532）

8点検出し、全て図示した。大型石皿兼台石に対して、小型で薄手のものを本器種とした。525は大半を欠くが、片面に擦痕が認められる。526は扁平な縦を使用している。三方を欠失するが、意図的に割ったのかは不明である。整った矩形を呈し、上面にかすかに磨痕を残す。527は、角が丸い自然縦を使用し、半分を欠失している。平滑な上面のみが機能面となり、中央は特に擦痕が明瞭である。側面は、被熱し赤変する。528は破片で、機能面には磨痕が認められる。529～531は、三方または四方を欠失し、全形は不明である。平滑な片面に磨痕を有す。532は角が丸い扁平な縦を使用し、二方を欠失する。両面に擦痕が認められる。

K 磨石（第58・59図533～539）

7点検出し、全て図示した。石材は花崗岩・流紋岩・閃緑岩製の川原縦を使用し、平面は円か円に近い梢円形の整った縦を選んでいる。7点共に、両面の中央に磨痕が認められ、若干凹んだ形状を呈するものもある。533は敲打痕もみられ、敲石としても用いている。539は完形で、典型的な形状を呈す。

L 敲石（第60図540～543）

4点検出し、全て図示した。片手で支持できる大きさや重量で、敲打痕を有するものを敲石とした。全て自然縦を使用している。540や542は長梢円形の棒状で、541や543は不定形な形状を呈す。敲打痕の

位置はさまざまで、540は両面の中央に、541や543は平滑な上面の中央に、542は先端部からやや平面よりの位置に、敲打痕が認められる。

M 碓器（第61図544～546）

3点検出し、全て図示した。円縦および分割縦の一端に、粗い剥離を加えて刃部を形成したものを碓器とした。544や545は分割縦で、546は円縦である。544や546は両面、545は片面からの剥離で刃部を形成している。石材は544が砂岩製、545・546がホルンフェルスである。（中村）

【註】

- ①調文早期土器については、山田猛氏にご教示を頂いた。
②高橋健太郎氏と石田由紀子氏にご教示を頂いた。

調文中期後葉の土器編年について、下記編年を参考にした。

繩織茂・高橋健太郎「中富式・神明式土器」『總覽調文土器』（株式会社アム・プロモーション 2008年）

③可児市教育委員会「宮之脇遺跡A地点」「宮之脇遺跡B地点」「川合遺跡群」（1994年）

各務原市教育委員会『炉畠遺跡発掘報告書』（1973年）

閑山市教育委員会『塚原遺跡・塚原古墳群』（1989年）

④財団法人岐阜県文化財保護センター「岐阜県文化財保護センター調査報告書 第11集 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集 戸入村平遺跡」（1994年）

⑤高橋健太郎「神明式土器の地域相」『美濃の考古学 第7号』（美濃の考古学刊行会 2004年）

⑥三重県埋蔵文化財センター「大石遺跡」『平成3年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』（1992年）

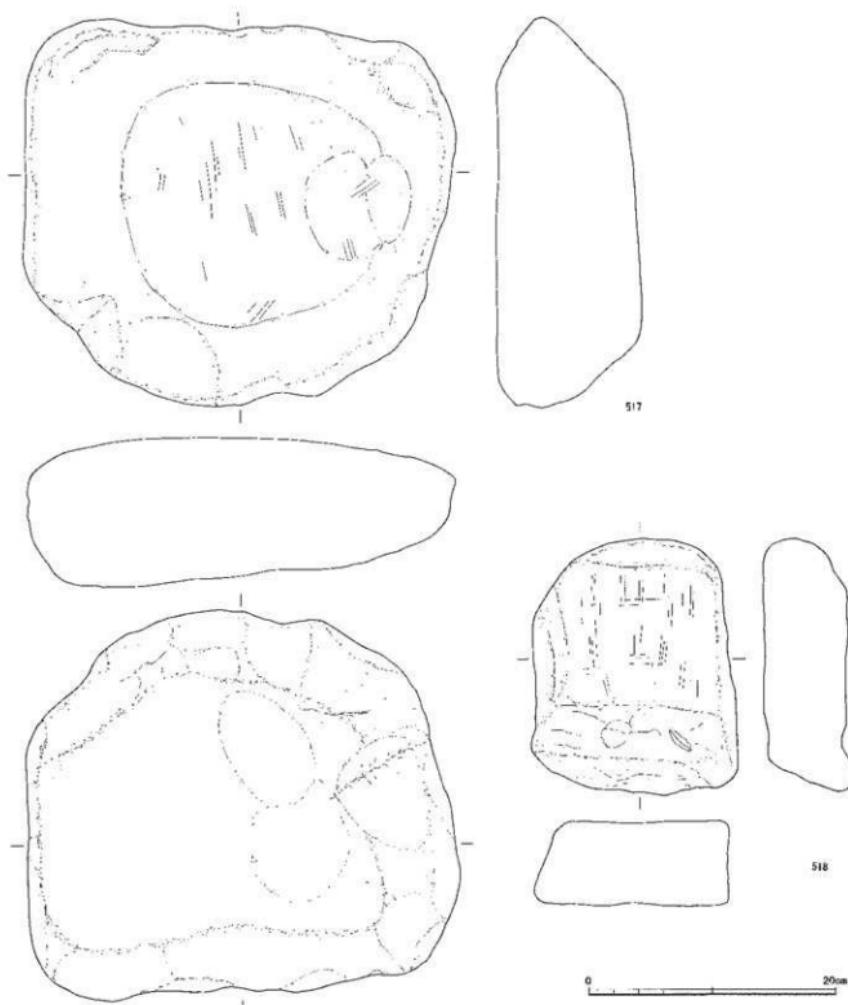
⑦東員町教育委員会『東員町埋蔵文化財調査報告4 村前遺跡発掘調査報告』（1993年）

⑧石器の選別と器種の同定については、田村陽一氏と久保勝正氏にご教示を頂いた。石材については、津村善博氏にご教示を頂いた。

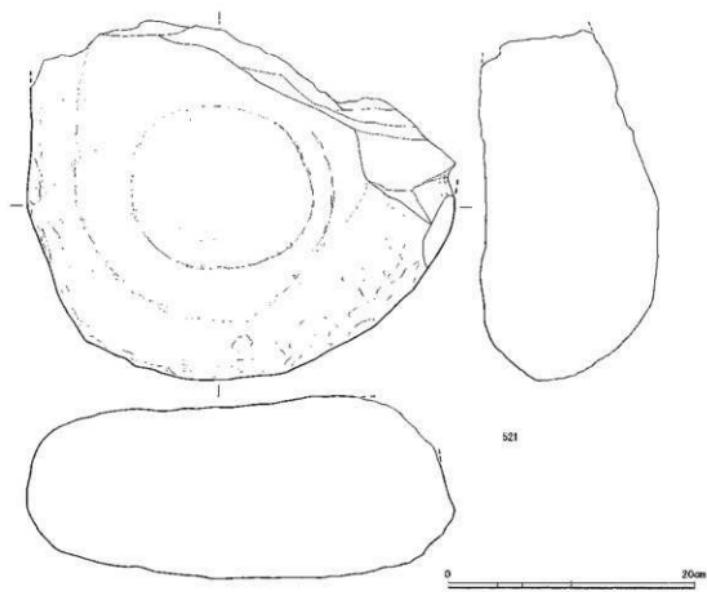
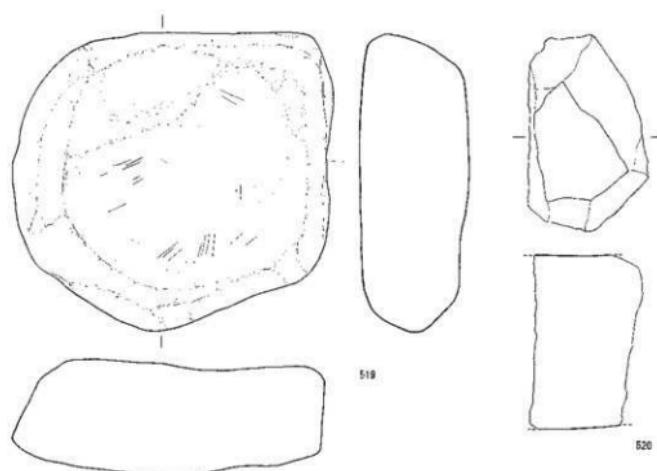
⑨石縫の分類については、以下の文献を参考にした。

奈良県立橿原考古学研究所「鶴山遺跡」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第96号』（2006年）

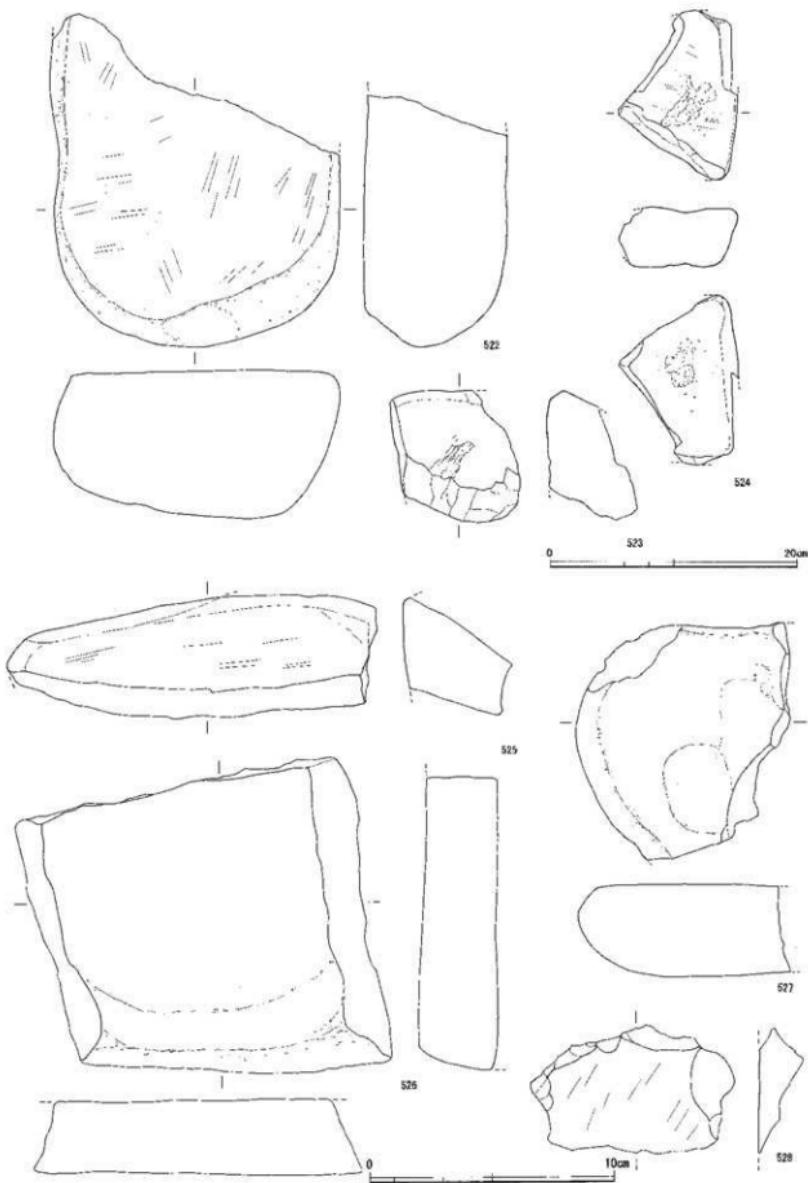
なお、図示できなかった遺物は表・写真でのみ掲載した。（報告番号547～582）



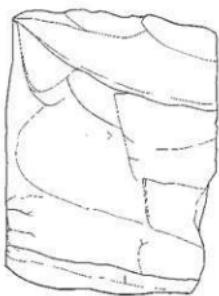
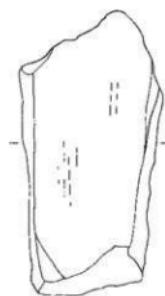
第54図 石器実測図(7) (1 : 4)



第55図 石器実測図(8) (1 : 4)

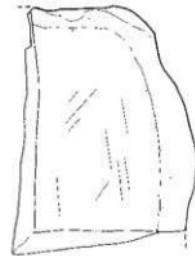
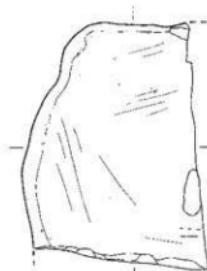
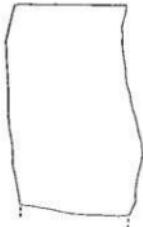


第56図 石器実測図 (9) (1 : 4) (1 : 2)



529

530



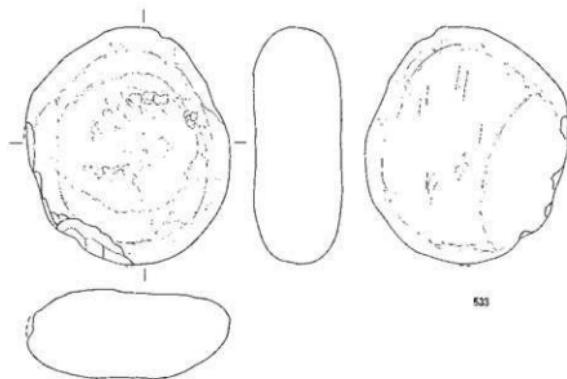
532



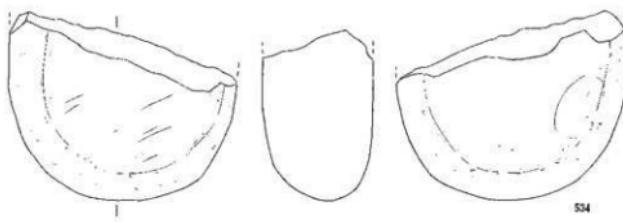
531

0 10cm

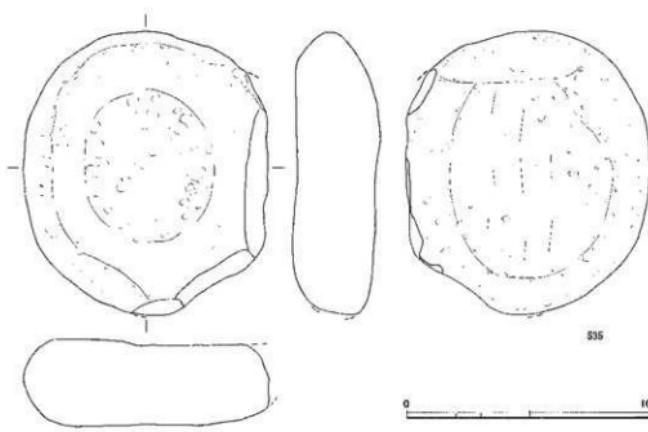
第57図 石器実測図 (10) (1 : 2)



533



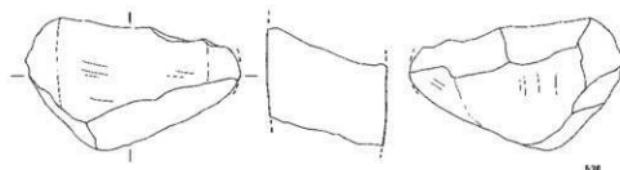
534



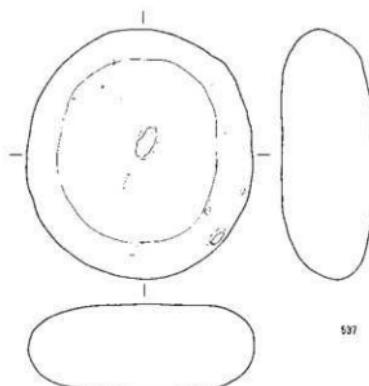
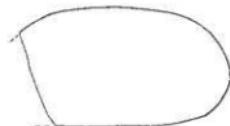
535

0 10cm

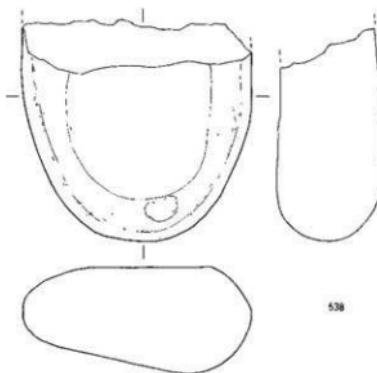
第58図 石器実測図 (11) (1 : 2)



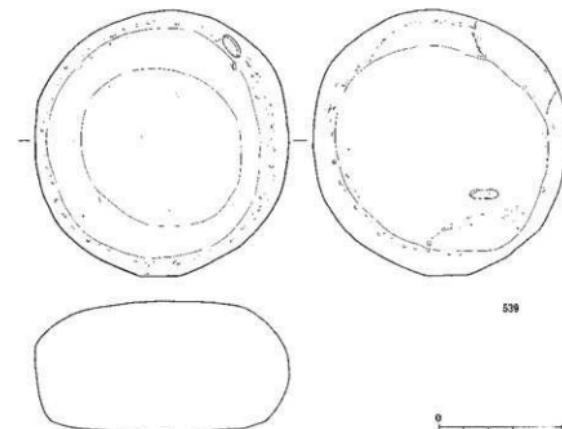
536



537



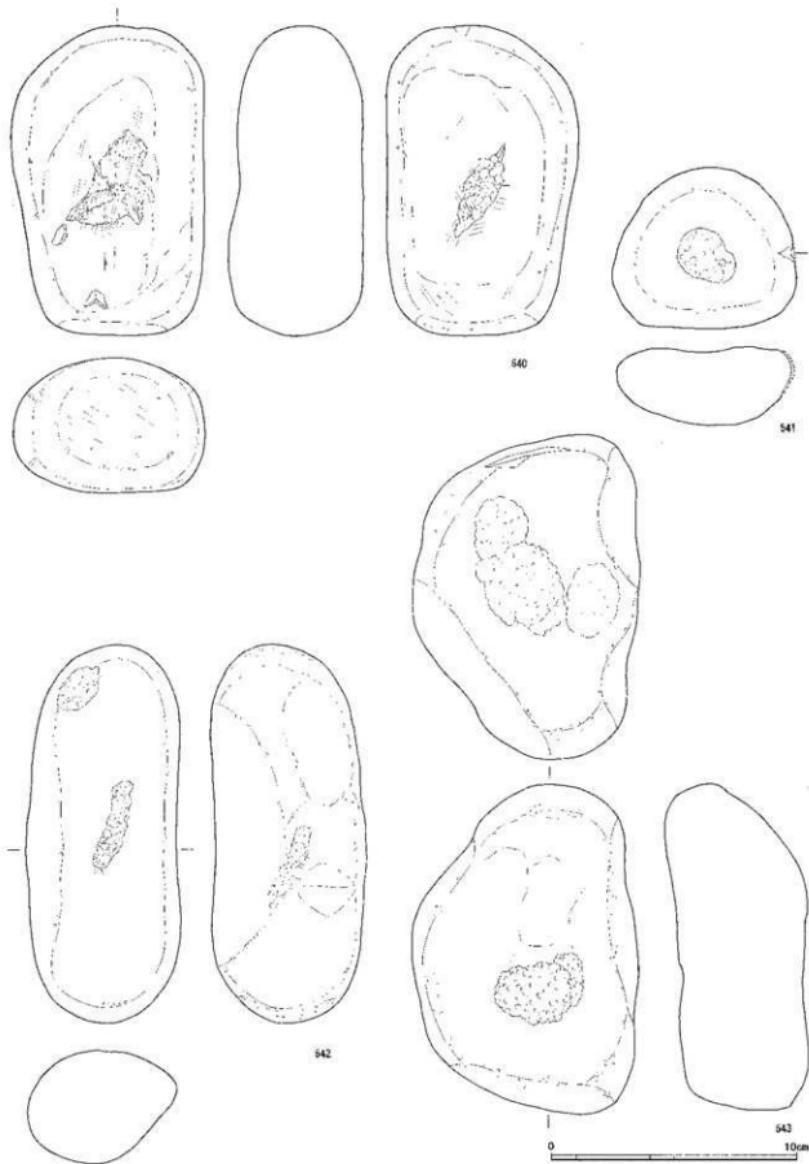
538



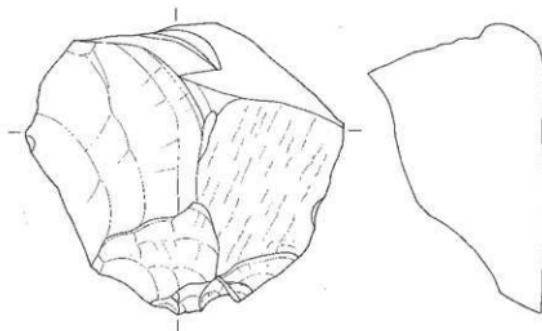
539



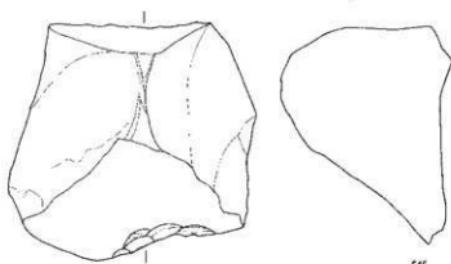
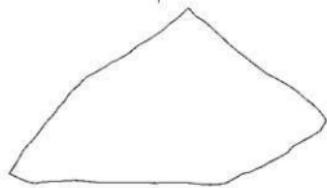
第59図 石器実測図 (12) (1 : 2)



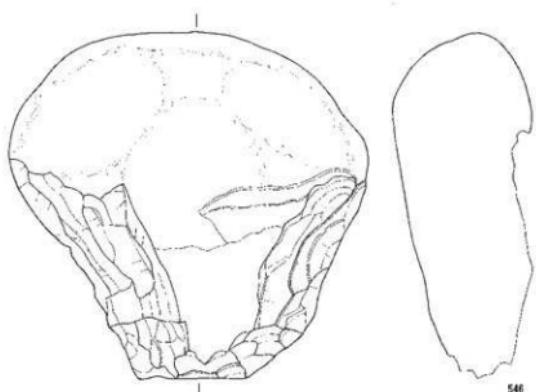
第60図 石器実測図 (13) (1 : 2)



544



545



546

0 10cm

第61図 石器実測図 (14) (1 : 2)

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
414	001-03	石器	C-D20	S H50上	サスカイト	完形	2.0	1.3	0.3	0.4	長脚端・草創期？ 縫合跡
415	012-01	石器	B-V 2	S K23	チャート	完形	1.0	1.3	0.3	0.27	縫合跡
416	013-04	石器	A-U25	S K19	下呂石	片脚部欠失	1.2	(1.1)	0.2	(0.19)	縫合跡
417	029-01	石器	E-W 9・10	S H107	サスカイト	片脚部欠失	0.95	(1.1)	0.2	(0.25)	縫合跡
418	022-02	石器	C-E24	S K57南	下呂石	約1/3欠失	(1.80)	(1.9)	0.35	(0.47)	縫合跡
419	002-01	石器	C-D20	S H50上	黒曜石	約1/4欠失	1.9	(1.0)	0.37	0.7	縫合跡
420	006-05	石器	C-D20	S H50F	サスカイト	片脚部欠失	1.95	(1.2)	0.3	(0.40)	縫合跡
421	008-01	石器	C-G・H 21・22	S H84E	サスカイト	完形	2.05	1.25	0.4	0.52	縫合跡
422	004-03	石器	E-X12	S K113	サスカイト	完形	2.1	1.50	0.38	0.7	縫合跡
423	015-01	石器	A-S・T25	S K1	サスカイト	片脚部欠失	2.1	(1.2)	0.3	(0.46)	縫合跡
424	004-01	石器	E-W 9・10	S H107	チャート	完形	2.1	1.3	0.34	0.5	縫合跡
425	028-03	石器	E-W 9・10	S H107	サスカイト	完形	2.0	1.5	0.4	1.03	縫合跡
426	004-02	石器	E-W 9・10	S H107 No. 2	サスカイト	完形	2.2	1.55	0.48	1.0	縫合跡
427	003-02	石器	A-V25	S K27	下呂石	先端部欠失 片脚先端部欠失	(2.3)	1.4	0.38	0.8	縫合跡
428	003-04	石器	C-E24	S K56	サスカイト	完形	2.2	1.4	0.4	0.8	縫合跡
429	003-01	石器	B-T 1	S K8 北	チャート	片脚部欠失	2.3	(1.3)	0.45	0.9	縫合跡
430	012-02	石器	B-V 2	S K23	サスカイト	片脚先端部欠失	1.15	(1.20)	0.3	(0.36)	縫合跡
431	008-02	石器	C-G・H 21・22	S H84D	下呂石	完形	1.15	1.0	0.3	0.37	黒化・研磨 縫合跡
432	006-01	石器	C-D20	S H50上	サスカイト	先端部欠失	(1.2)	1.2	0.3	(0.4)	縫合跡
433	023-04	石器	D-F 1	S K66北	サスカイト	片脚部欠失	1.15	(0.9)	0.15	(0.11)	縫合跡
434	021-01	石器	A-V25	S K27	サスカイト	片脚部欠失 側脚部欠失	1.65	(1.05)	0.2	(0.36)	縫合跡
435	028-01	石器	E-W 9・10	S H107 No. 3	サスカイト	片脚先端部欠失	1.7	(1.45)	0.4	0.68	
436	002-03	石器	C-G・H 21・22	S H84F	下呂石	完形	1.6	1.25	0.35	0.5	縫合跡
437	002-04	石器	C-G・H 21・22	S H84E	サスカイト	完形	1.6	1.4	0.27	0.4	縫合跡
438	014-02	石器	B-T 1	S K 8	サスカイト	片脚先端部欠失	1.7	(1.3)	0.25	(0.42)	縫合跡
439	008-05	石器	C-G・H 21・22	S H84D	サスカイト	先端部欠失	(1.35)	1.5	(0.2)	(0.30)	外側には刃剥離 縫合跡
440	008-04	石器	C-G・H 21・22	S H84上	サスカイト	完形	2.35	1.40	0.4	0.85	縫合跡
441	022-01	石器	C-F18	S K83	サスカイト	片脚部欠失	1.8	(1.5)	0.4	(0.67)	縫合跡
442	029-03	石器	E-W 12・13	S H109	チャート	先端部欠失 片脚部欠失	(2.3)	(1.3)	0.5	(1.21)	縫合跡
443	006-03	石器	C-D20	S H50中	サスカイト	完形	2.0	1.2	0.5	0.98	縫合跡
444	021-02	石器	C-F25・ G25	S K66北	下呂石	片脚部欠失	1.5	(1.05)	0.3	(0.27)	縫合跡
445	029-02	石器	E-X11	S H108下	サスカイト	先端部欠失	(1.4)	1.2	0.2	0.29	縫合跡
446	026-01	石器	E-U・V11	S H106	サスカイト	完形	1.35	1.30	0.3	0.43	縫合跡
447	002-02	石器	C-G・H 21・22	S H84F	チャート	完形	1.45	1.15	0.25	0.4	縫合跡
448	012-04	石器	B-V 1	S K26	サスカイト	基部大半欠失	1.2	(0.95)	(0.12)	0.13	縫合跡
449	026-03	石器	E-U・V11	S H106	サスカイト	完形	1.45	1.1	0.2	0.32	縫合跡
450	001-04	石器	C-D20	S H50F	チャート	完形	1.8	2.0	0.28	0.4	縫合跡
451	022-04	石器	D-C 4	S Z 92	チャート	片脚部欠失	1.7	(1.5)	0.2	0.23	縫合跡
452	008-03	石器	C-G21	S H84F	サスカイト	片脚部欠失	(1.8)	(1.3)	0.3	0.56	全体的に黒化・研磨 縫合跡
453	034-03	石器	E-X12	S K113	サスカイト	先端部欠失	(1.8)	1.5	0.25	0.59	縫合跡
454	001-01	石器	C-D20	S H50上	サスカイト	先端部欠失 片脚先端部欠失	(1.9)	(1.4)	0.29	(0.5)	縫合跡
455	036-01	石器	E-V 6	風呂木	サスカイト	先端部欠失 片脚先端部欠失	(1.75)	(1.9)	0.3	(0.67)	縫合跡
456	028-04	石器	E-W 9・10	S H107下	下呂石	完形	2.4	1.6	0.35	0.7	表面黒化 縫合跡
457	028-02	石器	E-W 9・10	S H107 No. 1	サスカイト	片脚先端部欠失	2.25	(1.65)	0.3	(0.89)	縫合跡
458	006-04	石器	C-D20	S H50F	チャート	片脚部欠失	2.3	(1.6)	0.3	(0.68)	縫合跡

第17表 石器観察表(1)

報告番号	整理番号	種類	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
459	014-04	石鏟	A-S-T25	S K 1	下呂石	片端部欠失 側縁部欠失	2.0	(1.2)	0.3	(0.56)	断面
460	014-01	石鏟	A-S-T25	S K 1	サヌカイト	完形	1.7	0.9	0.3	0.37	断面
461	036-03	石鏟		表面採集	チャート	片端部欠失	1.9	(1.25)	0.35 (最大)	0.59	分布調査
462	001-02	石鏟	C-D20	S H150上	サヌカイト	先端部欠失 側縁部欠失	(1.7)	1.3	0.28	(0.4)	断面
463	003-03	石鏟	C-D21	S K 49	サヌカイト	先端部欠失	(1.8)	1.6	0.35	0.6	断面
464	009-03	石鏟	C-G-H 21-22	S H84F	サヌカイト	約1/2欠失	(2.15)	(0.85)	(0.2)	(0.31)	断面
465	013-02	石鏟	A-U24-25	S K20北	チャート	先端部欠失 片端部欠失	(2.55)	(1.2)	0.3	(0.83)	断面
466	036-02	石鏟		表面採集	チャート	先端部欠失	(1.35)	1.15	0.2	(0.28)	分布調査
467	031-03	石鏟	E-X12	S K113	サヌカイト	完形	1.5	1.55	0.35	0.92	
468	014-03	石鏟	B-T 1	S K 8北	サヌカイト	完形	1.5	1.3	0.2	0.29	全体に風化顯著 断面
469	026-02	石鏟	E-U-V11	S H106	サヌカイト	完形	1.55	1.75	0.3	0.72	断面
470	007-03	石鏟	C-D20	S H150上	サヌカイト	先端部欠失	(1.4)	1.3	(0.35)	(0.76)	断面
471	009-01	石鏟	C-G-H 21-22	S H84北	チャート	完形	2.2	1.25	0.7	2.07	断面
472	006-02	石鏟	C-D20	S H150上	サヌカイト	先端部欠失	(2.3)	1.3	0.4	1.16	断面
473	009-02	石鏟	C-G-H 21-22	S H84上	チャート	基部先端部欠失	2.2	2.1	0.7	3.29	新久ではなく剥れた石の目 断面
474	013-03	石鏟	A-U24-25	S K20	チャート	完形	2.9	1.75	0.7	3.94	断面
475	031-01	石鏟	E-U-V11	S H106	サヌカイト	未完成	1.60	1.0	0.2	0.37	断面
476	031-04	石鏟	E-X11	S H108F	チャート	未完成	2.3	1.65	0.7	1.93	断面
477	034-01	石鏟	E-X12	S K113	サヌカイト	未完成	1.7	1.35	0.3	0.6	断面
478	031-02	石鏟	E-X11	S H1108F	チャート	未完成	1.8	1.3	0.3	0.83	断面
479	034-02	石鏟	E-X12	S K113	サヌカイト	未完成	1.8	1.6	0.4	0.77	断面
480	029-04	石鏟	E-W9-10	S H1107F	チャート	未完成	2.9	1.35	0.5	2.23	断面
481	024-03	石鏟	D-C 4	S Z 92	サヌカイト	未完成	2.55	1.7	0.65	2.28	断面
482	024-01	石鏟	C-F24	S K78	チャート	未完成	2.6	2.3	0.7	3.78	断面
483	015-03	石鏟	C-G22	S H84F 北東部	チャート	未完成	1.8	(1.8)	(0.5)	(1.69)	
484	016-01	石鏟	C-G-H 21-22	S H84F	チャート	未完成	2.75	2.1	1.0	4.9	石材全体にヒビが多く入る
485	010-01	石鏟	C-H22	S H84F 南東部	サヌカイト		3.0	1.1	0.7	2.92	
486	010-02	石鏟	C-G-H 21-22	S H84上	サヌカイト		2.0	1.05	0.4	0.71	断面
487	031-05	石鏟	E-X10-11	S H1108 西面	サヌカイト		2.7	1.2	0.6 (最大)	1.79	全体に風化
488	016-02	R F	C-G-H 21-22	S H84H	チャート		2.75	2.4	0.5	3.32	断面
489	030-01	R F	E-V11	S H106-柱穴A1	サヌカイト		2.9	1.8	0.8	3.63	
490	024-02	R F	D-C 4	S Z 92	チャート		(2.4)	(2.05)	(1.0)	(4.38)	断面
491	035-01	削削	E-X12	S K113	サヌカイト		1.6	3.3	0.8	3.18	
492	027-01	大型 削片	E-V11	S H106 No. 27	サヌカイト		5.2	6.1	1.4	33.14	
493	037-01	大型 削片	E-T 16周辺	表面採集	サヌカイト		8.55	7.35	2.2	119.92	
494	019-01	打製 石斧	C-G22	S H84F No. 28	ホルシフェルス	約1/2欠失 刃部	6.7	5.8	2.0	102.06	
495	020-01	打製 石斧	B-Y 5	粗視丸	泥紋岩	約1/2欠失	(6.25)	(5.40)	(1.80)	(90.18)	
496	038-01	打製 石斧		表面採集	砂岩	粗粒砂岩 刃部・泥紋岩	5.3	4.4	2.3 (最大)	64.59	摩耗顕著 分布調査
497	018-01	打製 石斧		表面採集	泥紋岩	先端部後用して 欠失?	(6.0)	(4.4)	(2.0)	(66.86)	全体に風化顕著
498	005-02	C-F-G25	S K68	泥岩	完形	3.0	1.2	0.43	3.0	整状小型 断面	
499	011-01	切口 石斧	C-D20	S H150	ホルシフェルス	片面欠失	5.3	4.2	0.9	21.75	
500	005-01	切口 石斧	C-D20	S H150	砂岩	完形	3.82	2.4	1.15	13.1	断面
501	011-02	切口 石斧	C-D20	S H150	ホルシフェルス	片面欠失	(5.0)	(3.4)	(1.8)	(36.85)	
502	011-03	切口 石斧	C-D20	S H150	ホルシフェルス	片面欠失	5.3	3.9	1.4	38.66	
503	016-03	切口 石斧	C-G-H 21-22	S H84F	砂岩	大半欠失	(2.1)	(2.3)	(0.45)	(2.49)	断面

第18表 石器観察表（2）

報告番号	整理番号	種類	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
504	017-02	切口 石碑	C-G22	S H84	カルシフェルス	完形	5.3	3.1	1.1	25.24	
505	053-01	切口 石碑	C-G-H 21+22 北東部	S H84下	カルシフェルス	片面欠失	6.3	3.0	1.26	33.93	
506	032-01	切口 石碑	E-W10	S H107 伊周邊	カルシフェルス	完形	4.8	3.6	1.7	37.37	赤色付着物有り
507	033-02	切口 石碑	E-W9+10	S H107 F	泥岩	完形	3.3	2.5	1.2 (最大)	13.11	断面け
508	033-01	切口 石碑	E-W10	S H107 南東部	砂岩	完形	4.8	2.6	0.7	14.11	
509	032-02	切口 石碑	E-W9+10	S H107 No. 4	砂岩	完形	6.0	4.8	2.1	75.33	
510	033-03	切口 石碑	E-W12	S H109 #2	カルシフェルス	完形	5.0	3.05	1.3	24.53	
511	017-01	切口 石碑	B-U1	S K18	カルシフェルス	完形	3.8	3.05	1.7	30.59	断面け
512	023-01	切口 石碑	A-V25	S K27	泥岩	ほぼ完形	3.85	2.3	0.95 (最大)	10.03	断面け
513	023-02	切口 石碑	C-F24	Pit 1	カルシフェルス	完形	4.4	3.4	1.4	23.68	
514	029-01	切口 石碑	C-D21	S K49	砂岩	完形	3.7	3.2	1.6	25.3	被熱? 断面け
515	035-03	切口 石碑	E-X12	S K113	カルシフェルス	約1/2欠失 切口一方のみ残存	5.4	2.4	1.3	19.22	断面け
516	035-02	切口 石碑	E-X12	S K113	砂岩	完形	3.15	2.45	1.6	16.96	被熱
517	039-01	台石	E-W10	S H107 No. 14	花崗岩	完形	35.6	31.9	11.9	20.5kg	無痕顯著
518	051-01	台石	E-W10	S H107 No. 12	花崗岩	完形	21.0	17.0	7.2	4500	無痕顯著
519	049-01	台石	D-F 1	S K66	花崗岩	完形	24.5	25.4	9.3	8900	使用痕顯著
520	056-01	台石	C-F23+24	S K62 No. 1	流紋岩	円錐を意図的に削る	16.1	9.9	14.3	3560	
521	048-01	台石	B-U-V 1	S K18	花崗岩	約1/4欠失	28.7	35.1	15.0	19.6kg	剝離顯著
522	040-01	台石	E-X11	S H108 No. 1	火成岩	約1/2欠失	27.35	23.8	12.2	10.7kg	無痕顯著
523	057-01	台石	A-S-T25	S K1 No. 1	カルシフェルス	大半欠失	10.8	10.6	6.1	950	
524	056-02	台石	C-D20	S H50 No. 46	砂岩	大半欠失	13.9	9.8	4.9	850	
525	052-01	石柱	C-G-H22	S H84上 No. 1	砂岩	大半欠失	15.1	5.1	4.9	409.45	被熱有り
526	044-01	石柱	C-D20	S H50 No. 48	砂岩	三方欠失	12.9	15.3	3.2	1070	
527	041-01	小型 石柱	E-V11	S H106 No. 20	砂岩	約1/2欠失	19.4	17.5	7.8	4000	被熱有り 使用痕顯著
528	047-01	小型 石柱	E-X12	S K113	カルシフェルス	礫片	5.2	8.3	2.0 (最大)	72.5	
529	045-02	小型 石柱	D-B13	複数	砂岩	四方欠失	11.6	5.9	8.8	998	人為的に削っている
530	050-01	小型 石柱	D-E 1・2	S K59	砂岩	三方欠失	13.2	15.7	7.5	2090	
531	052-02	小型 石柱	B-Y23	調査区東側	砂岩	四方欠失	(7.6)	(8.3)		154.94	
532	042-01	小型 石柱	A-W20+21	楕円木板	砂岩	二方欠失	10.1	7.6	3.0	353	
533	043-02	磨石	C-G22	S H84下 No. 31	花崗岩	一部欠失	9.7	8.35	3.6	397.5	被熱か、擦痕・砸打痕有り
534	044-02	磨石	C-G21	S H84上	花崗岩	約1/2残存	7.7	9.3	4.5	430	
535	043-01	磨石	A-T24	S K12	花崗岩	一部欠失	11.5	10.0	3.6	650	
536	042-03	磨石	C-D20	S H50上	閃雲岩	大半欠失	5.4	8.8	4.9	257.5	
537	042-04	磨石	A-U25	S K19	細粒花崗岩	完形	10.2	9.3	3.7	870	全体に剝離顯著
538	045-01	磨石	C-E20	S K61	花崗岩	約1/3残存	9.0	9.4	5.3	500	使用痕顯著
539	025-01	磨石	C-A21	Pit 1	流紋岩	完形	10.8	9.4	5.3	900	表面面とともに良く使用。側面も一時使用。全体に使用
540	046-01	磨石	C-G-H22	S H84上 No. 71	流紋岩	完形	12.6	7.85	5.5	960	
541	053-02	石柱	B-V 2	S K23北	花崗岩	ほぼ完形	7.5	6.5	3.2	199.52	断面け
542	053-03	石柱	耕土	花崗岩	完形	15.4	6.1	4.7	709		
543	054-01	石柱	C-E24	Pit 1	砂岩	完形	9.2	13.3	5.9	1050	
544	055-01	石柱	E-W10	S H107 No. 11	砂岩	11.9	13	2.7 (最大)	1000		
545	055-02	石柱	D-C 4	S Z 92	カルシフェルス	9.8	10.2	7.1	650		
546	052-03	石柱	D-E 1・2	S K59	カルシフェルス	14.1	14.8	5.7	1400		
547	007-01	石柱	C-D20	S H50中	サヌカイト	両端部欠失	(1.8)	(1.4)	(1.3)	(0.4)	断面け
548	007-02	石柱	C-D20	S H50北	サヌカイト	先端部欠失 片面部欠失	(0.9)	(1.15)	(0.2)	(0.23)	断面け

第19表 石器観察表(3)

報告番号	整理番号	器種	地区名	出土遺構	石質	残存状態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
549	010-03	石器	C-G-H 21-22	S H84北	サスカイト	未完成	(1.5)	(1.3)	(0.3)	(0.51)	縫合
550	012-03	石器	B-V 1	S K26北	サスカイト	片側部欠失	(1.3)	(0.9)	(0.15)	(0.14)	縫合
551	013-01	石器	A-U24-25	S K20北	サスカイト	先端部欠失	(1.6)	1.2	0.3	(0.40)	縫合
552	015-02	石器	C-G-H 21-22	S H84F	サスカイト	片側部のみ残存	(1.3)	(0.8)	(0.2)	(0.16)	縫合
553	021-03	石器	C-F-G 25	S K68	チャート	先端部欠失 両側部欠失	(2.6)	(1.35)	(0.35)	(1.27)	縫合
554	022-03	石器	D-C 4	S Z 92	チャート	先端部欠失 片側部欠失	1.0	(1.0)	0.3	0.23	縫合
555	007-04	石器	C-D20	S H50中	下昌石	先端部欠失 両側部欠失	(1.4)	(1.1)	(0.3)	(0.46)	縫合
556	007-05	石器	C-D20	S H50上	サスカイト	脚部先端のみ残存	(0.6)	(0.35)	(0.2)	(0.04)	縫合
557	015-04	石器	C-G21	S H84F	チャート	先端部のみ残存	(1.3)	(1.1)	(0.3)	(0.34)	縫合
558	024-01	石器	C-A23	S K33	サスカイト	先端部のみ残存	(0.9)	(0.7)	(0.25)	(0.12)	縫合
559	030-02	石器	E-W9-10	S H107	サスカイト	先端部のみ残存	(1.5)	(0.8)	(0.2)	0.18	全体にヒビ有り
560		石器	E-X11	S H108F	チャート	先端部のみ残存	(0.8)	(0.5)	(0.3)	0.1	縫合
561		石器	B-Y 1	S K 8 北	チャート	先端部欠失 両側部欠失	(1.5)	(1.1)	(0.3)	0.3	縫合
562		石器	A-U24-25	S K20北	チャート	片側部のみ残存	(0.9)	(0.7)	(0.2)	0.2	縫合
563		石器	C-D20	S H50下	チャート	先端部のみ残存	(0.8)	(0.9)	(0.2)	0.2	縫合
564	030-03	石器	E-W9-10	S H107	サスカイト		1.55	0.8	0.45	0.56	縫合
565		複形石器	C-G-H 21-22	S H84F 北東部	サスカイト		3.5	1.4	1.6	10.3	
566		複形石器	C-F-G 25	S K68北	サスカイト		2.3	0.8	1.1	2.5	縫合
567		複形石器	C-D20	S H50上	サスカイト		1.9	4.1	1.0	5.9	縫合
568		複形石器	C-G-H 21-22	S H84上	チャート		1.7	2.7	0.7	3.6	縫合
569		複形石器	C-D-E20	S H50北	サスカイト		2.1	1.8	0.7	2.1	
570		複形石器	C-D-E20	S H50北	サスカイト		2.4	2.0	0.8	2.7	
571		複形石器	C-D20	S H50上	サスカイト		1.5	2.4	1.0	4.2	縫合
572	030-04	R F	E-W9-10	S H107F	チャート		1.3	1.0	0.2	0.30	縫合
573	R F	C-E20	S H50	サスカイト			2.4	1.4	0.4	1.8	
574	R F	E-U11	S H106	チャート			2.7	1.8	0.5	2.3	
575	R F	C-G21	S H84F	チャート			1.9	1.1	0.3	0.3	縫合
576	R F	C-G21	S H84F	チャート			1.5	1.5	0.2	0.6	縫合(全周両面調査) 縫合
577	R F	C-D20	S H50上	サスカイト			3.4	1.9	0.6	4.1	縫合
578	R F	C-D20	S H50上	サスカイト			2.0	1.4	0.5	1.3	縫合
579	U F	E-U11	S H106	チャート			3.6	1.5	0.7	4.6	
580	U F	B-X21	包含層	チャート			3.2	1.85	0.55	3.2	
581		石核	B-V 1	S K26	チャート		3.1	1.4	1.3	6.2	縫合
582		石核	B-V 2	S K23	チャート		2.35	1.45	1.0	3.1	縫合

第20表 石器観察表(4)

遺構番号	報告番号
S K 1	423・459・460・523
S K 8 (S B85)	429・438・468・561
S K12	535
S K18 (S B86)	511・521
S K19 (S B85)	416・537
S K20	465・474・551・562
S K23 (S B86)	415・430・541・582
S K26 (S B86)	448・550・581
S K27 (S B86)	427・434・512
S K33	558
S K49	463・514
S H50	414・419・420・432・443・450・454・458・462・470・472・499・500・501・502・524・526・536・547・548・555・556・563・567・569・570・571・573・577・578
S K56 (S B89)	428
S K57 (S B89)	418
S K59	530・546
S K61	538
S K62 (S B89)	520
S K66 (S B105)	433・519
S K68	444・498・553・566
S K78 (S B86)	482
S K83	441
S H84	421・431・436・437・439・440・447・452・464・471・473・483・484・485・486・488・491・503・504・505・525・533・534・540・549・552・557・565・568・575・576
S K92	450・481・490・545・554
S H106	446・449・469・475・489・492・527・574・579
S H107	417・424・425・426・435・456・457・480・506・507・508・509・517・518・544・559・564・572
S H108	445・476・478・487・522・560
S H109	442・510
S K113	422・453・467・477・479・491・515・516・528
ピット	513・539・543
遺構外	455・461・466・493・495・496・497・529・531・532・542・580

第21表 石器出土一覧表

V 自然科学分析

1 放射性炭素年代測定

(1)はじめに

三重県菰野町に所在する鈴山遺跡の第2次発掘調査と第3次発掘調査で検出された縄文時代の遺構から出土した炭化材について、加速器質分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ材料について樹種同定を行っている。

(2)試料と方法

試料は、縄文時代早期とされる集石炉から出土した炭化材2点(P LD-33671, 33672)と煙道付炉穴から出土した炭化材3点(P LD-33673, 33679, 33680)、縄文時代中期とされる掘立柱建物柱穴、落とし穴、竪穴住居、土坑から出土した炭化材14点(P LD-33666~33670, 33674~33678, 33681~33684)である。測定試料の情報、調整データは第22・23表のとおりである。

試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 L5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

(3)結果

第23表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、第62~65図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD 1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yr BP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期

が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4)考察

以下、2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、結果を整理する。縄文土器編年と¹⁴C年代・暦年較正結果との対応関係については、小林(2008)、小林(2009)、工藤(2012)を参照した。

縄文時代早期とされる集石炉(S F51、S F53)と煙道付炉穴(S F60、S F91、S F97)から出土した炭化材(P LD-33671~33673, 33679, 33680)は、¹⁴C年代が9650±30~9535±30°C BP、2σ暦年代範囲が9238~8759calBCの範囲に収まり、いずれも縄文時代早期前葉に相当する年代を示した。縄文時代中期とされる掘立柱建物柱穴、落とし穴、竪穴住居、土坑から出土した炭化材14点(P LD-33666~33670, 33674~33678, 33681~33684)のうち、SK67(S B105柱穴)のP LD-33675、SK48(S B88)のP LD-33676、SH84(竪穴住居床面直上)のP LD-33678の3点は、試料調整を行ったが、AMS測定に十分なグラファイト(炭素の結晶)を得られず、確からしい¹⁴C年代を得られなかった。したがって、¹⁴C年代が得られた11点についてのみ記す。SK103(土坑)のP LD-33682、SH108(竪穴住居床面直上)のP LD-33683、SH50(竪穴住居床面5cm上)のP LD-33670、SK100(S B87柱穴)のP LD-33681、SK30(S B86柱穴)のP LD-

33667、SK5（SB85柱穴）のPLD-33666の6点は、¹⁴C年代が4370±20~4120±25¹⁴CBP、2σ暦年代範囲が3082~2580 calBCの範囲に収まり、縄文時代中期後半に相当する年代であった。

一方、SK83（落とし穴）のPLD-33677は、¹⁴C年代が6940±30¹⁴CBP、2σ暦年代範囲が5887~5741 calBC（95.4%）で、縄文時代早期後葉に相当する年代であった。縄文時代中期にSK83が掘られた際に縄文時代早期後葉の土層に含まれていた炭化材が落とし穴の中に供給された可能性が考えられる。あるいはSK83の時期が縄文時代早期後葉まで古くなる可能性も考えられる。

また、SK31（落とし穴）のPLD-33668は、¹⁴C年代が3885±20¹⁴CBP、2σ暦年代範囲が2462~2298 calBC（95.4%）で、縄文時代後期初頭、SK62（SB89柱穴）のPLD-33674は、¹⁴C年代が3660±25¹⁴CBP、2σ暦年代範囲が2135~2079 calBC（34.3%）および2064~1955 calBC（61.1%）で、縄文時代後期前葉に相当する年代であった。これらの遺構は、発掘調査所見よりもやや新しい可能性がある。

さらに、SK113（土坑）のPLD-33684は、¹⁴C年代が2955±20¹⁴CBP、2σ暦年代範囲が1259~1245 calBC（1.8%）、1234~1108 calBC（92.3%）および1099~1087 calBC（1.3%）で、縄文時代晚期前葉、SK48（SB88柱穴）のPLD-33669は、¹⁴C年代が2565±2014CBP、2σ暦年代範囲が5805~755 calBC（92.0%）、680~670 calBC（1.9%）および606~596 calBC（1.5%）で、縄文時代晚期中葉～後葉に相当する年代であった。これらの遺構については、発掘調査所見と合わせて時期を再検討する必要がある。

AMS年代測定グループ

伊藤茂・安昭炫・佐藤正教

廣田正史・山形秀樹・小林絃一

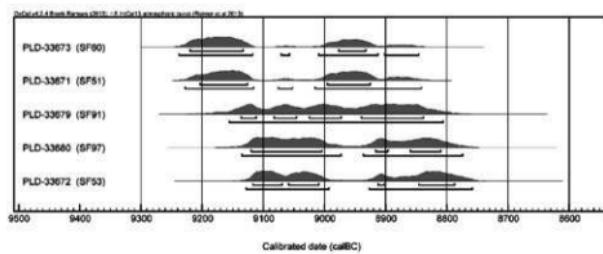
Zaur Lomtatidze・小林克也・中村賢太朗

(パレオ・ラボ)

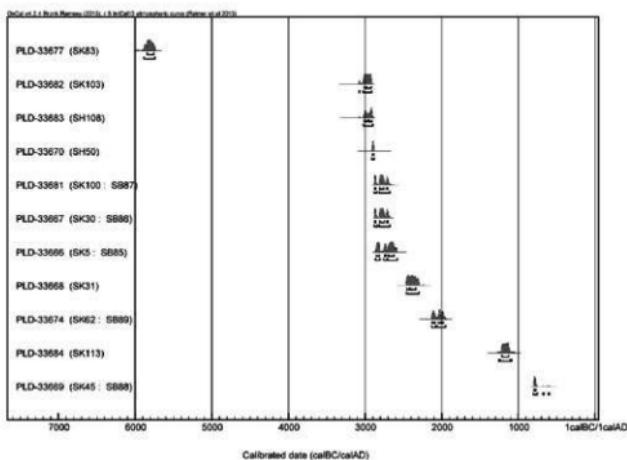
- ・小林謙一（2008）縄文時代の暦年代、縄文時代の考古学-歴史のものさし-, 257-269、同成社。
- ・小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82、雄山閣。
- ・工藤雄一郎（2012）第10章後氷期の考古編年と¹⁴C年代、旧石器・縄文時代の環境文化史, 212-229、新泉社。
- ・中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20、日本第四紀学会。
- ・Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer,
- ・R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

【参考文献】

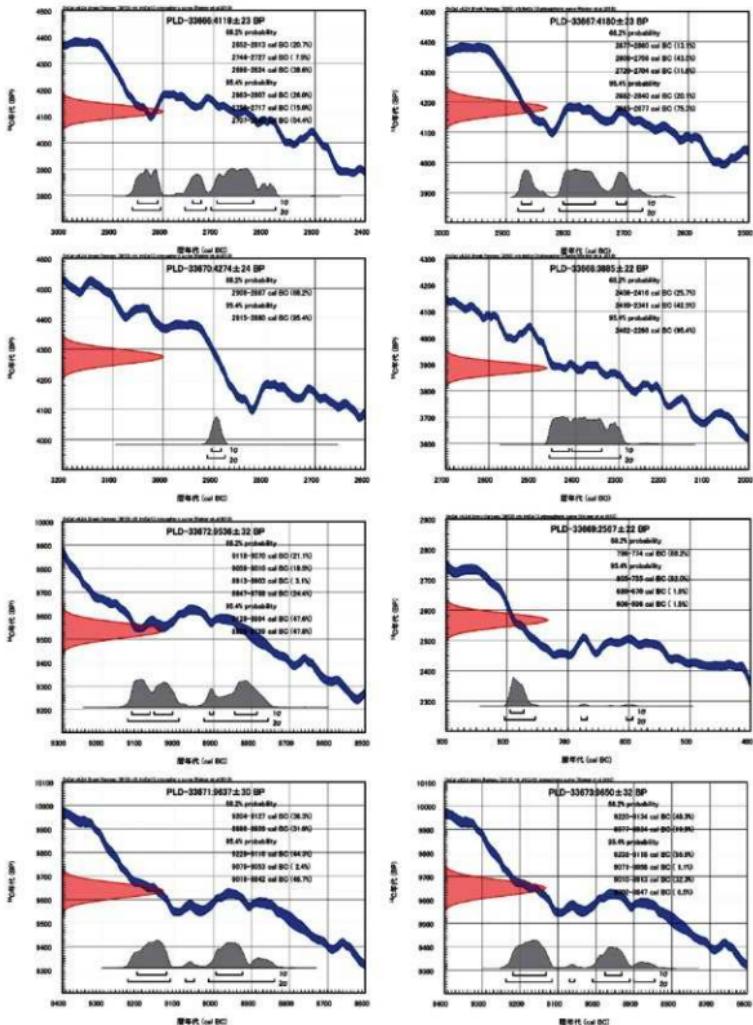
- ・Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.



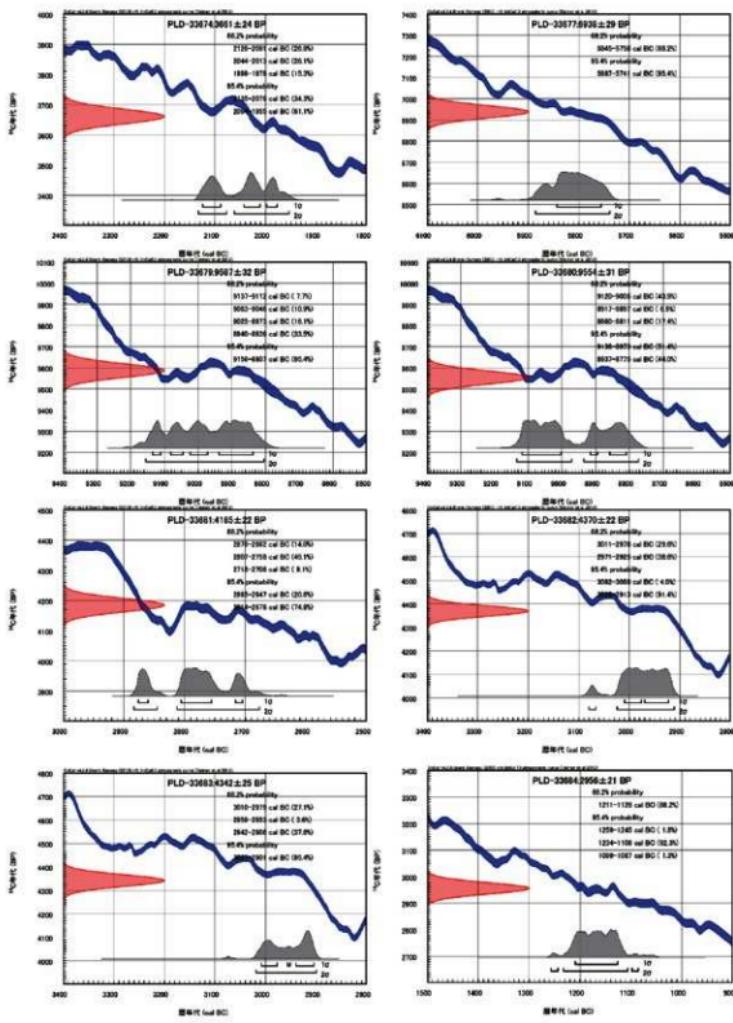
第62図 縄文時代早期の遺構から出土した炭化材の暦年較正結果の比較



第63図 縄文時代中期の遺構から出土した炭化材の暦年較正結果の比較



第64図 歴年較正結果（1）



第65図 歴年較正結果（2）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33666	試料No. 1 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK5(SB85柱穴) グリッド：A-T25 炭化物No. 7	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33667	試料No. 2 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK30(SB86柱穴) グリッド：B-V1 炭化物No. 5	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33668	試料No. 3 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK31(落とし穴) グリッド：A-X24 炭化物No. 1	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33669	試料No. 4 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK45(SB88柱穴) グリッド：C-D25 炭化物No. 8	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33670	試料No. 5 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SH50(窓穴住居床面5cm上) グリッド：C-D20 炭化物No. 16	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33671	試料No. 6 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF51(集石炉) グリッド：C-D21 炭化物No. 19	種類：炭化材（ツツジ属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33672	試料No. 7 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF53(集石炉) グリッド：C-D21 炭化物No. 24	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）
PLD-33673	試料No. 8 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF60(煙道付炉穴) グリッド：B-Y2 炭化物No. 2	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33674	試料No. 9 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK62(SB89柱穴) グリッド：C-F23 炭化物No. 12	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33675	試料No. 10 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK67(SB105柱穴) グリッド：C-G25 炭化物No. 25	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33676	試料No. 11 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK48 (SB88柱穴) グリッド：C-D24 炭化物No. 11	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）
PLD-33677	試料No. 12 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK83(落とし穴) グリッド：C-F18 炭化物No. 17	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）

第22表 測定試料および処理（1）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33678	試料No. 13 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SH84（堅穴住居床面直上） グリッド：C-G21 炭化物No. 20	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）
PLD-33679	試料No. 14 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF91（煙道付炉穴） グリッド：B-Y5 炭化物No. 23	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33680	試料No. 15 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SF97（煙道付炉穴） グリッド：C-E21 炭化物No. 21	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33681	試料No. 16 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK100（SB87柱穴） グリッド：A-S24 炭化物No. 22	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33682	試料No. 17 遺跡名：鈴山遺跡（第2次） 遺構：SK103（土坑） グリッド：C-D21 炭化物No. 15	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33683	試料No. 18 遺跡名：鈴山遺跡（第3次） 遺構：SH108（堅穴住居石開い炉） グリッド：E-X11 炭化物No. 1	種類：炭化材（ツヅジ属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33684	試料No. 19 遺跡名：鈴山遺跡（第3次） 遺構：SK113（土坑） グリッド：E-X12 炭化物No. 2	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	混合物除去 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第23表 測定試料および処理（2）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	“ ^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-33666 SK5(SR85柱穴)	-23.87 \pm 0.21	4118 \pm 23	4120 \pm 25	2852-2813 cal BC (20.7%) 2744-2727 cal BC (7.9%) 2696-2624 cal BC (39.6%)	2863-2807 cal BC (26.0%) 2759-2717 cal BC (15.0%) 2707-2580 cal BC (54.4%)
PLD-33667 SK30(SB86柱穴)	-23.52 \pm 0.23	4180 \pm 23	4180 \pm 25	2877-2860 cal BC (13.1%) 2808-2756 cal BC (43.5%) 2720-2704 cal BC (11.6%)	2882-2840 cal BC (20.1%) 2815-2677 cal BC (75.3%)
PLD-33668 SK31(落とし穴)	-22.13 \pm 0.19	3885 \pm 22	3885 \pm 20	2456-2416 cal BC (25.7%) 2410-2341 cal BC (42.5%)	2462-2298 cal BC (95.4%)
PLD-33669 SK45(SB88柱穴)	-26.98 \pm 0.19	2567 \pm 22	2565 \pm 20	796-774 cal BC (68.2%)	805-755 cal BC (92.0%) 680-670 cal BC (1.9%) 606-596 cal BC (1.5%)
PLD-33670 SH50(豎穴住居床面5cm上)	-23.88 \pm 0.15	4274 \pm 24	4275 \pm 25	2906-2887 cal BC (68.2%)	2915-2880 cal BC (95.4%)
PLD-33671 SF51(集石炉)	-24.14 \pm 0.22	9637 \pm 30	9635 \pm 30	9204-9127 cal BC (36.3%) 8996-8926 cal BC (31.9%)	9228-9116 cal BC (44.3%) 9076-9053 cal BC (2.4%) 9016-8842 cal BC (48.7%)
PLD-33672 SF53(集石炉)	-25.18 \pm 0.23	9536 \pm 32	9535 \pm 30	9118-9070 cal BC (21.1%) 9059-9010 cal BC (19.5%) 8913-8903 cal BC (3.1%) 8847-8788 cal BC (24.4%)	9128-8994 cal BC (47.6%) 8928-8759 cal BC (47.8%)
PLD-33673 SF60(煙道付炉穴)	-26.20 \pm 0.16	9650 \pm 32	9650 \pm 30	9220-9134 cal BC (48.3%) 8977-8934 cal BC (19.9%)	9238-9118 cal BC (55.5%) 9071-9058 cal BC (1.1%) 9010-8913 cal BC (32.3%) 8902-8847 cal BC (6.5%)
PLD-33674 SK62(SB89柱穴)	-25.85 \pm 0.27	3661 \pm 24	3660 \pm 25	2126-2091 cal BC (26.8%) 2044-2013 cal BC (26.1%) 1999-1979 cal BC (15.3%)	2135-2079 cal BC (34.3%) 2064-1955 cal BC (61.1%)
PLD-33675 SK67(SB105柱穴)	—	—	—	—	—
PLD-33676 SK48 (SB88柱穴)	—	—	—	—	—
PLD-33677 SK83(落とし穴)	-24.34 \pm 0.31	6938 \pm 29	6940 \pm 30	5845-5758 cal BC (68.2%)	5887-5741 cal BC (95.4%)
PLD-33678 SH84 (豎穴住居床面直上)	—	—	—	—	—
PLD-33679 SF91(煙道付炉穴)	-27.49 \pm 0.19	9587 \pm 32	9585 \pm 30	9137-9112 cal BC (7.7%) 9083-9046 cal BC (10.9%) 9025-8973 cal BC (16.1%) 8940-8839 cal BC (33.5%)	9156-8807 cal BC (95.4%)
PLD-33680 SF97(煙道付炉穴)	-27.71 \pm 0.19	9554 \pm 31	9555 \pm 30	9120-9005 cal BC (43.9%) 8917-8897 cal BC (6.9%) 8860-8811 cal BC (17.4%)	9136-8973 cal BC (51.4%) 8937-8775 cal BC (44.0%)
PLD-33681 SK100 (SB87柱穴)	-24.84 \pm 0.21	4185 \pm 22	4185 \pm 20	2878-2862 cal BC (14.0%) 2807-2758 cal BC (45.1%) 2718-2706 cal BC (9.1%)	2885-2847 cal BC (20.6%) 2814-2678 cal BC (74.8%)
PLD-33682 SK103(土坑)	-25.02 \pm 0.18	4370 \pm 22	4370 \pm 20	3011-2978 cal BC (29.6%) 2971-2925 cal BC (38.6%)	3082-3068 cal BC (4.0%) 3026-2913 cal BC (91.4%)
PLD-33683 SH108(豎穴住居石圓い炉)	-26.97 \pm 0.26	4342 \pm 25	4340 \pm 25	3010-2979 cal BC (27.1%) 2959-2953 cal BC (3.6%) 2942-2906 cal BC (37.6%)	3021-2901 cal BC (95.4%)
PLD-33684 SK113(土坑)	-24.26 \pm 0.20	2956 \pm 21	2955 \pm 20	1211-1128 cal BC (68.2%)	1259-1245 cal BC (1.8%) 1234-1108 cal BC (92.3%) 1099-1087 cal BC (1.3%)

第24表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

2 樹種同定

(1) はじめに

三重郡菰野町大字音羽に所在する鈴山遺跡の第2次および第3次調査で出土した炭化材について、樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行なわれている（放射性炭素年代測定の項参照）。

(2) 試料と方法

試料は、縄文時代早期の集石炉であるS F 51とS F 53、煙道付炉穴であるS F 60とS F 91、S F 97、縄文時代中期のS K 5（掘立柱建物S B 85柱穴）、S K 30（S B 86柱穴）、S K 100（S B 87柱穴）、S K 45（S B 88柱穴）、S K 48（S B 88柱穴）、S K 62（S B 89柱穴）、S K 67（S B 105柱穴）、堅穴住居跡であるS H 50、S H 84、S H 108、落とし穴であるS K 31、S K 83、土坑であるS K 103、S K 113から各1点出土した、計19点の炭化材である。

樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、広葉樹のクリとコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、ツツジ属の3分類群がみられた。また、試料が微細なため、広葉樹までの同定とした試料が6点あった。クリと広葉樹が各6点で、アカガシ亜属が5点、ツツジ属が2点であった。同定結果を第25表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第66図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc.
ブナ科 第66図 1 a-1 c (No. 8)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晚材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

ある。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第66図 2 a-2 c (No. 5)、3 a (No. 9)、4 a (No. 17)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韌で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(3) ツツジ属 *Rhododendron* ツツジ科 第66図

5 a-5 c (No. 18)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は10～20段程度の階段穿孔となり、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～4列が直立する異性で、幅1～5列となる。単列の放射組織は、レンズ状になる。

ツツジ属にはヤマツツジやサツキなどがあり、代表的なヤマツツジは北海道南部、本州、四国、九州に生育する。高さ1～5mになる半落葉低木の広葉樹である。材は堅くて緻密で、ねばり強い。

(4) 広葉樹 Broadleaf-wood 第66図 6 a (No. 15)

道管を有する広葉樹であるが、試料が微細で他の特徴が確認できず、広葉樹までの同定に留めた。

(4) 考察

縄文時代早期の集石炉であるS F 51の炭化材はツツジ属、S F 53の炭化材はクリであった。また、煙道付炉穴であるS F 60とS F 91の炭化材はクリ、S F 97の炭化材は広葉樹であった。試料は燃料材の可能性が考えられている。クリとツツジ属は共に薪炭材として利用される樹種であり（平井, 1996）、遺跡周辺に生育していたクリとツツジ属が利用されたと考えられる。同じ縄文時代早期の遺跡である松

阪市の鴻ノ木遺跡でも、早期の炉跡から出土した炭化材でクリが非常に多く確認されており（伊東・山田編、2012）、鈴山遺跡でも同様の傾向を示す可能性がある。

縄文時代中期のSK5（SB85柱穴）とSK30（SB86柱穴）の炭化材はクリ、SK45（SB88柱穴）とSK62（SB89柱穴）の炭化材はアカガシ亞属、SK100（SB87柱穴）とSK48（SB88柱穴）、SK67（SB105柱穴）の炭化材は広葉樹であった。これらの試料は、いずれも孤立立柱建物の柱の可能性がある。クリとアカガシ亞属は堅硬な樹種であり（伊東ほか、2012）、柱として選択的に利用されたと考えられる。

竪穴住居跡であるSH50の炭化材はアカガシ亞属、SH84の炭化材は広葉樹、SH108の炭化材はツツジ属であった。これらの試料は、焼けた建築材や燃料材の残渣などの可能性が考えられるが、詳細は不明である。アカガシ亞属とツツジ属は遺跡周辺にも

普通に生育する樹種であり（伊東ほか、2011）、遺跡周辺のアカガシ亞属とツツジ属が伐採利用されたと考えられる。陥穴であるSK31の炭化材はアカガシ亞属、SK83の炭化材はクリ、土坑であるSK103の炭化材はアカガシ亞属、SK113の炭化材は広葉樹であった。これらの試料の用途は不明である。遺跡周辺に生育していたクリやアカガシ亞属が伐採利用されたと考えられる。

小林克也

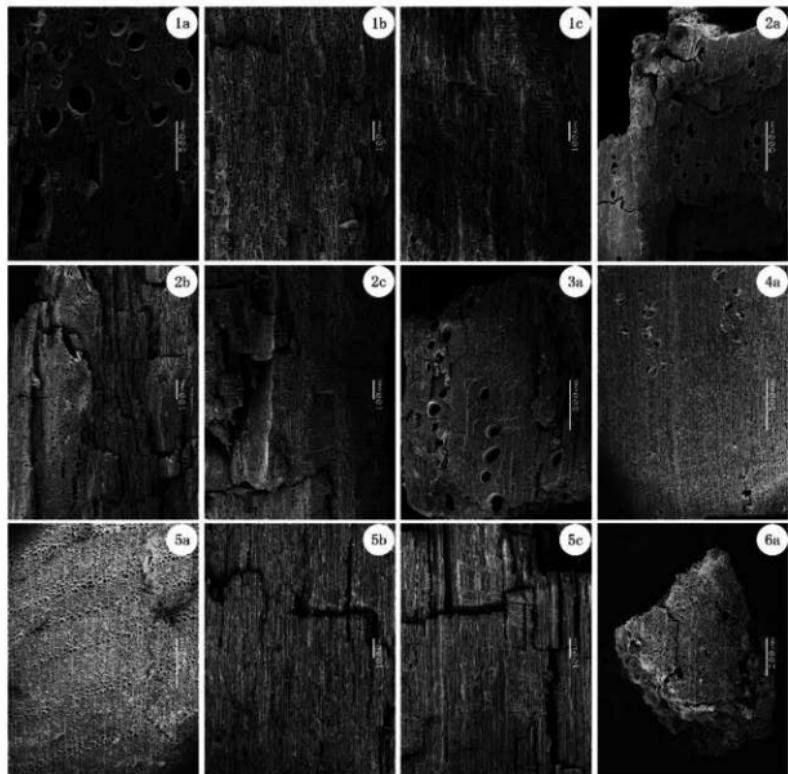
（バレオ・ラボ）

【引用文献】

- 平井信二（1996）木の大百科一解説編一、642p、朝倉書房。
- ・伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
- ・伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p、海青社。

試料No.	調査年次	遺構名	遺物No.	樹種	時期	年代測定番号
1	2次	SK5（SB85柱穴）	炭化物No. 7	クリ	縄文時代中期	P LD-33666
2	2次	SK30（SB86柱穴）	炭化物No. 5	クリ	縄文時代中期	P LD-33667
3	2次	SK31（陥穴）	炭化物No. 1	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	P LD-33668
4	2次	SK45（SB88柱穴）	炭化物No. 8	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	P LD-33669
5	2次	SH50（竪穴住居 床面5cm上）	炭化物No. 16	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	P LD-33670
6	2次	S F51（集石炉）	炭化物No. 19	ツツジ属	縄文時代早期	P LD-33671
7	2次	S F53（集石炉）	炭化物No. 24	クリ	縄文時代早期	P LD-33672
8	2次	S F60（煙道付炉穴）	炭化物No. 2	クリ	縄文時代早期	P LD-33673
9	2次	SK62（SB89柱穴）	炭化物No. 12	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	P LD-33674
10	2次	SK67（SB105柱穴）	炭化物No. 25	広葉樹	縄文時代中期	P LD-33675
11	2次	SK48（SB88柱穴）	炭化物No. 11	広葉樹	縄文時代中期	P LD-33676
12	2次	SK83（陥穴）	炭化物No. 17	クリ	縄文時代中期	P LD-33677
13	2次	SH84（竪穴住居 床面直上）	炭化物No. 20	広葉樹	縄文時代中期	P LD-33678
14	2次	S F91（煙道付炉穴）	炭化物No. 23	クリ	縄文時代早期	P LD-33679
15	2次	S F97（煙道付炉穴）	炭化物No. 21	広葉樹	縄文時代早期	P LD-33680
16	2次	SK100（SB87柱穴）	炭化物No. 22	広葉樹	縄文時代中期	P LD-33681
17	2次	SK103（土坑）	炭化物No. 15	コナラ属アカガシ亜属	縄文時代中期	P LD-33682
18	3次	SH108（竪穴住居 石圍炉）	炭化物No. 1	ツツジ属	縄文時代中期	P LD-33683
19	3次	SK113（土坑）	炭化物No. 2	広葉樹	縄文時代中期	P LD-33684

第25表 出土炭化材の樹種同定結果一覧



1a-1c. クリ(No. 8)、2a-2c. コナラ属アカガシ亜属(No. 5)、3a. コナラ属アカガシ亜属(No. 9)、4a. コナラ属アカガシ亜属(No. 17)、5a-5c. ツツジ属(No. 18)、6a. 広葉樹(No. 15)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第66図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

3 産地同定

(1) はじめに

三重郡菰野町大字音羽に所在する鈴山遺跡から出土した縄文時代中期の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。なお、成果品等の所有権および著作権の帰属は、三重県埋蔵文化財センターにある。

(2) 試料と方法

分析対象は、鈴山遺跡の第2次および第3次発掘調査で出土した石器17点である(第26表)。いずれも縄文時代中期の石器とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジと精製水を用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である、判別図法を用いた(望月、1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; countper second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3) Mn強度×100/Fe強度) log(Fe強度/K強度)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度

の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遭出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合は、log(Fe強度/K強度)の値が減少する点に注意が

分析No.	遺跡	出土遺構	器種	最大厚さ(mm)	最大長さ(mm)
1	鈴山遺跡(2次)	S1150上(ふらいぬけ)	石鏃	3.8	20.0
2	鈴山遺跡(2次)	S1150上(ふらいぬけ)	剥片	2.2	13.0
3	鈴山遺跡(2次)	S1150上(ふらいぬけ)	剥片	1.8	15.1
4	鈴山遺跡(2次)	S1150下(ふらいぬけ)	石鏃破片	2.0	9.0
5	鈴山遺跡(2次)	S1150下(ふらいぬけ)	剥片	3.6	11.8
6	鈴山遺跡(2次)	S1184(ふらいぬけ)	剥片	0.7	6.2
7	鈴山遺跡(2次)	S1184中(ふらいぬけ)	剥片	1.7	14.8
8	鈴山遺跡(2次)	SK1(ふらいぬけ)	剥片	2.8	23.2
9	鈴山遺跡(2次)	SK2(ふらいぬけ)	剥片	1.2	9.6
10	鈴山遺跡(2次)	SK5(ふらいぬけ)	剥片	2.2	8.4
11	鈴山遺跡(2次)	SK92(ふらいぬけ)	剥片	5.1	17.0
12	鈴山遺跡(3次)	S1110(ふらいぬけ)	剥片	4.0	10.0
13	鈴山遺跡(3次)	S1110(ふらいぬけ)	剥片	3.4	11.8
14	鈴山遺跡(3次)	S1110下(ふらいぬけ)	剥片	3.3	8.1
15	鈴山遺跡(3次)	S1110下(ふらいぬけ)	剥片	1.9	9.8
16	鈴山遺跡(3次)	S1110下(剥片)(ふらいぬけ)	剥片	1.2	6.0
17	鈴山遺跡(2次)	S1150中(ふらいぬけ)	剥片	3.3	11.0

第26表 分析対象となる黒曜石製石器



第67図 黒曜石産地分布図(東日本)

必要である（望月，1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第27表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第67図に各原石の採取地の分布図を示す。

基盤地図	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2), 池露頭(10), ト勝石露頭(2), 下河床(11), アジサイの露頭(10)
	赤井川		曲川・土川(24)
	上士幌		十勝三段(4), タウショベツ川右岸(42), タウショベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
	渡戸		渡戸山(5)
	所山		所山(5)
	豊浦	豊浦	豊浦(10)
	旭川		旭川・近文台(8), 開拓台(2)
	名寄		名寄
	秩父別		忠烈川(19)
	秋父親		秩父別(65)
			秩父別2
			秩父別3
	遠軽	遠軽	社名瀬川河床(2)
	生田原		生田原(7), 仁田布川河床(10)
	留辺蘿	留辺蘿1	ケショウマツ川河床(9)
		留辺蘿2	
	網走		網走市営スキー場(9), 安寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)
青森	木造		出来島(出島南海岸(15), 錦ヶ坂(10))
	深浦		八森山(岡崎浜(7), 八森山公園(8))
	青森		青森(天内川(6))
	秋田	男鹿	金ヶ崎(金ヶ崎温泉(10))
		能美	能美(海岸(4))
岩手	北上川	北上川1	北上川(9), 真城(33)
		北上川2	
		北上川3	
宮城	宮崎		湯ノ倉(湯ノ倉(40))
	色麻		根岸(40)
	仙台	秋保1	上磯(18)
		秋保2	
	塩竈	塩竈	塩竈(10)
山形	羽黒		月山(月山莊前(24), 大越沢(10))
	鶴沼		鶴沼(たらの代(19))
新潟	新発田		飯坂(飯坂牧場(10))
	新津		金津(金津(7))
	柏木	高原山	甘湯沢(甘湯沢(22))
長野	和田	七尋川	七尋川(3), 宮川(3), 技持沢(3)
		西御屋	美容ヘーリット岩集積場(30)
		魔山	魔山(14), 東御屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		上原橋	上原橋西(10)
		上原橋1	新和田トンネル北(20), 土坂橋北(58), 土坂橋西(1)
		古崎	和田岬トンネル上(28), 古崎(38), 和田岬スキーパーク(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
		高松沢	高松沢(19)
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35), 星ヶ崎(20)
	茅野		冷山(20), 麦草崎(20), 茅草崎東(20)
神奈川	箱根	芦ノ湖	芦ノ湖(20)
		御宿	御宿(51)
		鍋冶屋	鍋冶屋(20)
静岡	天城	上多賀	上多賀(20)
		柏崎	柏崎(20)
東京	神津島	恩地島	恩地島(27)
		砂壁崎	砂壁崎(20)
鳥取	延岐	久見	久見バーライト中(6), 久見採掘現場(5)
		荒浦	荒浦(其浦海岸(3), 加茂(4), 岸浦(3))

第27表 東日本黒曜石産地の判別群

(3) 分析結果

第29表に黒曜石製石器の測定値および算出した指標値を、第68図と第69図に黒曜石原石の判別図に黒曜石製石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。なお、分析No. 16は、観察の結果、無色透明で黒曜石ではないと考えられたため、別途半定量分析を行った。その結果、ほぼケイ素(SiO₂)のみの化学組成であり（第28表）、水晶と確認された。

分析の結果、16点の黒曜石製石器のうち、9点が星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）の範囲にプロットされた。また、3点（分析No. 2, 3, 14）は第69図では星ヶ台群の範囲に、第68図では星ヶ台群の下方に当たる位置にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ（望月, 1999）、試料は星ヶ台群に属する可能性が高い。

残りの4点（分析No. 5, 6, 9, 10）は、星ヶ台群の近くにプロットされるものの、合致する判別群ではなく、産地は不明であった。ただし、この4点は、第68図では互いに近い位置にプロットされ、第69図では分析No. 9, 10の下方に分析No. 5, 6がプロットされており、同一判別群である可能性がある。ここでは不明1群とした。

第29表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

産地の判明した12点は、いずれも信州産であった。長田（2011）では、繩文時代を中心とした愛知県、岐阜県、三重県内の18遺跡442点の黒曜石産地推定結果が集成されている。これによると、信州産が400点と圧倒的多数であるが、神津島産が15点、箱根産、柏崎産が各1点と、少量ながら信州産以外の黒曜石も確認されている。

(4) おわりに

鈴山遺跡より出土した縄文時代中期の石器17点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、12点が諏訪エリア産の黒曜石と推定された。また、4点は産地不明黒曜石、1点は水晶であった。

分析No.	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	CaO	材質
16	0.31	98.80	0.80	0.10	水晶

第28表 分析No. 16の半定量分析結果

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	$\frac{\text{Yn}}{\text{Fe}}$	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア	分析 No.
1	238.1	91.5	903.6	625.1	239.5	315.9	617.2	34.77	10.12	13.32	0.58	星ヶ台	諏訪	1
2	369.0	94.0	928.1	652.1	238.3	318.8	610.4	35.84	10.12	13.10	0.40	星ヶ台?	諏訪?	2
3	338.4	89.3	889.5	652.5	227.6	308.9	606.5	36.34	10.04	12.67	0.42	星ヶ台?	諏訪?	3
4	193.3	75.2	771.7	480.2	178.6	238.4	457.4	35.45	9.75	13.19	0.60	星ヶ台	諏訪	4
5	309.9	86.3	871.9	620.9	204.3	280.0	525.6	38.07	9.90	12.53	0.45	不明1?	不明	5
6	90.7	23.5	246.7	152.7	53.5	69.9	128.2	37.76	9.52	13.24	0.43	不明1?	不明	6
7	208.7	82.3	838.6	550.0	203.0	267.3	510.3	35.93	9.82	13.26	0.60	星ヶ台	諏訪	7
8	119.9	47.3	469.3	314.5	122.8	164.1	315.7	34.29	10.09	13.39	0.59	星ヶ台	諏訪	8
9	97.6	38.5	410.0	228.0	81.9	106.7	199.8	36.98	9.40	13.29	0.62	不明1	不明	9
10	167.2	64.6	692.3	390.6	145.5	186.4	354.6	36.26	9.32	13.51	0.62	不明1	不明	10
11	311.6	122.2	1162.6	802.0	301.7	404.1	781.0	35.04	10.52	13.18	0.57	星ヶ台	諏訪	11
12	165.3	64.9	662.0	402.4	148.4	196.7	376.7	35.79	9.80	13.20	0.60	星ヶ台	諏訪	12
13	143.7	55.0	544.2	379.6	146.9	195.7	379.8	34.45	10.10	13.33	0.58	星ヶ台	諏訪	13
14	116.3	31.6	297.0	215.3	79.2	108.8	214.3	34.86	10.63	12.83	0.41	星ヶ台?	諏訪?	14
15	217.4	83.9	846.0	549.1	200.8	261.4	496.9	36.41	9.92	13.31	0.59	星ヶ台	諏訪	15
17	262.1	102.2	1037.9	650.8	241.0	321.4	621.5	35.47	9.84	13.14	0.60	星ヶ台	諏訪	17

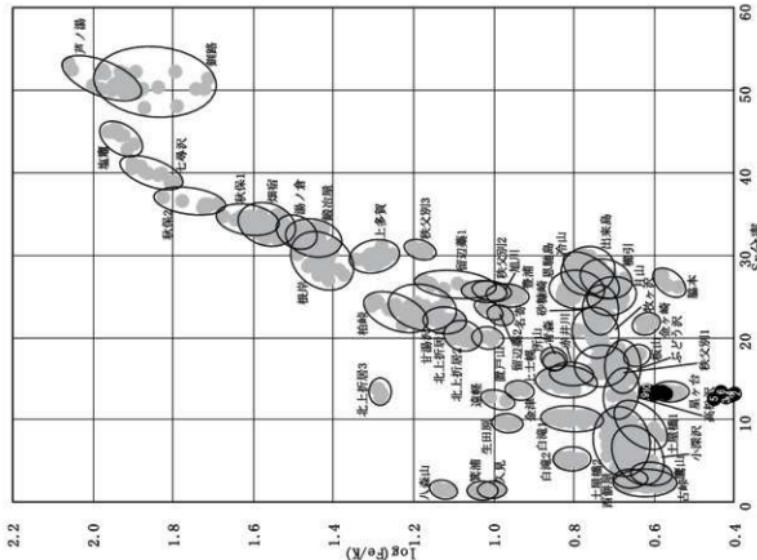
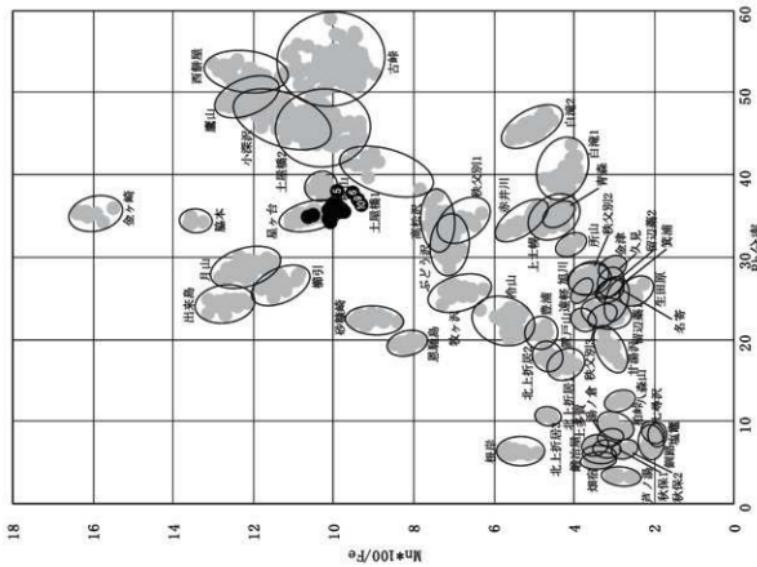
第29表 測定値および産地推定結果

【引用文献】

- ・望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定、大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」：172-179、大和市教育委員会。
- ・長田友也（2011）水汲遺跡の位置づけ、長田友也編「水汲遺跡」：249-252、豊田市教育委員会。

竹原弘展

（バレオ・ラボ）



第68回 黒耀石产地推定判別図 (1)

第69回 黒曜石产地推定判別図 (2)

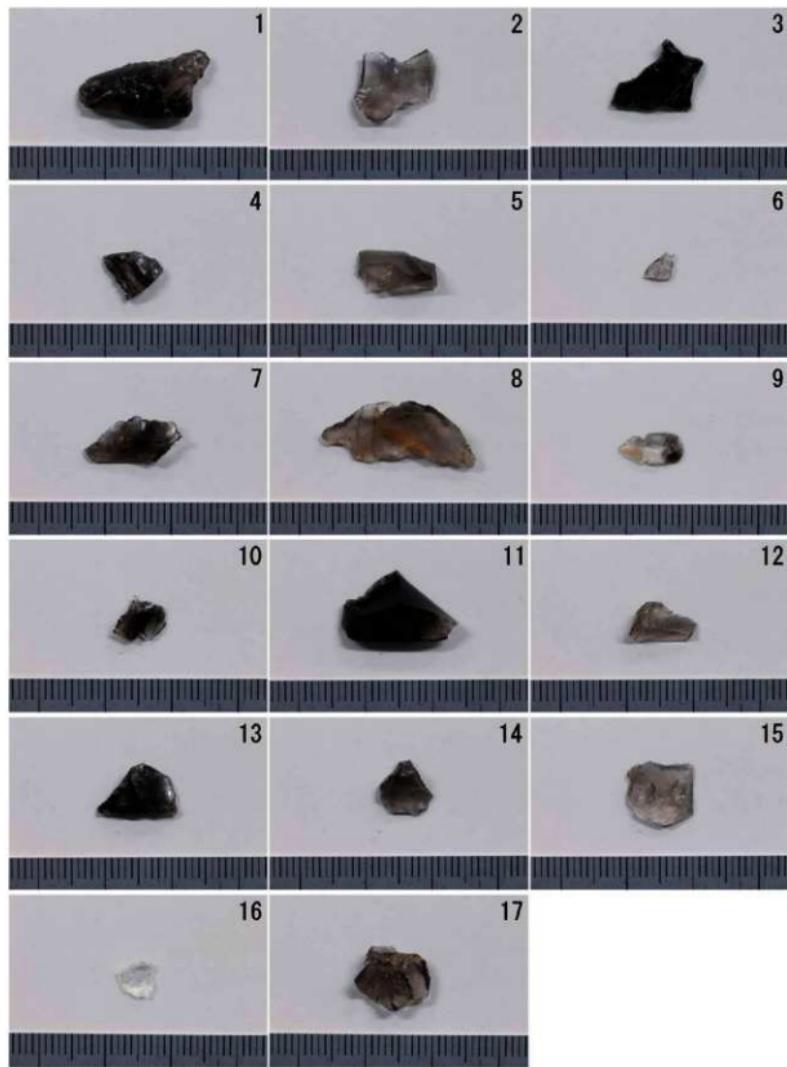


写真3 分析試料写真

VI 結語

1 繩文時代早期

(1) 遺模

煙道付炉穴 西調査区で10基を検出した。いずれも上部が後世に削平を受けて、煙道の天井部が無く、一見土坑のようであるが、全体の形状や前傾（オーバーハング）した壁、および焼土の様子などから、煙道付炉穴と判断した。

なお、三重県内では、当遺跡を含めて9遺跡で確認されている（第30表）。

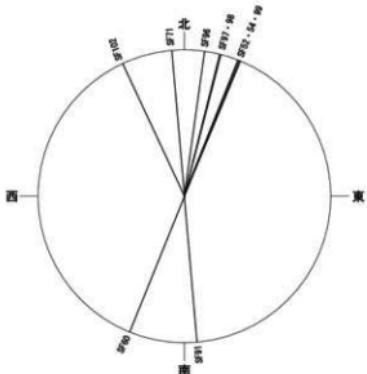
まず、全体構造の概略は、遺存状態の良いものから推定すると、全般的な平面形は細長い二等辺三角形をしており、全長は2.5m程度と思われる。

燃焼坑から煙道に向けて浅くなる例が多く、煙道天井部が崩落しないように、ある程度の深さ（60～70cm以上）が必要であったと思われる。

また、焼土は煙道前半部の底面に 1 m 程広がり、壁面にまで及ぶ例もある。厚さは 2 ~ 5 cm 程である。

次に、燃焼坑から煙出坑を見た方向は、10基中、8基が概ね北向き、2基が南向きで、東向きや西向きは無い（第70図）。

ところで、10基の中には、重複する例（SF52と



第70図 煙道付炬穴の燃焼坑から煙出坑をみた方角

S F54とS F99、S F96とS F97とS F98、S F91とS F102) と、単独の例 (S F60、S F71) が存在している。

煙道付炉穴は、先行する遺構の窪みを利用し、重複して設営されることが多いと指摘されており⁹⁾、当遺跡でも重複する例は、それと同様のことと言えると推定する。

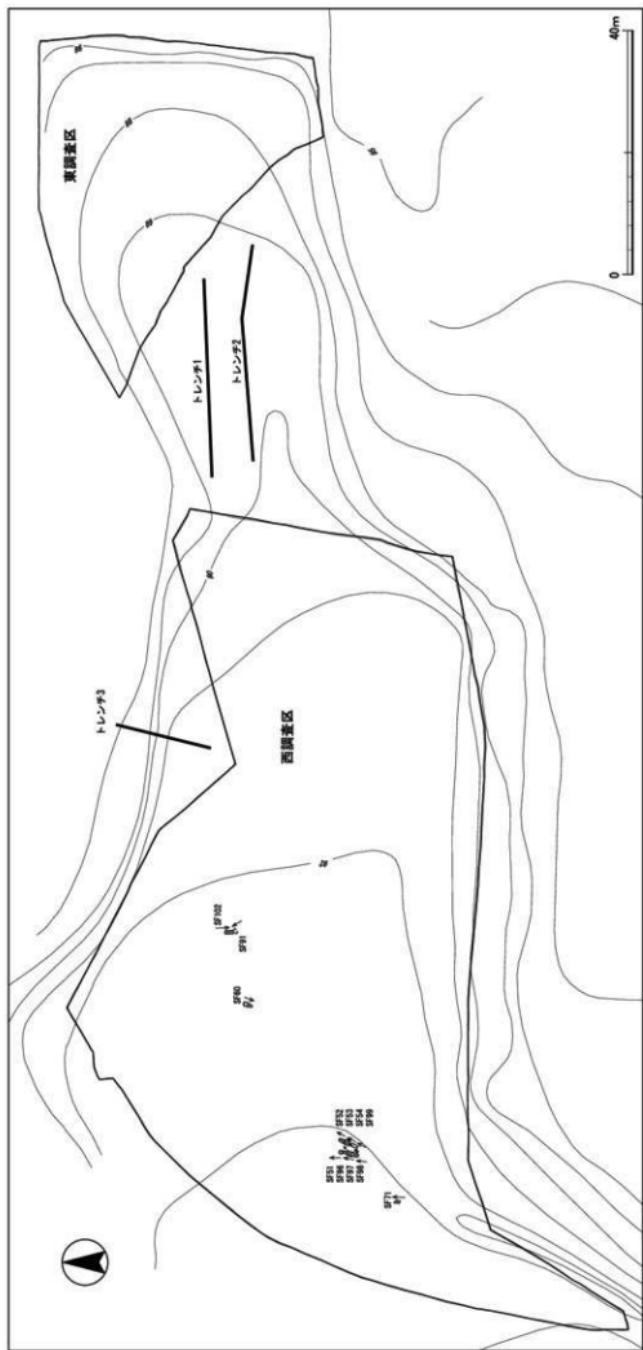
最後に、存続期間は1時期に1基設営したと仮定すると、3基の重複あるいは単独で分布する状況から、最短で3時期、最长で10時期だったと推定し、人々が何回か回帰した累積結果であると思われる。

また所属時期は、S F 52については出土した押型文土器から、早期前半であることを示し、重複する S F 54・99は窪みを利用したと推定することから、近しい時期であろう。その他の煙道付が穴については検討を要するが、平面形や焼土、埋土の様子が類似することから、それほど離れた時期ではないと推定する。

なお、報告のように、出土した炭化材の年代測定の結果は、 ^{14}C 年代が $9650 \pm 30 \sim 9535 \pm 30$ BCBP、 2σ 年代範囲が 9238～8759 calBC の内に収まり、早期前葉に相当する。

遺跡名	所在地	煙道付 炉穴数
中野山遺跡	四日市市北山町	174基
東庄内A遺跡	鈴鹿市東庄内町・ 龟山市崎町	2基
大鼻遺跡	龟山市太岡寺町	16基
西出遺跡	津市美里町	3基
浦ノ木遺跡	松阪市射和町・中万町	21基
コドノB遺跡	多気郡明和町上村	3基
坂倉遺跡	多気郡多気町東池上	19基
野添大辻遺跡	度会郡大紀町野添	11基

第30表 煙道付炉穴出土遺跡一覽表



第71図 早期の主要遺構全体図 (1 : 800)

集石炉 西調査区で2基を検出した。共に煙道付炉穴と重複しており、新旧関係は煙道付炉穴より新しい。平面形は略円形をしており、残存深は0.16～0.18mを測るが、復元深は煙道付炉穴と同等の0.6～0.7m程度であったと推定する。

埋土中に焼石や炭化物が含まれていたことで、壁面や底面に被熱が認められないが、「集石炉」とした。一般に「集石炉」には底面に石組を配する類もあるが、本遺構はそれに該当しない。しかし、焼石や炭化物が認められたことから、何らかの調理施設であった可能性はある。

出土した炭化材の年代測定の結果は、¹⁴C年代および2σ暦年代範囲は、煙道付炉穴と同じ範囲に收まり、早期前葉に相当する。

2 縄文時代中期

(1) 遺物

土器 中期中葉や後期初頭の例も數点認められたが、圧倒的多数は中期後葉に属する。そのほとんどが、遺構から出土した。東調査区では古相のものの割合が多く、西調査区では新相のものの割合が高い傾向にある。深鉢が大半で、このほかに台付深鉢や浅鉢、壺が寡少ある。完形は無く、小片のみである。

中期後葉でも古い時期（1～3期）では、地方色が弱くて量も少ない。一方、より新しい時期（4期新～5期新）になるほど地方色が強くなり、出土量も多くなる傾向を示す。

具体的には、北（美濃地域）と西（畿内・瀬戸内

地域）の地域と類似するものが見られる。2・3期の中でも特に立体装飾系のものは、美濃地域の塚原遺跡²や戸入村平遺跡³の東の地域の土器と類似し、独自性は見出しがたい。それに対し、4・5期は大波状口縁の深鉢など、西の地域（北白川C式C類）と類似するものもあるが全ては一致せず、似て非なるものである。つまり当地の独自性が強まる傾向にあるといえよう。また、西からの影響も北経由であったと見られる⁴。

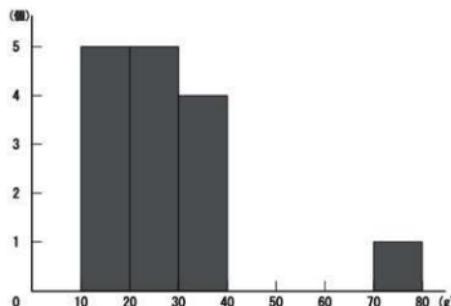
石器 出土した石器は、厳密には早期か中期かを特定できない。しかし、当遺跡から出土した土器のほとんどが中期であるため、石器についてもその多くは中期であると推定した。

礫石器（台石・石皿・磨石・敲石・穀器・切目石鍤等）は、遺跡周辺で採取できる石材（花崗岩・流紋岩・砂岩・ホルンフェルス・閃綠岩）である。一方、剥片石器（石鏃・石錐・削器等）は、サヌカイトや下呂石・黒曜石などという、他地域の石材を使用している。

各遺構埋土の箇掛けにより、多量の剥片や碎片を検出した。石材の割合は、サヌカイトが大半を占め、次にチャート・下呂石・黒曜石の順に多い。また、拳大の大型剥片も検出したことから、他地域から石材を運び、当遺跡で石器の製作をしていたことが推定される。

器種組成としては、狩猟具と食物加工具・漁労具・工具がある。中でも、狩猟具の石鏃が78点と多い。

また、漁労具と考えられる切目石鍤は18点を数え、



第72図 切目石鍤の重量（残存度の高いもののみ対象とした）

10~40 g のものが大半で、70~80 g のものも認められた（第72図）。

一方、植物加工工具の台石や石皿・敲石・磨石は、堅穴住居の棟数に対しては少ない感がある。しかし、消耗度や同時の使用数、あるいは他の素材なども考慮する必要がある。すると、植物食と狩猟や漁労がバランス良く採用されていたと考えられる。

なお、石錐は切目のみで打ち欠きが認められない点や、打製石斧の少なさにも注目しておきたい。

（2）遺構

堅穴住居（第74図） 西調査区で8棟、東調査区で5棟、合計13棟を検出した。

4個の主柱穴だけの残存例と周溝や壁まで、さらには周溝外に建物に付随するような小穴が残存する例もある。これらは後世の削平による残存の違いに過ぎず、構造上の基本的な相違はないと考える。

周溝が形作る平面形は、一見したところ略隅丸方形をしている例が多い。しかし、よく観察してみると、周溝は部分的に直線的で辺を意識しているようにも感じられる。北勢地域の堅穴住居は中期に円形から隅丸方形に変化するとされる²が、当該遺構はその過渡期の形状であろうか。

一方、主柱が周溝に近いという特徴を持ち、その分だけ垂木先は周溝から遠かつたはずである。さらに、周溝外には小穴がめぐっている例もある。全体的に何十cmかは削平されていることも考慮すると、これらの小穴は主柱からの距離が垂木先穴としては近過ぎることになり、垂木のような傾斜も認められない。したがって、これらの小穴は垂木先穴ではなく、側柱とも言うべき小柱穴であった可能性も考えられよう。

なお、屋内炉は、SH108に見られる石圍炉が一般的であったように思われ、石を配した痕跡と思われる窪みや、相当する大きさの石がSH50やSH84などで検出されている。

主柱を結んだ形は、正方形ではなく台形状をしており、柱間の最も狭い面（台形の上辺）の奥寄りに炉が位置する傾向にある。そのため、この反対側（台形の底辺）を出入口と推定した。

なお、この出入口と推定した周溝のほぼ中央には、SH50・SH106・SH107のように小穴や土坑を検

出した例がある。これらは、踏み段の痕跡、階段や梯子を支える支柱や、出入口付近で見つかることが多い埋甕の抜取り痕跡の可能性も考えられる³。

また、検出した13棟の出入口の方向は、東や南を向いており、北や西に向く例は1例もない。この原因は、日当たりや風向き、あるいは、雨水処理のために南東方向に延びる丘陵上に位置する地形の傾斜を考慮した事などが考えられようか。

堅穴住居の平面形や規模、柱穴や屋内炉の位置は、美濃地域の宮之脇遺跡⁴などの例と類似する。土器の地域色や掘立柱建物の伝播の問題などと共に、さらに類例を検証していく必要があろう。

また、平面規模は調査区によって規模の違う傾向が認められる（第31表）。主柱の平均的な柱間は、東調査区で概ね2mの後半から3m程度、西調査区で概ね2m弱から2mの前半である。

また、堅穴住居から出土した土器の型式は、両調査区とともに、中期後葉に属するが、東調査区の5棟は2~3期に、西調査区の8棟は4期古~5期古に属しており、東調査区の方が古い。

つまり、東調査区の堅穴住居は、西調査区より古くて柱間が広く、平面規模も大きく、新しくなると柱間が狭く、平面規模も小さくなる傾向にある。

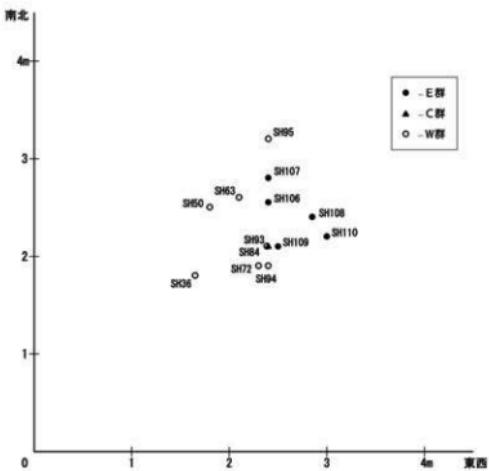
今後、主柱の柱間の広狭や平面規模の大小と時期の相関関係が、他の遺跡でも見られるのか、比較検討を要するものと思われる。

掘立柱建物（第74図） 西調査区で6棟を検出した。

柱穴は、平均して径約0.81mで、堅穴住居の柱穴（平均径約0.49m）と比較して大きい。桁行の柱間は狭く、一方で梁行の柱間は広い1間であり、弥生時代以降の高床倉庫と基本的に同じ柱の配置である。また、柱穴の周辺に壁周溝や炉（焼土）はみられない。以上の点から、切妻の高床倉庫で、妻入りの可能性があると推定した。ただし、堅穴住居の総数が少ないことから、平地式住居である可能性も残る⁵。

ところで、6棟の棟方向は、等高線には沿う位置に立地し、梁間はほぼ同じであるが、桁行3間のものと桁行2間のものが、それぞれ3棟ずつ、棟方向を概ね東西にして、西調査区の北西部と南西部の2ヶ所にまとまりを見せてている。

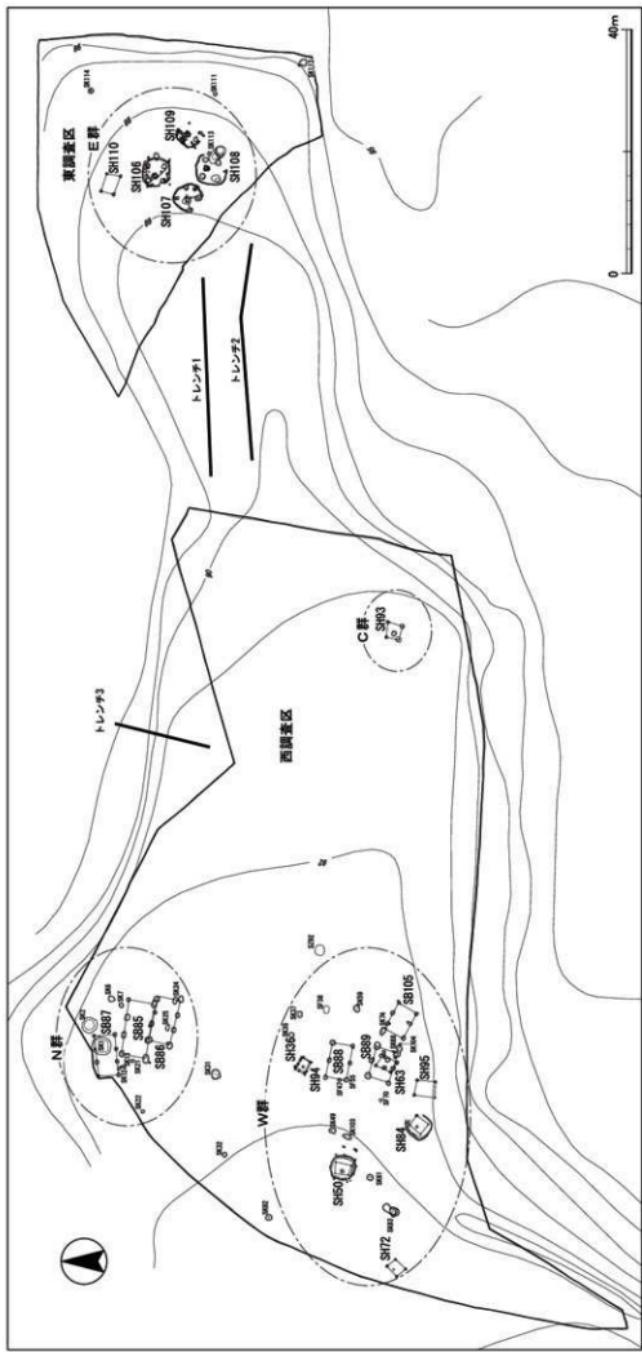
規模については、南西部の3棟よりも北西部の



第73図 整穴住居の主柱の平均柱間

遺構番号	調査区	規模(m) 長径・短径	残存最大深 (m) 上:長径・短径 下:最大深	最大柱穴(m)	柱間(m)	周溝(m) 上:最大幅 下:最大深	その他
S H36	西調査区	不明	不明	0.34・0.3 0.27	北面2.37・南面2.37 東面1.52・西面1.8	不明	石圍炉?
S H50	西調査区	4.1m四方	0.26	0.57・0.38 0.48	北面1.9・南面1.7 東面2.7・西面2.3	0.8 0.16	建替 垂木穴 石围炉
S H63	西調査区	不明	不明	0.6・0.55 0.48	北面2.2・南面2 東面2.42・西面2.7	不明	石围炉?
S H72	西調査区	不明	不明	0.52・0.38 0.3	北面2.4・南面2.28 東面1.76・西面1.88	不明	石围炉?
S H84	西調査区	4.2・3.9	0.45	0.7・0.55 0.42	北面2・南面2.14 東面2.4・西面2.35	0.24 0.18	石围炉?
S H93	西調査区	不明	不明	0.82・0.78 0.53	北面2.57・南面2.34 東面2.49・西面2.08	不明	石围炉?
S H94	西調査区	不明	不明	0.38・0.28 0.23	北面1.84・南面1.88 東面1.58・西面1.88	不明	石围炉?
S H95	西調査区	不明	不明	0.53・0.38 0.39	北面2.02・南面2.54 東面3.04・西面3.48	不明	不明
S H106	東調査区	5.55・4.1	0.19	0.66・0.5 0.22	北面2・南面1.9 東面2.2・西面1.96	0.06	石围炉?
S H107	東調査区	4.6・4以上	0.52	0.86・0.6 0.5	北面2.2・南面2 東面2.42・西面2.7	0.07	石围炉?
S H108	東調査区	5・4.6以上	0.09	1.26・0.9 0.28	北面2.2・南面2.3 東面1.76・西面2	0.06	石围炉
S H109	東調査区	不明	不明	0.45・0.42 0.34	北面2.06・南面2.22 東面2.6・西面2.4	0.02	石围炉?
S H110	東調査区	不明	不明	0.59・0.51 0.38	北面3.07・南面3.31 東面2.26・西面2.1	不明	不明

第31表 整穴住居一覧表



第74図 中期の主要遺構全体図（1：800）

3棟の方が大きいため、高床倉庫とするなら収藏する能力は高いと思われる。

そして、北西部の3棟は、それぞれ近接して、一部は重複しており、同時存在は考え難く、建て替え、もしくは時期差があるものと思われる。

県内での縄文時代中期の掘立柱建物の検出例には、四日市市の小牧南遺跡³がある。ともに中期後葉に属している。鈴木遺跡の掘立柱建物は、中期後葉の2・3期頃ではなく、4・5期頃に出現すると推定され、小牧南遺跡と同時期ないしは古い可能性がある。当例よりも先行する例は現時点では未確認であるため、当地域の掘立柱建物の出現期の様相を知る好例となった。

なお、掘立柱建物の類例として、岐阜県の塚原遺跡⁴があげられる。また、出土土器の中には、美濃地域との類似性を窺わせるものもあるため、北方からの影響を受けた可能性も考えられる。今後、類例の増加を待ち、県内の掘立柱建物の出現について、検討を加えていきたい。

略穴 西調査区で7基、東調査区で2基を検出した。平面形は概ね楕円形で、底面中央に径0.2m程の杭穴と思われる小穴1基を有するものが7基ある。陥穴から、中期後葉の一定時期の土器を検出しているため、当時期のものであると判断した。

7基の陥穴は、いずれも単独であり、等高線に沿って並ぶものではない。したがって、追込糞ではなく、獣道に設置した罠糞であったと推定する⁵。

また、陥穴の場所は、堅穴住居と近接する例もあるが、陥穴は、非居住域に設置された可能性が高いと考えられるため、堅穴住居とは同時存在でなく、時期差があったと考えられる。

群構成 最後に、中期の遺構が所在する位置や、存続の時期などについて、まとめてみることにする。

東西両調査区を合わせて、堅穴住居13棟と掘立柱建物6棟を検出したが、均一な分布ではなく、偏在する傾向が窺える。具体的に、まとまり（群）を見せるのは、大きく4つのエリアである。南西部を「W群」・北西部を「N群」・東部を「E群」・中央部は単独だが「C群」と呼んでおく（第74図）。

W群 坚穴住居7棟と掘立柱建物3棟がまとまりを見せる。堅穴住居は近接もしくは、重複するものが

あり、掘立柱建物には重複はないが、やや近接している。また、堅穴住居と掘立柱建物が重複しているものもある。出土土器の多くは、3土器型式（4期新～5期新）に及んでいる。

したがって、堅穴住居2棟程度と、掘立柱建物1棟が、一つの単位（セット）として、3時期程度に居住した累積結果と考えられないだろうか。ただし、遺構は土器型式より存続期間が短かったであろうことから、3時期の居住は断続的であったと推定する。

N群 掘立柱建物3棟が、まとまりを見せる。この3棟の桁行は全て3間であり、W群の3棟が全て2間であることとは対照的である。梁間はほぼ同規模であることから建物規模も大きい。また、この3棟は一部に重複がみられ、1・2棟が2～3時期にわたって存在したと推定する。出土土器は3土器型式（4期新～5期新）であり、その内4期新～5期古が多く見られる。したがって掘立柱建物は3時期にわたって存在した累積結果であると推定する。ただし、やはり遺構は土器型式より存続期間が短かったであろうから、ここでも3時期の存在は断続的だったと考えられる。

なお、このN群西側の調査区外に堅穴住居が存在している可能性もあるが、調査区内では確認されず、W群のような堅穴住居と掘立柱建物の単位（セット）は、不明である。

ただし、仮に、堅穴住居が周囲に存在していないとした場合、W群の掘立柱建物との規模の相違や数の一一致などから判断して、W群の単位と想定した堅穴住居2棟程度と掘立柱建物1棟の単位（セット）に、このN群の掘立柱建物が、個々に組み合わさる可能性も考えられようか。

E群 坚穴住居5棟がまとまりを見せており、掘立柱建物は確認されていない。堅穴住居の5棟の内、近接しているものもあり、すべての同時存在は考えにくい。また、出土土器は2～3期のものの割合が、他の群よりも多く、前後のものも見られる。

したがって、ここでも1・2棟が3時期程にわたり居住した累積結果と考える。ただし、やはり遺構は土器型式より存続期間が短かったであろうことから、3時期の居住は断続的であったと考える。

C群 壁穴住居1棟だけが存在している。西側はW群方向へと平坦であり、東側へは緩やかに傾斜して下っている。後世の削平などによる、遺構の未検出も考えられなくもないが、他に壁穴住居や掘立柱建物もない。

まとめ 以上、4つの群を見てきた。群によっては、壁穴住居と掘立柱建物が単位（セット）となり、または、掘立柱建物や壁穴住居だけが、概ね2～3時期の変遷をたどりながら、断続的に集落が営まれてきた様相が、浮かび上がってきたものと思われる。

今回の発掘調査区は、周知の埋蔵文化財包蔵地範囲の大半、約8～9割がその対象となった。言い換えれば、ほぼ、遺跡の全体を調査したことになる。

埋蔵文化財包蔵地範囲外の西側については、地形の大きな変換点もないため、遺構の更なる広がりも想定されるが、現時点では明言できない。

仮に、埋蔵文化財包蔵地範囲が、概ね正しいとすれば、前述の「群構成」から読み取れる、壁穴住居と掘立柱建物の単位（セット）などは、妥当であるかもしれない。

小結 鈴山遺跡の発掘調査で得られた縄文時代早期および中期の遺構や遺物の発見は、北勢地域における縄文時代の様相を知る上で貴重な手掛かりとなつた。なかでも、早期の煙道付炉穴から、人々の生活がおよそ1万年前には始まっていたことを明らかにした。また、県内最古である掘立柱建物からは、その出現期の様相について考える好例となった。それらの調査成果は、北勢地域に限らず、県内や近接する地域の縄文時代の研究に影響を与えるとともに、郷土の歴史を塗り替える程の重要な遺跡であることも判明した。
(中村)

【註】

- ①小瀬学「炉穴とその機能」『縄文時代の考古学5 なりわい・食糧生産の技術』(同成社 2007年)
- ②県教育委員会「塙原遺跡・塙原古墳群」(1989年)
- ③財團法人岐阜県文化財保護センター「岐阜県文化財保護センター調査報告書 第11集 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集 戸入村平遺跡」(1994年)
- ④高橋健太郎氏のご教示による。
- ⑤田村陽一「縄文時代住居について」『三重県史 資料編考古1』(三重県 2005年)

⑥石井寛氏のご教示による。

⑦可児市教育委員会「宮之脇遺跡A地点」「宮之脇遺跡B地点」『川合遺跡群』(1994年)

⑧前掲註⑥と同じ

⑨三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報IV』(2014年)

⑩前掲註②と同じ

⑪大泰時統「北日本の陥れ穴」『縄文時代の考古学5 なりわい・食糧生産の技術』(同成社 2007年)

⑫前掲註⑪と同じ

【参考文献】

- ・石井寛「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録第6冊』(港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1989年)
- ・石井寛「縄文時代掘立柱建物址に関する諸議論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集』(帝京大学山梨文化財研究所 1995年)
- ・石田由紀子「三重県内の中期末土器について」『東海縄文研究会 第13回研究会 三重県における縄文時代中期末発表資料集』(東海縄文研究会 2017年)
- ・小畠弘己「縄文時代の環境変動と植物利用戦略」『考古学研究 第63巻第3号』(考古学研究会 2016年)
- ・小林達雄「多摩ニュータウンの先住者」『月刊文化財1月号』(文化庁文化財保護部監修 1973年)
- ・中村法道「三重県の縄文時代掘立柱建物について」『東海縄文研究会 第13回研究会 三重県における縄文時代中期末発表資料集』(東海縄文研究会 2017年)
- ・林謙作「縄文期の集団領域－仙台湾岸を中心とした予察－」『考古学研究 第20巻第4号』(考古学研究会 1974年)
- ・堀越正行「小堅穴考」(一)～(四)『史館 5号・6号・8号・9号』(1975～1979年)
- ・山田猛「煙道付炉穴について」『第10回 東海縄文研究会 東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題』(東海縄文研究会 2014年)

写 真 図 版

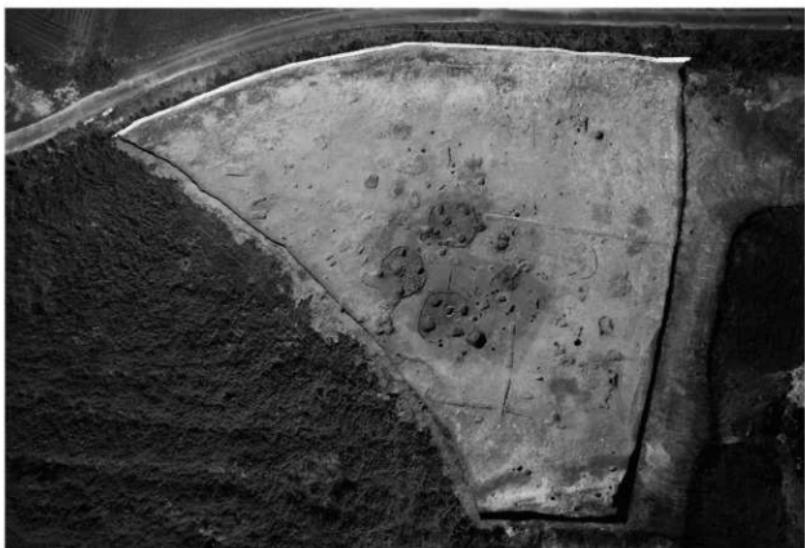


西調査区遠景（北から）

写真図版 1



西調査区完掘状況（真上から）



東調査区完掘状況（真上から）

写真図版 2

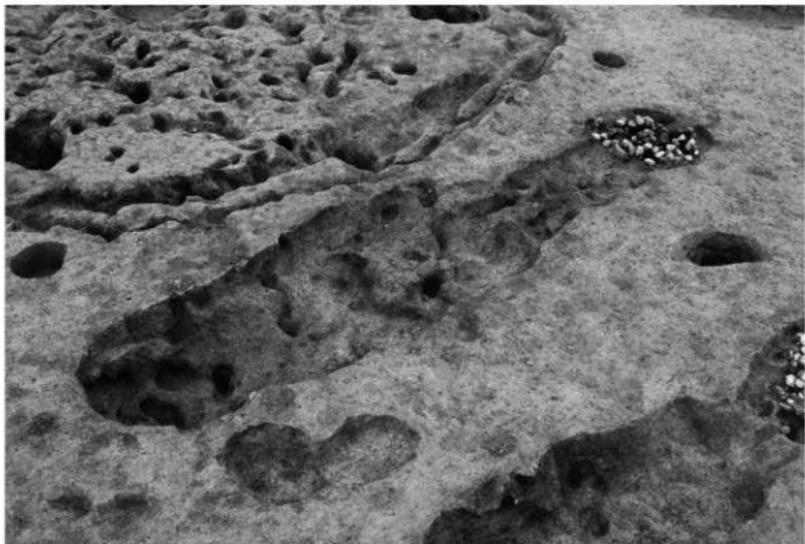


S F51櫛出土状況（東から）



S F53櫛出土状況（東から）

写真図版3



S F51・96・97・98完掘状況（南東から）

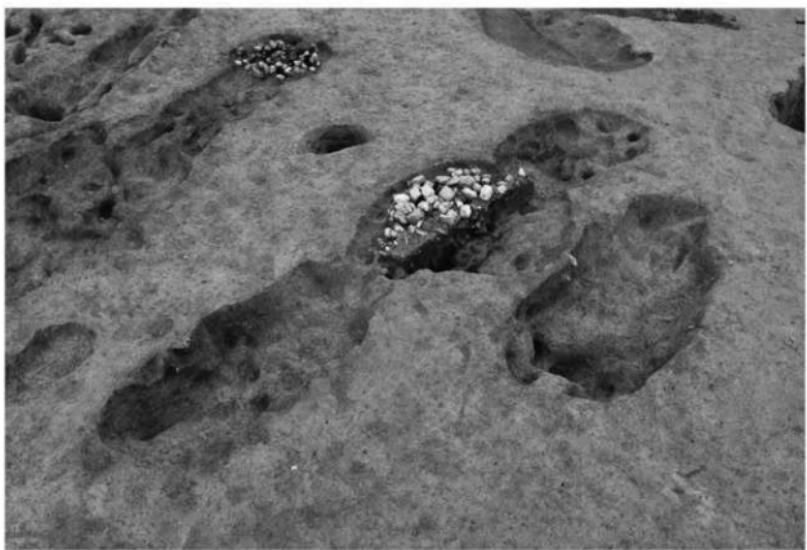


S F60完掘状況（北西から）

写真図版 4



S F 52・53・54・99完掘状況（北西から）

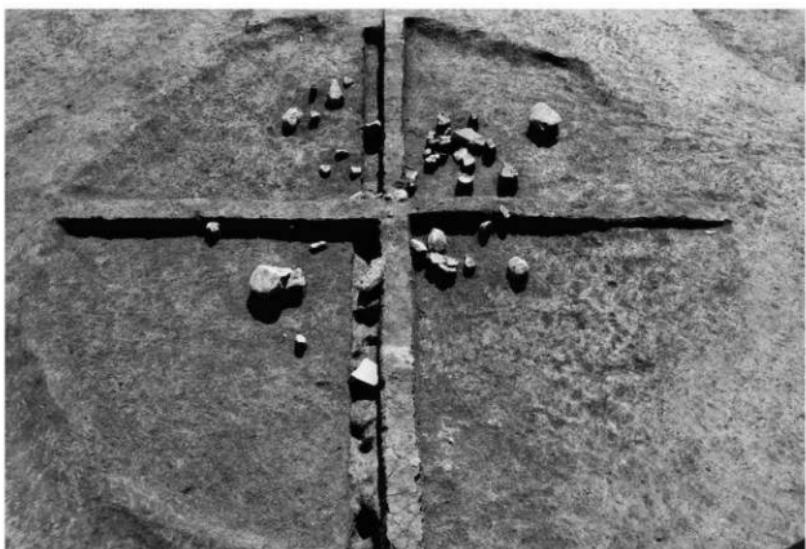


S F 52・54完掘状況・S F 53・99半截状況（南西から）

写真図版5

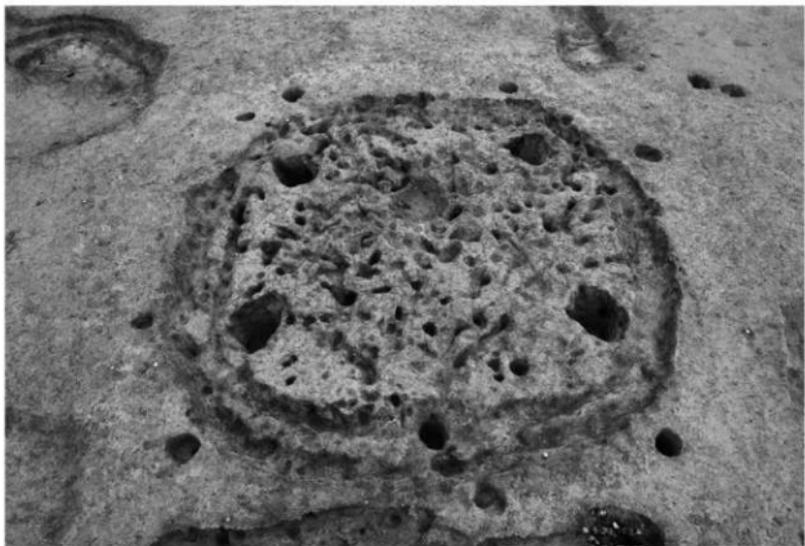


S H36・94完掘状況（南東から）



S H50遺物出土状況（北から）

写真図版 6



SH50完掘状況（東から）

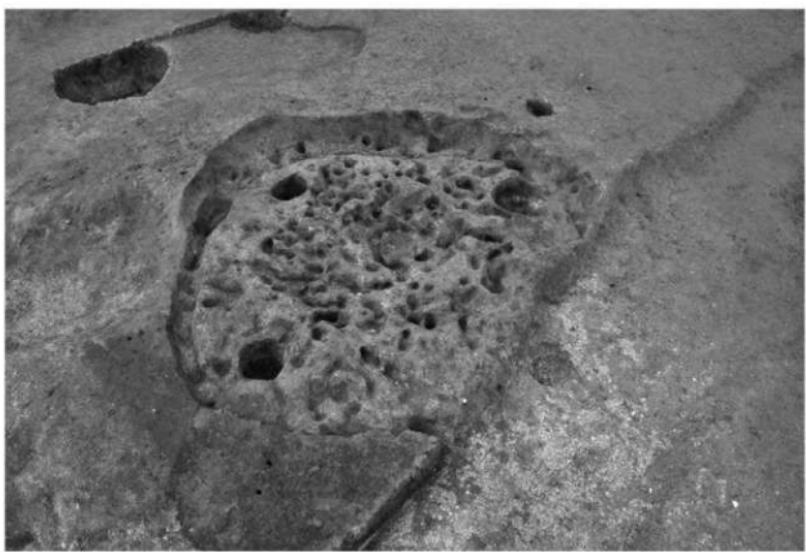


SH72完掘状況（東から）

写真図版7



S H84遺物出土状況（北から）

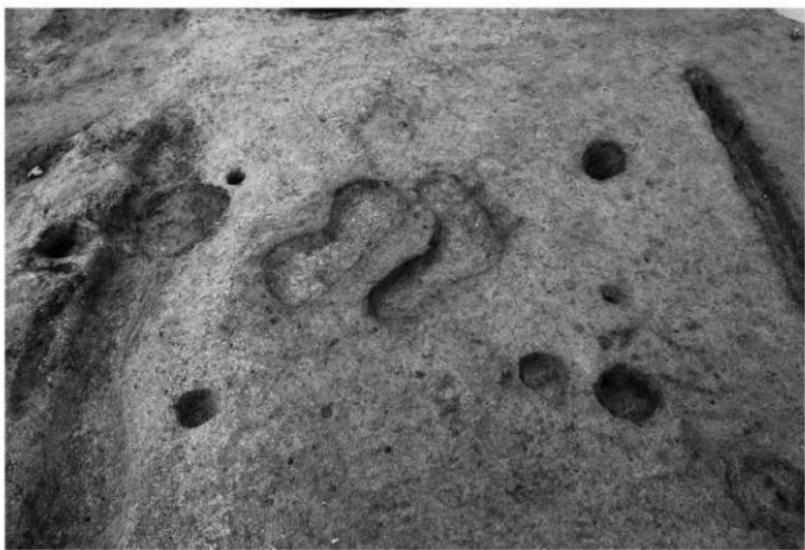


S H84完掘状況（南東から）

写真図版 8



S H93完掘状況（東から）



S H95完掘状況（東から）

写真図版9



S H106完掘状況（東から）



S H107礫出土状況（南西から）

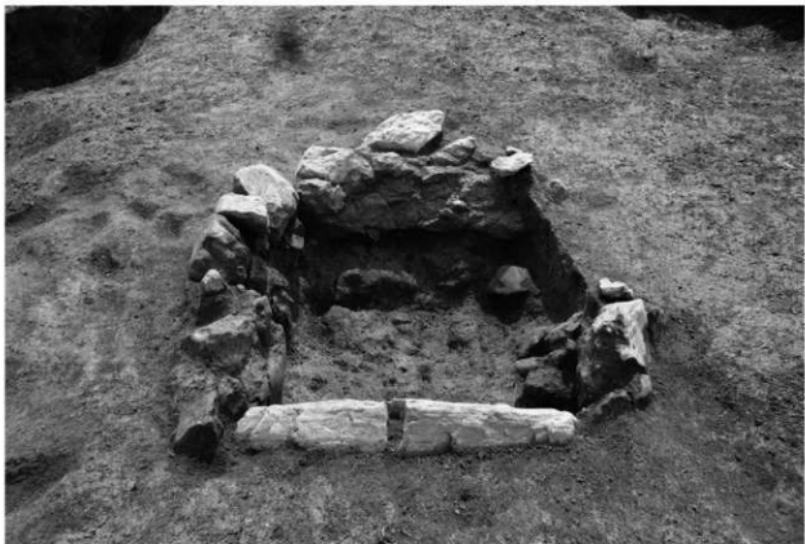


S H107完掘状況（南西から）



S H108完掘状況（南から）

写真図版11



S H108石窯炉完掘状況（北から）



S H106遺物出土状況（北から）



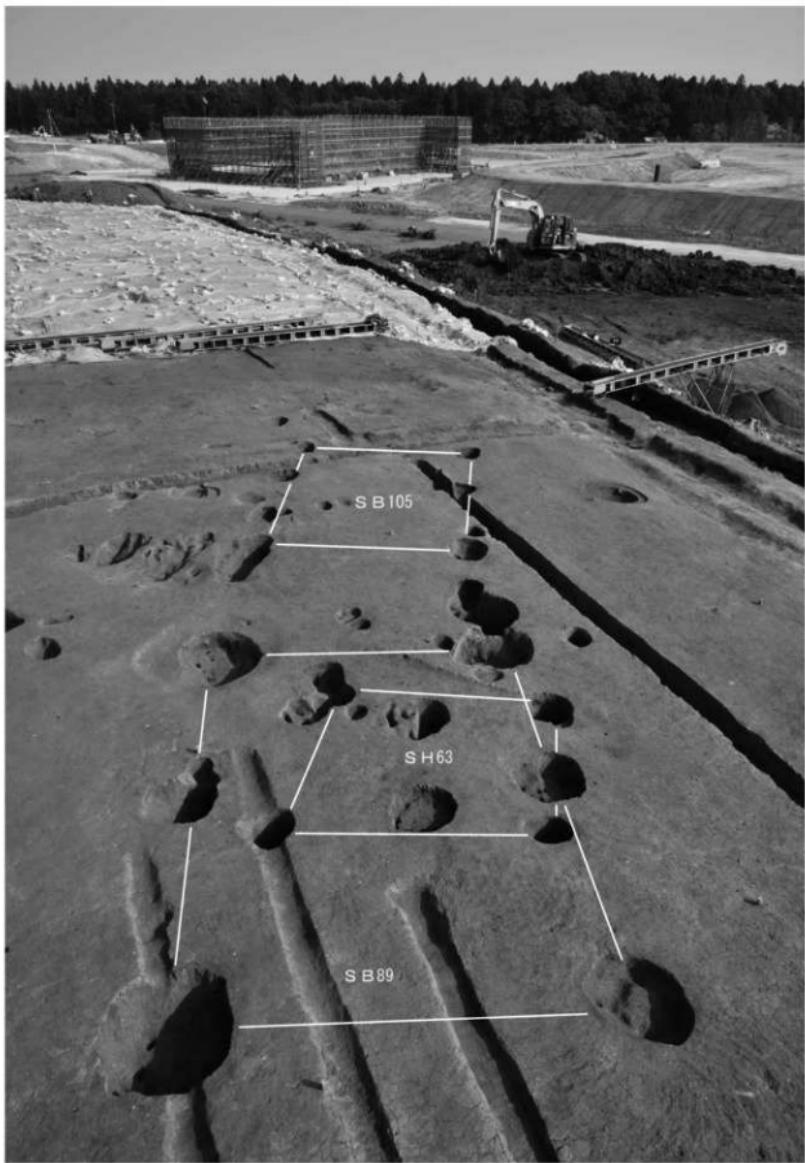
S Z92遺物出土状況（東から）



S H106炉周辺遺物出土状況（南西から）



S H108石窯炉掘削状況（南西から）

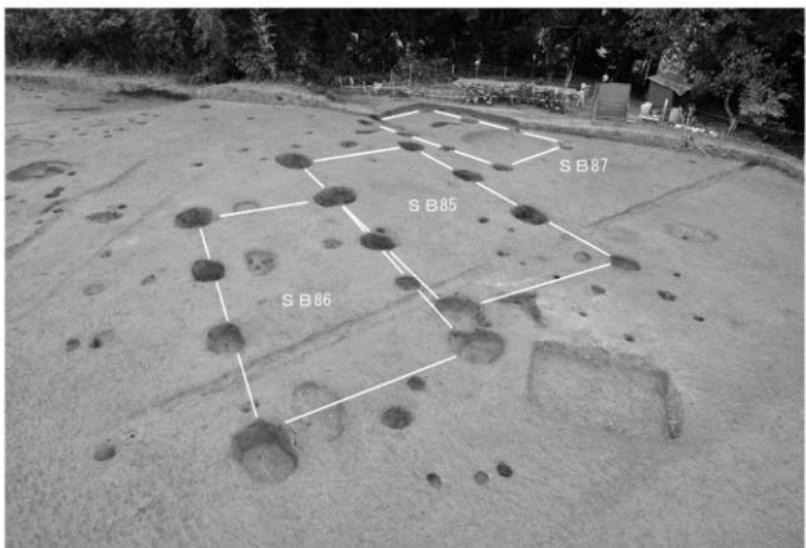


SB 89・105・SH 63完掘状況（西から）

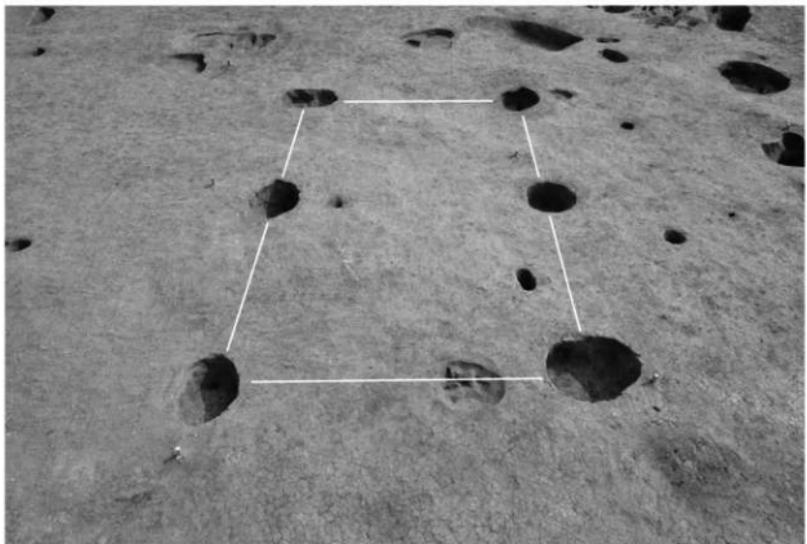
写真図版13



S B87完掘状況（東から）



S B85・86・87完掘状況（南東から）



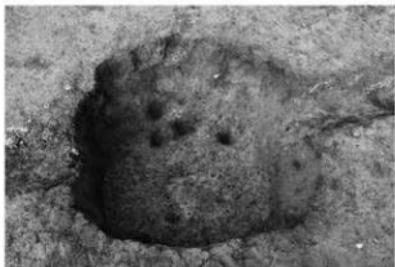
S B88完掘状況（西から）



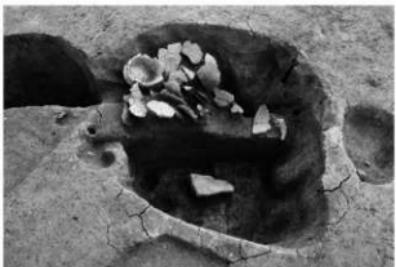
S B85・86柱穴（SK18）礫出土状況（南から）



S B85柱穴（SK20）遺物出土状況（南東から）



S B89柱穴（SK56）柱痕跡完掘状況（南から）



S B89柱穴（SK69）遺物出土状況（北から）

写真図版15



SK 1 穂出土状況（東から）



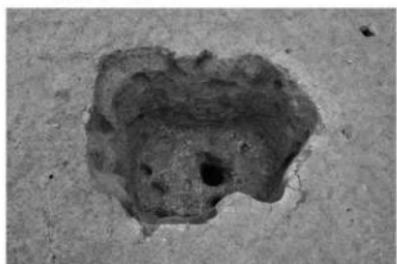
SK 2 完掘状況（南東から）



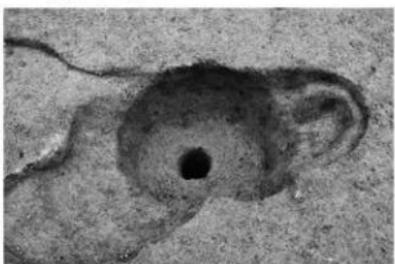
S K31完掘状況（南から）



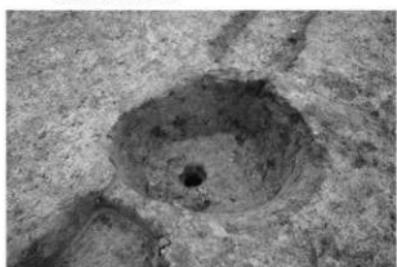
S K68完掘状況（南から）



S K49完掘状況（東から）



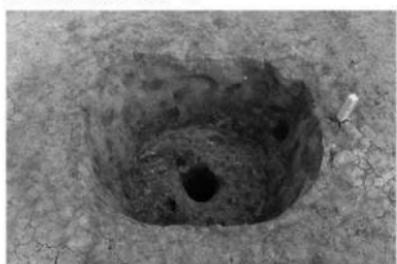
S K82完掘状況（西から）



S K59完掘状況（南東から）



S K83完掘状況（南東から）

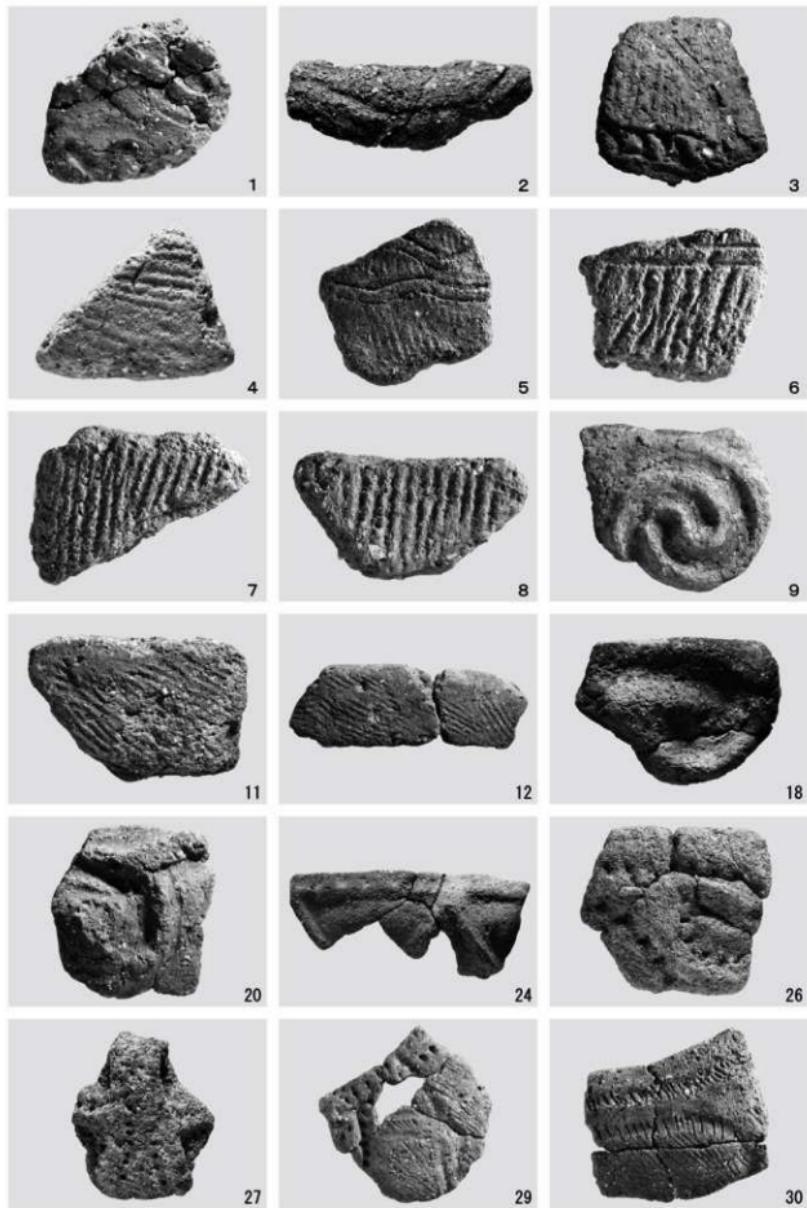


S K61完掘状況（北西から）

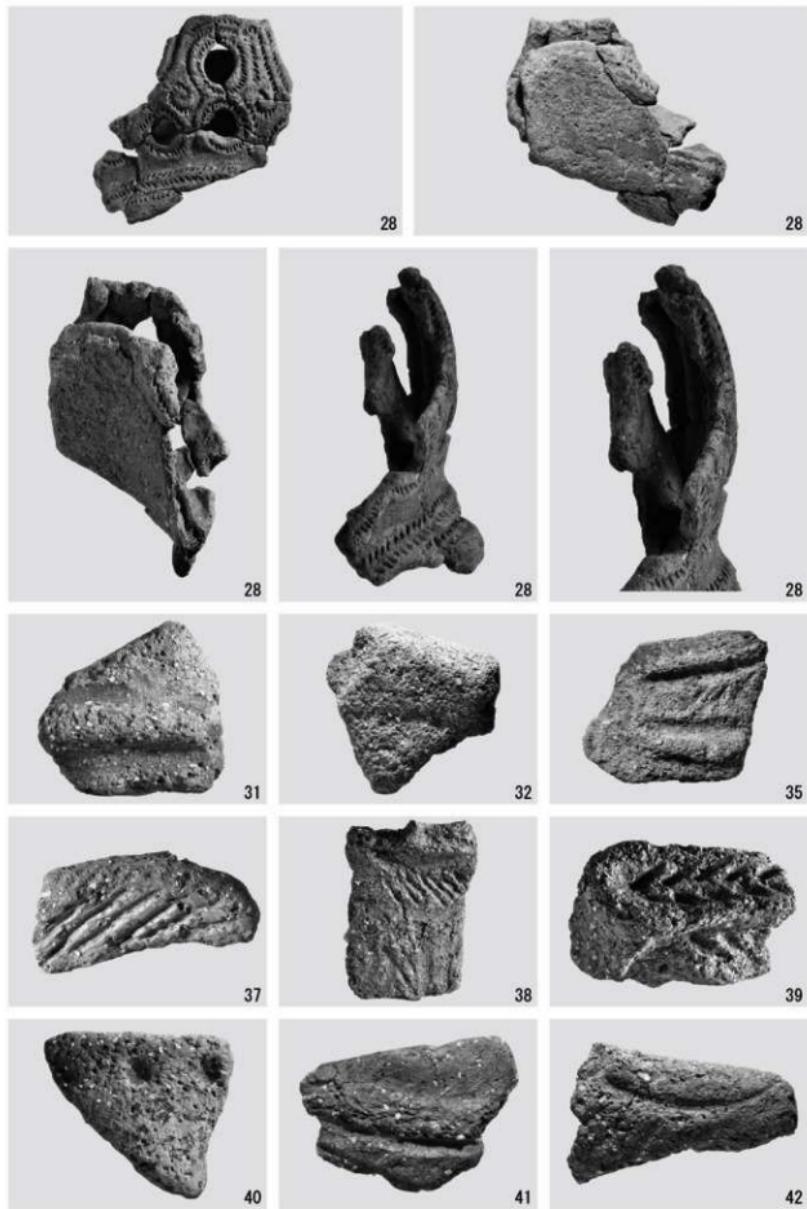


S K113完掘状況（北東から）

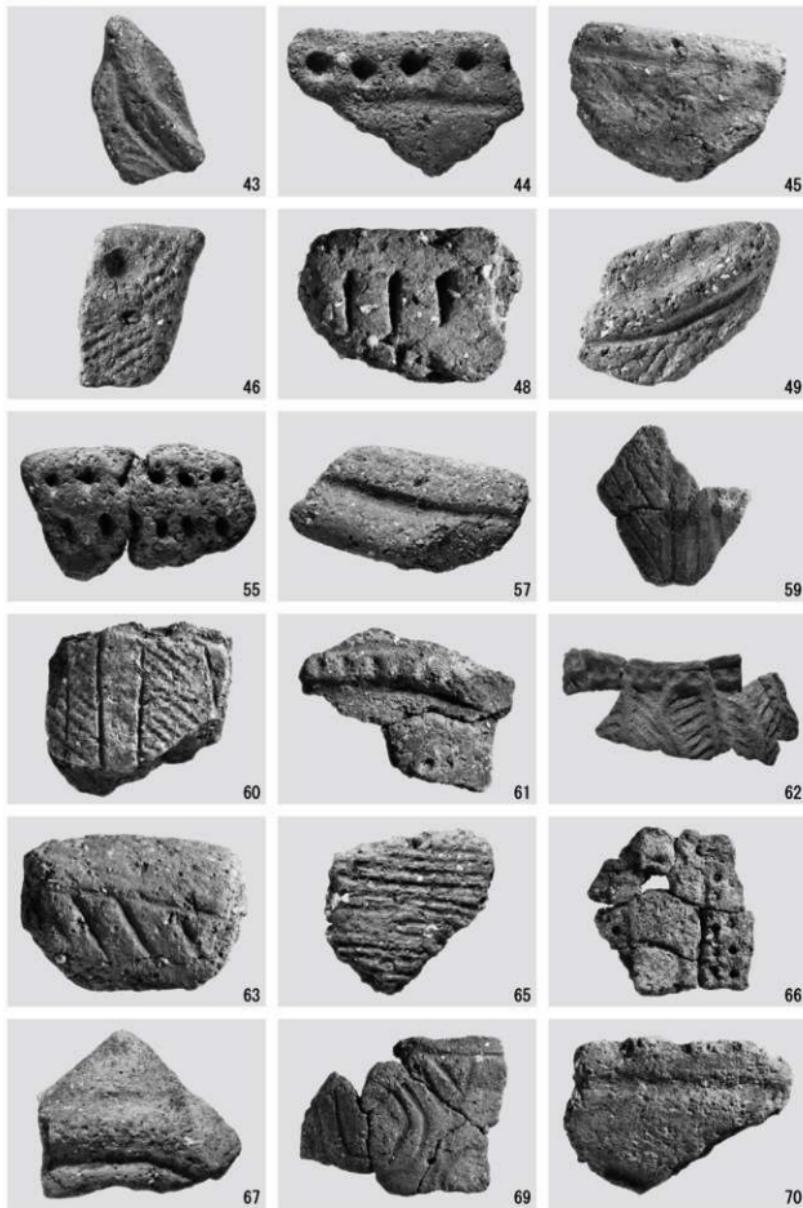
写真図版17



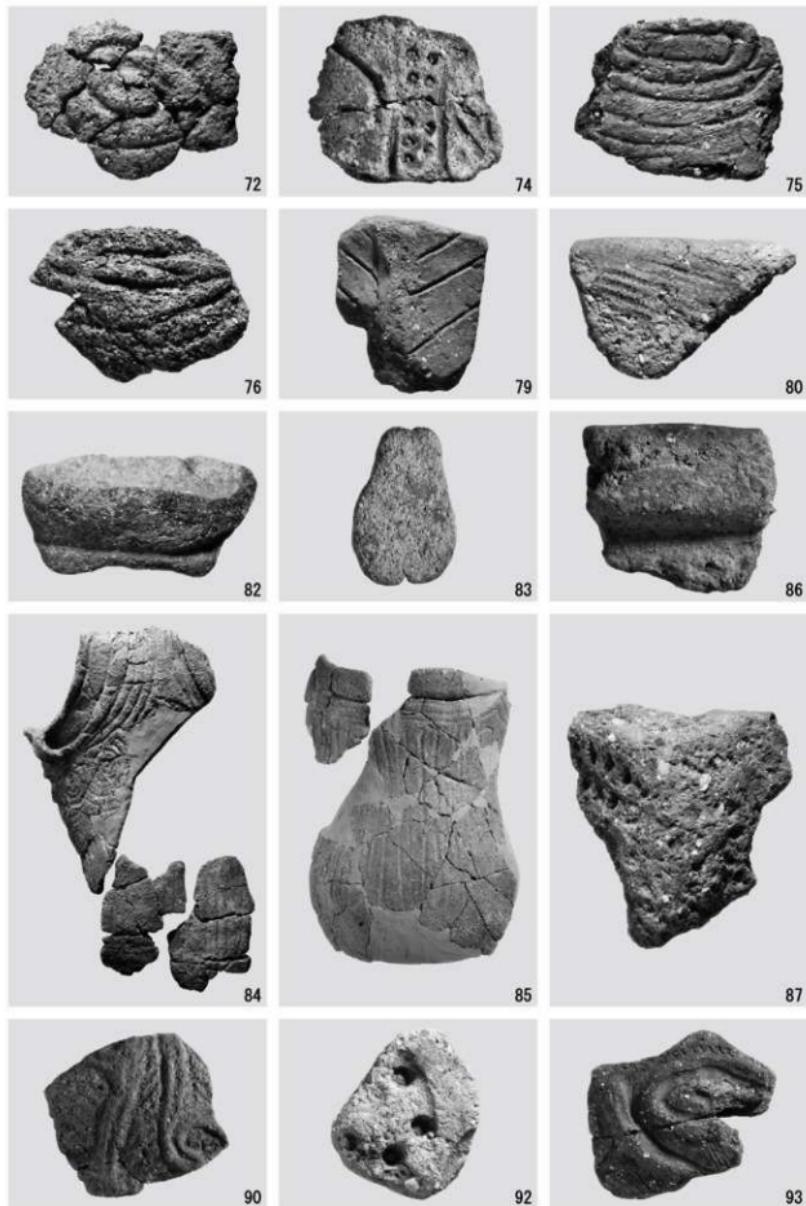
写真図版18



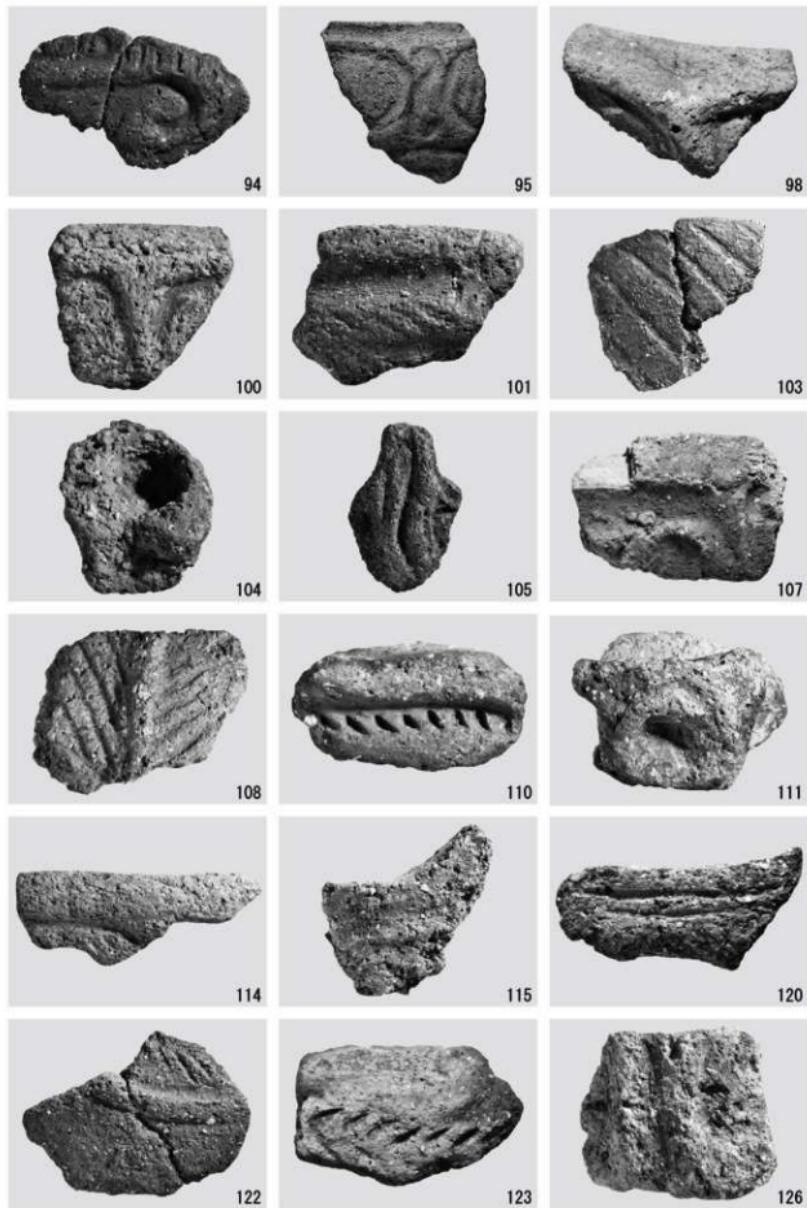
写真図版19



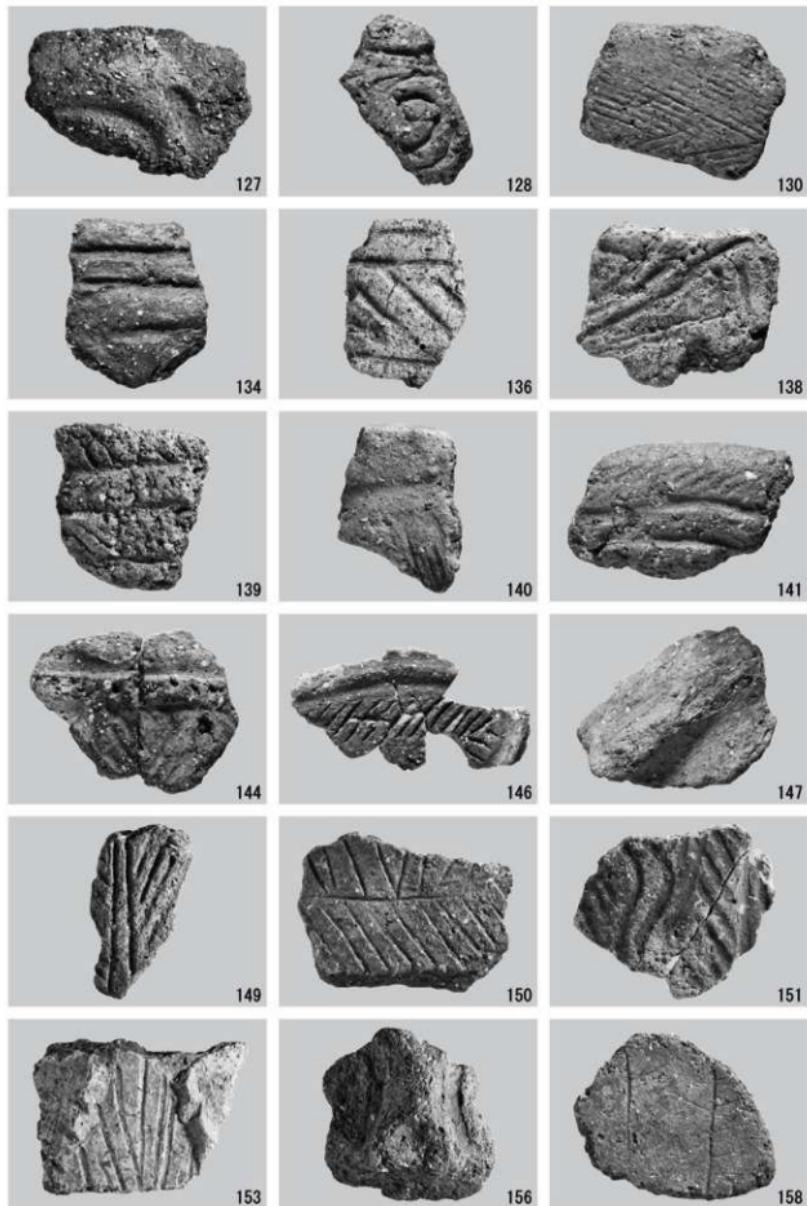
写真図版20



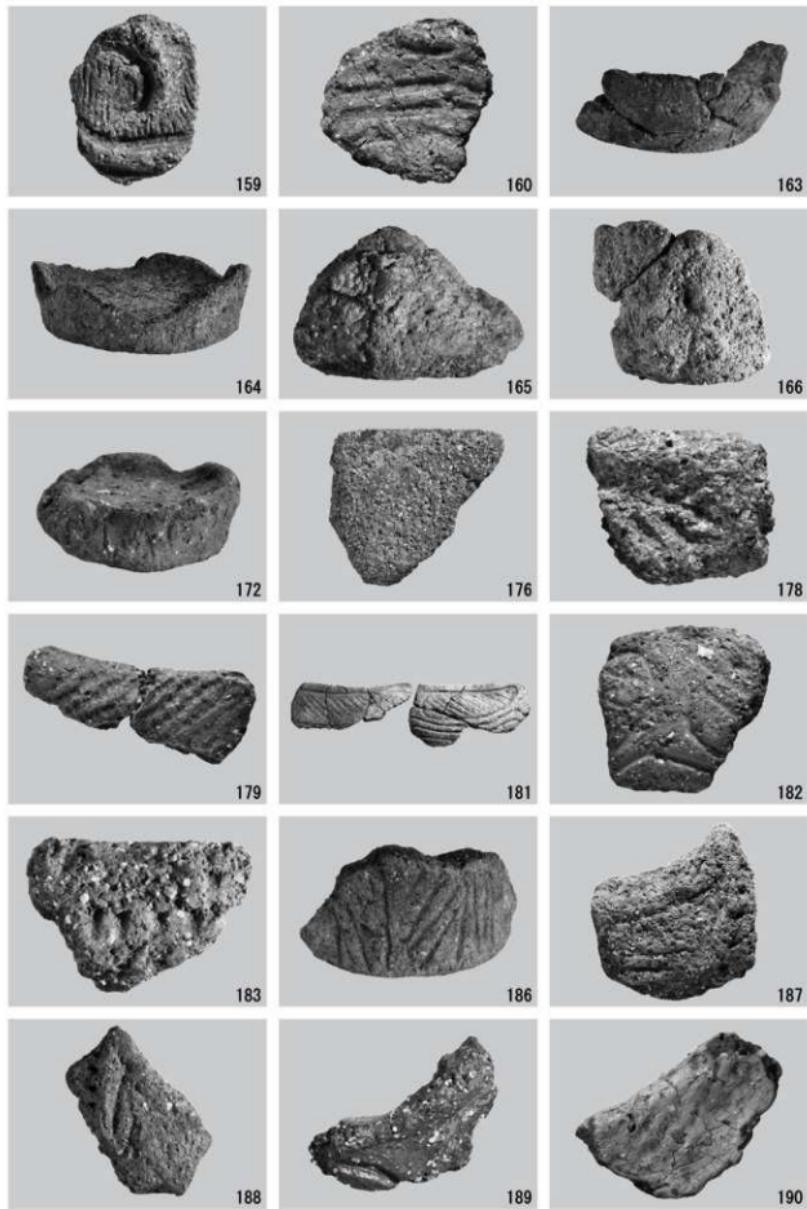
写真図版21



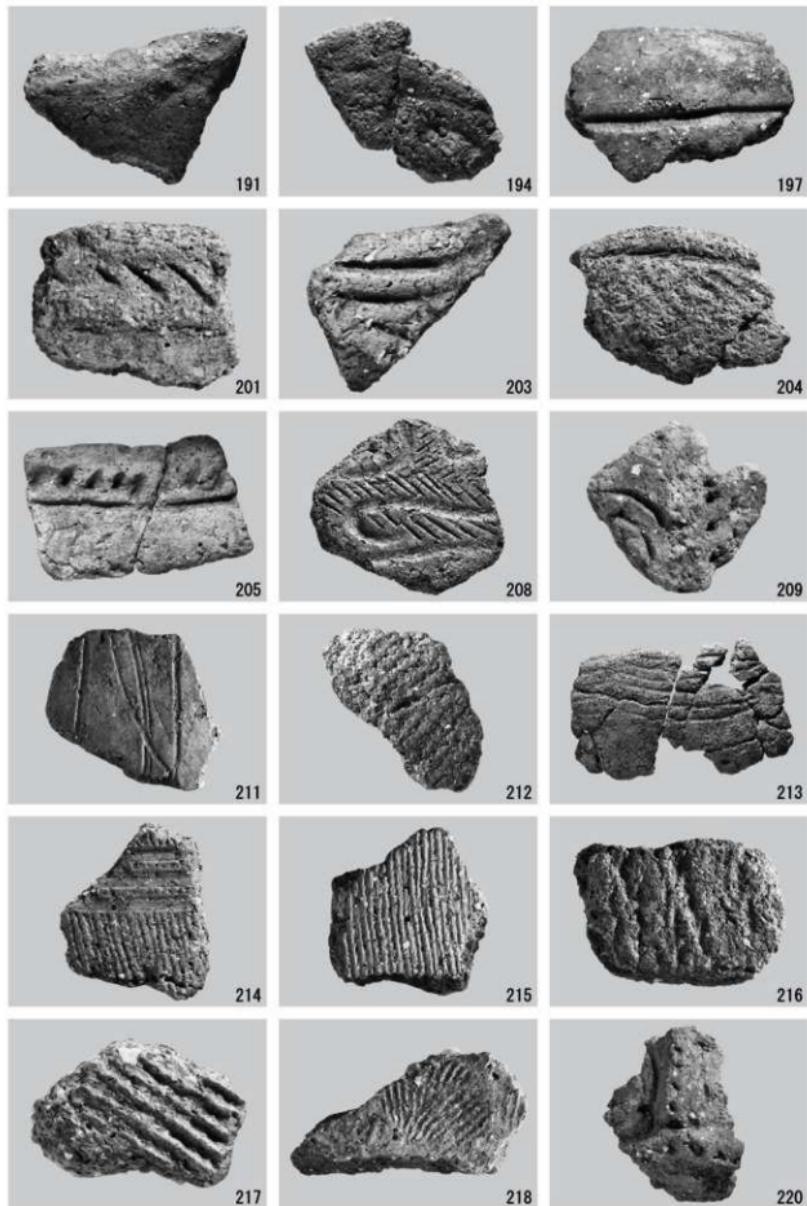
写真図版22



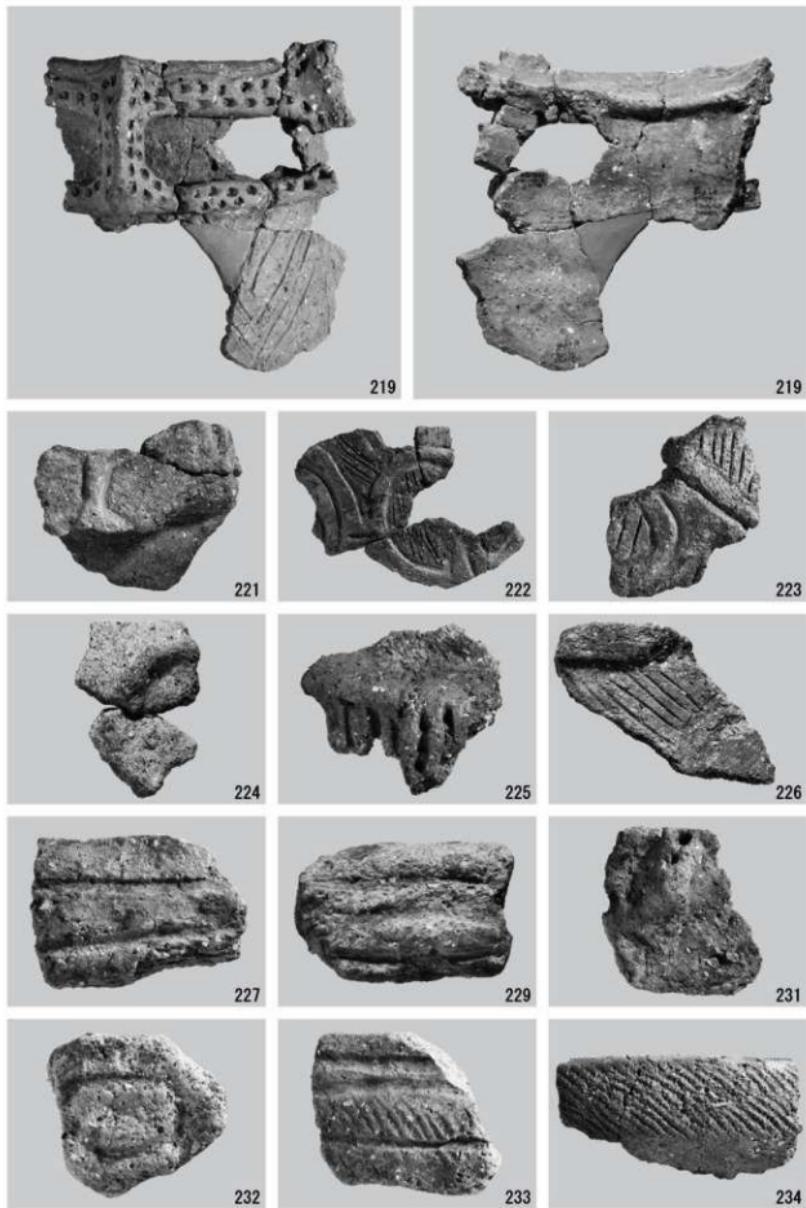
写真図版23



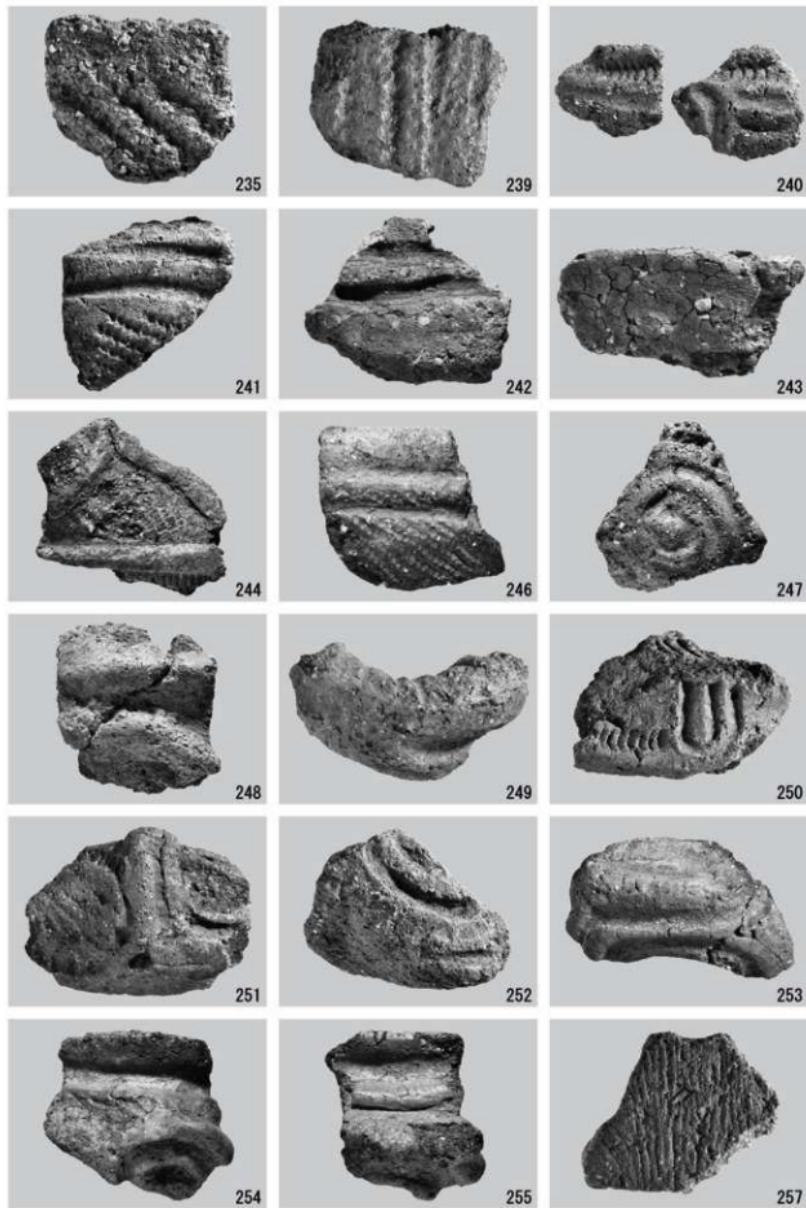
写真図版24



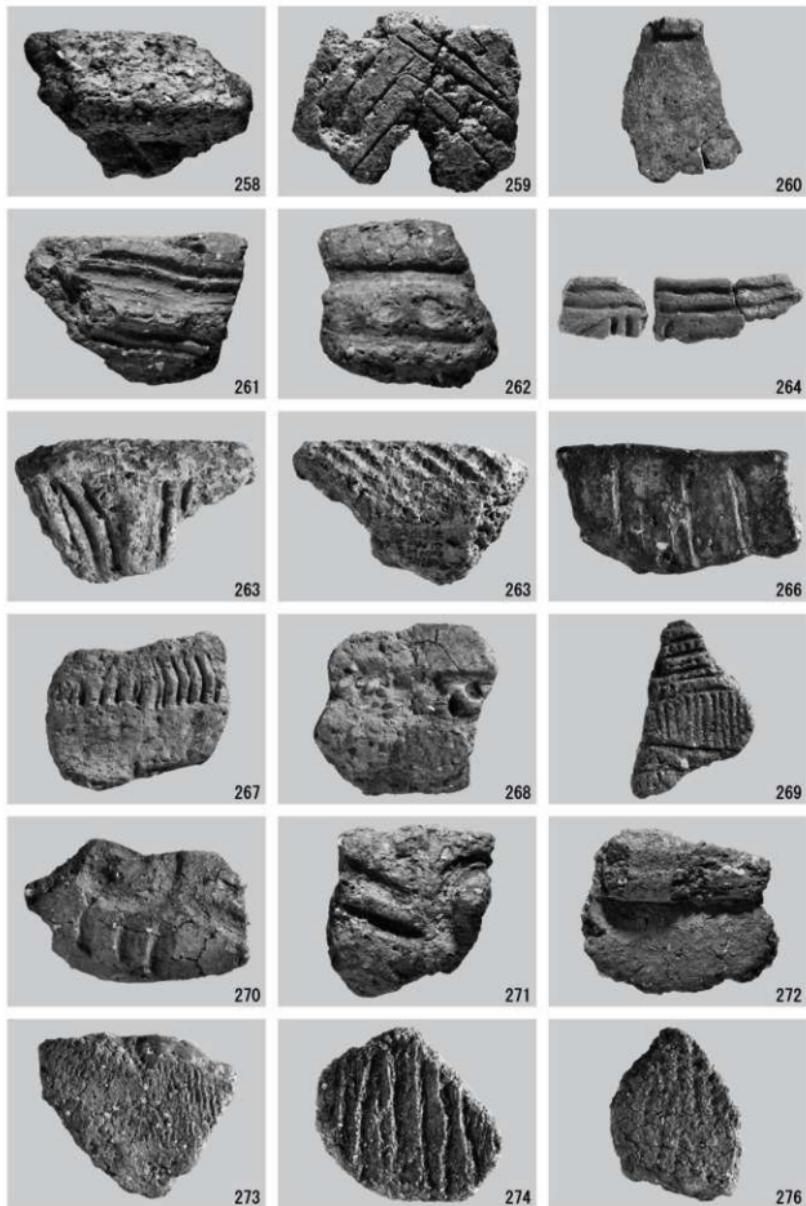
写真図版25



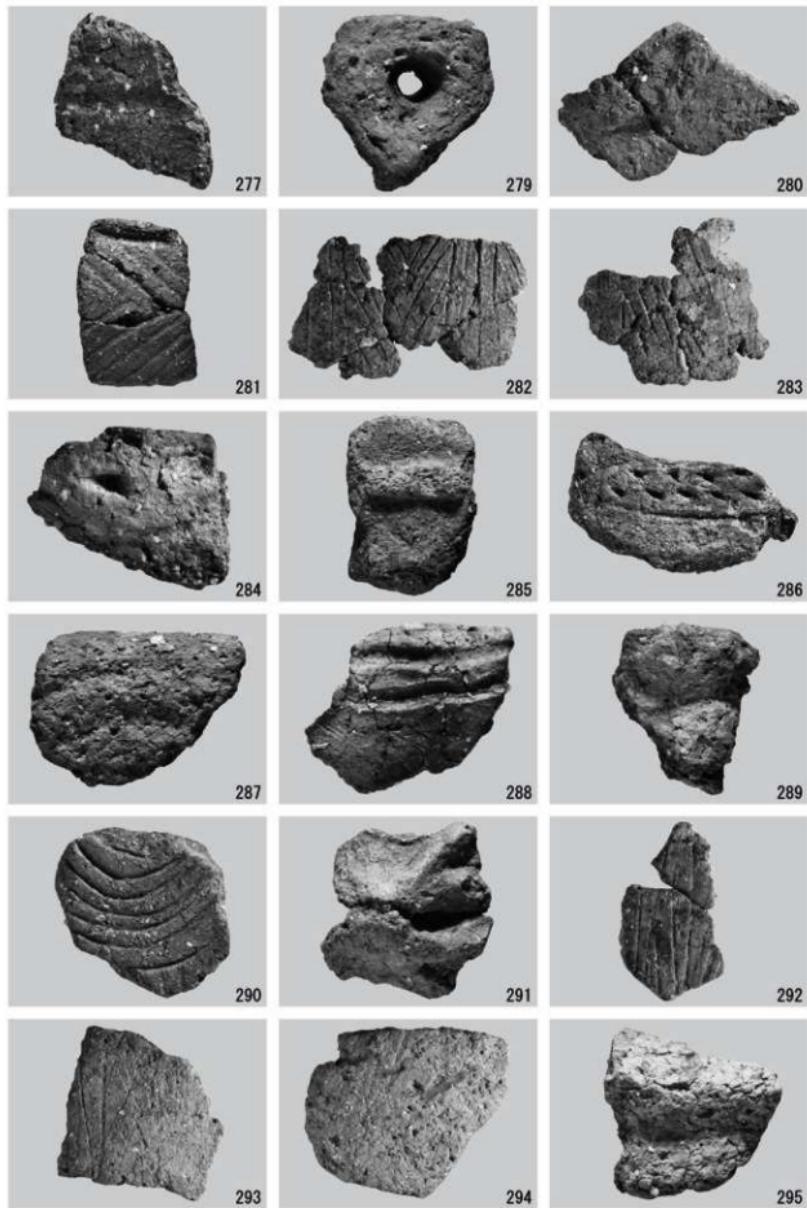
写真図版26



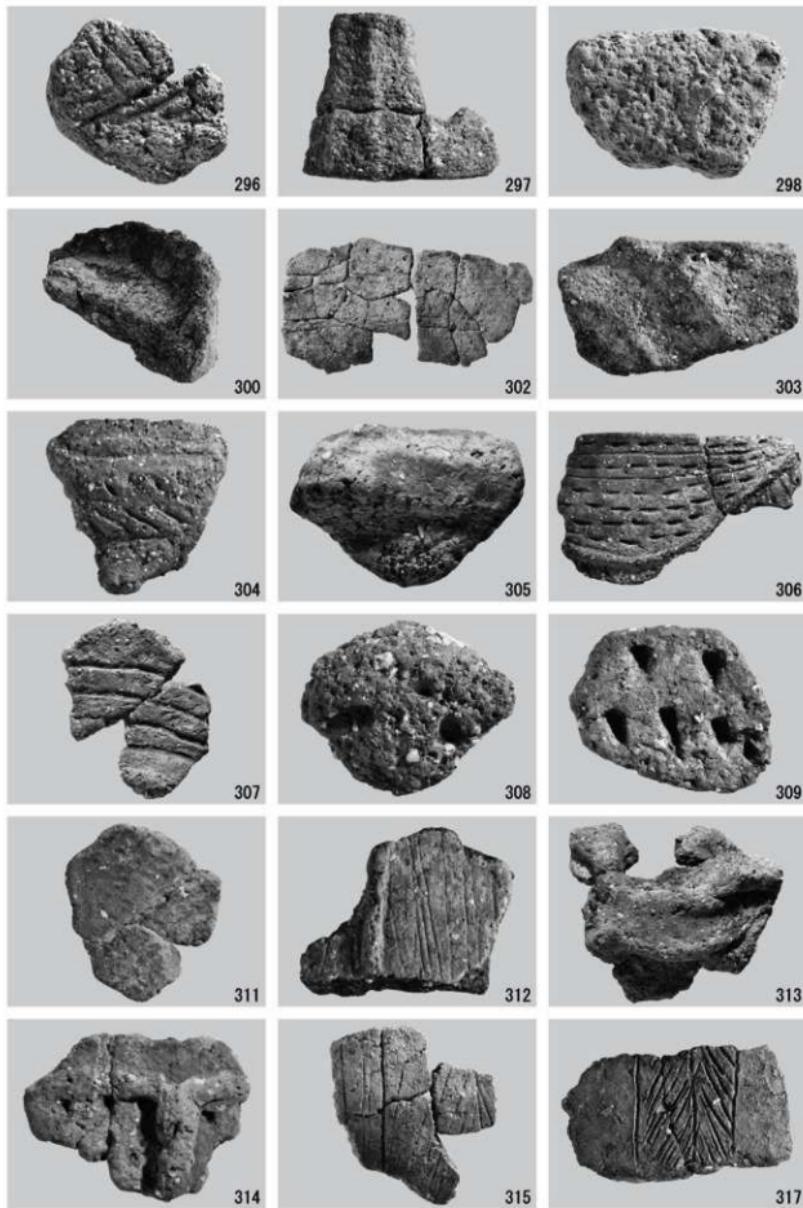
写真図版27



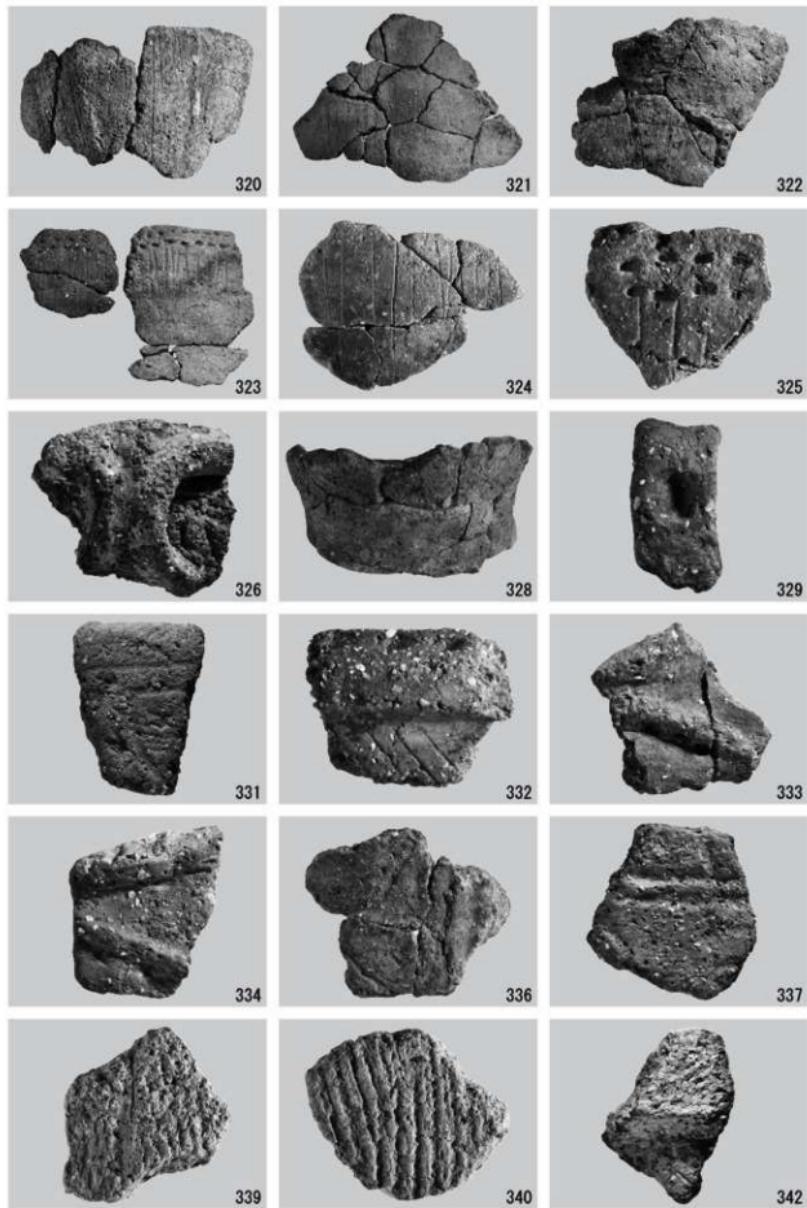
写真図版28



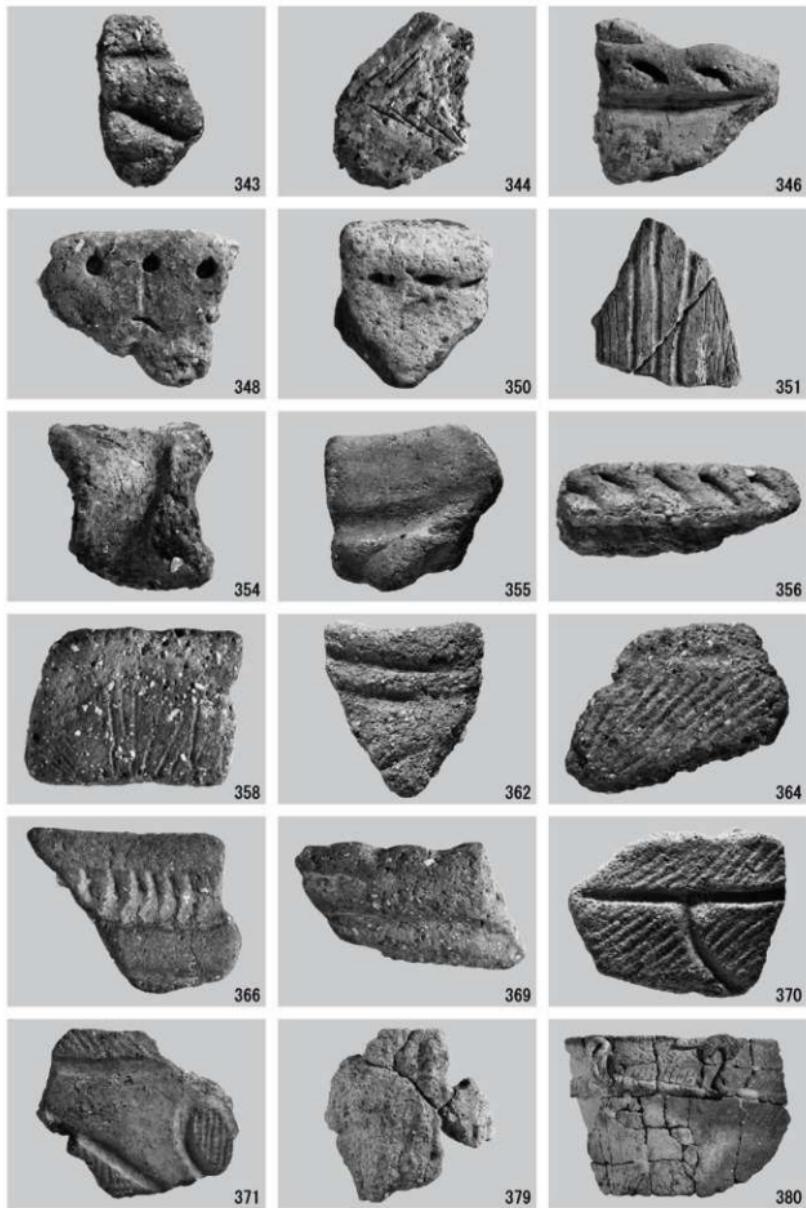
写真図版29



写真図版30



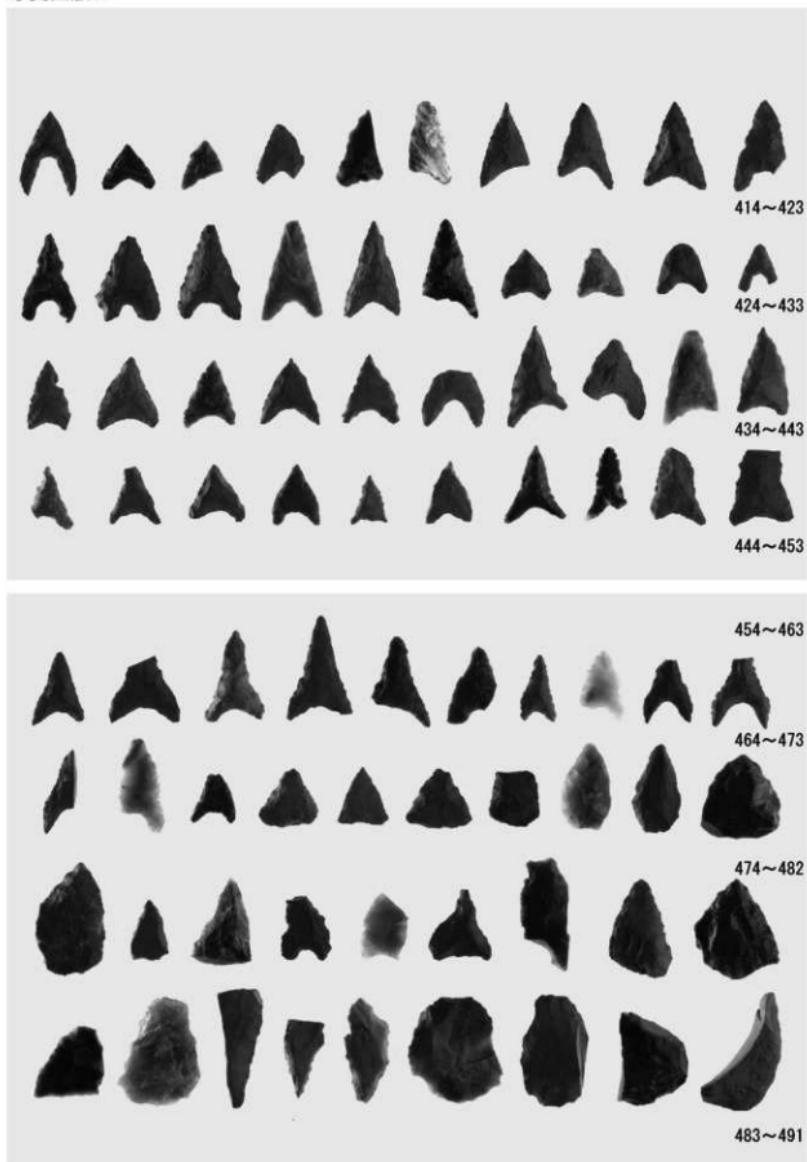
写真図版31



写真図版32



写真図版33



出土遺物 (17)

写真図版34



517



518



519



522



523



526



527



530



533



535

出土遺物 (18)

写真図版35



出土遺物 (19)

報告書抄録

ふりがな	すずやまいせき (じごに・さんじ) はくくつちょうきほうこく							
書名	鈴山遺跡（第2・3次）発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	323-11							
編著者名	泉賀治・中村法道・萩原義彦・服部芳人							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	西暦2018(平成30)年12月5日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コート 調査原因	北緯 市町村	東経 °'%"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
すずやまいせき 鈴山遺跡	三重県 三重郡 菰野町大字音羽	24341	136	35° 01' 29" 29"	136° 29' 51"	20150527～ 20151207 20160607～ 20160927	2次 6,256m ² 3次 1,563m ² 合計 7,819m ²	近畿自動車道 名古屋神戸線 (四日市JCT～ 龜山西JCT) 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
鈴山遺跡	集落跡	縄文時代早期 及び中期	煙道付炉穴と集石土坑 竪穴住居と掘立柱建物	縄文中期後葉の 土器・石器				
要約	縄文時代早期の煙道付炉穴10基と集石炉2基、及び押型文土器片を確認した。また、中期の竪穴住居13棟と掘立柱建物6棟・大型土坑2基・陥穴9基などとともに、中期後葉を中心とした土器及び石器を確認した。中期の掘立柱建物は県内最古例であり、その出現期の様相を考える好例となった。掘立柱建物の他、石開炉を有する竪穴住居や中期後葉の土器の様相は、美濃など北方からの影響を窺わせ、それらの伝播を考える手がかりとなった。また、石器の石材となる礫を東西の遠隔地から入手し、当地で石器の製作をしていったことがわかった。縄文時代早期及び中期の遺構や遺物の発見は、菰野町を始め北勢地域における縄文時代の様相を知るうえで貴重な成果である。							

三重県埋蔵文化財調査報告323-11

鈴山遺跡（第2・3次）発掘調査報告

発行年月日 2018（平成30）年12月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 共立印刷株式会社
